

RESEARCH REPORT

No. 51

MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY
INSTITUTE FOR EDUCATION

Contents

Social Trends on Transgender People in Japan and the U.S.A.
.....ANDO, Yoshinori

A Bibliography of Japanese Books on "Transgender,"
Resources for Transgender Persons and Their Allies in Japan, and Commentaries
.....ANDO, Yoshinori

A Bibliography of English Books on "Transgender,"
A List of Support-Groups for Sexual Minorities in the U.S.A., and Commentaries
.....ANDO, Yoshinori

Research on Actuality of Correspondence to Moral Education Reform in Schools and
Teacher's Consciousness (3):
Focusing on Statistical Analysis and Free Description Analysis in
the 2019 Survey for Schools across Japan
.....OSHITANI, Yoshio, YAHAGI, Nobuyuki, SAITO, Michiko
KIZAKI, Chinobu, TANIYAMA, Yuko, KOYAMA, Hisako & DAIGO, Mina

Listening Context and Listening Mode:
Towards a Unified Approach for Examining the Connection
between Music, Emotion, and Mood
.....DI STASIO, Michael J.

Progress Reports on Mukogawa Women's University Center for the Study of Child
Development 2020
.....KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SAKATA, Tomomi,
NAKAI, Akio, ISHIKAWA, Michiko, & TAMAI, Hideo

Faculty Achievements (2019)

March 2021

武庫川女子大学教育研究所
研究レポート第51号

二〇二一年三月

I S S N 0919-2816

武庫川女子大学教育研究所 研究レポート 第51号

Research Report, No.51
Mukogawa Women's University
Institute for Education

〈特集〉トランスジェンダーに関する日米の文献・情報と解説

日本とアメリカにおけるトランスジェンダーを巡る社会的動向
安東由則

日本におけるトランスジェンダー関連の図書リスト及び
トランスジェンダーのための関連資料と解説
安東由則

トランスジェンダー関連の英文図書リスト及びアメリカの性的少数者支援団体リストと解説
安東由則

学校現場における道德教育改革への対応と意識に関する調査研究(3)
—2019年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として—
押谷由夫・矢作信行・齋藤道子・木崎ちのぶ
谷山優子・小山久子・醍醐身奈

Listening Context and Listening Mode:
Towards a Unified Approach for Examining the Connection between Music,
Emotion, and Mood.
DI STASIO, Michael J.

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2020年度活動報告
河合優年・難波久美子・坂田智美
中井昭夫・石川道子・玉井日出夫

2019年度 研究員の業績および特別研究の経過報告

2021年3月

武庫川女子大学教育研究所

研究レポート第51号

目 次

日本とアメリカにおけるトランスジェンダーを巡る社会的動向

安 東 由 則

はじめに：本稿の目的と位置づけ	1
1. LGBT と SOGI	2
2. 日本におけるトランスジェンダーへの注目	5
3. トランスジェンダーに関する日本の動向	8
4. トランスジェンダーに関するアメリカの動向	11
おわりに	15
引用文献	16

日本におけるトランスジェンダー関連の図書リスト及び トランスジェンダーのための関連資料と解説

安 東 由 則

はじめに：本稿のねらい	19
I. 解説	19
II. トランスジェンダー関連の日本語文献及び資料	30
1. トランスジェンダー関連図書	30
2. 国内外の性的マイノリティへの取組（声明／法律、通達、条例等）	36
3. 大学設置のジェンダーセンター及び LGBT 等支援団体	37
4. 大学におけるトランスジェンダー学生関連ガイドライン及びダイバーシティに 関する資料	40

トランスジェンダー関連の英文図書リスト及びアメリカの性的少数者支援団体リストと解説

安 東 由 則

はじめに：本稿のねらい	59
I. 解説	59
II. “Transgender” 関連文献・支援団体リスト	68
1. 英文図書リスト	68
2. 英文学術雑誌リスト	79
3. LGBT の子ども・若者たちの支援団体など	79

学校現場における道徳教育改革への対応と意識に関する調査研究（3）

—2019年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として—

押 谷 由 夫・矢 作 信 行・齋 藤 道 子・木 崎 ちのぶ
谷 山 優 子・小 山 久 子・醍 醐 身 奈

I. 本研究の目的と方法	87
II. 調査結果の統計的分析	88
III. 調査結果の特定の自由記述の分析	108
IV. テキストマイニングを用いた全体的な自由記述の分析	114

Michael Joseph Di Stasio 嘱託研究員の紹介	127
---	-----

河 合 優 年

音楽聴取の背景と様式

—音楽、情動、気分の関係进行分析するための統合的方法をめざして—

マイケル・ディスタシオ

1. Abstract (要約)	129
2. Introduction (序論)	130
3. Organized Sound - The Elements of Music (構築された音 - 音楽の要素-)	133
4. Listening Diet - Music Genres (音楽のリスニング環境 - 音楽のジャンル-)	133
5. Exploring the Music Genre “Trichotomy” (音楽のジャンル「三分法」の探究)	135
6. Extended Listening (拡張されたリスニング体験)	141
7. Informed Listening (音響の訓練)	142
8. Tracking Listening (楽譜の読み方)	143
9. Music for the Screen (映画のための音楽)	145
10. The Music Video Experience (ミュージック・ビデオ体験)	147
11. Music Live (ミュージック・ライブ)	149
12. Sound Engineering (音響工学)	151
13. Defining Emotion & Mood (感情と気分の定義)	152
14. The Mind of the Listener (リスナーの心境)	154
15. The Listener Context (リスナーの背景)	156
16. Listening Mode (リスニング方式)	157
17. Music & Cognitive/Perceptual Enhancement Attempts (音楽と認知/知覚強化の試み)	158
18. Music & Physiological/Psychological Triggers (音楽と生理学/心理的トリガー) ...	161
19. Discussion (討論)	164
20. Conclusion (結論)	165
References (参考文献)	166

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2020年度活動報告

河 合 優 年・難 波 久美子・坂 田 智 美
中 井 昭 夫・石 川 道 子・玉 井 日出夫

I. はじめに	171
II. 2020年度の子ども発達科学研究センターについて	172
1. 本年度の取り組みについて	172
2. 外部資金の獲得について	174
3. 次年度に向けて	174
III. 研究業績	175
2019年度 研究員の業績および特別研究の経過報告.....	179
「研究レポート」掲載論文総目次（過去5号分）.....	195

日本とアメリカにおけるトランスジェンダーを巡る社会的動向

Social Trends on Transgender People in Japan and the U.S.A.

安東 由則 *

ANDO, Yoshinori

目次

はじめに：本稿の目的と位置づけ

1. LGBT と SOGI

2. 日本におけるトランスジェンダーへの注目

3. トランスジェンダーに関する日本の動向

4. トランスジェンダーに関するアメリカの動向

おわりに

引用文献

* 武庫川女子大学教育学部・教授／教育研究所・研究員

はじめに：本稿の目的と位置づけ

日本においては、トランスジェンダー（Transgender、以下 TG）に対する認知が、2010 年代半ば頃より広まり、一般的な会話の中でも使用されるようになってきた。後で確認するように、個々人の性自認や性的指向に基づく人権侵害や差別を禁止しようとする国際的な流れが形成されていく中で、2000 年になると法務省は彼らに対する差別禁止を明言し、2003 年には性同一性障害者に関する法律が作られた。さらに 2013 年には文部科学省が学校における性同一障害に関する調査を実施し、職場においても性的マイノリティに対するハラスメントや差別への取組みが明示されるようになるなど、徐々にではあるが社会の性的マイノリティに対する認識は広まっていった。これをさらに進めたのは、2017 年以降いくつかの女子大学が男性から女性の TG 学生の入学を検討する、さらには受入れる方針を表明した一連の報道であったと思われる。

TG 学生は、当然のことながら、これまでも大学に存在していたのであり、国際基督教大学など TG 学生への支援対応を積極的に実施している大学、あるいは当事者の学生やその支援者を中心に活動を行っている大学もあったが、それらは少数であり、あまり注目されてこなかった。それが、女性ばかりの女子大学に女性の性自認をもつとはいえ、戸籍上は男性の入学が検討されるということで、大きく社会の注目を集めることとなった。性的マイノリティへの権利擁護運動が活発なアメリカにおいても、女子大学に TG 学生の入学を許可するかどうか活発な議論が行われた末、多くの女子大学が概ね受入れる方針を固めたのは、日本における議論の始まりより 4-5 年前の、2013-14 年頃に過ぎなかった¹。2021 年 2 月末時点で、日本において TG 学生の受入れを表明した女子大学は 4 校（お茶の水女子、奈良女子、宮城学院女子、日本女子）であるが、他の女子大学においても、今後、入学を希望する MtF（Male to Female）の TG 学生に対してどのような方針を取るか、女子大学における“女性”定義の見直しや女子大学の意義を含め、決定が迫られている。女子大学における TG に関する課題は、TG 学生の受入れだけではない。女子大学に入学したが、出生時に割り当てられた自己の性別に違和感を持つ FtM（Female to Male）の TG 学生への対応や支援も大きな課題となってくる。共学大学においても同様である。

こうした状況の中、日本の女子大学において、性的マイノリティ、とりわけ TG 学生（さらに教職員）の受入れ体制の構築、支援のための環境整備は、喫緊の課題となっているとの認識から、武庫川女子大学教育研究所の研究員である安東由則と西尾亜希子、教育研究所所属の中尾賀要子が共同で研究に取り組む計画を立て、アメリカの大学との比較研

¹安東由則「スミス・カレッジ調査の目的・調査経緯とインタビューの解説及び補足：Wong の出願への対応とトランスジェンダー学生の受入れを中心に」『研究レポート』49, pp.1-22. 高橋裕子「トランスジェンダーの学生をめぐる入学許可論争とアドミッションポリシー」『ジェンダー史学』12, pp.5-17. など

究を行うこととした。2020 年度より科学研究費²を得て、日本とアメリカにおいて TG 学生を受入れた女子大学、既に TG 学生への支援体制を構築し、先進的な取り組みを行っている大学において聞き取り調査を行い、日本の大学、とりわけ女子大学における TG への支援環境の構築、整備に寄与することを目的として本研究を開始したのである。

この研究の基礎作業として、本稿では以下のことを行う。1) LGBT (Lesbian、Gay、Bisexual、Transgender)や SOGI (Sexual Orientation、Gender Identity) といった基本的概念を整理する。2) 日本社会において TG という語が注目され、広がってゆく経過を新聞記事から確認する。続いて、3) TG を中心とする性的マイノリティに関する日本での出来事を年表にまとめ、関心の高まりや支援・権利擁護の取り組みの進展過程を辿る。最後に、4) アメリカでの聞き取り調査の準備として、アメリカにおける TG に関する出来事の年表を作成し、これまでの取り組みと社会的受容の流れを把握する。

本稿とは別に、この共同研究の基礎作業として、日本とアメリカにおける TG 関連の図書リストと支援団体リストを各々まとめるとともに、日本に関しては大学が公表している TG 学生受入れ方針や取り組みに関する資料を収集し、本『研究レポート』に掲載した。

1. LGBT と SOGI : 性の多様性に関する認識の変化

トランスジェンダー (TG) を含む LGBT (あるいは LGBTQI³ など)、さらには SOGI (あるいは SOGIESC⁴ など) などの言葉が新聞等でもよく用いられるようになってきた⁵。この2つは対として用いられることもあるが、LGBT と SOGI では指す内容が異なる。近年、LGBT に関してはマスコミやネット報道をはじめ、職場や学校での取組、LGBT に関する解説本、自治体や支援団体、大学などが発行する冊子などでも、丁寧な解説がなされるようになってきている。その結果、LGBT に関する認知は高まっており、2018 年の電通調査では「知っている」34.4%、「なんとなく知っている」34.1%、合計 68.5% となり、同社の 3 年前の調査と比べ 30.9% も上昇した。労働者を対象とする厚生労働省調査 (2019 年) では、「多少は知っている、聞いたことがある」が 93.0% という高い数字であり、浸透していることが分かる。いずれの調査でも SOGI の認知については尋ねていないが、LGBT と比較すれば低下すると思われる。

それらの違いを分かりやすく説明するため、作成したのが表 1 である。まず LGBT と

²2020-224 年度科学研究費・基盤研究 (B)「大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れ課題：日米の女子大学事例を中心に」(代表：安東由則)

³LGBT の後の Q は Questioning (わからない、未決定)、I は Intersex (染色体異常などにより、身体的特徴から男、あるいは女と判別しづらい者。医学領域では、「性分化疾患」(Disorders of Sex Development:DSD)とも呼ばれている)の頭文字。

⁴SOGI に Gender Expression (性表現) の E と、Sexual Characteristics (性による身体的特徴) の SC を加えたものである。

⁵LGBT や TG については、2014-15 年頃から増加している。後掲の表 3、表 4 を参照。

は、先述したように Lesbian、Gay、Bisexual、Transgender の頭文字を取ったものである。このうち LGB は、出生時に割り振られた性と自己の“性的指向”（SOGI の SO : Sexual Orientation）、つまり好きになる対象が誰（男女）に向かうかの組み合わせによって決まるのに対し、T（Transgender）は“性自認”（SOGI の GI : Gender Identity）が出生時に割り振られた性と異なるかどうかで決定されるのであるから、半別の基準が異なる。LGBT（QI）はいずれも、個々の人物つまり“誰”を指す概念である。

これに対して SOGI（ESC）は、性的指向（SO）や性自認（GI）など、LGBT の人々に限らず、全ての人々がもっているものである。よって、SOGI を用いることで性に関する議論の中で LGBT を特別な枠にはめ込んでしまうことなく、全ての人々の課題・問題とすることができる。しかしながら、各人の性のあり方、捉え方は、性的指向と性自認のみの 2 要素で決定されるものではない。生物学的に割り振られた性（SC: Sexual Characteristics）という制約の下、自分の性的アイデンティティ（GI）をどう形成するのか、成長する中で性愛対象（SO）として同性を選ぶか、異性を選ぶか、どちらも選ぶか、どちらも選ばないのか、さらには自分の性表現（E: Gender Expression）をどのようなものとするか。GI、SO、E などには、当該社会や時代における Gender に関する価値や規範

表 1. 性の多様性：SOGI 及び LGBTQI について

〔性のグラデーション〕 女  男	
性自認（Gender Identity） GI	誕生時に割り当てられた性と自認する性 ・一致する場合：シスジェンダー（Cisgender） ・一致しない場合：トランスジェンダー（Transgender） ・わからない場合：クエスチョニング（Questioning）
性的指向（Sexual Orientation） SO	好きになる性 ・異性愛者：自分とは異なる性を好きになる（Heterosexual） ・同性愛者：自分と同じ性を好きになる（Homosexual／Gay, Lesbian） ・両性愛者：性別に関係なく好きになる（Bisexual） ・無性愛者：どんな性も好きにならない（Asexual） ・わからない場合：クエスチョニング（Questioning）
性表現（Gender Expression） GE	表現する性 ・男性的／女性的：言葉、服装・髪型、化粧、身体（乳房、筋肉）など ・ジェンダーレス（Genderless）／・ノンバイナリー（Non-binary）
生物学的・身体的性 （Sexual Characteristics） SC or（Biological Sex）	生物学的な性 ・染色体や生殖器の特徴による割り振り （単純に男女に分けられない場合もあり：Intersex など）
社会的性（Social Gender）	一般的には Gender（性に対する当該社会の社会的文化的価値や規範）

参考文献：

The Genderbread Person v4.0 〈<https://www.genderbread.org/resource/genderbread-person-v4-0>〉

早稲田大学 GS センター 「“セクシュアルマイノリティ”から知る多様な性」〈説明書〉

〈https://www.waseda.jp/inst/gscenter/assets/uploads/2018/12/GS_Educationalmaterials.pdf〉

の影響が少なからず入り込んでいる。さらに男女は二分法で分けられず、両者はグラデーションでつながっており、明確に分割されてはいない⁶。人間の性は、こうした諸要素の組み合わせから形成されており、非常に多様なのである。LGBT もこうした多様な性の一部分であって、特別な枠に囲い込んで捉えることがないようにしなければならない。

LGBT、さらにはTG のカテゴリーに相当する人々の割合については、様々な数字がある。LGBT かどうかは自己申告であり、社会環境（宗教、伝統、規範など）や自分が置かれた環境によって異なるであろうし、調査対象者の選定の仕方や属性（年齢、性別など）によっても変化することが考えられる。表2 に示しているように、電通ダイバーシティ・ラボによる3時点での調査でLGBTの人口比率を比べると、5.2%（2012）、7.6%（2015）、8.9%（2018）と、6年間で3.7%も増加している。電通も2012年と他の調査は、質問方法が異なるとして、単純な比較はできないとしているが、LGBTについての情報が浸透し、特に若者において抵抗感や違和感が低下したなどの要因も比率の増加には関係していると思われる。LGBTの比率が、5～8%程度（1学級に2～3人）、TGが0.5%前後（200人に1人）といった数字になっている⁷。

TGと性同一性障害の差異についても確認しておく必要がある。性同一性障害は医学的な診断名であり、TGが全てこれに該当するわけではない。TGは割り当てられた性と性

表2. LGBTおよびトランスジェンダーの人口比率

調査実施者	実施年	調査方法	LGBT(%)	TG(%)
The William Institute（UCLA）	2011	先行研究に基づく推計	3.5	0.3
電通ダイバーシティ・ラボ調査	2012	モニター調査	5.2	—
電通ダイバーシティ・ラボ調査	2015	モニター調査	7.6	0.7
LGBT総合研究所（博報堂）調査	2016	モニター調査	8.0※	0.47
電通ダイバーシティ・ラボ調査	2018	モニター調査	8.9	—
厚生省委託事業調査	2019	モニター調査	8.0	0.42

参考文献：

電通ダイバーシティラボ 2019. LGBT 調査 2018」（2018 年 10 月、web調査：6,229名）

厚生労働省(三菱UFJリサーチ) 『令和元年度厚生労働省委託事業 職場におけるダイバーシティ推進事業 報告書』LGBT総合研究所（博報堂）2019. 「LGBT意識行動調査2019」

東優子他 2018. 『トランスジェンダーと職場環境ハンドブック』日本能率協会マネジメントセンター, p.14
（The William Instituteの数字は、東による） ※このLGBTにはLGBT以外の性的マイノリティを含む

⁶男女が二分法で分けられず、グラデーションでつながっているという説明に関しては、マードル, A. (須川訳) 『13 歳から知っておきたい LGBT+』(ダイヤモンド社,2017) の説明に詳しい。

⁷大内正太 (2017) は茨城大学の生田奈咲らが大学生 (944 名) を対象に行った LGBT 調査の数字を紹介している。この調査においては、女性の LGBT 16.5%, TG 2.1%、男性の LGBT 3.1%、TG 0.5% となっており、他の調査に比して高い数字となっている (66 頁)。

自認が一致しない状況にある者を指すのであり、幅広い概念である。これに対して性同一性障害当事者とは、「身体的性別のまま生きようとしても性別違和感のためにそれが困難で性別移行をせざるを得ないような人々」（西野 2018, 36 頁）、「トランスジェンダーの中で医療が必要な人が、診断基準を満たすと付けられる診断の名前」（東他 2018, 219 頁）などの説明もある⁸。TG はこうした性同一性障害を含む広い概念なのである。2013 年に出版されたアメリカ精神医学会の DSM- 5 では、「性同一性障害（Gender Identity Disorder）」は「性別違和（Gender Dysphoria）」と変更された。障害の文字が削除されて、個人の特性の一つとして捉える流れにある。

2. 日本におけるトランスジェンダーへの注目

先に確認したように、LGBT やトランスジェンダーという言葉の認知、あるいはそれが何を意味するかについての認識は近年高まってきている。日本においては、いつ頃から社会一般において認知されてきたのか、本節では新聞記事に掲載された“トランスジェンダー”という言葉の掲載回数から検討していく。近年、新聞を読まず、SNS やネット記事から情報を得る者が若者を中心に増加しているが、それでも新聞は社会問題や課題を敏感に取り上げる影響力の強いメディアであり、“社会的認知”の指標としては有効だと考える。

新聞による記事の偏りも考慮して、朝日新聞（記事検索サイト“聞蔵Ⅱ”）と毎日新聞（検索サイト“毎索”）の 2 紙を対象とし、期間を 2010 年 1 月 1 日から 2020 年 12 月 31 日まで、キーワードを“トランスジェンダー”として検索した。両紙とも、東京本社版の朝夕刊、東京と大阪本社版の朝夕刊に絞った。これとは別に、全国でのトランスジェンダーの出現傾向を見るため、毎日新聞で地方版を含めた全ての記事を対象とした検索を行った。また、より一般的に使用されている“LGBT”との出現時期や頻度を比較するため、朝日新聞でその出現をカウントした。これらの結果をまとめたものが表 3、表 4 である。

まず、いつ頃から“トランスジェンダー（以下 TG）”という語が紙上に登場したかを検索すると、朝日新聞では 2010 年、2011 年ともに見られない。LGBT についても全く同様である。表には示していないが、2009 年にも記事はなく、2008 年には 6 本あったものの、そのうち 4 本は図書やイベント紹介であった。2007 年には 2 本あり、「家族：性を超えて」とのタイトルで 2000 字以上の記事が連載されているが、この頃はほとんど取り上げられていない。これに対して毎日新聞では、2010 年に 2 本、2011 年には 4 本の記事が

⁸東（2018）は、「トランスジェンダー（性同一性障害を含む）」との表現は不適切だと述べる。「トランスジェンダーという言葉は、社会の多数派とは異なる自分たちのありようを病理化する社会に対抗する人々が使用する自傷」（220 頁）であるから、そこに“病理”とされる性同一性障害を含めることは矛盾すると述べている。

掲載されており、「境界を生きる」と題した子どもの性同一性障害の記事、言葉の解説、さらに「記者の目」でも取り上げている。それ以前の5年については、各年1、2本のみであった。

朝日新聞では2012年から徐々に取り上げられるようになり、記者が「私の視点」で言及している他、性的少数者に関する記事、外資系企業における性的少数者支援などの記事が見られる。とはいえ、年間に5～7本程度にすぎない。2012年に内閣府の「自殺総合対策大綱」が改訂され、その中で性的マイノリティへの念慮の言及がなされたことは、TG支援の取組みとして一步前進した出来事とされる。毎日新聞においては「自殺総合対策大綱」改訂の記事で、性的マイノリティを含むようになった点に言及しているが、朝日新聞は改訂について記事にはしているものの、性的マイノリティへの言及はない。両紙とも、2014年、2015年頃からTG関連の記事は少しずつ増加していき、LGBTの成人式やパレードの紹介の他、学校における性的少数者の課題、学校でのTGに関する教材や冊子の配布など、学校関連の記事も増えていった。2013年末に、文部科学省が「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」を全国の学校を対象に実施し、翌年にその結果が発表されたことも増加の要因だと考えられる。2016年になると記事の出現数はさらに増加し、毎日新聞では性的マイノリティに関する言葉の解説を何度か行っており、社会での使用頻度が高まってきた証左である。このように、TG生徒へのいじめやトイレ、制服、教科書の問題など学校関連の記事がさらに多くなるとともに、厚生労働省がセクハラ対応でLGBT事由も対象であることを明示すなど、職場での取組みに関連する記事も増えていった。

2017年、朝日新聞においてTG関連記事が前年の26本から68本へ2.5倍に急増した。この要因は、編集委員の氏岡真弓、記者の杉山麻里子らが中心となり、積極的にTG関連の記事の掲載を始めたことである。3月20日の朝刊一面に「『心は女性』女子大入学可能に？ 日本女子大、検討へ」（署名記事）、三面には「『女子とは何か』問い直す大学」を報じた。その後、6月19日に「『心は女性』女子大も門戸？ 5校が検討中、3校が検討予定」を掲載し、6月25日には「『心は女性』受入れ検討の理由」とのタイトルで津田塾大学の高橋裕子学長と日本女子大学の小山聡子人間社会学部長へのインタビュー記事を大きく掲載した。これには伏線があったように思われる。2014-15年におけるアメリカの女子大学でのTG学生受入れの議論と決定、2016年のアメリカ大統領選挙におけるTGの権利をめぐる対立の激化（2016年6月29日「米トイレ論争」、2017年2月26日「反トランプうねり」など）があった。記者の杉山麻里子は署名記事で、2017年3月から8回に亘り「いま子どもたちは カミングアウト」を連載し、名古屋におけるLGBTの子どもたちの姿を伝えている。こうした流れの中で、日本女子大学からTG学生受入れ検討のリリースがあり、これをきっかけにTG関連の記事がより発信されるようになる。TG

の記事のみをとれば、この年の記事数が一番多い。その後、2018年にはお茶の水女子大学がTG学生の受入れを表明し、それに関連した記事の他、学校制服、当事者支援、さらにトランプ大統領のTGに関する政策が複数回報道され、2019年には奈良女子大学、宮

表3. 毎日新聞におけるトランスジェンダー（TG）関連記事の頻度推移（2010－2020年）

年	全国	東京(朝夕)	東京大阪(朝夕)	TG関連記事の主たる内容（東京・大阪版の朝夕刊）
2010	8	2	2	境界を生きる（子どもの性同一性障害）、スウェーデンの出来事
2011	9	4	5	ことば、記者の目、LGBT成人式、映画、性的少数者の相続（講演）
2012	5	4	4	自殺対策大綱見直し(性的マイノリティ言及)、3件は外国事例（結婚/スポーツ）
2013	12	5	6	性的マイノリティ（ことば紹介）、大学生の就職／外資系企業、境界を生きる（同性愛のいま、2524字）、LGBT支援宣言・淀川区（大阪版）、書評
2014	22	9	12	性的少数者と学校（「記者の目」「ありのまま」3039字など）3件、性的少数者の就職支援、LGBT成人式（早稲田など）、研修・学習会、ことばLGBT、海外2
2015	57	16	21	調査(性的少数者自殺考えた)、小学校で授業・冊子、子育て(性への違和感受け止めて)、ICU学生寮、法務省DVD作成、LGBT等の解説、渋谷区同性愛カップル…
2016	86	27	33	ことば紹介（LGBT、GID、TGなど）、トイレ、いじめ、教科書、就職、職場、セクハラ／アメリカの事例など
2017	93	32	43	トランプのTG入隊拒否発言関係（12件）、学校トイレ、児童養護施設、早稲田のLGBTセンター、10件が映画演劇
2018	105	38	49	ことば(性的マイノリティ、LGBT)、お茶の水女子大、大学の企画、いじめ・相談、教師、カミングアウト、職場、ファッション、広辞苑の説明／映画や演劇8
2019	85	25	27	電通調査（LGBT68%既知）、弁護士支援、就活、制服、奈良女子大・宮城学院女子大TG受入、同性パートナー、性同一性障害訴訟、など
2020	59	27	31	スポーツ界、同性事実婚訴訟、日本女子大受入れ、性同一性障害の乗務禁止不当、避難時の障壁、シネマ/TV等
合計	541	189	233	

表4. 朝日新聞におけるトランスジェンダー（TG）関連記事の頻度推移（2010－2020年）

年	LGBT 東京(朝夕)	TG 東京(朝夕)	TG 東京大阪(朝夕)	TG関連記事の主たる内容（東京・大阪版の朝夕刊）
2010	0	0	0	
2011	0	0	0	
2012	6	5	7	私の視点(性的少数者)、性的少数者の報道、外資系で社内支援／イスラムのタブー
2013	9	7	11	私の視点（LGBT権利）、働く性的少数者の思い、性同一性障害の子ども、など
2014	21	15	19	教師向け解説本、大学のLGBTサークル、パレード、性別変更、「らしさって？」
2015	57	15	17	いちからわかるや時評で解説、パレード、LGBTカップル、LGBT成人式、外国事例6
2016	75	26	31	セクハラ対応にLGBT明記(厚労省)、学校制服、学生の勉強会(学生LGBTに寄り添う)、スポーツ、虹色ダイバーシティ代表・村木真紀、外出時のトイレ、トイレ論争など米国事例4、大阪市3区学校向け実践アドバイス(大阪版)
2017	106	68	77	日本女子大TG受入れ検討、女子大5校が検討中、「いま子どもたちは:カミングアウト」1-8連載、パレード、スポーツ、就活、性的少数者調査（宝塚大）、トランプ関連など
2018	156	51	61	お茶の水女子大TG受入れ関連複数、同性カップル、TVの性的少数者、当事者による支援、心の性(社説)、垣根超える服、性別問わず選べる制服／トランプの政策関連5件など
2019	91	32	36	奈良女子・宮城学院TG受入れ、性の表現の自由(制服選択 港区)、変る小学校体育教科書、経産省トイレ使用制限違法、高校願書性別欄廃止県も、トランプの軍隊TG禁止
2020	70	44	49	どうなる教科書(性の多様性)、お茶大TG受入れに医師診断書求めず、奈良女副学長インタビュー、日本女子大TG受入れ決定、性別欄ない履歴書、制服、トイレ、五輪参加など
合計	591	263	308	

城学院女子大学の TG 学生受け入れ決定の他、学校関連の記事が数多く掲載されるが、総数は減少した。2020 年の記事は、お茶の水女子大学や奈良女子大学での TG 学生受け入れ開始、五輪、スポーツを含め多様な内容である。

毎日新聞は、2017 年の日本女子大学が TG 学生の受け入れ検討を始めたことについて記事にはしていない。この年、前年と比べて 5 本増えて 32 本になったにすぎず、そのうちトランプ大統領による TG の入隊拒否発言関連の記事が 12 本、映画や演劇関連の記事が 10 本ほどあり、これらで 3 分の 2 を占める。記事の本数では、お茶の水女子大学の受け入れが決定した翌 2018 年において最も多くなり（この年も映画や演劇関係がやや多い）、その後はやや減少している。LGBT 関連の記事については、朝日新聞の記事のみに限定されるものの、TG 関連の記事の現れ方（頻度）と同様の傾向が見て取れる（重複する記事も多い）。

朝日、毎日両紙とも、TG、LGBT など性的マイノリティを対象とする記事は 2014、2015 年頃から急激に増え始め、2017、2018 年において最も頻繁に取り上げられるようになり、その後やや減少傾向になっている。こうした報道の結果、先の電通調査など（表 2）でも見たように、トランスジェンダー（TG）や LGBT といった言葉の認知は進み、性的マイノリティの人々の学校、大学、家庭、職場など様々な場、あるいは結婚や就職、契約などの場面における差別や障害、それ故の苦悩について、ある程度は理解されるようになってきた。しかしながら、TG を含む性的マイノリティへの理解の深まりはまだ十分ではなく、様々な制度や支援の整備は緒についたところだと言えよう。

3. トランスジェンダーに関する日本の動向

前節では、新聞記事を手掛かりに、TG（トランスジェンダー）の語が使用された記事の本数から、社会へ TG が広まってゆく時期やそのきっかけ、記事の内容などを確認した。本節では、このように TG を含む LGBT などの性的マイノリティが社会的に認知されていくようになった社会的背景、つまり LGBT をめぐる世界の動き、法律や制度の制定、調査、重要な出来事などの動きを探っていく。こうした社会的な動きが、LGBT 当事者らによる権利主張や支援の動きを推し進め、人々の意識や認識を変えていったからである。

表 5 は、世界の動向も交えながら、主として日本における TG を中心とする性的マイノリティに関連する出来事をまとめたものである。まず、世界的な流れとしては、1990 年前後から、同性愛についての脱病理化の動きが作られた（表 5 では（ ）内に表示）。アメリカ精神医学会の DSM- III R の精神疾患リストや WHO（世界保健機関）の疾病分類（ICD）から“同性愛”が除外され、“同性愛”は疾病ではないとの診断基準が示されるようになる。1993 年には、WHO が「同性愛はいかなる意味でも治療の対象とならない」

表5. 日本におけるTG／性的マイノリティ関連の動向・出来事（一部世界の動向）

1987	(アメリカ精神医学会のDSM-III-R 精神疾患リストから「自我異和の同性愛者」除外… 同性愛 は正常範囲に)
1990	(WHOの疾病分類ICDから 同性愛 の分類名廃止) ・府中青年の家事件（ゲイとレズビアンへの会の利用を「秩序を乱すおそれがある」などとして利用拒否）
1993	(WHO「同性愛はいかなる意味でも治療の対象とならない」と宣言)
1994	・厚生労働省がWHO・ICDの見解を踏襲 (DSM-IV 非典型的なジェンダーのあり方 を「 性転換症 」から「 性同一性障害(GID) 」に）いずれも精神疾患) ・日本で初めてプライド・パレード実施（2007～東京プライドパレード、2012～東京レインボープライド）
1995	・日本精神神経学会はWHOの分類同様、疾病分類から同性愛の分類名を削除
1997	・日本精神神経学会のGID（Gender Identity Disorder）に関する委員会が「 性同一性障害 の診断と治療のガイドライン」公表（以後改訂）
1999	GID（Gender Identity Disorder）学会設立（岡山大学）
2002	・法務省が「人権週間強化事項」で性的指向を理由とする差別禁止を明記
2003	・「 性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律 」成立（2004年施行） ・ICU（国際基督教大学）で、性別違和のある学生の学籍簿上の氏名・性別の表記を変更可能に
2004	・法務省が「人権週間強調事項」で 性同一性障害を理由とする差別禁止 を明記
2007	(ジョグジャカルタ原則Yogyakarta Principles（性的指向および性自認に関して国際人権法がどのように適用されるかをまとめた国際文書）を国連人権理事会で承認（2017年11月に改訂））
2008	・「性的指向と性的同一性に関する声明」が国連総会に提出され、日本も賛同
2011	(国連人権理事会が「性的指向と性自認に基づく人権侵害」に焦点をあてた決議採択)
2012	・内閣府「 自殺総合対策大綱 」で 性的マイノリティの自殺対策 に言及
2013	・男女雇用機会均等法「指針」で同性間のセクハラを明記 ・多摩市女と男の平等参画を推進する条例 (DSM-Vにおいて診断名が「 性同一性障害 」から「 性的違和 (Gender Dysphoria) 」に)
2014	・文部科学省「 学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査 」を発表（前年4-12月実施）
2015	・LGBTに関する課題を考える国会議員連盟の発足（超党派） ・文部科学省「 性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について 」を発出 ・「第4次男女共同参画基本計画」（閣議決定）で性的指向や性同一性障害を理由として困難な状況に置かれている場合への対応言及 ・渋谷区「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」を制定 ・一橋大学 アウトティング (outing) 事件
2016	・文部科学省「 性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について (教職員向け) 」作成・配布
2017	・日本女子大学が トランスジェンダー学生 の受け入れ検討を始める（2024年から実施予定） ・「 いじめ防止対策推進法 」に基づく基本方針が改定され、 L G B T への対応 が盛り込まれる
2018	・お茶の水女子大学が2020年度から 性自認が女性の者の入学を認めることを表明 （2020年から実施） ・世田谷区「多様性を認め合い男女共同参画と多文化共生を推進する条例」を制定
2019	・奈良女子大学が2020年度からトランスジェンダー女性の入学認める／宮城学院女子大学は2021年度から (WHO疾病分類ICD-11で「 性同一性障害 」を 精神障害から除外 。「 性別不合 (Gender Incongruence) 」に)
2020	・日本女子大学が2024年度からトランスジェンダー女性の入学認める

出典：

アジア・太平洋人権情報センター（ヒューライツ大阪）〈<https://www.hurights.or.jp/archives/international-activities/>〉

アムネスティJapan 〈<https://www.amnesty.or.jp/human-rights/topic/lgbt/>〉

朝日新聞2020.6.19.日本女子大学／2019.6.29.奈良女子大学、9.12.宮城学院女子大学／2018.7.3.お茶の水女子大学

藤井ひろみ2018.「性自認および性的指向の困難解決に向けた支援マニュアルガイドライン」『小児保健研究』77(2),98-101.

中西絵里2017.「LGBTの現状と課題：性的指向又は性自認に関する差別とその解消への動き」『立法と調査』394,3-17.

e-Gov.法令検索 〈<https://elaws.e-gov.go.jp/>〉

OUTJAPAN 〈https://www.outjapan.co.jp/lgbtcolum_news/news/2020/11/33.html〉

Tokyo RainbowPride 〈<https://trponline.trparchives.com/calendar/>〉

との声明を発売したのを受け、翌年には厚生労働省がこの考えの踏襲を発表し、1995年には日本精神医学会でも疾病分類から“同性愛”を削除するなど、医学的見地からではあるが、“同性愛”に関しては疾病としてきた従来の考え方が大きく変化した。1960年代ごろより始まったとされる非病理化運動がようやく実ったのである。これに対してTGは、1994年のDMS-IVで名称が“性転換症”(Transsexualism)から“性同一性障害”(Gender Identity Disorder)へと変更され、その後、2013年に診断名が性的違和(Gender Dysphoria)となったものの、病理としての位置付けが継続している。WHOのICD-11では、2019年に“性同一障害”を精神疾患から除外し、「性の健康に関する状態」分類の中の“性別不合”(Gender Incongruence)と位置付けられるまで(2022年から発効)⁹、病理の対象とされてきた。ホモセクシャルの脱病理から30年の開きがある。TGの社会的認知はなかなか進まず、より抑圧されてきた存在とも言える。

TGをめぐる日本での動きとしては、日本精神神経学会が、1997年に「性同一性障害の診断と治療のガイドライン」を公表し、1999年にGID(Gender Identity Disorder)学会が設立されて以降、ようやく本格化する。2003年に「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」(以下、特例法)が短期間の審議のみで議員立法として成立し、翌年に施行された。これにより、特定の条件を満たす者が家庭裁判所の審判を経ることで、日本でも戸籍上の性別の変更が認められることになった¹⁰。特例法の成立もあり、2004年には法務省が人権週間の強調事項として「性同一性障害を理由とする差別をなくそう」を掲げ、啓発活動を始めている。この時期、既に国際基督教大学では性別違和のある学生の学籍簿上の氏名や性別の変更を可能とするなど、大学としては先駆的な取組みを始めた¹¹。

世界的な動きとしては、2007年に国連人権理事会で「ジョグジャカルタ原則」を承認して、性的指向や性自認に関する国際人権法の適用例を示したのを始め、性指向や性自認に基づく人権侵害について強いメッセージを発信していくようになり、世界的な流れが作られていった。日本でもより広範囲な取組みが行われるようになっていく。2012年には内閣府が「自殺総合対策大綱」¹²を改訂した。自殺念慮の割合が高いことが指摘される性的マイノリティを自殺要因の一つに挙げ、社会における無理解や偏見等がその背景にあるとして、性的マイノリティに関する理解促進の取組みを、社会全般、学校において推進するようになる。2014年には、文部科学省が小学校から高校までを対象に、性同一性障害

⁹ OUT JAPAN 2019.5.27. ニュース “WHO が性同一性障害を「精神障害」の分類から除外しました” <https://www.outjapan.co.jp/lgbtcolumn_news/news/2019/5/13.html> その前年には、この変更予定が伝えられていた。

¹⁰ 竹田香織 2009 「性同一性障害者特例法をめぐる現代的状況—政治学の視点から」『GEMC journal』(東北大学) 1, pp.94-105.

¹¹ 国際基督教大学ジェンダー研究センター 2014. 『ICUにおけるジェンダー・セクシュアリティ対応—トランスジェンダー学生対応の10年間とこれから』

¹² 厚生労働省「自殺総合対策大綱」(平成24年8月28日閣議決定)

者の現状把握と今後の対策を考えるために実施した全国調査の結果を公表した（実施は2013年4-12月）¹³。調査によって得られた606件（小学校93件、中学校110件、高校403件）の報告をもとに分析を行い、2015年には「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」を発出し¹⁴、さらにその翌年には教職員向けの対応冊子を作成・配布して、一気に対応を進めた。2015年には、他にも様々な動きがみられた。まず、「第4次男女共同参画基本計画」（内閣府 2015）の「第8分野 …困難を抱えた女性等が安心して暮らせる環境の整備」において、「エ 性的指向や性同一性障害、女性であることで複合的に困難な状況に置かれている人々への対応」が盛り込まれた。次に、LGBTに関する課題を考える国会議員連盟が超党派で結成され、渋谷区では「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」が成立し、他の自治体に先駆けて「パートナーシップ制度」を導入するなどした。表3と表4でも確認したように、新聞でもLGBTを取り上げた記事が増加していった年であり、三省堂が行っている「今年の新語 2015」の3位に“LGBT”がはいった¹⁵。

その後、前節で述べたように、日本女子大学がTG学生入学検討を始めたという朝日新聞の記事をきっかけに、TG学生の受入れの検討を始める女子大学も現れ、2018年にお茶の水女子大学、翌2019年には奈良女子大学と宮城学院女子大学、さらに2020年に日本女子大学がそれぞれTG学生の受入れを表明した。お茶の水女子大学と奈良女子大学では、2020年度から実施され始めた。

以上、日本におけるTGを中心に、性的マイノリティに関する出来事と、彼/女らを対象とした様々な制度や取組みの始まりを概観した。TGに対する医学的な捉え直しは、LGなどホモセクシャルに比べてかなり遅れたことを確認した。日本におけるTGへの取組みの始まりは、2000年頃、本格的には2003年に性同一性障害者特殊法の成立以後である。実質的に認知が進み具体的な政策が実施され始めたのは、この7-8年のことに過ぎない。取組みは緒についたばかりである。

4. トランスジェンダーに関するアメリカの動向

アメリカにおけるTGに関連する出来事や話題はかなり以前より様々なあるが、抑圧され、声を上げられない状況が続いていた。TGを含む性的マイノリティの解放運動につながる出来事は、第二次世界大戦後、1960年代になってからのことである。

解放運動に先立ち、TGについて一般社会の話題になった出来事は、元軍人（G.I.）であった男性が1951年にデンマークで3度の性転換手術をうけ、女性（Christine

¹³ 文部科学省 2014.6.13.「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」

¹⁴ 文部科学省 2015.4.30.「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」

¹⁵ 三省堂「辞書を編む人が選ぶ今年の新語 2015年」。1位じわる、2位マイナンバー、4位インバウンド。

Jorgensen) として帰ってくるとのニュースが新聞に掲載され、翌年に帰国したことである(以下、表6表照)。以後、彼女はショービジネスの世界に入り、有名人となってTGの存在を社会に知らしめた。また彼女は、TGの有名人として政治活動にも参加するようになる¹⁶。エリクソン(Erickson, Reed)は女性として生まれ、男性へと性転換したTG(FtM)で、ジョンス・ホプキンス大学の医師ベンジャミン(Benjamin, Harry)の患者となって施術をうけ、1963年以降、社会的には男性として生活するようになった。父親から遺産を引き継いだエリクソンは、1964年にエリクソン教育財団を設立し、トランスセクシャルの人々をはじめ、ベンジャミンなどに対して資金援助を始めた(Stryker 2017)。

LGBT解放運動(Liberation Movement)の始まりは、通常、1969年にニューヨークの人気ゲイバーStonewall Innにおける騒動(Stonewall Riots)だとされる。このバーに家宅捜索に踏み込み、同性愛者やTGらを連行しようとした警察に抵抗して起こったもので、これを機にLGBT当事者らによる権利獲得のための運動が活発化していくようになる。よって、Stonewallはその象徴的な事件となり、これをタイトルとする図書は何冊も出版されている。また、1971年以降、LGBTQ+に関する優れた図書に贈られる“Stonewall Book Award”が設けられ、今日も継続している¹⁷。これより前にも、様々な出来事、事件は生じていた。その一つがサンフランシスコにあるCompton's Cafeteria騒動である¹⁸。この店はTGコミュニティの溜まり場で、TG女性を逮捕しようとした警官に抵抗したことから始まった混乱である。いわゆるソドミー法(Sodomy Law)が存在し、同性愛や異性装などが禁じられ、LGBTに対する警察による取締りが厳しかった当時であったが、こうした騒動を含め抵抗運動がたびたび起こるようになり、LGBT解放運動の大きな流れへとつながっていく。

1970年代になると、団体(Gay Liberation Front、Gay Activist Allianceなど)を結成しての解放活動、権利主張が盛んになった。そのうちの一つがSTAR(Street Transvestite Action Revolutionaries)“異性装者の行動革命”という団体であり、TGの権利を求めて活動を始めた。1975年には、ミネアポリス市でTGへの差別を禁止する法律が初めて制定され、1977年にはMtFのTGであるレネ・リチャーズ(Renée Richards)(1975年に性別適合手術)が全米オープンテニスへの女子選手としての出場をめぐる裁判を起こし、これに勝訴して出場権を得て騒がれた。1979年にはHarry Benjamin国際性別違和協会が設立されるなど、アメリカでも性別適合手術とその支援が一層広がっていった。この年、“レズビアンとゲイの権利を求めるワシントン大行進”も実施され、LGBTの権利を

¹⁶ これ以降の本文に示すアメリカにおける出来事の説明は、個々に出典を示していない限り、主としてPohlen(北丸訳2016=2019)及びStryker(2017)の記述に基づいている。

¹⁷ American Library Association web サイト“Stonewall Book Awards”

¹⁸ Stryker, S. と Silverman, V. らはこの事件を取り上げ“Screaming Queens: The Riot at Compton's Cafeteria.”というタイトルのドキュメンタリーを作成し、エミー賞を受賞した。(GLBT Historical Society 2020)

表6. アメリカにおけるトランスジェンダーに関する事件と動向

1952	Christine Jorgensen transgenderの存在を初めて世に知らしめる 〈以下、Transgender をTGと表記〉
1964	Reed Erickson (FtM) 基金 (Erickson Educational Foundation)の創設 (FtM: Female to Maleの略)
1966	Compton Cafeteria 騒動 (Trans Womenが差別と警察の嫌がらせに抵抗)
1969	Stonewall 騒動 (同性愛者やTrans Women等、LGBTQの人々が警察と衝突) …LGBT解放運動の端緒
1970	The Street Transvestite Action Revolutionariesの創設 (New York)
1972	(スウェーデンにおいて世界で初めて、法的に性転換を認める)
1975	ミネアポリス市で初めてトランスジェンダーへの差別を禁じる法律が成立
1977	New Yorkの最高裁がRenée Richardsがテニス協会に対して勝訴 (女性プロ選手として活動する権利)
1979	The Harry Benjamin International Gender Dysphoria Associationが創設される (現、The World Professional Association for Transgender Health (WPATH))
1986	Lou Sullivan (FtM) がトランス男性の擁護団体を創設 (FtM International)
1992	トランスジェンダー法と雇用政策に関する国際会議がヒューストンで開催される
1993	ミネソタ州で初めて州としてトランスジェンダーへの差別に対する保護を法律に盛り込む
1994	DSM-IVで“Gender Identity Disorder (GID)”が診断名となる
1999	トランスジェンダー追悼日 (TDOR: Transgender Day of Remembrance) (1年前のRio Hesterの殺害追悼)
2002	・ Transgender Law Centerが創設 (TGの人々が安心して生活できるよう、法律や政策の変更を目的とする) ・ Sylvia Rivera Law Projectが創設 (TGを包摂できる社会を作るよう法的サービスや教育を提供)
2003	National Center for Transgender Equality が創設される
2004	TransMarchが初めてサンフランシスコで行われる
2008	TGであることを公開している者として初めて、Stu Rasumussenが初めて市長 (Silverton in OR) となる
2009	TGであることを公開している者として初めて、Amanda Simpsonがホワイトハウスのアドバイザーとなる
2012	Title VII (雇用機会の平等/性に基づく雇用差別の禁止) をトランスジェンダーにも適用
2013	DSM-V 性同一性障害を診断カテゴリーから外すが、“gender dysphoria (性別違和)”という診断名で継続
2014	デューク大学出版会が、トランスジェンダーに関する学術雑誌として <i>Transgender Studies Quarterly</i> 発行
2016	・ オレゴン州で、バイセクシュアルを公表しているKatherine Brownが、性的少数者として初めて知事になる ・ ノースカロライナ州が出生証明書の性別に基づくトイレ使用を義務付ける州法を制定 ・ オバマ大統領は、教育プログラム・活動における性差別の禁止に性自認に基づく差別が含まれるとし、トランスジェンダーの生徒は性自認に合致するトイレ、ロッカー等を使用できるとされた
2017	・ トランプ米大統領トランスジェンダーの人々が米軍に入隊を認めないと発表 ・ 生徒が自認する性別に応じてトイレを使用できるとするトランスジェンダーの生徒に対する保護を撤回
2021	バイデン大統領が、トランプ前大統領によるトランスジェンダー入隊禁止措置を撤回

出典：

Beemyn, G. 2014. Transgender History in the United States. (As special unabridged version of a book chapter from *Trans Bodies, Trans Selves*. (Oxford Univ. Press), edited by Laura Erickson-Schroth.

〈https://www.umass.edu/stonewall/sites/default/files/Infoforandabout/transpeople/genny_beemyn_trans_genderhistoryintheunitedstates.pdf〉

CNN 2021.2.2. LGBTQ Rights Milestones Fast Facts

〈<https://edition.cnn.com/2015/06/19/us/lgbt-rights-milestones-fast-facts/index.html>〉

glaad 2012.12.19. Timeline: A Look Back at the History of Transgender Visibility.

〈<https://www.glaad.org/blog/timeline-look-back-history-transgender-visibility>〉

New York Times 2015.8.28. Opinion: Milestones in the American Transgender Movement

〈<https://www.nytimes.com/interactive/2015/05/15/opinion/editorial-transgender-timeline.html>〉

Teich, N.M. 2012. *Transgender 101: A Simple Guideline to a Complex Issue*. Columbia Univ. Press, 68-69.

中川かおり 2021. 「【アメリカ】性差別禁止によるLGBTQ保護等に関する連邦施策」『外国の立法』286(1), 20-21.

ハフポスト 2017.7.26. 「トランスジェンダーのアメリカ軍での勤務を禁止する」トランプ大統領が発表

〈https://www.huffingtonpost.jp/2017/07/26/trump-us-military-transgender_n_17592760.html〉

ポーレン,J. (北丸雄二訳) 2019. 『LGBTヒストリーブック』サウザンブックス

ロイター (2017.2.23) 「米政権、トランスジェンダーを擁護するオバマ氏の通達破棄」

〈<https://jp.reuters.com/article/usa-trump-lgbt-idJPKBN16209W>〉

大々的に求めるようになったのである。解放運動は活発になっていったが、LGBT の諸団体は一枚岩ではなく、例えばレズビアンと TG 女性の間においては、かなり深刻な不和が見られた¹⁹。

1980 年代は、深刻な病として HIV がアメリカで広がりを見せた、いわゆる“エイズ危機”の時代であった。人々の恐怖や差別の矛先は、十分な科学的根拠もないまま、当初の罹患者に同性愛者が多かったことから、ゲイを中心とするホモセクシャルに向けられるようになる。LGBT の解放運動の盛り上がりを快く思っていなかった政治的、宗教的保守派の巻き返しもあり、ゲイをはじめ LGBT に対する反発、偏見が強まっていった。これに対し、これまで不和もあった LGBT の諸コミュニティは協力し合い、“ACT UP (AIDS Coalition to Unleash Power)”などの組織を立ち上げるなどして、抗議活動を開始していく。ナチスがホロコーストで同性愛者に貼り付けたピンク・トライアングルを逆手に取り、有名なスローガン“Silence=Death”を掲げたのは、この団体である。

1990 年代になっても保守的な動きは続くが、1992 年に民主党のビル・クリントン (Clinton, Bill) が大統領に就任するなどリベラル派が勢力を伸ばし、LGBT 権利主張・擁護の揺れ戻しも始まった。1992 年以降は TG 法や TG の雇用政策に関する国際会議が開催されるなど、国際的に TG に関する問題・課題を共有し、連携していこうとする動きが現れてきた。アメリカ国内でも、ミネソタ州が TG への差別に対する保護を初めて法律に盛り込んだ²⁰。また、TG の団体が全国に数多く創設され、カミングアウトする者が増えてきたのも 90 年代の特徴だとされる (Pohlen 2016 = 2019, 138-139)。もう一つ TG にとって重要な動きは、アメリカ精神医学会の DSM-IV の診断基準において、GID (Gender Identity Disorder) を設けたことである。ただ、多くの TG の人々にとって、GID を認めることは健康管理のために“病理”としてレッテルを貼られるとの否定的認識をもつ者が多くいる一方、ある人々は安心して相応しい医学的治療を受けることができると考えており、これを受入れるかどうかは論争を呼ぶ課題であった (Stryker 2017, 139)。

2000 年に入ると、TG の権利擁護、平等を求める組織やプロジェクトが次々に始動するとともに、TG を公表している者が初めて公職に就く事例が増加し、地域的な偏りはあるものの、TG に対する社会的認知と理解は広がっていく。2010 年代になるとこうした動きはさらに加速し、Title VII (性に基づく雇用差別の禁止) に TG が含まれるようになり、オレゴン州知事に TG 公表者のカテリーナ・ブラウン (Brown, K.) が就任した。学術面でも、TG を主とする学術雑誌 *Transgender Studies Quarterly* が名門デューク大学出版会

¹⁹Beemyn, G. The Transgender History in the United States. (A unabridged version of a book chapter from *Trans Bodies, Trans Selves*, (2014). edited by Laura Erickson-Schroth). pp.23-25.

²⁰ ゲイ・レズビアン差別禁止法は、1982 年にウィスコンシン州で初めて制定された (Pohlen 2016 = 2019)。

から発行されるようになった。

しかし、2017年にトランプ（Trump, D.）大統領が就任すると、こうした動きに後退が生じる。アメリカの軍隊では、LGBTを公表している者を軍隊に入隊させないことになっていたが、クリントン大統領の時代に“Don’t Ask, Don’t Tell（DADT）”という苦肉の策を編み出し、LGBTであるかどうかを尋ねない、本人も性的指向を言わないという原則が、適用されていた（1993年）。その原則をトランプ大統領が認めないこととしたのである。さらに、オバマ（Obama, B.）大統領の就任時に、教育現場においてTGの生徒は性自認に合致するトイレやロッカーを使用できるとされたが（2016年）、トランプ大統領がこれを撤回したことで（2017年）、反対運動が起こった。2021年にバイデン（Biden, J.）大統領が就任すると、TGの軍隊入隊禁止はすぐさま撤回された²¹。

TGに限らず、LGBTの権利擁護、平等化は前進と後退を繰り返しながらも、着実に進んでいっている。しかし、社会に差別や障害はまだ残っており、少しのきっかけで容易に逆行する脆弱さをもっていることは十分に認識しておく必要がある。これを前提に、TGの解放・人権擁護運動は広がりを見せながら、継続強化されていくと思われる。

おわりに

本稿では、日本とアメリカにおけるTGに関する出来事（事件、運動、団体設立、政策・制度等）などを取り上げて年表を作成し、TGに対する社会の動向を概観的に把握しようと試みた。TGの問題は、LGBT+など性的マイノリティ全般に関連することも多いが、ここではできるだけTGに絞ったので、重要な出来事や動きが捉えきれない可能性が残る。今後、調査研究を進めていく中で、補足していきたい。

両国の動向を比較して気付くことは、日本におけるTGをめぐる運動の歴史の浅さと、トップダウン型のTG支援政策の進展という点である。人々の人権擁護や平等の希求といった要請からTGの社会的受容が進展していったというよりは、世界的に生じてきた性的マイノリティへの人権擁護の高まりといった動きの中で、法務省や文部科学省、内閣府などが法律や制度を作成し、あるいは改訂し、TGの社会的受容の動きを作っているように思われる。認知は広がり、論争や混乱もなく進行しているようであるが、人々が真にTGの人々の思いや社会的状況（雇用や婚姻、社会的サービスなどの差別や障害等）をどれほど理解しているのかという不安が生じる。この不安は、本稿を含む科学研究費研究で対象とする女子大学におけるTG学生の受入れにもつながる大きな課題だと考えている。

²¹ 朝日新聞（2017.2.23. 夕刊 [東京版]）「米トランプ政権、学校への通達撤回 トイレ・更衣室「心の性」に応じて」、（2017.7.27. 朝刊 [東京版]）「トランスジェンダーの軍受け入れ、トランプ氏「認めぬ」」、（2021.1.27. 朝刊 [東京版]）「トランスジェンダー、米軍入隊許可：バイデン大統領 前政権で禁止を撤回」など。

引用文献

- 安東由則 2019. 「スミス・カレッジ調査の目的・調査経緯とインタビューの解説及び補足：Wong の出願への対応とトランスジェンダー学生 of 受入れを中心に」『研究レポート』 49, 1-22.
- American Library Association “Stonewall Book Awards” 〈<http://www.ala.org/rt/rrt/award/stonewall>〉
- Beemyn, G. 2014. Transgender History in the United States. (A special unabridged version of a book chapter from *Trans Bodies, Trans Selves*. edited by Laura Erickson-Schroth. Oxford Univ. Press) , 〈https://www.umass.edu/stonewall/sites/default/files/Infoforandabout/transpeople/genny_beemyn_transgender_history_in_the_united_states.pdf〉
- CNN 2021.2.2. LGBTQ Rights Milestones Fast Facts. 〈<https://edition.cnn.com/2015/06/19/us/lgbt-rights-milestones-fast-facts/index.html>〉
- 電通ダイバーシティ・ラボ 2019. 「LGBT 調査 2018」 (2018 年 10 月、web 調査：6,229 名) 〈<https://www.dentsu.co.jp/news/sp/release/2019/0110-009728.html>〉
- 藤井ひろみ 2018. 「性自認および性的指向の困難解決に向けた支援マニュアルガイドライン」『小児保健研究』 77(2), 98-101.
- GLBT Historical Society 2020. THE COMPTON'S CAFETERIA RIOT & THE LEGACY OF POLICE VIOLENCE 〈<https://www.glbthistory.org/events/2020/8/5/the-comptons-cafeteria-riot-amp-the-legacy-of-police-violence>〉
- ハフポスト 2017.7.26. 「トランスジェンダー of アメリカ軍での勤務を禁止する」 トランプ大統領が発表」 〈https://www.huffingtonpost.jp/2017/07/26/trump-us-military-transgender_n_17592760.html〉
- 国際基督教大学ジェンダー研究センター 2014. 『ICU におけるジェンダー・セクシュアリティ対応ー トランスジェンダー学生対応の 10 年間とこれから』 〈http://web.icu.ac.jp/cgs/2014/09/nl017_06.html〉
- 国際基督教大学ジェンダー研究センター 2015.10.21. 「LGBT 学生生活ガイド in ICU トランスジェンダー／GID 編 ver.8」 〈http://web.icu.ac.jp/cgs/docs/20151021_TSGuide_v8.pdf〉
- 国際基督教大学ジェンダー研究センター 2016.9.1. 「ジェンダー・セクシュアリティとキャンパスライフ Vol.2： やれることリスト 108 at University (ver.1)」 〈<http://web.icu.ac.jp/cgs/2016/09/gsc102v1.html>〉
- 厚生労働省「自殺総合対策大綱」 (平成 24 年 8 月 28 日閣議決定) 〈<https://www.mhlw.go.jp/content/h28h-s2.pdf>〉
- 厚生労働省 (三菱 UFJ リサーチコンサルティング) 2020. 「令和元年度厚生労働省委託事業・職場におけるダイバーシティ推進事業報告書」 〈https://www.mhlw.go.jp/stf/eisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyoukintou/0000088194_00001.html〉
- LGBT 総合研究所 (博報堂) 2019. 「LGBT 意識行動調査 2019」 〈https://www.daiko.co.jp/dwp/wp-content/uploads/2019/11/191126_Release.pdf〉

- 東優子 2018.「ジェンダーの多様性をめぐる概念の登場と変遷」『女性心身医学』22(3), 219-224.
- 東優子・虹色ダイバーシティ・ReBit 2018.『トランスジェンダーと職場環境ハンドブック』日本能率協会マネジメントセンター
- マーデル, A. (須川訳) 2017.『13 歳から知っておきたい LGBT+』ダイヤモンド社 (Mardell, A. 2016. *The ABC's of LGBT+: Gender Identity Book for Teens*. Coral Gables, FL: Mango Publishing)
- 三成美保 2017.『教育と LGBTI をつなぐ』青弓社
- 文部科学省 2014.6.13.「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」〈https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1322368_01.pdf〉
- 文部科学省 2015.4.30.「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」〈https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm〉
- 内閣府 2015.12.25「第4次男女共同参画基本計画」〈https://www.gender.go.jp/about_danjo/basic_plans/4th/pdf/print.pdf〉
- 中川かおり 2021.「【アメリカ】性差別禁止による LGBTQ 保護等に関する連邦施策」『外国の立法』286(1), 20-21.
- 中西絵里 2017.「LGBT の現状と課題：性的指向又は性自認に関する差別とその解消への動き」『立法と調査』394, 3-17.
- New York Times 2015.8.28. Opinion: Milestones in the American Transgender Movement
〈<https://www.nytimes.com/interactive/2015/05/15/opinion/editorial-transgender-timeline.html>〉
- 西野明樹 2018.『子どもの性同一性障害に向き合う』日東書院
- 大内正太 2017.「性的違和の疫学と原因」康純編『性的に違和感がある子どもたち』合同出版、pp.63-69.
- 三省堂「辞書を編む人が選ぶ 今年の新語 2015 年」〈<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/topic/shingo2015/2015Best10.html>〉
- OUT JAPAN 2019.5.27. ニュース “WHO が性同一性障害を「精神障害」の分類から除外しました”
〈https://www.outjapan.co.jp/lgbtcolumn_news/news/2019/5/13.html〉
- Pohlen, J. (北丸訳) 2019.『LGBT ヒストリーブック：絶対に諦めなかった人々 100 年の闘い』サウザンブックス社 (Pohlen, J. 2016. *Gay, and Lesbian History for Kids: The Century-Long Struggle for LGBT Rights, with 21Activities*. Chicago: Chicago Review Press.)
- Stryker S. 2017. *Transgender History: The Roots of Today's Revolution* (Revised edition). Berkley, CA: Seal Press
- 高橋裕子 2016.「トランスジェンダーの学生をめぐる入学許可論争とアドミッションポリシー」『ジェンダー史学』12, 5-17.
- 竹田香織 2009「性同一性障害者特例法をめぐる現代的状況—政治学の視点から」『GEMC journal』

(東北大学) 1, 94-105. <http://www.law.tohoku.ac.jp/gcoe/wp-content/uploads/2009/03/gemc_01_cate4_6.pdf>

Teich,N.M. 2012. *Transgender 101: A Simple Guideline to a Complex Issue*. Columbia University Press.

ロイター 2017.2.230. 「米政権、トランスジェンダーを擁護するオバマ氏の通達破棄」 <<https://jp.reuters.com/article/usa-trump-lgbt-idJPKBN16209W>>

早稲田大学 GS センター 「"セクシュアルマイノリティ" から知る多様な性」(説明書) <https://www.waseda.jp/inst/gscenter/assets/uploads/2018/12/GS_Educationalmaterials.pdf>

※新聞記事については、文中に新聞社名と経済年月日を記載しているので、省略した。

(2020.6.19. 日本女子大学／ 2019.6.29. 奈良女子大学、9.12. 宮城学院女子大学／ 2018.7.3. お茶の水女子大学)

利用した団体・組織の web サイト

アムネスティ Japan <<https://www.amnesty.or.jp/human-rights/topic/lgbt/>>

アジア・太平洋人権情報センター (ヒューライツ大阪) <<https://www.hurights.or.jp/archives/international-activities/>>

glaad 2012.12.19. Timeline: A Look Back at the History of Transgender Visibility. <<https://www.glaad.org/blog/timeline-look-back-history-transgender-visibility>>

e-Gov. 法令検索 <<https://elaws.e-gov.go.jp/>>

OUT JAPAN <https://www.outjapan.co.jp/lgbtcolumn_news/news/2020/11/33.html>

Tokyo Rainbow Pride <<https://trponline.trparchives.com/calendar/>>

The Genderbread Person v4.0 <<https://www.genderbread.org/resource/genderbread-person-v4-0>>

※以上のネット資料については、2021 年 2 月 28 日に最終の所在確認を行った。

付記

本稿は、2020－2024 年度 科学研究費・基盤研究 (B) 「大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れ課題：日米の女子大学事例を中心に」(代表：安東由則) による研究成果の一部である。

日本におけるトランスジェンダー関連の図書リスト及び トランスジェンダーのための関連資料と解説

A Bibliography of Japanese Books on “Transgender,”
Resources for Transgender Persons and Their Allies in Japan, and Commentaries

安東 由則 *

ANDO, Yoshinori

目次

はじめに：本稿のねらい

I. 解説

II. トランスジェンダー関連の日本語文献及び 資料

1. トランスジェンダー関連図書
2. 国内外の性的マイノリティへの取組
3. 大学設置のジェンダーセンター及び
LGBT 等支援団体
4. 大学におけるトランスジェンダー学生関
連ガイドライン及びダイバーシティに関
する資料

* 武庫川女子大学教育学部・教授／教育研究所・研究員

はじめに：本稿のねらい

『研究レポート』本号掲載の拙著論文において、日本では2010年代以、徐々にトランスジェンダー（以下、TG）を含む性的マイノリティに関する社会的関心が高まり、様々な制度や環境の整備が行われるようになったことを確認した。大学において性的マイノリティ学生支援の取組みが始められているが、その嚆矢は国際基督教大学であり、2003年よりTG学生の氏名や性別の表記変更を可能にした¹。2010年代半ば頃から、いくつかの大学キャンパスにおいては、LGBTサークルなど性的マイノリティへの支援活動が活発化していった。さらに2017年、日本女子大学がMtF（Male to Female）のTG女性の受入れ検討の報道²がなされると、日本でも性的マイノリティ、とりわけTGへの社会的関心は高まり、環境整備や支援のあり方が模索され始めたところである。そこで、日本の女子大学におけるTG学生のための環境整備や支援のあり方を探り、進展させていくため、この分野において取組みが進んでいるアメリカの大学事例（女子大学と共学大学の双方）を参考に、日本の大学との比較研究を学内研究者と共同で進めることとした³。

本稿では、この共同研究における土台づくりとして、日本におけるTG関連の基礎文献・情報の収集と整理を行い、それを4つのセクションに分けて提示する。1）トランスジェンダー関連図書リストの作成、2）性的マイノリティに関する法律・規定・声明等の収集、3）大学のジェンダーセンター及びLGBT等支援団体リストの作成、4）国内大学におけるTG学生等に関するガイドライン等の収集及び提示、である。以下、「Ⅰ．解説」においてそれぞれの概要を述べ、文献リストおよび各種資料・情報については「Ⅱ．トランスジェンダー関連の日本語文献及び資料」に掲載する。

Ⅰ．解説

1. トランスジェンダー関連図書について

まず、文献リストづくりでは、TG関連の日本語文献（図書のみ）のリストを作成し、領域別（全般／学校・子ども関連／職場関連などに大別）、年代順に示した。“トランスジェンダー”をキーワードとして検索し、TGを扱った図書が中心となっている。本稿に示した図書文献以外にもTGを取り上げた書籍は多くある。また、図書リストもTGのみに限定することは不可能であり、LGBT全般を扱ったものも少なからず含まれている。ここでは、日本社会においてTGを中心とする性的マイノリティへの関心がいつ頃から強まり、社会的課題として意識されていくようになったか、その変化を確認する指標として、図書の出版を用いることとした。

¹国際基督教大学ジェンダー研究センターのwebサイトにその経緯の説明がある。

²朝日新聞 2017年3月20日（東京版・朝刊）「「心は女性」女子大入学可能に？」

³2020-2024年度科学研究費・基盤研究（B）「大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れ課題：日米の女子大学の事例を中心に」（代表：安東由則）として進めていく。

（１）全般

収集した文献の中で最も古いものは渡辺恒夫が1989年に出版した『トランスジェンダーの文化―異世界へ越境する知―』である（2013年に再版）。これは、心理学の観点を中心にしながら、古今東西の医学や歴史、文学、マンガなどを対象に幅広く論じたエッセー集である。1990年には『現代のエスプリ』（277号）が「トランスジェンダー現象」を特集し、その編者でトランスジェンダー当事者である蔦森樹は1993年、自身のセクシュアル・アイデンティティの彷徨を綴った『男でもなく女でもなく』を著した。虎井まさ衛は1990年代にアメリカで性転換手術を受けており、その経緯や経験を記した図書を立て続けに出版した（1996、1997）。これらは当事者の自伝としては初期のものであるが、総じて90年代における図書は数少ない。2000年代になって、前出の虎井まさ衛（2000a・b、2003）をはじめ、杉浦郁子（2001、2003）、佐倉智美（2004、2006）、三橋順子（2004）らによるライフヒストリーや社会史研究などが発表されるようになった。この頃はトランスジェンダーを「性同一性障害」として捉えていることも多い。2000年に出版にされた吉永みち子著『性同一性障害 ―性転換の朝―』は、日本で初めて公的に行われた性転換手術の過程を、当事者らへのインタビューをもとに丹念に描いたものである。学校関係の図書としては、“セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク”により2003年に出版された、当事者の語り『セクシュアルマイノリティ』がその先駆けの一つと思われる。2003年は「性的同一性障害者の取扱いの特例に関する法理」が制定された年であり（2004年施行）、この前後からTGへの意識化は徐々にではあるが進んでいったようである。

2000年代に入るとTG（あるいは性同一性障害）関連の図書はコンスタントに出版されていくようになり、2007年にはTGの当事者である上川あやが『変えてゆく勇気―性同一性障害―』を岩波新書から出版し、翌2008年には田端・鶴田・東らが『性同一性障害』を、さらに2009年には鶴田が『性同一性障害のエスノグラフィー』を発表するといった具合である。その後、学校・子ども関連や職場関連など様々な領域で、TG関係の図書出版が急速に増えていくのは、2010年代半ばからである。近年においては、外国で出版されたライフヒストリーが日本語に翻訳されたものも相次いで出版されている（デッカー、マクビー、ポーレン、サラモンなど、いずれも2019年出版）。

（２）学校・子ども関連

2015年には河嶋静代を代表とする北九州市男女共同参画センター・ムーブが、大学に対して性的マイノリティ支援の実態調査を行った結果を公表し、同年、早稲田大学教育総合研究所は『LGBT問題と教育現場』と題する冊子を公表した。その後、学校関係では、子どもや保護者、教員、支援者向けのLGBTの解説や支援のためのガイドブックが数多

く出版されるようになる。2016年には、はたさちこ他『LGBTサポートブック』、遠藤まめた『先生と親のためのLGBTガイド』などが出版される。前者のはたさちこ等の著作は、学校・教育関係と医療・看護関係に大別され、Q & A形式で具体的に分かりやすく伝えようとしている。後者の遠藤はトランスジェンダー当事者であり、64の場面や事例を設定し、当事者の声を交えながら丁寧に解説やアドバイスを提供し、巻末には支援・相談機関やそのwebサイトなども掲載している。翌2017年にはジェンダー法学が専門で、TG関連の課題にも積極的な発言を行っている奈良女子大学・三成美保の編による『教育とLGBTをつなぐ』が出版された。この書籍の著者らは研究者が主であり、学校教育及び大学教育におけるLGBTの権利保障の取組みや対応、課題が様々な観点から述べられた学術書である。同年、マードル（Mardell, Ashley）による『13歳から知っておきたいLGBT+』が翻訳、出版された。アメリカで2016年に出版された図書で、原題は“The ABC’s of LGBT+”、既にYouTuberとして有名であったマードルが自分の体験を基に、友人や専門家の協力を得てイラストや写真を交えながら、自分の言葉で分かりやすく書いたものである。とても定評のある図書で、アメリカでの出版の翌年に翻訳が出された。さらに同年、ユネスコ編『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』も出版されている。

（３）職場関連

文部科学省が2013年実施の調査に基づき、「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」を発出したのが2014年のことであり、それ以降、子どものTGあるいはLGBTに関する社会的関心は高まっていく。それまであまり関心を持たなかった領域だけに、数多くのガイドブック等の図書が出版されていった。女子大学のTG学生受け入れも大きな社会的関心事となった。女子大学としてその受け入れの検討をいち早く発表した日本女子大学LGBT研究会は『LGBTと女子大学』を出版し、問題提起を行っている。

職場でもLGBTに対するハラスメント的な対応が問題視されるようになり、職場におけるLGBT対応の解説・対応本が出版されるようになる。2015年に柳沢正和（ヒューマン・ライツ・ウォッチ東京委員）らが『職場のLGBT読本』、2018年には大阪府立大学の東優子と虹色ダイバーシティ、ReBit（いずれもNPO）が『トランスジェンダーと職場環境ハンドブック』、弁護士の寺原真希子らが『ケーススタディ職場のLGBT』、さらに2019年には奈良女子大学・三成美保編『LGBTの雇用と労働』などが相次いで上梓された。2013年以降、男女雇用機会均等法の「指針」や「第4次男女共同参画基本計画」、さらには日本経済団体連合会がLGBTの人々への対応の提言を出す等、職場におけるLGBTへの対応やハラスメントについて、明確な方向性が示されるようになってきた社会的背景もある。

(4) 博士論文、その他

博士學位論文にも“トランスジェンダー”をタイトルに含むものが現れ始めている。トランスジェンダーをキーワードに検索するとヒットする論文は4本、鶴田幸恵が東京都立大学に提出した『女／男であるための方法—トランスジェンダー・性同一性障害のエスノグラフィ—』が最初である。“性同一性障害”を含めると合計で9本となる⁴（但し、医学論文は含めていない）。2000年に東優子がお茶の水大学に提出した『非典型的男女に関する研究—性科学理論と発達支援についての検討—』以降、散見されるようになるが、数はまだ少ない。

この他、「#5 その他の資料」として、ネットからダウンロードできるガイドラインや提言、アンケート結果などの、著作者・資料タイトル・webアドレスを掲載している。

2. 性的マイノリティに関する法律・通達等

世界と日本に分け、性的マイノリティ、とりわけTGに関して発表された節目となる出来事をいくつかピックアップしている。世界では、1990年にWHO（世界保健機構）による疾病分類から“同性愛”が削除され、それから約30年後の2019年、“性同一性障害”が“精神障害”カテゴリーからようやく除外された。また、国連人権理事会でも2000年代に入ってから、性的指向や性自認（以下、SOGI）に基づく人権侵害をなくすよう、決議・採択がなされるようになる。2007年にはジョグジャカルタ原則⁵を示して、SOGIに関して国際人権法がどのように各国家において適用されるべきか、29の原則を示して権利の平等を訴えた。2011年には、SOGIに対する人権侵害に焦点を当てた初めての決議を採択するなど、性的マイノリティに対する権利擁護に積極的に取り組んでいる。

日本でも、2000年以降、法務省などの官庁から公的に性的マイノリティに対する人権擁護が明示されるようになっていく。2002年、法務省は「人権週間強調事項」において初めて性的指向を理由とする差別の禁止を明記し、翌2003年には「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」が成立した（翌年施行）。これにより、一定の条件下で、性別の変更が可能になった。2012年には内閣府が「自殺総合対策大綱」の中で、性的マイノリティに対する周囲の人々の理解の促進や、自殺対策の必要性を明記した⁶。

⁴ 女性学／ジェンダー研究 博士論文データベース 〈<https://wan.or.jp/hakuron/search/>〉及び国会図書館 〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#/>〉にて検索を行った。

⁵ 一般財団法人 アジア・太平洋人権情報センター（ヒューライツ大阪） 〈<https://www.hurights.or.jp/archives/newsinbrief-ja/section4/2017/12/lgbti10201711.html>〉

⁶ 自殺の予防策である「正しい知識の普及」の中に、「自殺念慮の割合等が高いことが指摘されている性的マイノリティについて、無理解や偏見等がその背景にある社会的要因の一つであると捉えて、理解促進の取組を推進する。」（学校関係の場合：「……教職員の理解促進の……」の文言が入る）との文章が加えられている 〈<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihoukufukushibu/0000172329.pdf>〉

2013 年、文部科学省は「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」を実施して、翌年その結果を公表、さらに 2015 年には「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施について（教員用）」を発行して、学校における性的マイノリティへの理解促進と個々への対応に、積極的に取り組み始めた。

地方自治体も 2010 年代半ばから、“男女共同参画”や“多様性”といった文言を盛り込んだ条例や宣言をつくり、SOGI による差別の禁止する姿勢を示すようになっていった。例えば、文京区の男女平等参画推進条例（2013）では、七条において「……性別に起因する差別的な取扱い（性的指向 又は性的自認に起因する差別的な取扱いを含む。）その他の性別に起因する人権侵害を行ってはならない。」としている⁷。

3. 大学のジェンダーセンター／LGBT 支援団体等

（1）大学のジェンダーセンター

女性研究所あるいはジェンダー研究センター等の名称の組織が置かれている大学がある。それらは社会的マイノリティに甘んじてきた女性及び女子教育、あるいはジェンダーに関する課題や問題を調査研究する部署であり、戦後、まずは女子大学において設置された。日本女子大学では 1964 年に女性教育研究所が設立され、設立者成瀬仁蔵の思想や附属学校を含む女子教育についての研究が積み重ねられてきた。1995 年より 3 つの研究所が統合され、総合研究所となっているが、女性教育研究所の設立意図は引き継がれている⁸。東京女子大学では、1976 年、比較文化研究所内に Woman's Studies 委員会が発足し、1990 年に独立して女性学研究所となり、今日に至っている⁹。女性学やジェンダーの視点に基づいた学際的な領域にわたるプロジェクト研究及び個人研究への助成を行っており、「女性史・青山なを賞」の創設と授与はその一環である。国立女子大学、お茶の水女子大学では、1986 年に女性文化研究センターが設立された。1996 年にはジェンダー研究センターへと改組され、日本で初めて“ジェンダー研究”を目的とする本格的な研究施設となった。2015 年からはジェンダー研究所へと名称が変更されて今日に至っており¹⁰、海外の大学との研究交流も盛んに行うなど、日本で最も活発にジェンダー研究を推進している機関と言える。

公立の共学大学、大阪府立大学にも長い伝統をもつ女性学研究センターがある。これは府立大学の前身の一つである大阪女子大学において、1996 年に設立された女性学研究セ

⁷ このような全国の地方自治体が設けた性の多様性に関する「条例」については、一般財団法人地方自治研究機構の web サイトで、確認することができる。

〈http://www.rilg.or.jp/htdocs/img/reiki/002_LGBT.htm〉

⁸ 日本女子大学総合研究所 〈<http://mcm-www.jwu.ac.jp/~sogoken/seturitu.html>〉

⁹ 東京女子大学女性学研究所 “沿革と歴史” 〈<https://irowg.jp>〉

¹⁰ お茶の水女子大学 〈<http://www2.igs.ocha.ac.jp/about-igs/>〉

ンターにルーツを持つ。2005 年の府立大学統合を経て、今日に至っており、センターの役割は女性学・ジェンダー論関連科目を大学で提供するとともに、国内外の大学と交流し、女性やジェンダーに関する共同研究を実施することある。

私立の共学大学である国際基督教大学（以下、ICU）にジェンダー研究センター（Center for Gender Studies）が創設されたのは 2004 年であり、共学大学としては早い段階での設立といえる。ICU では、自己の性別に違和感を持つ学生が、学籍簿上の氏名・性別表記を変更することを 2003 年から可能にしており、これをきっかけとして、センターが上記の目的で設置された。このセンターは、ジェンダーやセクシュアリティの研究に関心がある人たち全てに開かれた新しいコミュニケーション・スペースとして発足したもので、日本における LGBT 支援の先駆と言える¹¹。

国立の共学大学、一橋大学に創設されたジェンダー社会科学研究センター（Center for Gender Research and Social Sciences）は、2005 年から実施された「一橋大学における男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラムの策定」プロジェクト、さらに 2006～2008 年度実施の先端課題研究「日常実践 / 方法としてのジェンダー」をきっかけに、「ジェンダー研究と社会科学を融合させた学際的な研究領域の創出」とそれに基づく「新たなジェンダー教育の確立と実践」を目指して、2007 年 4 月に創設された。その成果は、『ジェンダーと社会－男性史・軍隊・セクシュアリティ－』（2010）、『ジェンダー研究を継承する』（2017）として刊行されるなど、積極的で活発な研究活動を展開している¹²。

2010 年代に入ってから、男女共同（協働）やダイバーシティを冠するセンターが国立大学法人に設置されてきているが、これは男女共同参画社会基本法、障害者差別解消法、女性活躍推進法などの法律が相次いで制定され、「男女共同参画社会」「インクルーシブな（包摂共生的な）社会」の実現に沿う形で、ワークライフバランスの取れた、誰もが働きやすく学びやすい環境を推進する部署として設けられるようになったものである。そこに LGBT への支援やインクルージョンを包摂しているものもあるが、そうした大学はまだ少ないのが現状であるようだ¹³。

（2）LGBT 等支援団体

TG に限らず、LGBT を含む性的マイノリティ全般への権利擁護団体・支援団体などは、徐々に増えてきた。このセクションの最初に掲載しているアムネスティ日本やヒュー

¹¹ 国際基督教大学ジェンダー研究センター 〈<http://subsite.icu.ac.jp/cgs/about/>〉。その経緯は、同センター 2014、『ICU におけるジェンダー・セクシュアリティ対応－トランスジェンダー学生対応の 10 年間とこれから』〈<http://web.icu.ac.jp/cgs/docs/TgSatICU.pdf>〉

¹² 一橋大学ジェンダー社会科学研究センター 〈<http://gender.soc.hit-u.ac.jp/research.html>〉

¹³ 新井浩子他「大学のダイバーシティ施策に関する調査研究（その 1）－各大学の推進組織、重点事業を中心に－」『早稲田教育評論』33（1），pp.39-59

マン・ライツ・ウォッチ（以降、HRW）などはグローバル組織であり、LGBTを含めて人権が損なわれている、あるいはその恐れのある人々を擁護し、政府や関連機関への積極的な政策提言やロビー活動を行っている。日本のHRWは現在、東京オリンピック、パラリンピックを契機に「LGBT平等法」の制定を目指す“#Equality Act Japan”キャンペーンを進めているところである。

上記の他、日本の主だった権利擁護・支援組織をいくつか挙げた。“東京レインボープライド”は、毎年4月～5月の連休ごろ、Pride Weekを設定し、LGBTやその支援者によるパレードやフェスタを実行していることで有名であり、LGBTに関する啓発・研修活動や情報発信活動を行っている。“虹色ダイバーシティ”と“ReBit”も全国的な組織となっており、支援活動、学校や企業に対する研修、コンサルティング等の教育・啓発活動を積極的に展開する¹⁴。“虹色ダイバーシティ”は大阪を本拠とし、大阪市淀川区のLGBT支援事業の委託・運営、ICUのジェンダー研究センターと連携したLGBTの職場環境に関するアンケート調査なども実施しており、webサイトには、LGBTの人々やその支援者のための電話相談や支援団体のリストが掲載されている¹⁵。

“CialFrame”の前身団体は、2005年に性的マイノリティのライフサポートを目指して活動を開始しており、ここに挙げた団体の中では古い部類である。その後、2010年に一般社団法人日本同性愛者協会を設立し、2017年に一般社団法人日本セクシュアルマイノリティ協会、さらに2019年に現在の名称となった。研修や講演、PRなどの事業を行っているが、特徴的なものとして、2015年よりLGBT検定を始めている。“Queer & Ally”（性的マイノリティと支援者）は、彼らが気兼ねなく集まることができるコミュニティづくりを目指して2012年に活動を開始した。「性の健康」を広めていく活動家や応援する人々の集団である“NPO 法人日本性の健康協会”のLGBTs部門となり、交流会、講演やイベント開催などの活動を実施している。“LGBT 連合会”は、2015年、「性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備」を目的とし、多くの性的マイノリティ団体が連合して構成されたもので、①政策提言、②法案の策定、③学習会の実施、④情報発信、を活動内容として設立された。この団体は「LGBT 困難リスト」¹⁶を作成・公表する他、この団体を編者とする出版活動も行っている。

ここに紹介している団体は全国にある支援団体の一部に過ぎず、他の全国的な組織や各地域で活動している組織などが数多くある。先に紹介した虹色ダイバーシティ web サイト、遠藤まめた（2016）をはじめ多くの図書で、LGBTらの支援団体リストが紹介されて

¹⁴ この2団体は、図書の解説で取り上げたように、大阪府立大学の東優子（虹色ダイバーシティ・理事）と共同で『トランスジェンダーと職場環境ハンドブック』を出版した。

¹⁵ 電話相談〈<https://nijiirodiversity.jp/513>〉、支援団体〈<https://nijiirodiversity.jp/649>〉

¹⁶ LGBT 連合会 web サイト、「LGBT 困難リスト」〈<http://lgbtetc.jp/#sec04>〉

いる。

（３）医療機関

性同一性障害（Gender Identity Disorder：GID）への相談や治療を行う医療機関も増加している。ここでは大学病院のみ取り上げる。

この分野で先進的な取り組みを行っている医療機関として知られているのは、岡山大学病院である。2001年に性同一性障害者に対する手術（性別適合手術）を実施した、全国で２番目の施設¹⁷としても知られている。それ以降も治療を継続する中で、2010年、大学病院に精神科神経科、産婦人科、泌尿器科及び形成外科の４科が連携し、GIDに限らずジェンダー関連疾患全般の診療を行う部門として“ジェンダーセンター”を設立し、診療・治療を続けている¹⁸。また、岡山大学には1999年に設立されたGID学会の本部が置かれており、これとの関連も深い。札幌医科大学病院では、2003年12月から神経精神科や産婦人科・泌尿器科・消化器・総合、乳腺・内分泌外科・形成外科からなる専門外来「GIDクリニック」を開設し、実績を積み上げている¹⁹。名古屋大学医学部附属病院泌尿器科では、2003年よりCross-sex hormone treatment（ホルモン療法）を開始し、2014年には名古屋大学GID診療ガイドラインを策定するとともにGID委員会を設置し、包括的な診療を始めた。現在、上記GID学会が認定する認定医も在籍し専門的な診療を行っている²⁰。大阪医科大学病院の精神医学教室では、性同一性障害（GID）専門外来を設け、第一人者の康純医師を中心に2000年頃からこの領域の研究・治療に取り組み、オピニオンリーダー的役割を担ってきた²¹。

大学病院の他、後の資料集に挙げている病院、それ以外にも、専門外来を設け、相談治療にあたる病院・医院はあるが、まだそう多くはないようである。

４．大学のトランスジェンダー学生等に対するガイドライン

女子大学においては、2017年に日本女子大学がTG学生（Male to Female）の受入れについて検討すると発表して以降、何校かの女子大学が受入れの検討を始め（朝日新聞2017.3.20/6.19.）、その後、お茶の水女子大学が2018年に受入れを決定し、2019年には

¹⁷ 日本で初めての正当な医療としての性別適合手術は、1998年に埼玉医科大学で実施された。2007年より中断された。日本経済新聞（2010年12月8日電子版）〈https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG1802J_Y0A211C1CR8000/〉

¹⁸ 岡山大学病院ジェンダーセンター 〈<http://www.okayama-u.ac.jp/user/genderc1/>〉

¹⁹ 札幌医科大学病院 〈<https://web.sapmed.ac.jp/hospital/guide/mumhv60000002vz7.html>〉

²⁰ 名古屋大学病院泌尿器科学教室「性同一障害」〈<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/uro08/sick/gid/index.html>〉

²¹ 康淳 2015.10.17.「トランスジェンダーの概念はなぜ生まれたか—性同一性障害の歴史的背景」『Medical Note』〈<https://medicalnote.jp/contents/151005-000005-XAEUXT>〉及び大阪医科大学神経精神医学教室〈<http://psymc.com/medical/specialty-outpatient-clinic/gid/>〉

奈良女子大学と、私学として初めて宮城学院女子大学が、さらに2020年には日本女子大学が受入れを決定した。2021年3月時点で、以上の4つの女子大学がTG学生入学への対応を表明している（お茶の水大学と奈良女子大学は2020年度から受入れ開始）。

共学大学でも、LGBT等の性的マイノリティの学生や教職員にとって、学びやすい、働きやすい環境を整えるためのガイドラインを作成するなど、様々な取組みを始めているところがある。後掲の“Ⅱ. 文献及び資料”の4（1）では、そうした性的マイノリティ受入れガイドラインや指針、あるいは宣言の掲載webサイトを、4（2）にはそれらの内容のいくつかを転載した。但し、具体的な支援手続きも記載されているが、紙面の都合上もあり、概要を提示するにとどめている。ここに掲載したものは一部の大学の例に過ぎず、多くの大学が作成・公表を行うようになってきた。

ガイドライン等の内容では、TG学生の受入れを表明した女子大学4校（お茶の水女子、奈良女子、宮城学院女子、日本女子）と、TG学生受入れの検討を表明した筑紫学園大学を加えた5校を最初に掲載した。お茶の水女子大学では「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」とするそのミッションを実現するため、TG学生の受入れを決定したと述べ、これにより様々な分野に「多様な女性」が入っていける社会の実現につながることを期待している。奈良女子大学は、自らの性を「女性」と自認する者に学ぶ権利を積極的に保障することは、国立大学法人たる女子大学としての責務であると受入れ理由を明示している。いずれの大学も、入学後に本人の性自認が男性に変わった場合でも、学則に反しない限り退学にしないとする。

宮城学院女子大学では、2017年より「性の多様性と人権」検討委員会を立ち上げて検討を始め、「トランス女性は『男性』ではなく『多様な女性のうちの一人』」だとの認識の下、「流動的な意味も含む『女性』すべてを守り、それぞれが自分らしく生きられる社会、多様な一人ひとりで構成される豊かな社会を目指します」として、受入れの表明と環境整備の具体例を挙げている。他の女子大学に先駆けて、TG学生入学の検討に入った日本女子大学は、性を二元法で論じることはできず、「女性」自体が多様であること踏まえ、「『女性』を再定義し、トランスジェンダーの方もこの定義の中で共に学んでいただくこととしました」と述べ、このことは「多様な人が尊重され、包摂される社会を形成する立役者としての『女性当事者』を力づける」ことになるとTG学生の受入れを意義付けている。

筑紫学園大学は、まだTG学生受入れの正式発表を行っていないが、2019年4月1日に建学精神である仏教の教えを基盤とする「ダイバーシティ推進宣言」を公表し、この中で「病気や障がいがある学生・教職員の支援、文化的多様性や性的多様性をもつ学生・教職員の支援をはじめとして、少数者であるという理由で取り残されることのないキャンパス作りを進めます」とした。その3日後、TG学生の受入れの検討を始めた旨を公表し

ている²²。

共学大学でも、TG 学生を含め、性的マイノリティに対する支援が徐々に推し進められ、ガイドラインを作成する大学も増えている。その先駆けは国際基督教大学（ICU）である²³。2003 年度、初めて TG 学生の学籍簿上の名前・性別の変更手続きが取られ、翌 2004 年には、ジェンダー研究センターを設立した。2012 年には『LGBT 学生生活ガイド in ICU トランスジェンダー／GID 編』、2016 年に『ジェンダー・セクシュアリティとキャンパスライフ Vol.1：できることガイド in ICU』、その後さらに改定を続けており、これが後発大学の一つモデルとなっている。ICU では、「1997 年に制定されたセクシュアル・ハラスメント防止規程に、『性的指向』に基づく差別発言もセクハラにあたると、90 年代の段階から明記されて」²⁴ あり、人権に対する意識が高く、下地が醸成されていたことが分かる。

近年、京都精華大学、龍谷大学といった私立大学、大阪府立大学や筑波大学など国公立の大学法人でも、LGBT や SOGI の学生や教職員に対応するための大学としての基本方針を示し、さらに進んでガイドライン等を作成する大学が増加している。その一方で、まだまだ取組みが進んでいない大学も多くあるようだ。

おわりに

本稿は、トランスジェンダー、性的マイノリティに関する日本の支援の実態、とりわけ大学における取組状況の概要を把握することを目的とする。ここに提示できた文献や資料は、状況把握には不十分なものではあるが、第一段階の土台づくりと位置付け、ひとまず文献・資料を公表することとした。今後、性的マイノリティ支援の取組みを始めようと考えている大学や機関にとって、少しでも役立てば幸いである。今後、さらに充実したものとしていきたい。

²² 日本経済新聞（朝刊）2019.4.5.「女性自認の学生受入れへ 福岡・筑紫女学園大が検討」

²³ 国際基督教大学ジェンダー研究センター 2014.『ICU におけるジェンダー・セクシュアリティ対応ートランスジェンダー学生対応の 10 年間とこれから―』

²⁴ 脚注 11 の冊子、1 頁。座談会での、加藤悠二氏の発言。

引用文献（但し、文献リストに掲載されているものを除く）

新井浩子他「大学のダイバーシティ施策に関する調査研究（その１）―各大学の推進組織、重点事業を中心に―」『早稲田教育評論』33(1), 39-59

地方自治研究機構「性の多様性に関する条例」〈http://www.rilg.or.jp/htdocs/img/reiki/002_LGBT.htm〉

女性学／ジェンダー研究 博士論文データベース 〈<https://wan.or.jp/hakuron/search/>〉

国会図書館 検索 〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#/>〉

国際基督教大学ジェンダー研究センター 2014.『ICU におけるジェンダー・セクシュアリティ対応 ―トランスジェンダー学生対応の 10 年間とこれから―』

康淳 2015.10.17.「トランスジェンダーの概念はなぜ生まれたか―性同一性障害の歴史的背景」
Medical Note 〈<https://medicalnote.jp/contents/151005-000005-XAEUXT>〉

日本経済新聞（2010.12.8. 電子版）「性転換手術、草分けの埼玉医大が本格的に再開」
〈https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG1802J_Y0A211C1CR8000/〉

日本経済新聞朝刊（2019.4.5.）「女性自認の学生受入れへ 福岡・筑紫女学園大が検討」

検索サイト

朝日新聞検索サイト 聞蔵 〈<https://database.asahi.com/index.shtml>〉

日本経済新聞検索サイト 〈<https://r.nikkei.com/search>〉

女性学／ジェンダー研究 博士論文データベース 〈<https://wan.or.jp/hakuron/search/>〉

国会図書館 〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#/>〉

※全てのネット資料について、2021 年 3 月 1 日・2 日に最終の所在確認を行った（Ⅱの文献・資料も同様）。

付記

本稿は、2020-2024 年度 科学研究費・基盤研究（B）「大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れ課題：日米の女子大学事例を中心に」（代表：安東由則）による、研究成果の一部である。

II. トランスジェンダー関連の日本語文献及び資料

1. トランスジェンダー関連図書 (ジャンル別、年代・著者名順、総頁数)

1 全般 (理論・歴史・自伝・エスノグラフィー等)

・1999 年以前

- 渡辺恒夫 1989.『トランス・ジェンダーの文化 ―異世界へ越境する知―』勁草書房 219 頁
蔦森樹編 1990.『現代のエスプリ』277 号 (特集: トランスジェンダー現象) 至文堂 220 頁
蔦森樹 1993. 男でもなく女でもなく―新時代のアンドロジナスたちへ―』勁草書房 296 頁
虎井まさ衛 1996.『女から男になったワタシ』青弓社 224 頁
虎井まさ衛・宇佐美 恵子 1997.『ある性転換者の記録』青弓社 196 頁

・2000-2004 年

- 宮崎留美子 2000.『私はトランスジェンダー ―二つの性の狭間で…ある現役高校教師の生き方―』ねおらいふ (星雲社・発売) 221 頁
虎井まさ衛 2000a.『トランスジェンダーの仲間たち (寺子屋ブックス 9)』青弓社 157 頁
虎井まさ衛 2000b.『トランスジェンダーの時代 ―性同一性障害の現在―』十月舎 141 頁
矢島正見, 三橋順子, 杉浦郁子編 2000.『戦後日本<トランスジェンダー>社会史』戦後日本<トランスジェンダー>社会史研究会 133 頁
吉永みち子 2000.『性同一性障害 ―性転換の朝―』集英社 (新書) 240 頁
杉浦郁子 2001.『松葉ゆかりのライフヒストリー (戦後日本<トランスジェンダー>社会史; 4)』戦後日本<トランスジェンダー>社会史研究会 147 頁
大島俊之 2002.『性同一性障害と法 (神戸学院大学法学研究叢書)』日本評論社 363 頁
セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編 2003.『セクシュアルマイノリティ―同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性―』明石書店 232 頁 (第2版: 2006 年, 296 頁/第3版: 2012 年, 284 頁)
杉浦郁子 2003.『美島弥生のライフヒストリー』戦後日本<トランスジェンダー>社会史研究会 161 頁
虎井まさ衛 編 2003.『語り継ぐトランスジェンダー史 ―性同一性障害の現在・過去・未来―』十月舎 221 頁
米沢泉美編 2003.『トランスジェンダリズム宣言 ―性別自己決定権と多様な性の肯定―』社会評論社 271 頁
中央大学社会科学研究所「セクシュアリティの歴史と現在」研究チーム, 戦後日本<トランスジェンダー>社会史研究会編 2004.『日本におけるセクシュアル・マイノリティ・スタディーズ』中央大学社会科学研究所 63 頁
針間克己・相馬佐江子 2004.『性同一性障害 30 人のカミングアウト』双葉社 269 頁

三橋順子 2004.『女装者愛好男性 A 氏のライフヒストリー』戦後日本＜トランスジェンダー＞社会史研究会 104 頁

佐倉智美 2004.『明るいつランスジェンダー生活』トランスビュー 243 頁

・2005-2009 年

カリフィア, パトリック、石倉由・吉池祥子 (訳) 2005.『セックス・チェンジズ ―トランスジェンダーの政治学―』作品社 605 頁 (Califia-Rice, Patrick 2003. *Sex Changes: The Politics of Transgenderism*. Cleis Press.)

中村美亜 2005.『心に性別はあるのか? ―性同一性障害のよりよい理解とケアのために―』医療文化社 127 頁

真木柊鷹, 山田正行 編 2006.『トランスジェンダーとして生きる』同時代社 109 頁

佐倉智美 2006.『性同一性障害の社会学』現代書館 213 頁

田中玲 2006.『トランスジェンダー・フェミニズム』インパクト出版会 176 頁

針間克己・大島俊之・野宮亜紀・虎井まさ衛・上川あや 2007.『性同一性障害と戸籍 ―性別変更と特例法を考える―』緑風出版 199 頁 (2013 年に増補改訂版 213 頁)

上川あや 2007.『変えてゆく勇気 ―性同一性障害―の私から―』岩波新書 204 頁

田端章明・鶴田幸恵・東優子他 2008.『性同一性障害』御茶ノ水書房 316 頁

鶴田幸恵 2009.『性同一性障害のエスノグラフィ ―性現象の社会学―』ハーベスト社 265 頁

・2010-2014 年

好井裕明編 2010.『セクシュアリティの多様性と排除 (差別と排除の [いま] 第 6 巻)』明石書店 224 頁

安達太郎, 野村幸一郎, 林久美子 編 2013.『表象のトランス・ジェンダー ―越境する性―』(京都橘大学女性歴史文化研究所叢書) 新典社 224 頁

針間克己, 平田俊明 編 2014.『セクシュアル・マイノリティへの心理的支援 ―同性愛、性同一性障害を理解する―』岩崎学術出版社 243 頁

・2015 年以降

松本美子 2015.『カミングアウト―ランスジェンダーの夫との離婚狂想曲―』幻冬舎 164 頁

国連人権弁務官事務所 (山本梓訳) 2016.『みんなのための LGBTI 人権宣言 ―人は生まれながらにして自由で平等―』合同出版 118 頁

森山至貴 2017.『LGBT を読みとく ―クィア・スタディーズ入門―』筑摩書房 240 頁

佐々木掌子 2017.『トランスジェンダーの心理学 ―多様な性同一性の発達メカニズムと形成―』晃洋書房 214 頁

石井由香理 2018.『トランスジェンダーと現代社会 ―多様化する性とあいまいな自己像をもつ人たちの生活世界―』明石書店 296 頁

「なくそう！ SOGI ハラ」 実行委員会編 2019.『はじめよう！ SOGI ハラのしない学校・職場
づくりー性の多様性に関するいじめ・ハラスメントをなくすためにー』 大月書店 184 頁

砂川秀樹 2018.『カミングアウト』朝日新聞出版 224 頁

デッカー, J.S. (上田勢子訳) 2019.『見えない性的指向 アセクシュアルのすべてー誰に
も性的魅力を感じない私たちについてー』 明石書店 320 頁 (Decker, Julie Sondra.
2014. *The Invisible Orientation: An Introduction to Asexuality*. Carrel Books)

菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編 2019.『クィア・スタディーズをひらく』 晃洋書房

LGBT 法連合会編 2019.『日本と世界の LGBT の現状と課題』 かもがわ出版 160 頁

マクビー, トーマス・ページ (小林玲子 訳) 2019.『トランスジェンダーの私がボクサー
になるまで』 毎日新聞出版 240 頁 (MacBee, Thomas Page 2018. *Amateur: A True
Story About What Makes a Man*. Scribner)

ポーレン, ジェローム (北丸雄二訳) 2019.『LGBT ヒストリーブックー絶対に諦めなかつ
た人々の 100 年の闘いー』 サウザンブックス社 192 頁 (Pohlen, Jerome 2015. *Gay &
Lesbian History for Kids: The Century-Long Struggle for LGBT Rights, With 21
Activities*. Chicago Review Press)

サラモン, ゲイル (藤高和輝 訳) 2019.『身体を引き受けるートランスジェンダーと物
質性のレトリックー』 以文社 365 頁 (Salamon, Gayle 2010. *Assuming a Body:
Transgender and Rhetorics of Materiality*. Columbia University Press.)

谷口洋幸編 2019.『LGBT をめぐる法と社会』 日本加除出版 256 頁

稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編 2020.『フェミニスト現象学入門ー経験から「普
通」を問い直すー』 ナカニシヤ出版 208 頁

吉野 靱 2020.『誰かの理想を生きられはしないーとり残された者のためのトランスジェ
ンダー史ー』 青土社 209 頁

2 学校／子ども関連

・2014 年以前

セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編 2003.『セクシュアル・マイノリティ
ー同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性ー (第 3
版)』 明石書店 232 頁 (2006 年 第 2 版／ 2012 年 第 3 版)

砂川秀樹・RYOJI 編 2007.『カミングアウト・レターズ』 太郎次郎社エディタス 232 頁

加藤慶・渡辺大輔編著 2012.『セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援 (増補
版)』 開成出版 238 頁 (初版は 2010 年出版 204 頁)

薬師美芳・古堂達也・小川奈津巳・笹原千奈未 2014.『LGBT ってなんだろう？からだの
性・心の性・好きになる性』 合同出版 127 頁

・2015 年以降

- 河嶋静代 2015.『性的マイノリティの学生支援における課題 平成二十六年度ジェンダー問題 調査・研究支援事業報告書』北九州市男女共同参画センター・ムーブ 76 頁
- 早稲田大学教育総合研究所監修（金井景子・薬師実芳・杉山文野）2015.『LGBT 問題と教育現場 ―いま、わたしたちにできること―』（早稲田教育ブックレット No.13）学文社 56 頁
- 遠藤まめた 2016.『先生と親のための LGBT ガイド ―もしあなたがカミングアウトされたなら―』合同出版 223 頁
- はたちさこ・藤井ひろみ・桂木祥子編 2016.『LGBT サポートブック ―学校・病院で必ず役立つ―』保育社 176 頁
- オウエンズ＝リード, ダニエル・ルッソ, クリスティン他（金成希訳）2016.『LGBT の子どもに寄り添うための本 ―カミングアウトから始まる日常に向き合う Q&A―』白桃書房 216 頁（Owens-Reid, Dannielle・Russo, Kristin et al. 2014. *This Is a Book for Parents of Gay Kids: A Question & Answer Guide to Everyday Life*. Chronicle Books）
- マーデル・アシュリー（須川綾子訳）2017.『13 歳から知っておきたい LGBT +』ダイヤモンド社 216 頁（Mardell, Ashley 2016. *THE ABC's of LGBT+*. Mango Media）
- 三成美保編 2017.『教育と LGBT をつなぐ ―学校・大学の現場から考える―』青弓社 314 頁
- 康純編 2017.『性別に違和感がある子どもたち（子どものこころの発達を知るシリーズ 7）』合同出版 117 頁
- ユネスコ 編（浅井春夫他訳）2017.『国際セクシュアリティ教育ガイダンス ―教育・福祉・医療・保健現場で活かすために―』明石書店 216 頁（2020 年『国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】―科学的根拠に基づいたアプローチ―』296 頁）
- 日本女子大学人間社会学部 LGBT 研究会編 2018.『LGBT と女子大学 ―誰もが自分らしく輝ける大学を目指して―』学文社 64 頁
- 西野明樹 2018.『子どもの性同一性障害に向き合う ―成長を見守り支えるための本―』日東書院本社 224 頁
- 石田仁 2019.『はじめて学ぶ LGBT ―基礎からトレンドまで―』ナツメ社 264 頁
- 葛西真記子 2019.『LGBTQ+ の児童・生徒・学生への支援 ―教育現場をセーフ・ゾーンにするために―』誠信書房 206 頁
- 佐藤文香（監修）・一橋大学佐藤文香ゼミ一同 2019.『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた ―あなたがあなたらしくいられるための 29 問―』明石書店 208 頁
- 薬師実芳・笹原千奈未 2019.『LGBT ってなんだろう？（改訂新版）』合同出版 135 頁（初版は薬師実芳・笹原千奈未・古堂達也・小川奈津己 2014 年出版）

3 職場関連

- 柳沢正和・村木真紀・後藤純一 2015.『職場の LGBT 読本』実務教育出版 264 頁
- 東優子・虹色ダイバーシティ・ReBit 2018.『トランスジェンダーと職場環境ハンドブック』日本能率協会マネジメントセンター 240 頁
- 森永 貴彦 2018.『LGBT を知る』日本経済新聞出版（日経 BP）145 頁
- 寺原真希子（代表）・東京表参道法律事務所編 2018.『ケーススタディ 職場の LGBT — 場面で学ぶ正しい理解と適切な対応—』ぎょうせい 240 頁
- 三成美保編 2019.『LGBTI の雇用と労働 —当事者の困難とその解決方法を考える—』晃洋書房 224 頁
- 神谷悠一・松岡宗嗣 2020.『LGBT とハラスメント』集英社新書 224 頁

4 博士論文（医学論文除）〔検索キーワード：トランスジェンダー／性同一性障害〕

- 東優子 2000.『非典型的男女に関する研究 —性科学理論と発達支援についての検討—』博士（人文科学）お茶の水女子大学
- 大島俊之 2002.『性同一性障害と法』博士（法学）神戸学院大学
- 中塚朋子 2006.『ジェンダー・アイデンティティの社会的構築—ある性転換者の自己物語とその社会学的考察—』博士（学術）奈良女子大学
- 鶴田幸恵 2007.『女／男であるための方法 —トランスジェンダー・性同一性障害のエスノグラフィー—』博士（社会学）東京都立大学
- 荘島（湧井）幸子 2009.『「望む性」を生きる自己と家族—ある性同一性障害者とその家族へのナラティブアプローチ—』博士（教育学）京都大学
- 佐々木掌子 2010.『性的自己の非典型性における発達機序と形成—多次元動的ジェンダー・アイデンティティモデルからみた性同一性障害／トランスジェンダー—』博士（教育学）慶応義塾大学
- 吉野靱 2013.『性同一性障害からトランスジェンダーへ —法・規範・医療・自助グループを検証する—』博士（学術）立命館大学
- 正岡美麻 2015.『Female-to-Male トランスジェンダー／トランスセクシュアルにおける男性ホルモン投与の影響』博士（学術）東京大学
- 宮田りりい 2018.『「性別越境者問題」の社会学的研究 —「性同一性障害」概念にもとづく社会問題化の超克—』博士（文学）関西大学

5 その他の資料

- 社会的包摂サポートセンター編 2016.『性自認および性的指向の困難解決に向けた支援マニュアルガイドライン』社会的包摂サポートセンター（現在、第2版 55 頁）

〈<https://www.since2011.net/publish/publish001/>〉より申し込み

日本学術会議法学委員会・社会と教育における LGBTI の権利保障分科会 2017.『提言 性的マイノリティの権利保障をめざして ―婚姻・教育・労働を中心に―』

〈<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t251-4.pdf>〉

日本学術会議法学委員会・社会と教育における LGBTI の権利保障分科会 2020.『提言 性的マイノリティの権利保障をめざして（Ⅱ）―トランスジェンダーの尊厳を保障するための法整備に向けて―』〈<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t297-4.pdf>〉

東京都 2020 職員のための性自認及び性的指向に関するハンドブック

〈<https://www.soumu.metro.tokyo.lg.jp/10jinken/tobira/pdf/R1handbook.pdf>〉

（※東京都に限らず、様々な自治体、企業などで、こうした冊子が多数出されている。）

○アンケート

電通ダイバーシティラボ 2015.「LGBT 調査 2015」（2015 年 4 月、web 調査：900 名）

〈<https://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html>〉

LGBT 総合研究所（博報堂 DY ホールディングス）2016.「6 月 1 日からのサービス開あたり LGBT をはじめとするセクシャルマイノリティの意識調査を実施」（2016 年 5 月、web 調査：1036 名）

〈<https://www.hakuhodody-holdings.co.jp/news/corporate/2016/06/325.html>〉

日本労働組合総連合会 2018.「LGBT に関する職場の意識調査」（2016 年 6 - 7 月、web 調査：1000 名）〈<https://www.jtuc-rengo.or.jp/info/chousa/data/20160825.pdf?0826>〉

経済同友会 2017.「ダイバーシティと働き方に関するアンケート調査結果」（2017 年 2 月）（2016 年 10 月～11 月、メール・FAX で調査票送付：903 社中 131 社回答）

* 2012 年より調査実施。2017 年調査から LGBT に関する質問項目が設けられた。

〈<https://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2016/pdf/170207a.pdf>〉

日本経済団体連合会 2017.「LGBT への企業の取り組みに関するアンケート」調査結果（2017 年 3 月 1 日～31 日、対象 1,385 社 156 団体に 233 社回答）日本経済団体連合会『ダイバーシティ・インクルージョン社会の実現に向けて』（2017 年 5 月）所収

電通ダイバーシティラボ 2019.「LGBT 調査 2018」（2018 年 10 月、web 調査：6229 名）

〈<https://www.dentsu.co.jp/news/sp/release/2019/0110-009728.html>〉

LGBT 総合研究所 2019.「LGBT 意識行動調査 2019」（2019 年 4 - 5 月、web 調査：34. 万名）

〈https://www.daiko.co.jp/dwp/wp-content/uploads/2019/11/191126_Release.pdf〉

三菱 UFJ リサーチコンサルティング 2020.「令和元年度厚生労働省委託事業・職場におけるダイバーシティ推進事業報告書」（2019 年 11-12 月、web 調査：2,405 名）

〈https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyoukintou/0000088194_00001.html〉

2. 国内外の性的マイノリティへの取組（声明／法律、通達、条例等）

1 世界

世界保健機構（WHO）1990. 疾病分類（ICD-10）から「同性愛」の分類名を削除

国際連合 2007. 「性的指向と性自認の問題に対する国際法の適用に関するジョグジャカルタ原則」を国際連合人権理事会で採択

国際連合 2008. 「性的指向と性自認に関する決議」採択

国際連合人権理事会 2011. 「人権、性的指向および性自認」に関する決議採択。性的指向と性自認に基づく人権侵害に焦点を当てた初めての決議。「由々しき懸念」を表明。

国際連合人権理事会 2012. *Born Free and Equal: Sexual Orientation and Gender Identity in International Human Rights Law*

〈<https://www.ohchr.org/Documents/Publications/BornFreeAndEqualLowRes.pdf>〉

国連人権理事会 2016. 「性的指向と性自認を理由とする暴力と差別からの保護」に関する決議を採択

世界保健機構（WHO）2019 性同一性障害を「精神障害」の分類から除外

〈<https://www.unic.or.jp/activities/humanrights/discrimination/lgbt/>〉

2 日本

法務省 2002 「人権教育・啓発に関する基本計画」にて、「同性愛者への差別といった性的指向に係る問題」について「その解決に資する施策の検討を行う」と明記

法務省 2002 「人権週間強調事項」にて、性的指向を理由とする差別の禁止を明記「性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律」（平成 15（2003）年 7 月 10 日成立、平成 16 年 7 月 16 日施行、以降 3 度の改正…最新の改正平成 30 年 6 月 20 日）

法務省 2003. 「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」（平成十五年法律第百一十一号）〈<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=415AC1000000111>〉

内閣府 2012 「自殺総合対策大綱」を改正し、性的マイノリティを対象とした自殺対策の必要性を明記 〈<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengo-kyokushougaihoukenfukushibu/honbun.pdf>〉 2021 年 2 月 1 日確認…大綱は自殺対策基本法に基づき 2007 年に策定され、以後 2008 年、2012 年、2017 年に改正）

文部科学省 2014. 「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」（平成 26 年 6 月）…2013 年「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」

文部科学省 2015. 「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」（平成 27 年 4 月 30 日）27 文科初児生第 3 号

文部科学省 2016. 「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）」〈https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/〉

28/04/_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369211_01.pdf>

文京区 2013.「文京区男女平等参画推進条例」(2013 年 11 月 1 日施行)

渋谷区 2015.「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」(2015 年 4 月 1 日施行)

東京都 2018.「東京都オリンピック憲章にうたわれる人権尊重の理念の実現を目指す条例」(2018 年 4 月 1 日全面施行／一部は前年 12 月 28 日の公布日から施行)

※その他、東京都、港区、中野区、多摩市、川崎市、堺市などの自治体でも同様の条例制定。

全国の「性の多様性に関する条例」については、次のサイトに詳しい。

一般財団法人地方自治研究機構 <http://www.rilg.or.jp/htdocs/img/reiki/002_LGBT.htm>

3. 大学設置のジェンダーセンター及び LGBT 等支援団体

1 大学の機関

お茶の水女子大学 ジェンダー研究センター <<http://www.igs.ocha.ac.jp/>>

奈良女子大学 アジア・ジェンダー文化学研究センター <<http://koto.nara-wu.ac.jp/gender/>>

一橋大学 ジェンダー社会科学研究センター (CGraSS) <<http://gender.soc.hit-u.ac.jp/>>

名古屋大学 ジェンダー・リサーチ・ライブラリ <<http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>>

大阪府立大学 女性学研究センター <<http://www.human.osakafu-u.ac.jp/w-center/>>

(その他、ダイバーシティ研究環境研究所／女性研究者支援センターなどもある)

中央大学 ダイバーシティセンター <<https://www.chuo-u.ac.jp/campuslife/diversity/>>

国際基督教大学 ジェンダー研究センター <<http://web.icu.ac.jp/cgs/>>

城西国際大学 ジェンダー・女性学研究所 <<https://www.jiu.ac.jp/igws/link.html>>

日本女子大学 総合研究所 (1964 年開設の「女子教育研究所」を含む 3 研究所が 1995 年に統合され、設置された) <<http://mcm-www.jwu.ac.jp/~sogoken/top.html>>

昭和女子大学 女性文化研究所 <<https://content.swu.ac.jp/jyobunken-blog/>>

東京女子大学 女性学研究所 <<https://irowg.jp/>>

明治大学 ジェンダーセンター <<https://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>>

立教大学 ジェンダーフォーラム <<https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>>

和光大学 ジェンダーフォーラム <<https://www.wako.ac.jp/organization/gender/index.html>>

早稲田大学 ジェンダー研究所 (<<https://waseda-gender-studies-inst.jimdofree.com/>>)

Gender and Sexuality Center <<https://www.waseda.jp/inst/gscnter/>>

愛知淑徳大学 ジェンダー・女性学研究所 <<http://www.aasa.ac.jp/institution/igws/index.html>>

京都橘女子大学 女性歴史文化研究所 〈https://www.tachibana-u.ac.jp/research_area/general_academic/iwhc/index.html〉

神戸女学院大学 女性学インスティテュート 〈<https://www.kobe-c.ac.jp/kenkyusho/>〉 など

2 LGBT 等の支援組織

公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本

〈<https://www.amnesty.or.jp/human-rights/topic/lgbt/>〉

アムネスティ・インターナショナルは 1961 年に発足した世界最大の国際人権 NGO である。様々な理由で差別や暴力に苦しむ人、ひどい条件で働かされる子どもたちの自由と尊厳が平等に守られる世界となるよう活動を行っており、200 カ国、700 万人以上がアムネスティの運動に参加している。日本支部として 1970 年に設立された。

認定 NPO 法人 ヒューマンライツ 〈<https://www.hrw.org/ja>〉

1978 年、ニューヨークで誕生した人権団体で、2009 年より日本に事務所が置かれた。客観的調査、それを基にした「戦略的ターゲットアドボカシー」（ここでのアドボカシー：ロビイング活動と政策提言）を行うことで、「人権侵害の解決に向けた行動を求める世論と圧力を作り出す。2021 年 3 月現在、東京オリパラを契機に、日本にも「LGBT 平等法」を実現させようとする“#EqualityActJapan”を実施している。

東京レインボープライド 〈<https://tokyorainbowpride.com/>〉

組織が安定せず、沿革は web サイトにも書かれていない。活動内容としては、1）プラットフォーム（プライドパレード&フェスタ実施やレインボーウィーク・キャンペーン実施など）、2）教育・社会啓発事業（LGBT 企業研修・講演会など）、3）情報発信・情報収集事業などを行っている。

認定 NPO 法人 虹色ダイバーシティ 〈<https://nijiroidiversity.jp/>〉

大阪に本部をもつ団体で、2013 年より NPO 法人となり、全国的な活動を行っている（活動開始は 2011 年）。LGBTQ 等の性的マイノリティがいきいきと働ける職場づくりをめざして、調査・講演活動、コンサルティング事業、コンテンツ制作等を行っている。全国の LGBTQ 支援団体リスト有り。〈https://nijiroidiversity.jp/lgbt_support/〉

特定 NPO 法人 ReBit 〈<https://rebitlgbt.org/>〉

当事者である薬師実芳が早稲田大学で設立し、2010 年より早稲田大学の公認学生団体、2018 年に認定 NPO 法人格を得た。「LGBT を含め全ての子どもが、ありのままの自分で大人になれる社会」をつくることを目指す。「少しずつ（Bit）」を「何度でも（Re）」繰り返すことで社会が前進してほしいとの願いから命名。薬師は精力的に著作活動も行っている。LGBT の人、LGBT でない人ら大学生や 20 代の若者を中心に現在、約 600 名が参加。イベント開催や、教材・調査報告、支援、教育事業など

を展開する。

一般社団法人 CialFrame (旧・一般社団法人日本セクシュアルマイノリティ協会)

〈<https://jlga.or.jp/>〉教育・研修、多様性促進、PR、厚生福利などの事業

Queer & Ally (NPO 法人日本性の健康協会 (JASH)) の LGBTs 部門・交流会部門)

〈<https://www.queerally.com/>〉2012 年、Queer&Ally を設立。Queer やその支援者たちが何度も参加したくなるような場所やコミュニティづくりを目指して出発。2014 年に「NPO 法人 日本性の健康協会 (JASH)」の会員となり、2017 年より JASH の LGBTs 部門として統合され、現在、交流会、講演会、調査・インタビュー協力などの活動を行っている。

LGBT 法連合会 〈<http://lgbtetc.jp/>〉性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備を目的として 2015 年に設立され、政策提言、法案の策定、学習会の実施、情報発信などの活動を行っている。これまで、以下のような出版物がある。

- ・LGBT 法連合会 2015.『性的指向および性自認を理由とするわたいたが社会で直面する困難のリスト』(第 2 版) LGBT 法連合会 (初版は同年 4 月、第 2 版は 9 月に発表)
- ・LGBT 法連合会 2017.『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう?』かもがわ出版
- ・LGBT 法連合会 2019.『性的指向および性自認を理由とするわたいたが社会で直面する困難のリスト』(第 3 版) LGBT 法連合会 〈<http://lgbtetc.jp/news/1348/>〉
- ・LGBT 法連合会 2019.『日本と世界の LGBT の現状と課題—SOGI と人権を考える—』かもがわ出版

3 病院等

岡山大学病院ジェンダーセンター (<http://www.okayama-u.ac.jp/user/genderc1/>)

名古屋大学医学部附属病院 泌尿器科 GID 専門外来

〈<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/uro08/sick/gid/index.html>〉

札幌医科大学病院 GID クリニック (性同一性障害)

〈<https://web.sapmed.ac.jp/hospital/guide/mumhv60000002vz7.html>〉

大阪医科大学病院 神経精神医学教室・性同一性障害 (GID) 専門外来

〈<http://psymc.com/medical/specialty-outpatient-clinic/gid/>〉

医療法人 啓信会 京都きづ川病院 ジェンダー外来

〈<http://www.kyoto-keishinkai.or.jp/kizugawa/gairai/gender/index.html>〉

社会福祉法人恩賜財団済生会 大阪府済生会泉尾病院 ジェンダー外来

〈<https://www.izuo-saiseikai.gr.jp/section/?cat=51>〉

沖縄県立中部病院おきなわジェンダーセンター

〈<https://chubuweb.hosp.pref.okinawa.jp/departments/jender/>〉

* 福岡大学病院は 2004 年よりジェンダークリニックを設立。他にも少なくない。

4. 大学におけるトランスジェンダー学生関連ガイドライン及びダイバーシティに関する資料

(1) 大学のトランスジェンダー学生等に関するガイドラインとアンケート等

1 女子大学

日本女子大学 「トランスジェンダー学生（女性）の受け入れについて」

〈http://www.jwu.ac.jp/content/files/knd/comment_20200619.pdf〉

宮城女学院大学 「トランスジェンダー学生の受け入れに関するガイドライン」

〈<https://web.mgu-ac.work/campus/news/2054.html>〉

筑紫女学園大学 「ダイバーシティ推進宣言について」

〈<https://www.chikushi-u.ac.jp/diversity>〉

お茶の水女子大学 「トランスジェンダー学生受入れに関する対応ガイドライン」

〈http://www.ocha.ac.jp/news/20190528_d/fil/TG_guideline20190528.pdf〉

奈良女子大学 「奈良女子大学におけるトランスジェンダー学生の受入れについて」

(<http://www.nara-wu.ac.jp/nwu/news/transgender/index.html>)

2 共学大学

ICU 国際基督教大学

・国際基督教大学ジェンダー研究センター 〈<http://web.icu.ac.jp/cgs/>〉

・LGBT 学生生活ガイド in ICU トランスジェンダー／GID 編 2015. LGBT in ICU
Student Guidebook Transgender/GID Edition 2015.10.21. ver.8

〈http://web.icu.ac.jp/cgs/docs/20151021_TSGuide_v8.pdf〉

・「ジェンダー・セクシュアリティとキャンパスライフ Vol.2： やれることリスト 108
at University (ver.1)」 〈<http://web.icu.ac.jp/cgs/2016/09/gsc102v1.html>〉

早稲田大学

・セクシュアルマイノリティ学生への配慮・対応ガイド（教職員向け）【第3版】

〈<https://www.waseda.jp/inst/diversity/support/sexual-minority/>〉

・セクシュアルマイノリティ学生とアライのためのサポートガイド Ver.3(GSセンター)

〈<https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2020/03/23/3167/>〉

京都精華大学 「ダイバーシティ推進宣言」2016 年、2018 年

(<https://www.kyoto-seika.ac.jp/about/diversity.html>) 2020 年 9 月 1 日

龍谷大学

- ・「性のあり方の多様性に関する基本指針について」 2017 年 12 月 8 日
(https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/committee/sexuality_guideline.html)
- ・「性的指向、性自認等に関する本学の対応について」(2020 年 1 月更新)
(https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/committee/sexual_minority.html)

立命館アジア太平洋大学

- 「性の多様性に関する基本方針と本学の環境について」(「学生生活」の中の項目)
〈<https://www.apu.ac.jp/home/life/content57/>〉 アンケート調査結果あり

筑波大学 ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンタ

- 〈<http://dac.tsukuba.ac.jp/>〉

大阪大学

- ・「大阪大学 SOGI 基本方針の策定について」
大阪大学総長 西尾章治郎 平成 29 年 7 月 19 日 (<http://www.danjo.osaka-u.ac.jp/sogi/>)
- ・「SOGI」の多様性に関する学生への配慮・対応ガイドライン
(<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/student/general/2101>)

大阪府立大学

- ・「学生支援」の中に、“SOGI（性的指向・性自認）等に関連して学生生活に困難を抱える学生の支援”との項目 〈https://www.osakafu-u.ac.jp/campus_life/support/sogi/〉
- ・大阪府立大学 SOGI（Sexual Orientation and Gender Identity）の多様性と学生生活に関わるガイドライン
〈https://www.osakafu-u.ac.jp/osakafu-content/uploads/sites/428/guideline_sogi.pdf〉

3 アンケート

大学を対象としたアンケート調査には、次のようなものがある。特に、河嶋静代氏を代表とする調査は、大学における性的マイノリティ支援実態についての、日本では初めての本格的な調査であり、多くの著書や論文でも引用されている。

- ① 北九州市の男女共同参画センター・ムーブ（代表：北九州市立大学 河嶋静代）2015. 『平成 26 年度 ジェンダー問題調査・研究支援事業報告書：性的マイノリティの学生支援における課題』北九州市の男女共同参画センター・ムーブ 全 73 頁
〈<https://www.kitakyu-move.jp/tosyo/1933.html>〉

全国の大学における性的マイノリティの学生支援の状況を明らかにすることで、大学における性的マイノリティの学生の修学環境が整備されることを目的に、2014 年 7 月、北九州市立男女共同参画センター・ムーブの助成により、全国の大学を対象に性的マイノリティの学生への支援状況調査を実施しており、大学を対象とする初めての全国調査

である（500 大学に郵送、241 校回答：48.2%）。

2016 年の「障害者差別解消法」施行以降、障害学生の「合理的配慮」の一環としての性同一性障害のある学生への支援が進展し、LGBT 学生への支援に取り組む大学も増加している。筑波大学、大阪大学、早稲田大学などは性の多様性に関する基本方針、ガイドラインを策定し、早稲田大学、龍谷大学、関西学院大学などでは大学のセクシャルマイノリティの現状とニーズに関するアンケート調査を実施していることなどを報告。

- ② 羽田野花見・多久馬寛孝・末永芳子・大坪昌喜 2020.「大学における性的マイノリティ学生支援の取り組み—中国・四国・九州・沖縄の大学・短期大学の調査結果—」『熊本保健科学大学研究誌』17、pp.115-121. 〈<https://khsu.repo.nii.ac.jp/>〉

2018 年 2～3 月、上記のアンケート調査を参考に、中国地方からから沖縄までの西日本の大学・短大を対象とした質問紙調査（218 大学に郵送、83 校から回答：38.1%）

※学生のみ、あるいは教職員も含めて性的マイノリティに関する実態、意識調査や要望等のアンケートを実施している大学もある。ICU、早稲田、龍谷、京都精華、関西学院、立命館アジア太平洋などの大学では実施され、それを基に支援策の策定が行われたようである。

(2) トランスジェンダー学生対応ガイドライン／ダイバーシティ宣言等

お茶の水女子大学「トランスジェンダー学生受入れに関する対応ガイドライン」

この「ガイドライン」は2019年4月1日に制定されたものでA4用紙5枚からなり、お茶の水女子大学のwebサイトにpdf形式で掲載されている。「禁転載」とのスタンプが押されているので、以下ではその概要のみを掲載する。

(※2021年3月4日 お茶の水女子大学広報企画部より以下の内容での概要提示の許可)

ガイドラインは「基本理念」に続いて、具体的な取組6項目が説明されている。「基本理念」では、以下のような内容が述べられている。

お茶の水女子大学は、自身の性自認に基づき、女子大学で学ぶことを希望する者（但し、性自認が女性であるトランスジェンダー学生）を受入れることを決定した。その理由は、「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」というお茶の水女子大学のミッションに基づいて判断した結果である。

この決定は「多様性を包摂する女子大学と社会」を創出するための取組の一環であり、一人ひとりがその個性と能力を十分に発揮でき、様々な分野に「多様な女性」が入っている社会の実現につながることを期待している。

(下線および太字は安東による)

上記の基本理念に従い、次の6項目についてトランスジェンダー学生の支援を行っていくための具体的な説明がなされているが、ここでは割愛する。

1. 受入委員会と相談窓口
2. 名前と性別の情報について
3. 授業や学修について
4. 学生生活について（定期健康診断、学生寮、トイレ、更衣室、野外活動）
5. 就職活動・キャリア支援について
6. 周囲の対応について

〈https://www.ocha.ac.jp/news/20190528_d/fil/TG_guideline20190528.pdf〉

「奈良女子大学におけるトランスジェンダー学生の受入れについて」

2020 年 9 月 1 日

社会における女性の知的自立と知的展開能力の獲得を基本理念とし、時代状況や社会の変化に柔軟に対応することを目指してきた奈良女子大学は、「性／性別」の定義が大きく変化している国際的動向に照らし、これまでの「女子」の概念を拡大して「女性としての性自認を持つトランスジェンダー女性（MtF）」を受入れることとします。このように、自らの性を「女性」と自認する者に学ぶ権利を積極的に保障することは、国立大学法人たる女子大学としての責務であると考えます。

今後、早急に受入れ態勢の整備に努め、入学後の学生生活環境を整えることが重要ですが、依然不十分な点があると予想されます。そこで当面は、出願前にトランスジェンダー女性（MtF）当事者と大学側が面談し、受入れ態勢についての合意形成を図ることとします。

【受入対象者及び受入時期】

受入対象者は、学部学生、大学院生、研究生、聴講生、科目等履修生とします。なお、受入時期は以下のとおりです。

○学部学生：2020 年 4 月 ○大学院学生：2021 年 4 月

○学部での研究生、聴講生、科目等履修生：2021 年 4 月 ○三年次編入学生：2022 年 4 月

【受入にあたっての手続き】

出願希望申出書等の書類提出を求めます。

提出された書類を元に、原則として面談を行い、受験時に配慮を希望することがあるかどうか、入学後に修学・学生生活上で配慮を希望することがあるかどうか等を確認するとともに、学内の設備環境についても説明します。また、性自認が女性であることを確認します。

【出願にあたっての相談窓口】

出願希望者からの事前相談は「トランスジェンダー受入相談窓口」を通じて受け付けます。

※性自認が変化した場合の対応

トランスジェンダー女性（MtF）として入学後に本人の性自認が男性に変わった場合も、学則等に反しないかぎり、退学にはなりません。

※入学後に戸籍を変更した場合の対応

女性として入学した後に戸籍を男性に変更した場合も、学則等に反しないかぎり、退学にはなりません。（下線は安東による）

令和元年 7 月 22 日

奈良女子大学長 今 岡 春 樹

〈<http://www.nara-wu.ac.jp/nwu/news/transgender/index.html>〉

宮城学院女子大学「トランスジェンダー学生の受け入れに関するガイドライン」

(2020 年 4 月 8 日より施行)

本学は、「共生のための多様性宣言」を表明しました。この宣言の下、トランス女性を受け入れることを決定し、そのためのガイドラインをここに定めます。(以下略)

「共生のための多様性宣言」

宮城学院女子大学は、本学に集うすべての学生の多様性と尊厳・人権を尊重します。年齢、信条、障害、エスニシティ、性的指向・性自認など、個人の特性や文化的背景を尊重し、そのための環境づくりに最善を尽くします。

「共生のための多様性宣言」に関する基本方針

1. 自己決定を尊重します。

各個人の特性に関わる情報の開示・非開示、またそれらの表現については、当事者の意思が尊重されるものであり、他者から不当に侵害されることがあってはなりません。

2. 修学の妨げを取り除くために最善を尽くします。

本学で学ぶすべての学生にとって、修学の妨げとなる事柄は、適切なプロセスによる合意形成を経て、合理的な範囲で取り除かれなければなりません(合理的配慮)。

1. 基本的な考え方と本学の取り組み状況(一部文言を省略)

①受け入れの背景と理解促進に向けた本学の取り組み状況

正規カリキュラムに組み込まれた複数の必修科目において「性の多様性と人権」を取り上げ、学生全員がセクシュアルマイノリティについて学ぶ機会を設けてきました。

2017年に発足した「性の多様性と人権」検討委員会および2018年に引き継いだ「性の多様性と人権」委員会では、学生・教職員を対象に研修会、公開講演会、説明会等を継続的に行っています。2018年には学生の自主活動「にじいろプロジェクト」も立ち上がり、宮城学院をはじめ社会で性の多様性についての理解が広がることを目指し活動しています。

②トランス女性について

トランス女性は「男性」ではなく「多様な女性のうちの一人」です。出生時に振り分けられた性が男性であることに“違和感がある”、あるいは“自認の性で生きたい、それを承認してほしいと切望している”人たちです。本学は、流動的な意味も含む「女性」すべてを守り、それぞれが自分らしく生きられる社会、多様な一人ひとりで構成される豊かな社会を目指します。みなさんが多様な他者と共に存在できるよう、大学の環境を整えていきます。(下線は安東による)

※以下、「2. 名前と性別の情報と管理、3. 授業、4. 学生生活、5. 留学・学外実習、6. インターンシップ、就職活動、キャリア支援、7. 周囲の対応およびカミングアウト等、8. 相談窓口、9. 自己点検」の項目。

https://web.mgu-ac.work/campus/wp-content/uploads/sites/14/2020/06/mgu_guidelineNT20200615.pdf

日本女子大学 「トランスジェンダー学生（女性）の受け入れについて」

日本女子大学では、2024 年度入学より、自らの性自認に基づき本学で学びたいと希望をするトランスジェンダーの方*に受験資格を認めることを決定しました。

成瀬仁蔵は、「女子は学なきをよし」とする考えの強い封建的な時代に、「女子を人として、婦人として、国民として教育する」という理念を掲げて本学を創設いたしました。時代は変わって、女性の進学率は大幅に上昇し、社会的活躍の場も広がりました。しかし、今なお日本はジェンダーギャップ指数**において、諸国の中では下位に甘んじており、女性が社会のあらゆる場面で真の参画を果たしていくことに向けて、成瀬の掲げた理念が色あせることはありません。

一方、今日、性とは男女二元で論ずることはできず、実に多様であるということが認識されるようになりました。それは「女性」自体が多様であるということも意味します。そこで、本学では「女性」を再定義し、トランスジェンダーの方*もこの定義の中で共に学んでいただくこととしました。多様な人が尊重され、包摂される社会を形成する立役者としての「女性当事者」を力づけるためです。それは同時に、在籍するすべての学生を力づけることを意味します。様々な違いがあっても不当な扱いを受けることのない、人権の尊重される社会の実現に貢献する女性の育成に努めることが本学の使命であると考えています。（下線は安東による）

すでにガイドラインやマニュアル等の整備はすすんでおりますが、受け入れ時期が4年後であるのは、この時間をかけて本学の決定を学内外の皆様には十分知っていただき、すべての学生が入学時に、本学で性自認が女性であるトランスジェンダー学生も共に学ぶと理解していることを重視するためです。また、その時間を使って学内の準備を整えるとともに、構成メンバー間の対話と理解を進めるべく計画しております。

* 出生時に割り当てられた性別が男性で、現時点で法律上の性別（日本では戸籍）が男性または女性以外であるが、性自認が女性である方

**2019 年日本の総合スコア 121 位／153 か国中 世界経済フォーラム公表の『グローバルジェンダーギャップレポート 2020』より

2020 年 6 月 19 日

日本女子大学学長

篠原 聡子

〈http://www.jwu.ac.jp/content/files/knd/comment_20200619.pdf〉

筑紫女学園大学 「ダイバーシティ推進宣言について」

筑紫女学園大学は、学生・教職員をはじめとする本学の一人ひとりが、自らを見つめ、自らを信じて未来へと歩む行動力ある人となり、あらゆる人を尊び、多様性を包摂する社会の実現に資する大学となるために、ダイバーシティ推進を宣言いたします。

本学は今後さらに、ジェンダー平等の実現はもちろんのこと、病気や障がいがある学生・教職員の支援、文化的多様性や性的多様性を持つ学生・教職員の支援をはじめとして、少数者であるという理由でとり残されることのないキャンパス作りに積極的に取り組みます。

2019年4月1日 筑紫女学園大学

筑紫女学園大学ダイバーシティ推進宣言

筑紫女学園大学は「親鸞聖人が明らかにされた仏陀（釈尊）の教え、すなわち浄土真宗の教えにもとづく人間教育」を建学の精神としています。学生・教職員をはじめとする本学の一人ひとりが、自らを見つめ、自らを信じて未来へと歩む行動力ある人となり、あらゆる人を尊び、多様性を包摂する社会の実現に資する大学となるためにダイバーシティ推進を宣言いたします。

釈尊は『仏説阿彌陀經』のなかで浄土に咲く蓮の花のありようを「青い蓮華は、青い色・青い輝き・青い外観をもっている。黄色い蓮華は、黄色い色・黄色い輝き・黄色い外観をもっている。白い蓮華は白い色・白い輝き・白い外観をもっている。雑色の蓮華は、様々な色・様々な色の輝き・様々な色の外観をもっている。」と説かれ、それぞれが自らの色を放ち、互いの個性を活かすことで共存している状態が、すべてのいのちが調和しあう最も理想的な世界だと表現されています。一人ひとりが個性ある尊い存在であるという前提に立ち、人権を擁護し尊重することは、ダイバーシティを推進していくうえで最も大切にすべきことです。そのために学内の修学・教育・研究・就業のあらゆる面からジェンダー、年齢、国籍、人種、民族、出自、文化、言語、宗教、障がい、病気、セクシュアリティなどを理由とするあらゆる不自由や差別、排除をなくすことを目指します。

女子大学として本学は、社会におけるジェンダー平等を先導する役割を担うべく取り組んできました。しかし、いまだ社会における男女格差（ジェンダーギャップ）は大きく、女性がライフイベントのなかで幾度となく自己犠牲を伴う選択をあたりまえのこととして強いられる現実があります。私たちは、ジェンダー平等の実現はもちろんのこと、病気や障がいがある学生・教職員の支援、文化的多様性や性的多様性を持つ学生・教職員の支援をはじめとして、少数者であるという理由でとり残されることのないキャンパス作りを進めます。（下線は安東による）

筑紫女学園大学は、自分の人生を主体的に生き、多様な存在であるすべての人を認め尊重し、共生社会の一員として社会にかかわる経験をする場となることで、多様性を包摂する社会の実現に尽くしてまいります。2019年4月1日 筑紫女学園大学 学長 中川正法

〈<https://www.chikushi-u.ac.jp/diversity>〉

国際基督教大学 「人権侵害防止対策基本方針」

ICU は世界人権宣言を重んじる大学として、人権侵害のない教育・研究・就労環境を整え、構成員が安心して過ごせるキャンパスを確保する責任があると考えています。ゆえに、性、人種、宗教、年齢、性的指向、障がいなどに基づく差別や、地位・立場を利用したあらゆるハラスメントは形態の如何に関わらず許されません。本学の構成員はみな献学の精神である国際性やキリスト教精神を十分理解し、快適なキャンパスをともに作っていくことが要請されます。

『ジェンダー・セクシュアリティとキャンパスライフ Vol.01 できることガイド in ICU』

（このガイドは、2012 年から発行をはじめた「LGBT 学生生活ガイド in ICU：トランスジェンダー・GID 編」を改題、位置づけを見直し再編集したものの。）

このガイドの内容：

学籍簿の氏名・性別記載変更／大学の発行する証書の性別記載／体育実技の履修、更衣室／学生定期健康診断の個別受診／留学／就職相談／学内行事：リトリートの宿泊／学内行事：ふわカフェ／学生参加型プロジェクト：R-Weeks Project、すみれプロジェクト／ICU 授乳室／多目的トイレ／ジェンダー・セクシュアリティ特別相談窓口

（例えば、最初の「学籍簿の氏名・性別記載の変更」では、次のような説明がある。）

ICU では、性別に違和感を持つ学生の学籍簿上の氏名・性別表記の変更が 2003 年から可能になっています。当初は人権課題として人権相談員が対応にあたっていましたが、2015 年より通常の学生対応として学生グループが対応を担当することになりました。…

記載変更に際しては、学生サービス部長との個人面談が行われます。学籍簿の氏名・性別表記の変更には、現段階では医師の診断書が必要になりますが、診断書は「診断中」という主旨のものでも受理される可能性があります。

学籍簿の記載に関する相談、変更プロセスの詳細は、学生サービス部長にお問い合わせください。なお、学籍簿の記載変更を希望しない場合でも、このガイドで後述される様々な個別対応を受けることは可能です。…

記載変更プロセス（概略）：〈<https://www.icu.ac.jp/campuslife/health/#hr>〉

- ・学生サービス部長に連絡／・学生サービス部長と面談をし、希望する対応方針決定
- ・学籍簿変更を希望する場合、大学幹部会で承認の可否を決定／・幹部会で承認後、学籍簿変更が可能となる／・承認の可否は、学生サービス部長から相談者に伝えられる

京都精華大学 「ダイバーシティ推進宣言 2018」

京都精華大学は、自由自治を建学理念に掲げ、世界人権宣言にもとづく人間尊重を教育の基本理念とする大学として、学生・教員・職員をはじめとする全構成員が、互いの差異を通じてともに成長してゆく組織を目指します。そのために、本学ではダイバーシティを「多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合い、対等に機会が開かれること」と定義し、これを推進します。

年齢、人種、性別、身体的特徴、性表現など表面的に認識されやすいものから、国籍、宗教、家庭環境、出自、働き方、性自認、性的指向など表面からは認識されにくいものまで、私たちは1人1人異なる属性を複数持っているはずで、誰もが多様で差異がある、という考えに立ち、一部のバックグラウンドや属性を理由にした不自由、差別や排除がないキャンパス環境を、修学・教育・研究・就労の観点から活動方針に沿って着実に整えます。

本学の考えるダイバーシティ推進とは、制度や仕組みの整備のみを指すではありません。人間の多様性に触れる機会を学内の様々な場面で継続的に設けることで、共生の意識を醸成します。違いを理解しようとするプロセスで生まれる「価値観の変化」や「他者への想像力」こそが新しい発見や思考につながり、構成員全体の創造性を高めると考えるからです。変化し続け不安定さが増す今後の世界において、新しい価値をもたらすことができる大学であるために、ここにダイバーシティのさらなる推進を宣言します。

2018年4月 学長ウスビ サコ

・ダイバーシティ推進のための行動方針（5項目）と具体的な取組みが明示されている。

1. 学内環境整備

全ての学生、教員、職員が、個々のバックグラウンドや属性に左右されることなくキャンパスライフを送ることができるよう、以下3つの側面それぞれの学内環境を整備します。 1) 学生の生活・修学 2) 教職員の教育・研究 3) 教職員の就労

2. 意識醸成

ダイバーシティ&インクルージョンの意識を醸成するため、多様性に関する知識や理解を深める機会を継続的に設けます。

3. 交流活性化

多様性理解を促進するため、構成員の交流を活性化するキャンパス環境を整備します。

4. 人的構成

ダイバーシティの観点に立った人的構成・人材育成を推進します。

5. 情報公開

本学のダイバーシティ推進の取組みに関する情報を学内外に向けて公開・発信します。

具体的な取組み（TG 関連のみ掲載）

【学内環境整備の取組み】

性別違和・通称名使用などの事由による学籍簿の氏名・性別変更を認可。(2016～)
定期健康診断で、性別違和や健康上の事情を抱える人を専用の時間帯を設定。(2013～)
大学で発行する全ての証明書に性別の記載なし。(2017～) 以下一部略
誰でも利用できる「みんなのトイレ」を学内 24 箇所に設置。(2016～)
教職員の就業規則における特別休暇及び弔慰金の対象とする配偶者を、同性婚などのパートナーまで拡大。(2016～)

【意識醸成のための取組み】

学内の学生や教職員のダイバーシティ推進に対する認知度やニーズを確認する全学的なアンケート実施。(2017～)
多様性に関する知識や理解を深めるための講演イベントを年内に複数回開催。(2017～)
「ダイバーシティを考慮した学生指導・学内コミュニケーションガイド」を作成し、全教職員に対しデータ配信。(2018～)

〈<https://www.kyoto-seika.ac.jp/about/diversity.html>〉

龍谷大学 「性的指向、性自認等に関する本学の対応について」

龍谷大学は、人権に関する基本方針において「性別、セクシュアリティなどにかかわらず、本学に関わるすべての人が差別やハラスメントなどの人権侵害を受けることなく学び、働き、関わり合えることを保障する」ことを明らかにしています。また、「性のあり方の多様性に関する基本指針」を定め、学生のみなさんや教職員の声・要望に応えながら、ともに安全で誰もが安心して過ごすことができるキャンパスづくりに努めています。

性のあり方の多様性に関する基本指針について

[〈https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/committee/sexuality_guideline.html〉](https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/committee/sexuality_guideline.html)

龍谷大学は、「人権に関する基本方針」を策定し、本学に関わるすべての人が差別やハラスメントなどの人権侵害を受けることなく学び、働き、関わり合えるよう保障することを宣言しています。しかし、昨年度に実施した学内のアンケートにおいて、性的指向や性自認などに関する嘲笑的・差別的言動などが日常的にあり、それによって傷つき生きづらさを感じている人がいることが明らかとなりました。なかでも誤った理解や無自覚にもとづく教職員の言動によって、深く傷ついている人がいるということに気づいてこなかったことを重く受け止め、しっかりと見つめなおさなければなりません。

このたび、龍谷大学は、性的指向や性自認などを理由とした差別や偏見を克服し、誰もが自分らしく安心して過ごすことができるキャンパスを実現するために、本学構成員一人ひとりがとるべき指針として、「性のあり方の多様性に関する基本指針」を策定しました。

基本指針は、あくまで取り組みの第一歩であって、これからの歩みこそが大切です。私たちは、不断の学びと継続した啓発を通し、多様性を認めあう文化の創造に努めてまいります。みなさまのご理解とご協力を切にお願いいたします。

2017（平成 29）年 12 月 8 日 龍谷大学長 入澤崇

性のあり方の多様性に関する基本指針

性的指向や性自認など、性のあり方は多様であり、これらに関する差別や偏見を解消し誰もが自分らしく安心して過ごすことができる大学や社会を目指すことは、すべての本学構成員が取り組むべき課題です。

龍谷大学は、「人権に関する基本方針」のもと、本学構成員の一人ひとりが、性的指向および性自認などに関する悩みや生きづらさを抱える人がいることを常に理解し、合理的な配慮を可能な限り提供するため、次のとおり基本指針を策定します。

1. 教育、学修、研究、就業等の環境において、性のあり方に関する偏見や差別が生じることがないように不断の学習と啓発に努めます。
2. 具体的な対応にあたっては、悩みや生きづらさを抱える本人の意思を尊重して合意形成を目指します。
3. トイレや更衣室等の利用にあたり、戸籍上の性別等にかかわらず性自認にしたがって自らが選択できるよう、環境整備と理解の醸成を図ります。
4. 性のあり方に関する個人情報の保護を徹底します。

[〈https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/committee/sexual_minority.html〉](https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/committee/sexual_minority.html)

相談体制

学生のみなさんは、クラス、ゼミ、研究室などの指導教員や最寄りの事務職員など、あらゆる教職員に相談することができますが、龍谷大学では相談のための窓口として学生部内に「なんでも相談室」を設置しています。セクシュアリティだけではなく学生生活に関することについてカウンセラーが相談に応じます。また、人権啓発を担当している宗教部でもオフィスアワーを開設していますのでご相談ください。

なお、学生や教職員を対象に、性的指向や性自認などに関する悩みや困りごとについて相談できる「ジェンダー・セクシュアリティ相談（GS 相談）」を試行的に開設しています。

・ジェンダー・セクシュアリティ相談／・なんでも相談室／・宗教部オフィスアワー

…ジェンダーやセクシュアリティなどについて語り合う茶話会「SOGI カフェ」を開催（半期に一回程度のペースで開催）。参加者のジェンダーやセクシュアリティは問いません。黙って聞いているだけでも OK です。途中参加や途中退室も可、お申し込み不要です。

性別にかかわらず利用できる「だれでもトイレ」について

龍谷大学では、現在、男女別のトイレとは別に、多目的に利用できる「だれでもトイレ」の整備を進めています。性別などにかかわらずどなたでもご利用いただけます。

健康診断について

龍谷大学では、学校保健安全法に定められた健康診断を毎年4月に実施しています。健康診断は、学部（学年）・男女別に行われます。その際、胸部レントゲン写真撮影がありますが、撮影時の更衣スペースは、個人ごとに分かれていません。健康診断の際に配慮が必要な方は、事前に所属学部があるキャンパスの保健管理センターまで電話にてご相談ください。

- ・新入生フレッシュャーズキャンプについて
- ・大学が発行する証明書等の性別記載について（2019 年 4 月 1 日現在性別の記載なし）
- ・性別違和等による学生の通称名の使用について
- ・龍谷大学におけるセクシュアルマイノリティの現状とニーズに関するアンケート
- ・龍谷大学 LGBTs 交流サークル「にじりゅう」などの説明

大阪府立大学「SOGI (Sexual Orientation and Gender Identity) の多様性と学生生活に関わるガイドライン」(2017 年 4 月 1 日策定)

1. 基本理念

大阪府立大学は、人権を重んじる大学として、性的指向 (Sexual Orientation) や性自認 (Gender Identity) を理由とする差別や偏見のない大学を目指します。また、本学構成員の一人ひとりが相互に人格と多様性を尊重し合い、快適に、安心して過ごせる教育・研究環境を整えます。

2. 基本方針

大阪府立大学は、本ガイドラインの基本理念に従い、その実現の指針となる 7 つの基本方針を定めます。

- (1) 学生の個別の意思・選択を常に尊重すること。
- (2) 学生本人を交えて十分に話し合い、実現のあり方を考えること。
- (3) 学内外の関係者が連携・協力して実現に向けて取り組むこと。
- (4) 学生生活全般に関して合理的配慮を図ること。
- (5) 個人情報の保護を徹底すること。
- (6) SOGI (性的指向・性自認) の多様性に関する理解促進に係る啓発を行なうこと。
- (7) 本学の取り組みに関する情報を学内外に向けて公開・発信すること。

3. 対象及び範囲

本ガイドラインの対象となるのは、SOGI (性的指向・性自認) に関連して、学生生活に困難を抱える本学のすべての学生とします。また、取り組みの範囲は、入試時の配慮に関する事項、入学から卒業までの学生生活全般に関する事項、及び進学・就職等に関する事項とします。

4. 組織体制

本ガイドラインの基本理念を実現するため全学的な拠点を学生センター内に設置し、必要に応じて学内外の関係者が連携して取り組みを行います。また、学生委員会において、本ガイドラインの基本理念の実現に向け、具体的な方策・課題の検討、及び審議を行ない、全学的な取り組みを推進します。

※アクセスセンター「各種ガイドライン・規程」より 〈<http://opuac.ao.osakafu-u.ac.jp/>〉

筑波大学「LGBT+ 等に関する筑波大学の基本理念と対応ガイドライン」(3版)

(2020 年 4 月制定)

(Ⅰ～Ⅴから構成され、Ⅱ．LGBT の概念と支援体制、Ⅲ．現状での具体的対応と方針、Ⅳ．対応項目一覧、Ⅴ．おわりに、の内容が日本語と英語で表記。以下、ⅠとⅡを示す。)

Ⅰ．筑波大学における LGBT 等の性自認及び性的指向を理由とした差別の禁止及び解消に関する基本理念

建学の理念に「開かれた大学」を掲げ、教育・研究に多様性と柔軟性を追究する筑波大学にあっては、本来違いを持つ学生及び教職員がすべて尊重されることは言うまでもありません。少数者にあたる LGBT 等 (Lesbian・Gay・Bisexual・Transgender 及び他のセクシュアリティを含む) について、我が国における大学改革を先導する本学は、以下の方針により責任を持って対応します。

少数者を差別しません

性自認や性的指向は本学が重視する本人の能力とは無関係であり、少数者ということで差別や嫌がらせがあってはなりません。これらは本学のダイバーシティ基本理念に反するものです。

自己決定を尊重します

性自認や性的指向に関わる情報やその開示・非開示、またそれらの表現は、当事者の意思でコントロールされるものであり、他者から不当に侵害されることがあってはなりません。

修学・サービスの妨げを取り除きます

LGBT 等の少数者にとって修学・サービスの妨げとなる事柄は、適切な過程による合意形成を経て、合理的な範囲で取り除かれなければなりません。

地球規模課題の解決の先頭に立つ本学において、個性と多様な能力が発揮されることは、未来地球社会に求められるイノベーションの創出という目標の出発点にあります。そのため、本学は学生、教職員を問わず全構成員を対象とした上記の基本理念を掲げ、さらに以下の具体的な対応を行います。

Ⅱ．LGBT 等に関する概要と本学での支援体制

LGBT とは L (Lesbian、レズビアン)、G (Gay、ゲイ)、B (Bisexual、バイセクシュアル)、T (Transgender、トランスジェンダー) の頭文字を取った略称です。このガイドラ

インでは「LGBT 等」という語をセクシュアル・マイノリティ（性的少数者）の総称に用いています。

こうした当事者は、生まれ持った性的指向（どんな性を好きになるか、あるいは好きにならないか等）や性自認（どんな性と自分で思うか、あるいは思わないか等）といった要素により千差万別であり、L・G・B・T の 4 種類に単純には分けられません。今日では SOGI (Sexual Orientation and Gender Identity)、すなわち性的指向と性自認という略語によって性をめぐる多様なあり方が表されることもあります。本学では、そのような多様性や個性を前提として、包括的に当事者への支援を行います。

筑波大学は 2015 年（平成 27 年）に「LGBT 等の学生・教職員への支援体制の検討」を開始し、2017 年（平成 29 年）に「LGBT 等に関する筑波大学の基本理念と対応ガイドライン」を国立大学で初めて発表しました。建学の理念に「開かれた大学」を掲げ、教育・研究に多様性と柔軟性を追究する本学の使命は、学生や教職員を問わず全構成員の個性と多様な能力が発揮されてこそ実現されるのは言うまでもありません。こうした背景に基づく本学の取り組みは、LGBT 等に限らず他のマイノリティも包摂することで、未来地球社会に求められるイノベーションを創出していくものです。

本学では、ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター（DAC センター）を LGBT 等当事者の直接の対応窓口とし、総合相談窓口など他の窓口とも連携して対応しています。それとともに、本学は LGBT 等にとどまらないダイバーシティ推進のため、教職員 FD 講習会（ファカルティ・ディベロップメント）や学生への授業といった啓発活動、教育や研究の環境改善、より広汎な支援を実現するワークシートの提供といった多面的な取り組みを推進しています。

〈https://diversity.tsukuba.ac.jp/wordpress2017/wp-content/uploads/2020/03/lgbt_guidline_20200327.pdf〉

大阪大学 「性的指向」と「性自認」の多様性に関する基本方針

平成 29（2017）年 7 月 19 日 大阪大学総長 西尾章治郎

大阪大学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、多様で心豊かな地域と⑤階の創造のために寄与すべく、平成 28 年 4 月に策定した「大阪大学男女協働推進宣言」において、「男女協働推進アクションプラン」を全学的に推進し、ダイバーシティ環境の実現を図ることを公表しました。

本学が目指す研究型総合大学にふさわしい多様な知と人材が交差する魅力あるダイバーシティ環境をより豊かなものとしていくために、「性的指向（Sexual Orientation）」と「性自認（Gender Identity）」の多様性と権利を認識し、偏見と差別をなくすよう、構成員への啓発活動を行うことを基本方針として提示します。

大阪大学は、「大阪大学男女協働推進宣言」とこの基本方針を踏まえ、多様な構成員の意志と選択の自由が尊重され、その個性と能力が存分に発揮できる学修、研究、就業環境の整備に取り組んでいきます。

〈<https://www.danjo.osaka-u.ac.jp/page-7731-2-2-2-2/>〉

大阪大学 SOGI 基本方針策定の背景

昨今、LGBT という言葉が一般的に使用されるようになりましたが、LGBT という限定的な観点ではなく、「誰もがそれぞれの性的指向・性自認をもっている」という考え方に基つき、大阪大学では、すべての人を対象とする SOGI という文言を基本方針に使用することにしました。基本方針は、本学の全構成員（学生・教職員等）を対象としており、国立大学としては「先駆け」となる策定です。

今後の取組＜トイレ・サイン＞

SOGI に関する取組の第一歩として、新設及び改修される建物について、「ALL GENDER」サインの使用を推奨しています。また、本サインと合わせて、「WOMEN」「MEN」及び使用例のサインを提示いたします。

〈<https://www.danjo.osaka-u.ac.jp/sogi/>〉

名古屋大学「LGBT 等に関する名古屋大学の基本理念と対応ガイドライン」

(平成 30 年 5 月)

I. 名古屋大学における LGBT 等の性的個性を尊重する基本理念

名古屋大学では、学術憲章において「自由闊達な学風」と「人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする」ことを掲げています。その理念に照らし、名古屋大学では、さまざまな個性を持つ学生及び教職員すべてが尊重されるキャンパスを確保する責任があると考えています。LGBT 等（Lesbian・Gay・Bisexual・Transgender 及び他のセクシュアリティを含む）の性的個性についても、同様に尊重され、その能力が存分に発揮できる教育・研究・就業環境の整備に取り組むとともに、理解を深めるための啓発活動を積極的に実施していきます。

II. 現状での具体的対応と方針

本ガイドラインは、平成 30 年 3 月時点で本学が実施している LGBT 等の当事者を取り巻く課題への具体的な対応の内容と方針です。…前述した基本理念に沿って、さらに現状の対応を踏まえた上で、様々な場面で起こりうる課題への個別的対応を検討していきます。

1. 氏名・性別の情報とその管理について

- ① 氏名の変更：本学における学生の氏名は、学籍簿上の表記に基づき学内で取り扱われ、学籍簿上の表記は本名（戸籍上の氏名）を原則としています。自認する性に基づく通称名の使用を希望する場合は、所定の手続きを経た上で使用することができますので、詳細は相談窓口までご相談ください。なお、本学が発行する証明書等（成績証明書や学位記等）については、可能な範囲で柔軟に対応します。…

(②性別の変更 ④証明書等の性別記載、⑤提出書類における性別情報記入は省略)

- ③ 性別情報の取扱い：本学では、当事者の意図しない形で本人の性別情報が公表されることがないように、慎重に取り扱います。特に名簿と学務情報システムでの性別情報の取扱いについて、以下の点に取り組みます。

- ・名簿：学生に配布・掲示する名簿については、原則としていかなる文章についても性別欄を除外して配布・掲示します。（以下略）
- ・学務情報システム：学務情報システムで性別情報にアクセスできる権限を有するのは、教務担当・学生担当の教職員のみです。本学では教職員に対して、性別情報を含めた個人情報の取り扱いに関する研修だけでなく、LGBT 等に関する研究を受けさせることを推進し、性別情報の慎重な取り扱いを広く啓発していきます。

※学生については、次の領域の説明がされている。2. 授業について、3. 学生生活について、4. インターンシップ・就職活動、学生生活に関する相談、5. 留学について。

http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/upload_images/20180822_lgbt.pdf

トランスジェンダー関連の英文図書リスト及び アメリカの性的少数者支援団体リストと解説

A Bibliography of English Books on “Transgender,”
A List of Support-Groups for Sexual Minorities in the U.S.A., and Commentaries

安東 由則 *

ANDO, Yoshinori

目次

はじめに：本稿のねらい

I. 解説

II. “Transgender” 関連文献・支援団体リスト

1. 英文図書リスト
2. 英文学術雑誌リスト
3. LGBT の子ども・若者たちの支援団体
など

* 武庫川女子大学教育学部・教授／教育研究所・研究員

はじめに：本稿のねらい

「大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れ課題：日米の女子大学事例を中心に」¹のテーマで共同研究に取り組み始めた。日米の大学において、トランスジェンダー(Transgender、以下：TG)学生を主たる対象としながら、性的マイノリティの学生たちに対する支援の実態と課題を明らかにし、日本における今後のサポートについて示唆を得ようとするものである。初年度においては、その基礎作業として次の二つを行った。一つは日本におけるTGに関する文献収集とリストづくり及び、大学における取組みと支援体制、民間支援団体、法律・条例、アンケートなどの情報・資源の収集とそのまとめであり、その成果は本『研究レポート』に掲載している。もう一つの成果が本稿であり、アメリカ合衆国を中心とするTG関連図書(及び学術雑誌)リストとTGを含む性的マイノリティの人々への主だった支援団体及び情報提供サイトのリストを作成した(本稿のⅡに掲載)。研究は始まったばかりで、提示した図書・雑誌及び支援団体等はまだまだ不十分なものではあるが、今後の研究を進めていくための土台として位置づけている。

本稿は二つのセクションから成っており、前半はアメリカを中心とするTG関連の図書出版及び研究動向、支援団体等について簡単な解説を行う。後半のセクションは、前半で解説したTG関連の英文図書・学術雑誌及び支援団体等のリストである。TG関連の文献リストの対象は図書のみに限定している。論文を含めると膨大な数に上ること、さらに図書のみでも研究動向とアメリカ社会におけるTG学生やその支援についての認知を把握することができると思うからである。TG支援団体やTG情報関連サイトについても、TGに限定せず、LGBTや性的マイノリティ全体を対象としたもの、人権擁護団体に含まれるもの、国際・全国・地域等の組織規模、宗教系、フェミニズム関連など、多様な組織が数多く存在する。目下、検索と点検を継続中であり、重要な組織が漏れ落ちている可能性もある。今後、研究を継続していく中で、アメリカにおけるTG関連の文献リスト、支援組織リストともに充実させていきたい。ここでは、不十分ながら第一段階のまとめとして示すこととした。

Ⅰ．解説

1. Transgender 関連図書

(1) 図書リスト作成の方針

TG関連の著作物は、日本とは比較にならないほど歴史の厚みがあり、その量は膨大なものとなる。本研究は、LGBTQIなど性的マイノリティ全般を対象とするのではなく、TGの人々の中でも、大学生を対象とする調査研究と位置づけている。その第一段階とし

¹この研究テーマで、安東を研究代表者とする科学研究費・基盤研究B(2020-24年度)を取得し、本学の西尾亜希子と中尾賀要子との共同研究に取り組み始めた。

て、“Transgender” & “College” (or “Youth” or “Student”) をキーワードとして、UCLA (University of California, Los Angeles) をはじめとする複数のアメリカの大学図書館およびネット書店で検索をおこない、その中から関連ある図書の選定を行った。よって、今回まとめた図書リストの中では、TG 学生やその周囲の人々のためのガイド本、当事者へのインタビューや語りといった内容のものが多く傾向にある。次に、第一段階の検索結果をもとに購入した図書を参照に、複数の書物で引用がされ、定評がある TG あるいは LGBT 全般に関する理論や歴史、自伝等の図書を選定していった。TG を冠しない図書であっても、多くの TG 関連図書に引用されている重要文献については、ピックアップして掲載している。対象を “Gay” や “Lesbian”、“Homosexual”、“Queer”、“Sexuality” を含む性的マイノリティ全般に関する図書まで対象を拡大すると、抜け落ちている重要図書も多くあるが、TG 関連では、ある程度はカバーできていると認識している。

(2) TG 領域の学術領域化過程：図書出版状況から

選定した図書については、年代順、著者名順に掲載した。Gay、Lesbian、Homosexual、あるいは Sexuality に関連したものは、1970 年代にホモセクシャルなどの性的マイノリティへの反差別（解放）運動、さらにはフェミニズム運動の興隆もあり、小説を含めると少なからずこれに関連した図書の出版が見られる。アメリカにおいては、LGBT などの人々がその存在や権利を主張し、反差別の運動を始めたのは、日本よりはかなり早いものの、それでもわずか半世紀前の 1960 年代後半にすぎない。そのきっかけは、1966 年にサンフランシスコで起こった Compton’s Cafeteria 騒動や、1969 年にニューヨークのゲイバー Stonewall で生じた騒動などであり、Gay や Lesbian らを中心としながらも、性的マイノリティの人々に対する反差別運動、“Gay (or Queer) Liberation”ゲイ解放運動などが展開されていく。TG に関してはその頃、まだ傍系に位置づけられており、TG に関する書籍が出版され始めるのは 1990 年代からであり、2000 年代になると急速に増加していった。これには、TG の小中学生や、その保護者、教員などの大人を対象とするガイド本が多く含まれる。こうした LGBT、Queer の解放運動の歴史は、Stryker, S. (2008, 2017 revised version) の *Transgender History: The Roots of Today’s Revolution* に詳しくまとめられており、Riemer, M. & Brown, L (2019) の *WE ARE EVERYWHERE: Protest, Power, and Pride in the History of Queer Liberation* では、豊富な写真資料を駆使し、ゲイやレスビアン、トランスジェンダーなどの人々が起こした運動や出来事を記述している。運動の始まりより後 50 年にわたり、社会への受け入れを求め、権利擁護運動を継続・拡大してきた。今日もまだその途上にあると言える。

アメリカにおける TG 研究の進展に尽力した研究者として、Stryker, S. を筆頭に、Currah, P. らの名前が挙げられる²。この両者は、医学関係雑誌を除いた場合、初の TG を

対象とする学術雑誌である *Transgender Studies Quarterly* (Duke University Press) の共同編集者でもある。

ゲイ (Gay) やレズビアン (Lesbian) など同性愛の解放運動やそれに関する学術的研究が進展する一方で、TG のそれは後れをとっていた。そうした中、TG に関する情報や史資料を収集して積み上げ、整理して学術的に提示し、TG を対象とする学問領域の基礎を築いたのが Stryker たちだと言われる。MtF (Male to Female) の TG で、レズビアンであることを公表している Stryker の半生は、TG 研究が世に認められ、一つの領域を形成していく過程と重なる。Agarwal, K. (2018)³、Beemyn, G. (2014)⁴、及び前出の Stryker, S. の図書 (2017revised version) を基に、Stryker の半生を辿りながら、アメリカにおける TG 研究の発展を辿っていく。

彼女は 1990 年代初め、カリフォルニア大学 Berkeley 校で歴史学の博士学位を取得したのと同時期に、社会的にも身体的にも性転換を行った。30 才であった。“19 世紀初頭の宗教史や文化史 (博士論文題目「モルモンのコミュニティとアイデンティティ形成」) を専門とする性転換者には、歴史学の職を得る可能性はゼロであった” (Agarwal 2018) とインタビューで語っているように、研究領域も関係していようが、当時の大学において TG を公表している者を受け入れる環境はなかった。1990 年当時、医学領域⁵を除くと、TG についてのまとまった学術的な研究はほとんどなされていない。1980 年代までに出版された TG 関連の著作としては、興味本位の出版物を除けば、Morris, J. (1974) *Conundrum*、Conn, C. (1974) *Canary*、Martino, M. (1977) *Emergence*、Richards, R.⁶ ら (1983) *Second Serve* など、当事者の自伝が相次いで出版され、注目を集めるようにはなっていた。また 1979 年にはフェミニズム研究の第一人者 Raymond, J. が *The Transsexual Empire* を出版し、男性から女性になった性転換者を、女性の身体をレイプしていると厳しく批判し、女性であることを認めなかったのである (Beemyn 2014)。性的マイノリティと一括りにされるが決して一枚岩ではなく、TG に対する反発が強まった時期でもあった。

このような状況で、性的マイノリティへの偏見がまだまだ強い社会にあって、TG であることをカミングアウトした Stryker は、大学での職は得られなかった。専門職を得られ

² Halberstam, J. (2019, October) による Snorton, C.R. 著 *Black on Both Sides* に対する書評 (*American Historical Review*. 124 (3) .1464-65.) には、この二人をこの分野のパイオニアとして挙げている。

³ Agarwal, Kritika 2018.5.1. “What Is Trans History?: From Activist and Academic Roots, a Field Takes Shape.” *The Newsmagazine of American Historical Association*.)

⁴ “Transgender History in the United States.” In Erickson-Schroth, L. (ed.). *Trans Bodies, Trans Selves*. に所収されている。この章の無削除版が、E-Book として公開している。

⁵ 医学領域では、1960 年代には性転換手術が行われるようになっていた。1966 年以降、Johns Hopkins 大学病院では Harry Benjamin らによって専門の診療がされるようになっていた。(Benjamin 1966)

⁶ Richards, Renée は性転換手術を受けた MtF の TG で、1976 年に全米オープンテニスに女子選手として出場した。

ない Stryker は、必要に迫られて TG の歴史について書くようになっていくが、それは“学問的な訓練を受けた者として取り組んだのであり、TG を公表した者が、専門職に就職できる可能性を意識しながら戦略的にとり組んだ”（Agarwal 2018）と語っている。2009 年にインディアナ大学 Bloomington 校でジェンダー研究のテニユア職を得るまでの間、Stryker は学術誌に投稿したり、GLBC 歴史協会（Gay, Lesbian, Bisexual, Transgender Historical Society）で監督をしたり、エミー賞を獲得したドキュメンタリーフィルム（*Screaming Queens*）⁷を制作するなどの活動を行っていた。またこの間、Stryker は TG についての既存研究をまとめた入門書 *The Transgender Studies Reader* を 2006 年に、翌々年には *Transgender History*（2008 年）を立て続けに出版している。彼女が専門職として大学で職を得るまでの間に、徐々に TG 関連のまとまった研究書も出版され始めた。その一つが Feinberg, L.（1996）が著した *Transgender Warriors: Making History from Joan Arc to Dennis Rodman* であり、これまでに TG として生きてきた人々の生活、表現、アイデンティティなどを人々の語りをもとに描き出したものである。2002 年には、エール（Yale）大学の Meyerowitz, J. が *How Sex Changed: A History of Transsexuality in the United States* を上梓した。これは TG についての学術的研究としてよく引用されるものであり、TG の学術分野を形成する基本図書の一つとされる。この頃から本格的な TG に関する学術書が著されるようになっていく。

Stryker が Whittle, S. との共編で、2006 年に出版した前掲の“読本”*The Transgender Studies Reader* は 700 頁を超えるもので、それまでの TG 研究を網羅するテキストである。さらに、2008 年には O'Brien 編で 1000 頁超の *Encyclopedia of Gender and Society* が発刊された。TG 分野の読本と辞典が相次いで出版され、TG が一つの独立した学問領域として急速に形成されていったことがうかがえる。この頃、他にも重要な図書が数多く出版された。Currah, P. ら（2006）*Transgender Rights*、Ekins, R.（2006）*The Transgender Phenomenon*、Kennedy, P.（2007）*The First Man-Made Man*、Serano, J.（2007）*Whipping Girl*、そして Stryker（2008）*Transgender History* などである。このようにしてアカデミズムの世界にも TG に関する研究領域が形成されていき、Stryker は 2009 年にインディアナ大学の Gender Studies でテニユアの職を得、2011 年よりアリゾナ大学 Institute for LGBT Studies に所属している。

TG の学術領域が徐々に確立されていき、重要な図書も次々に出版されていく。Stryker らは 2013 年、2006 年の“読本”の続巻となる *The Transgender Studies Reader 2* を出版した。この“読本”もまた 700 頁を超えるものである。2014 年には Erickson-Schroth,

⁷このドキュメンタリーは、1966 年にサンフランシスコで起こった Compton's Cafeteria Riot を題材にしたもので、聞き取りなどを通して新事実を掘り起こした。Buckell, G. 2008. *Screaming Queens*. *Vertigo* 3（8）（web 掲載分）

L. 編による *Trans Bodies, Trans Selves: A Resource for the Transgender Community* が世に出た。6つのセクション、24章（本文のみで645頁）から構成され、TG 関連のあらゆる領域を網羅している。さらに2016年にはGoldberg, A.E. 編による辞書 *The Sage Encyclopedia of LGBTQ Studies*（全3巻）が発刊された。もう一つの重要なトピックは、2014年に初めてのTG領域の学術専門誌（但し医学領域を除く）である *Transgender Studies Quarterly* が Stryker, S. と Currah, P. を共同編集者として、権威ある Duke University Press から発刊されるようになったことである。これによって、TG 領域に関する読本、辞書、学術雑誌が全て揃うこととなった。その後も次々に、専門書が出版されており、活発な研究がなされている。

これまで学術図書を中心に見てきたが、TGの大学生や生徒、子どもを対象とした図書、子どもや保護者、教師ら向けのガイド本も数多く出版されていった。今回のリストに収められた図書に限ると、学生、生徒らを対象としたもので、最も古いものは Rhoads, R. (1994) *Coming Out in College* がある。ガイド・解説本としては、Sanlo, R. L. (1998) *Working with Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender College Students: A Handbook for Faculty and Administrator* が459頁の本格的なものである。学校におけるLGBTの受入れは大きな課題となっていたようで、2000年代に入ると大学キャンパスや学校におけるLGBT学生・生徒の苦悩や受け入れについて書かれた図書、あるいはサバイバルガイドなどが次々に出版されていく。Madrone, K. H. (2003) が著したのは *GLBTQ: The Survival Guide for Queer & Questioning Teens* とのタイトルで、10代の子どもたちの学校での生き残り対策が扱われており、Brill, S. A. ら (2008) *Transgender Child: A Handbook for Families and Professionals* はTGの子どもを持つ親や子どもを取り巻く専門職のためのハンドブックである。特筆すべきは Makadon, H. J. ら (2008) による *The Fenway Guide to Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Health* の出版であり、これにはあらゆる方面から専門家による詳細な解説がなされている。2015年には第2版が出版され、5つのセクション、20章と付録から構成されており、603頁に及ぶものである。こうした専門的なガイドばかりではなく、当事者で YouTuber として有名な若者 Mardell, A. (2016) が、仲間の協力を得て、子どもたちのために分かりやすいイラストなどを入れて書いたLGBTの入門書 *The ABC's of LGBT+* も出版され、よく読まれている。この図書は、翌年に日本でも出版された。ここには挙げきれないが、様々な対象向け、様々なレベル及び目的の解説、ガイド本が出版され続けている⁸。

⁸2019年、2020年出版の図書については、十分に調べ切れていない。今後、さらなる充実を図ってきたい。

2. Transgender 関連のジャーナル

LGBTQ に関するジャーナルも数多く発行されるようになっており、掲載しているジャーナル（学術雑誌）はその一部に過ぎない。Homosexuality を冠するジャーナル *Journal of Homosexuality* は 1976 年から発刊され始めた定評のある学術雑誌である。1990 年代になると、性的マイノリティや Sexuality に関連するジャーナルが次々に誕生し、1995 年には *Journal of Lesbian and Gay Studies* が Duke University Press から発行されるようになった。Transgender を冠するジャーナルとしては、1997 年に医療を中心とする専門職団体である WPATH（前身は Harry Benjamin International Gender Dysphoria Association）が *International Journal of Transgender Health* を発刊し始めたのが最初かと思われる。New York Times の Transgender 運動に関する特集記事⁹では、2015 年に Duke University Press が発刊を始めた *Transgender Studies Quarterly* を TG に関する初めての学術雑誌（“the first academic publication of its kind”）として紹介している。権威ある学術出版社から雑誌が発行されるようになったということは、TG 関連の研究が、一つの学問分野として認められたことを意味する。

この他にも TG に関する学術論文は、*Women's Studies Quarterly*（1972-）といった歴史ある学術雑誌、あるいはフェミニズム系の雑誌、心理学や社会学系の雑誌、さらには医学や福祉関連など、実に多様な分野の雑誌で掲載されている。TG や LGBT は、様々な分野から研究を行うことができる学際的な領域学問なのである。

3. 権利擁護・支援団体

Transgender のみならず、LGBT などの性的マイノリティの人権を擁護し、彼/女らが学び活動する環境を整備し、支援しようと活動する組織や団体は、全国レベル、地域レベル、コミュニティレベルの組織、職能団体の組織など様々で、実に多くの組織・団体が存在する。特にアメリカ合衆国は、草の根民主主義の伝統があり、権利擁護のため、あるいは社会的弱者支援のために、弱者ら自らが、あるいは支援者らが団体を作り、行動を起こしてきた。よって、全国組織とともに、数多くのコミュニティレベルの団体が存在する。

このリストに掲載したものは、全国レベルのものを中心に、ごく一部の団体を紹介したに過ぎない。以下では全国レベルのいくつかを簡単に紹介していく。詳細は、後に掲載するリスト及び掲載している web サイトで確認してもらいたい。

先に LGBT の人々のための支援団体を並べている。最初の *GLAAD*（Gay & Lesbian Alliance Against Defamation）は 1985 年、当時の HIV に対するホモセクシャルへの断片的でセンセーショナルな報道への抗議から活動を開始し、その後、LGBTQ の人々が社会

⁹ New York Times 2015.8.28. “Milestones in the American Transgender Movement.” を参照。

に受け入れられるよう、イベント開催やエンターテインメントの公演、賞の授与などを含めメディアを活用して、人々に性的マイノリティについて知ってもらうための諸活動、マスメディアの報道に対する異議申し立てなど、非常に多様で活発な活動を展開している団体である。

GLSEN (the Gay, Lesbian & Straight Education Network)¹⁰ は、LGBTQ の人々とそうではない人が互いに協力し合い、いじめや迷惑行為に悩まされず、安心して学び、過ごすことができる学校環境を整えようとする人々のネットワークである。この団体の特徴として、2001 年以降、“National School Climate Survey” (全米学校風土調査) を継続して実施し、こうした調査結果に基づき、様々な提言を行っていることが挙げられる。これまでの調査結果は、すべて web 上で公開されている。

Human Rights Campaign は、1976 年にワシントン DC で組織された the Gay Rights National Lobby を前身としており、その後 1980 年に Human Rights Campaign Fund、1995 年からは現名となって、LGBTQ への差別の撤廃と平等の実現を求めて活動している。300 万人の会員や支援者、さらに選挙への協力者は 5,200 万人と見積もられ、全米で最も大きな、政治的に熱心な投票集団を持つ、政治的ロビー活動組織である。

the National LGBTQ Task Force “be you” は 1973 年に設立され、こうした団体の中では長い伝統をもつ組織である。もともと National Gay Task Force として始まり、ゲイの人々の権利擁護団体であったが、それにレスビアンが加わり、さらに LGBTQ 全体の権利擁護を主張する団体になっていった。

National LGBT Bar Association (全米 LGBT 法律家協会) は、LGBT の人々に関連する問題や課題に取り組む法律家、裁判官など法曹に携わる人々の全国組織であり、法律専門職の立場から、LGBTQ+ の人々の社会的公正を守るために活動している。

その他、全米組織の National Resource Center on Domestic Violence のプログラムの一環として設立された **National LGBTQ Institute on Intimate Partner Violence** は、家庭や友達など親密な関係にある LGBTQ の子どもたちへの虐待や暴力を防ぐための取組みを行う部署で、介入プログラムの開発やシェルターへの取り次ぎ、データ収集などを行っている。**GSA** (gay-straight alliances) **Network** は、ゲイに限らず LGBTQ の若者とその支援者たちが、中等学校を中心に若者主導のクラブを基盤として、コミュニティ・ベースで互いにつながり、性的マイノリティの若者の権利擁護をしようとする団体ネットワークである。

調べた範囲で、TG の人々を主たる対象とする組織として最も古くからあるのが、**WPATH** (World Professional Association for Transgender Health) であり、前身の Harry

¹⁰ この場合、Straight は LGBT ではない、異性愛者を意味する。

Benjamin International Gender Dysphoria Association は性的違和者（Gender Dysphoria）のために、性転換手術をアメリカで本格的に始めた医師 Benjamin, H. によって 1979 年に設立された。医療系を中心とする様々な分野の専門家が集まり、TG の人々の健康に寄与しようとする学際的な団体である。その他の二つは 2000 年以降の設立で、*Transgender Law Center* は 2002 年、*National Center for Transgender Equality* は 2003 年にそれぞれ創設され、TG のためのロビー活動、advocacy（権利擁護）活動を推し進めている。後者は、2015 年に大規模な調査を行っており、その調査結果をダウンロードすることができる。

地域や大学における性的マイノリティ（トランスジェンダー限定もあり）の支援組織は、実に数多くある。ここでは一例を示したに過ぎない。多くの大学では、それぞれに LGBTQ 支援の組織（学生のみ、教職員含む等）を組織しており、例えばミシガン州立大学の *The Alliance of Queer and Ally Students*¹¹、オレゴン大学の *The Queer Ally Coalition*¹²、さらには *LGBTQ+ Student Alliance*、*LGBTQ and Ally Network*、*Queer-Straight Alliance* など名称は異なるが、学生組織あるいは公的組織が設けられ、様々な他の組織と連携しながら活動を行っている。

LGBTQ 関連の情報及び諸資料にアクセスできるサイトとして、非常に優れた多くの史資料を公開している *The Williams Institutes* と *The glbtq Project* を挙げている。これらも一例に過ぎない。大学や公立の図書館・資料館、あるいは LGBTQ 関連の組織が数多くあり、それらが書類や写真、映像、音声などの諸資料をデジタルやリスト一覧の形で公開している。

おわりに

はじめにも述べた通り、ここに提示したトランスジェンダーを中心とする LGBTQ+ に関する英語文献及び支援団体のリストは、2020 年度から始めた科研費研究の第一歩、基礎固めと位置づけて収集、整理を試みたものである。全体的な把握もまだ十分にできておらず、押さえておくべきものが抜け落ちるなど不十分な点は多々あることを自覚している。今後の研究の進展に合わせてさらに充実させていくが、コロナ禍において聞き取り調査が実行できない中で行った 1 年間の研究成果のまとめとして、公表することとした。

¹¹ 〈<https://alliancemsu.weebly.com/>〉〈<https://lbgtrc.msu.edu/community/organizations/index.html>〉。この組織は 1970 年代に創設され最も歴史ある団体の一つであり、次のアドレスのサイトには関係資料も蓄積されている。Alliance of Queer and Ally Students Records 〈<https://archive.lib.msu.edu/uahc/FindingAids/ua12-3-24.html>〉

¹² 1992 年に組織された組織であり、トレーニングプログラムなども提供している。〈<https://dos.uoregon.edu/qac>〉

引用文献（但し、後掲Ⅱ“TG 関連文献・支援団体リスト”に挙げている図書は除く）

- Agarwal, K. 2018.5.1. What Is Trans History?: From Activist and Academic Roots, a Field Takes Shape. *The Newsmagazine of American Historical Association*. <<https://www.historians.org/publications-and-directories/perspectives-on-history/may2018/>>
- The Alliance of Queer and Ally Students (Michigan State Univ.) <<https://alliancemsu.weebly.com/>>
及び <<https://lbgtc.msu.edu/community/organizations/index.html>>
<<https://archive.lib.msu.edu/uahc/FindingAids/ua12-3-24.html>>
- Beemyn, G. 2014. Transgender History in the United States. In Erickson-Schroth, L. (ed.) . *Trans Bodies, Trans Selves*. New York: Oxford University Press. の無削除版。
<https://www.umass.edu/stonewall/sites/default/files/Infoforandabout/transpeople/genny_beemyn_transgender_history_in_the_united_states.pdf>
- Buckell, G. 2008. Screaming Queens. *Vertigo* 3 (8) web 掲載
<https://www.closeupfilmcentre.com/vertigo_magazine/volume-3-issue-8-winter-2008/screaming-queens/>
- Halberstam, J. (2019, October) Book Review “Black on Both Sides” by Snorton, C.R., *American Historical Review*.124(4). 1464-65.
- New York Times 2015.8.28. Milestones in the American Transgender Movement. Opinion: Transgender Today. *New York Times*.
- The Queer Ally Coalition (Univ. of Oregon) <<https://dos.uoregon.edu/qac>>

※全てのネット資料については、2021年2月28日、3月1日に最終の所在確認を行った（Ⅱの文献・団体リストも同様）。

付記

本稿は、2020－2024年度 科学研究費・基盤研究（B）「大学におけるトランスジェンダー学生を受け入れ課題：日米の女子大学事例を中心に」（代表：安東由則）による、研究成果の一部である。

II. “Transgender” 関連文献・支援団体リスト

1. 英文図書リスト

アメリカ及びイギリスで発刊された主として“Transgender”を主題とする図書の文献リストを作成し、まだ不十分なものではあるが、公開することとした。“Transgender”に関連する“LGBT”、“Queer”、“Sexuality”といったワードをタイトルとする図書にも“Transgender”関連の記述は多くあるが、それらを含めると膨大な量になるため今回は限定している。とは言え、Transgender 研究にとって重要と思われる図書については、このリストに掲載した。図書は、年代順、著者名のABC順に掲載され、各図書の最後に書かれている数字は総頁数、小文字ローマ数字は序文の頁数である（ローマ数字のないものは、序文などの頁数を含めたものになっているものが多い）。100 頁未満のものは、基本的に掲載していない。また、どのような分類の図書かを識別するため、三種類の記号を記している。重要と思われる図書は太字とした。

㊦：大学を含む学校、生徒・学生関連の書籍

㊧：生徒・学生や教員、保護者、サポーターのためのガイド本

㊨：自叙伝、伝記、ナラティブなど

太字：重要と思われる文献、※印は特に重要と思われるもの（但し、視点により異なる）

1999 年以前：

Benjamin, H. 1966. *The Transsexual Phenomenon: A Scientific Report on Transsexualism and Sex Conversion in the Human Male and Female*. New York: Julian Press. 296pp.

㊦ Conn, C. 1974. *Canary: The Story of a Transsexual*. Los Angeles: Nash Publishing. 335pp.

㊦ Morris, J. 1974. *Conundrum: From James to Jan - An Extraordinary Personal Narrative of Transsexualism*. Harcourt Brace Jovanovich. 174pp.

㊦ Martino, M. 1977. *Emergence: A Transsexual Autobiography*. New York: Crown Publisher. 273pp.

㊦ Hunt, N. 1978. *Mirror Image*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 263pp.

㊦ Richards, R. with Ames, J. 1983. *Second Serve: The Renée Richards Story*. New York: Stein and Day.

Butler, J. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. London and New York: Routledge. 256pp.

Sedgwick, E. K. 1990. *Epistemology of the Closet*. Berkeley: University of California

- Press. 258pp.
- ⑥ Sullivan, L. 1990. *From Female to Male: The Life of Jack Bee Garland*. Boston, MA: Alyson Publications. 183pp.
 - ⑥ Bornstein, K. 1994. *Gender Outlaw: On Men, Women and the Rest of Us*. New York: Routledge. 224pp.
- Herdt, G. (ed.). 1994. *Third Sex, Third Gender: Beyond Sexual Dimorphism in Culture and History*. New York: Zone Books. 624pp.
- Raymond, J. G. 1994. *The Transsexual Empire: The Making of the She-Male*. New York: Teachers College Press. 220pp. (Originally published in 1979 by Beacon Press)
- ⑤ Rhoads, R. 1994. *Coming out in College: The Struggle for a Queer Identity*. Westport, CT: Praeger. 208pp.
- Ekins, R. & King, D. 1996. *Blending Genders: Social Aspects of Cross-Dressing and Sex Changing*. New York: Routledge. 288pp.
- ⑥ Feinberg, L. 1996. *Transgender Warriors: Making History from Joan of Arc to Dennis Rodman*. Boston, MA: Beacon Press. 240pp.
- Bullough, B., Bullough, V. L. & Elias, J. (eds.) . 1997. *Gender Blending*. Amherst, NY: Prometheus Books. 524pp.
- Califia-Rice, P. 1997. *Sex Changes: The Politics of Transgenderism*. San Francisco, CA: Cleis Press. 309pp.
- Devor, H. 1997. *FTM: Female-to-Male Transsexuals in Society*. Bloomington: Indiana University Press. 695pp.
- Tierney, William G. 1997. *Academic Outlaws: Queer Theory and Cultural Studies in the Academy*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications. 304pp.
- Denny, D. (ed.) . 1998. *Current Concepts in Transgender Identity*. New York: Garland Publishing. 452pp.
- Halberstam, J. 1998. *Female Masculinity*. Durham, NC: Duke University Press. 329pp.
- ⑥ Prosser, J. 1998. *Second Skins: The Body Narratives of Transsexuality*. New York: Columbia University Press. 284pp.
 - ⑤ Sanlo, Ronni L. 1998. *Working with Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender College Students: A Handbook for Faculty and Administrator*. Westport, CT: Greenwood Press. xxi, 459pp.
- Cromwell, J. 1999. *Transmen and FTMs: Identities, Bodies, Genders, and Sexualities*.

- Urbana, IL: University of Illinois Press. 201pp.
- Feinberg, L. 1999. *Trans Liberation: Beyond Pink or Blue*. Boston, MA: Beacon Press. 160pp.
- Mallon, Gerald P. 1999. *Social Services with Transgendered Youth*. New York: Harrington Park Press. xxiv, 163pp.
- Nanda, S. 1999. *Neither Man nor Woman: The Hijras of India*. Stanford, CT: Wadsworth Publishing. 354pp.
- Stryker, S., Van Buskirk, J., & Maupin, A. 1999. *Gay by the Bay: A History of Queer Culture in the San Francisco Bay Area*. San Francisco, CA: Chronicle Books. 176pp.

2000 – 2004 年 :

- ⑤ Howard, K., & Stevens, A. (eds.). 2000. *Out & About Campus: Personal Accounts by Lesbian, Gay, Bisexual & Transgendered College Students*. Los Angeles, CA: Alyson Books. 320pp.
- Namaste, V. K. 2000. *Invisible Lives: The Erasure of Transsexual and Transgendered People*. Chicago, IL: University of Chicago Press. 354pp.
- ⑤ Wall, Vernon A., & Evans, Nancy J. (eds.). 2000. *Toward Acceptance: Sexual Orientation Issues on Campus*. Lanham, MD: University Press of America. 472pp.
- ⑤ Dilley, Patrick 2002. *Queer Man on Campus: A History of Non-Heterosexual College Men; 1945 to 2000*. New York: Routledge. viii, 246pp.
- ※ Meyerowitz, J. 2002. *How Sex Changed: A History of Transsexuality in the United States*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 392pp.
- ⑤ Sanlo, R., Rankin, S., & Schoenberg, R. 2002. *Our Place on Campus: Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender Services and Programs in Higher Education*. Westport, CT: Greenwood Press. xviii, 273pp.
- Whittle, S. 2002. *Respect and Equality: Transsexual and Transgender Rights*. London, UK: Routledge-Cavendish Publishing. 336pp.
- ⑤ Madrone, K.H. 2003. *GLBTQ: The Survival Guide for Queer & Questioning Teens*. Minneapolis, MN: Free Spirit. xi, 224pp.
- ⑧ Drescher, J. & Leli, U. 2004. *Transgender Subjectivities: A Clinician's Guide*. New York: Routledge. 180pp.
- ⑥ Green, J. 2004. *Becoming a Visible Man*. Nashville, TN: Vanderbilt University Press. 264pp. (2nd edition published in 2020)
- ⑧ Hunter, N. D., Joslin, C. G., & McGowan, S. M. 2004. *The Rights of Lesbians, Gay Men,*

Bisexuals, and Transgender People: The Authoritative ACLU Guide to a Lesbian, Gay, Bisexual, or Transgender Person's Rights (4 th ed.). Carbondale, IL: Southern Illinois University Press. xvii, 218pp.

- ⑧ Lev. A. I. 2004. *Transgender Emergence: Counseling Gender-Variant People and their Families*. New York: Routledge. 500pp.

2005 – 2009 年 :

- ⑥ Ekins, R. & King, D. (eds.). 2005. *Virginia Prince: Pioneer of Transgendering*. Binghamton, NY: Haworth Medical Press. 64pp.

- ⑤ Kailey, M. 2005. *Just Add Hormones: An Insider's Guide to the Transsexual Experience*. Boston, MA: Beacon Press. 184pp.

Rudacille, D. 2005. *The Riddle of Gender: Science, Activism, and Transgender Rights*. New York: Pantheon Books. 384pp.

- ⑤ Sears, James T. 2005. *Gay, Lesbian, and Transgender Issues in Education: Programs, Policies, and Practices*. New York: Harrington Park Press. xxii, 209pp.

- ※ Currah, P., Juang, R. M. & Minter, S.P. (eds.). 2006. *Transgender Rights*. Minneapolis, MN: University of Minneapolis Press. 368pp.

- ※ Ekins, R. 2006. *The Transgender Phenomenon*. Thousand Oaks, CA: SAGE. xiv, 263pp.

- ※ Stryker, S. & Whittle, S. (eds.). 2006. *The Transgender Studies Reader*. New York: Routledge. 768pp.

- ⑤ Beam, C. 2007. *Transparent: Love, Family, and Living the T with Transgender Teenagers*. Orlando, FL: Harcourt. 323pp.

Ettner, R., Monstrey, S., & Eyler, A. E. (eds.). 2007. *Principles of Transgender Medicine and Surgery*. Binghamton, NY: Haworth Press. xxiv, 363pp. (2nd edition published in 2016, 430pp.)

- ⑥ Hill, R. S. 2007. *As a Man I Exist; As a Woman I Live: Heterosexual Transvestism and the Contours of Gender and Sexuality in Postwar America*. [Dissertation submitted to University of Michigan.]

- ⑥ Kennedy, P. 2007. *The First Man-Made Man: The Story of Two Sex Changes, One Love Affair, and a Twentieth-Century Medical Revolution*. New York: Bloomsbury. 214pp.

- ⑤ Martin, Hillias J. & Murdock, James R. 2007. *Serving Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, and Questioning Teens: A How-to-do-it Manual for Librarians*. New York:

Neal-Schuman Publishers. xix, 267pp.

- ⑥ Serano, J. 2007. *Whipping Girl: A Transsexual Woman on Sexism and the Scapegoating of Femininity*. Emery, CA: Seal Press. 392pp.
- ⑧ Baez, J., Howd, J., Pepper, R. & the staff of the Princeton Review. 2008. *The Gay and Lesbian Guide to College Life: A Comprehensive Resource for Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Students and Their Allies*. New York: Random House. xiv, 391pp.
- ⑧ Brill, S. A. & Pepper, R. 2008. *The Transgender Child: A Handbook for Families and Professionals*. San Francisco, CA: Cleis Press. 252pp.
- ⑤ Harper, Shaun R., & Quaye, Stephen J. (eds.). 2008. *Student Engagement in Higher Education: Theoretical Perspectives and Practical Approaches for Diverse Populations* (2 nd ed.) . New York: Routledge 360pp. (2nd edition published in 2014, 390pp.)
- ※ ⑤ Makadon, Harvey J. et al. 2008. *The Fenway Guide to Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Health*: Philadelphia, PA: American College of Physicians, xvii, 526pp.
- O'Brien, J. (ed.). 2008. *Encyclopedia of Gender and Society*, Thousand Oaks, CA: Sage Publications. 1032pp.
- ※ Stryker, S. 2008. *Transgender History*. Berkeley, CA: Seal Press. 208pp. (First ed.)
- Reis E. 2009. *Body in Doubt: An American History of Intersex*. Baltimore, MD: Johns Hopkins Univ Press. 216pp.
- ⑥ Mallon, Gerald P. (ed.). 2009. *Social Work Practice with Transgender and Gender Variant Youth* (2nd ed.). New York: Routledge. xiv, 191pp.

2010 年 :

- Barclay, S., Bernstein, M., & Marshall, A-M. (eds.) . 2010. *Queer Mobilizations: LGBT Activists Confront the Law*. NY: NYU Press. 384pp.
- ⑤ Bertram, C. C., Crowley, M. S., & Massey, S. G. (eds.). 2010. *Beyond Progress and Marginalization: LGBTQ Youth in Educational Contexts*. New York: Peter Lang. xiv, 316pp.
- ⑤ Cuyjet, M. J., Howard-Hamilton, M. F., & Cooper, D. L. (eds). 2010. *Multiculturalism on Campus: Theory, Models, and Practices for Understanding Diversity and Creating Inclusion*. Sterling, VA: Stylus Publishing. 444pp. (2nd edition published in 2014, 427pp)
- Elliot, P. 2010. *Debates in Transgender, Queer, and Feminist Theory*. Surrey. Ashgate Publishing. 204pp. (2016 e-book published by Routledge, London 208pp.)
- Hines, S., & Sanger, T. 2010. *Transgender Identities: Towards a Social Analysis of Gender*

Diversity. New York: Routledge. 312pp.

- ⑤ Rankin, S., Weber, G., Blumenfeld, W., & Frazer, S. 2010. *2010 State of Higher Education for Lesbian, Gay, Bisexual & Transgender People*. Charlotte, NC: Campus Pride, 196pp.

Shapiro, E. 2010. *Gender Circuits: Bodies and Identities in a Technological Age*. New York: Routledge. 248pp.

2011 年 :

Battis, J. (ed.). 2011. *Homofiles: Theory, Sexuality, and Graduate Studies*. Lanham, MD: Lexington Books. 173pp.

※ Beemyn, G., & Rankin, S. 2011. *The Lives of Transgender People*. New York: Columbia University Press. xvi, 230pp.

Bronski, M. 2011. *A Queer History of the United States*. Boston, MA: Beacon Press. 288pp.

Grant, J.M., Mottet, L.A., Tanis, J., Herman, J.L., & Keisling, M. 2011. *Injustice at Every Turn: A Report of the National Transgender Discrimination Survey*. Washington, D.C.: National Center for Transgender Equality and National Gay and Lesbian Task Force. 179pp. & appendix.

⑥ Krieger, N. 2011. *Nina Here nor There: My Journey beyond Gender*. Boston: Beacon Press. 216pp.

⑧ Madrone, K. H. 2011. *GLBTQ: The Survival Guide for Gay, Lesbian, Bisexual, Transgender, and Questioning Teens*. Minneapolis, MN: Free Spirit Publishing. ix, 229pp.

⑤ Marine, Susan B. 2011. *Stonewall's Legacy: Bisexual, Gay, Lesbian, and Transgender Students in Higher Education*. San Francisco, CA: Jossey-Bass. xiii, 145pp.

2012 年 :

⑤ Cianciotto, J., & Cahill, S. 2012. *LGBT Youth in America's Schools*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press. 236pp.

Enke, A. F. (ed.). 2012. *Transfeminist Perspectives: In and Beyond Transgender and Gender Studies*. Philadelphia, PA: Temple University Press. viii, 260pp.

⑤ Fisher, Emily S., & Kennedy, Kelly S. 2012. *Responsive School Practices to Support Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, and Questioning Students and Families*. New York, NY: Routledge. 176pp.

Pepper, R. 2012. *Transitions of the Heart: Stories of Love, Struggle and Acceptance by Mothers of Transgender and Gender Variant Children*. NJ: Cleis Press. 224pp.

- ⑧ Teich, Nicholas M., & Green, Jamison. 2012. *Transgender 101: A Simple Guide to a Complex Issue*. New York: Columbia Univ Press. 160pp.

2013 年 :

- ⑤ Drescher, J. & Byne, W. (eds.). 2013. *Treating Transgender Children and Adolescents: An Interdisciplinary Discussion*. London; New York: Routledge. xi, 219pp.
- ⑤ Jocson, Korina M. (ed.). 2013. *Cultural Transformations: Youth and Pedagogies of Possibility*. Cambridge, Massachusetts: Harvard Education Press. viii, 272pp.
- ⑤ Mayo, C. 2013. *LGBTQ Youth and Education: Policies and Practices*. New York: Teachers College Press, Columbia University. xii, 147pp.
- ※ Stryker, S. & Aizra, A. (eds.). 2013. *The Transgender Studies Reader 2* : New York, NY: Routledge. 704pp.

2014 年 :

- ※ Erickson-Schroth, L. (ed.). 2014. *Trans Bodies, Trans Selves: A Resource for the Transgender Community*. New York: Oxford University Press. 672pp.
- Jeffreys, S. 2014. *Gender Hurts: A Feminist Analysis of the Politics of Transgenderism*, London and New York: Routledge. 216pp.
- ⑤ Meyer, Elizabeth J. & Sansfaçon, Annie P. 2014. *Supporting Transgender & Gender Creative Youth: Schools, Families, and Communities in Action*. New York: Peter Lang. x, 260pp.
- ⑤ Paludi, Michele A. 2014. *Campus Action against Sexual Assault: Needs, Policies, Procedures, and Training Programs*. Santa Barbara, CA: Praeger, xxxix, 315pp.

2015 年 :

- ⑤ Hawley, John C. (ed.). 2015. *Expanding the Circle: Creating an Inclusive Environment in Higher Education for LGBTQ Students and Studies*. Albany, NY: State University of New York Press. xiii, 352pp.
- ⑤ Jones, T. 2015. *Policy and Gay, Lesbian, Bisexual, Transgender and Intersex Students*. New York: Springer. 174 pp.
- ※⑧ Makadon, H., Mayer, K., Poter, J., & Goldhammer, H. 2015. *The Fenway Guide to Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Health* (2nd ed.). Philadelphia, PA: American College of Physicians. xix, 603pp.
- ⑥ Nutt, Amy E. 2015. *Becoming Nicole: The Transformation of an American Family*. New

York: Random House. xix, 279pp.

- ⑥ Shultz, Jackson W. 2015. *Trans/Portraits: Voices from Transgender Communities*. Hanover, NH: Dartmouth College Press. xxii, 218pp.

2016 年 :

- ⑤ Bloomfield, Veronica E. & Marni E. Fisher. 2016. *LGBTQ Voices in Education: Changing the Culture of Schooling*. New York: Routledge. xxix, 226pp.
- ⑥ Brill, Stephanie A., & Kenney, L. 2016. *Transgender Teen: A Handbook for Parents and Professionals Supporting Transgender and Non-Binary Teens*. San Francisco, CA: Cleis Press. xviii, 338pp.
- ⑥ Corbett, K. 2016. *A Murder over a Girl: Justice, Gender, Junior High*. New York: Henry Holt. 273pp.
- ※ Goldberg, A. E. (ed.). 2016. *The Sage Encyclopedia of LGBTQ Studies* (3 volumes). Thousand Oaks, CA: SAGE. xxxv, 1396pp.
- ⑥ Hinrichs, Donald W. 2016. *Queer Voices from the Campus: Lesbian, Gay, and Bisexual Students Share Their Coming-Out Stories*. Outskirts Press. 122pp.
- ⑥ Mardell, A. 2016. *The ABC's of LGBT+: Gender Identity Book for Teens*. Coral Gables, FL: Mango Publishing. 190pp.
- ⑤ Miller, sj 2016. *Teaching, Affirming, and Recognizing Trans* and Gender Creative Youth: A Queer Literacy Framework*. New York: Palgrave Macmillan. xxi, 323pp.
- ⑤ Nicolazzo, Z. 2016. *Trans* in College : Transgender Students' Strategies for Navigating Campus Life and the Institutional Politics of Inclusion*. Sterling, VA: Stylus Publishing. 208pp.
- ⑤ Sadowski, Michael 2016. *Safe Is not Enough: Better Schools for LGBTQ Students*. Cambridge, MA: Harvard Education Press. x, 218pp.
- Vaughn, S. 2016. *Transgender Youth: Perceptions, Media Influences and Social Challenges*. New York: Nova Publishers. xii, 243pp.

2017 年 :

- Brettschneider, M., Burgess, S. & Keating, C. 2017. *LGBTQ Politics: A Critical Reader*. New York: New York University Press. xii, 621pp.
- Davis, Heath F. 2017. *Beyond Trans: Does Gender Matter?* New York: New York University Press. 208pp.
- Demos, V. & Segal, M. T. (eds.). 2017. *Gender Panic, Gender Policy*. Bingley, UK: Emerald

Press. 342pp.

- ⑧ Eriksen, T. 2017. *Unconditional: A Guide to Loving and Supporting Your LGBTQ Child (Book for Parents of a Gay or Transgender Child)*. Coral Gables, FL: Mango Publishing. 244pp.
- ⑧ Killermann, S. 2017. *A Guide to Gender: The Social Justice Advocate's Handbook* (2 nd ed.) . Impetus Books. 312pp. (1st edition published in 2014. 252pp.)
- ⑤ Kjaran, Jón I. 2017. *Constructing Sexualities and Gendered Bodies in School Spaces: Nordic Insights on Queer and Transgender Students* (Queer Studies and Education) London, UK: Palgrave Macmillan. xv, 243pp.
- ⑤ Meadow, T. 2017. *Trans Kids: Being Gendered in the Twenty-first Century*. Oakland, CA: University of California Press. xiii, 300pp.
- ⑥ Misra, J., Stewart, M. D. & Brown, M. A. 2017. *Gendered Lives, Sexual Beings: A Feminist Anthology*. Los Angeles, CA: SAGE. xviii, 628pp.
- ⑤ Nealy, Elijah C. 2017. *Transgender Children and Youth: Cultivating Pride and Joy with Families in Transition*. New York: W. W. Norton & Company. xxii, 423pp.
- ⑤ Rupp, Leila J. & Freeman, Susan K. (eds.). 2017. *Understanding and Teaching U.S. Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender History* (2nd ed.). Madison, WI: University of Wisconsin Press. 392pp. (1st edition Published in 2014)
- Skidmore, E. 2017. *True Sex: The Lives of Trans Men at the Turn of the Twentieth Century*. New York: New York University Press. v, 253pp.
- Snorton, C. R. 2017. *Black on Both Sides: A Racial History of Trans Identity*. Minneapolis, MN: Univ of Minnesota Press. xiv, 259.
- ⑧ Stead, V. 2017. *A Guide to LGBTQ+: Inclusion on Campus, Post-Pulse*. New York: Peter Lang Publishing. xxiv, 340pp.
- ※ Stryker S. 2017. *Transgender History: The Roots of Today's Revolution* (Revised edition) . Berkley: CA: Seal Press. 301pp. (Reading Guide List 有)

2018 年 :

- ⑧ Airton, L. 2018. *Gender: Your Guide: A Gender-Friendly Primer on What to Know, What to Say, and What to Do in the New Gender Culture*. Avon, MA: Adams Media. 240pp.
- Busch, Elizabeth K. & Thro, William E. 2018. *Title IX: The Transformation of Sex Discrimination in Education*. New York: Routledge, Taylor & Francis Group. xiv, 232pp.
- ⑤ Brunskell-Evans, H., & Moore, M. 2018. *Transgender Children and Young People: Born*

- in Your Own Body*. Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing. xii, 232pp.
- ⑧ Fisher, F., & Fisher, O. 2018. *Trans Teen Survival Guide*. London, UK: Jessica Kingsley Publishers. 224pp.
- ⑤ Garvey, Jason C., Chang, Stephanie, H., Nicolazzo, Z., & Jackson, R. 2018. *Trans* Policies & Experiences in Housing & Residence Life*. Sterling, VA: Stylus Publishing. 233pp.
- Gill-Peterson, J. 2018. *Histories of the Transgender Child*. MN: University of Minnesota Press. 288pp.
- ⑧ Janssen, A., & Leibowitz, S. (eds.). 2018. *Affirmative Mental Health Care for Transgender and Gender Diverse Youth: A Clinical Guide*. New York: Springer International Publishing. xviii, 232pp.
- ⑧ Krieger, I. 2018. *Helping Your Transgender Teen: A Guide for Parents* (2nd edition). London; Philadelphia, PA: Jessica Kingsley Publishers. 110pp. (1st edition published in 2011 from Createspace Independent Publishing. 86pp.)
- ⑧ Langford, J. 2018. *The Pride Guide: A Guide to Sexual and Social Health for LGBTQ Youth*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield. xviii, 363pp.
- ⑧ Meyer, E. J. & Sansfaçon, A. P. (eds.). 2018. *Supporting Transgender & Gender-creative Youth: Schools, Families, and Communities in Action* (revised edition). New York: Peter Lang. xxii, 331pp.
- ⑥ Neacs. u, D. & Holt, David B. (editors in chief), 2018. *Sexual Orientation, Gender Identities, and the Law: A Research Bibliography, 2006-2016*. Getzville, NY: William S. Hein & Co. xxvii, 451pp.
- Tannehill, B. 2018. *Everything You Ever Wanted to Know about Trans*. London, UK: Jessica Kingsley Publishers. 432pp.
- ⑧ Waites, M. 2018. *Supporting Young Transgender Men: A Guide for Professionals*. London, UK; Philadelphia, PA: Jessica Kingsley Publishers. 168pp.
- ⑥ Yarhouse, Mark A., Dean, Janet B., Stratton, Stephen P., & Lastoria, M. 2018. *Listening to Sexual Minorities*. Westmont, IL: Inter Varsity Press. 320pp.

2019 年 :

- ⑥ Anderson, Ryan T. 2019. *When Harry Became Sally: Responding to the Transgender Moment*. New York: Encounter Books. 272pp.
- Beauchamp, T. 2019. *Going Stealth: Transgender Politics and U.S. Surveillance*

Practices. Durham, NC: Duke University Press. 208pp.

- ⑤ Beemyn, G. (ed.). 2019. *Trans People in Higher Education*. Albany, NY: SUNY Press (State University of New York Press) . xxxi, 310pp.

Funk, M. 2019. *The Book of Pride: LGBTQ Heroes Who Changed the World*. San Francisco, CA: HarperOne. 288pp.

Gonzales, K., & Rayne, K. 2019. *Trans+: Love, Sex, Romance, and Being You*. Washington, DC: Magination Press. 304pp.

Gratton, C. 2019. *Supporting Transgender Autistic Youth and Adults*. London, UK: Jessica Kingsley Publishers. 240pp.

Jones, T. 2019. *Working with Transgender and Gender Variant Youth: Research, Policy, and Practice for Health and Social Care Providers*. London, UK; Philadelphia, PA: Jessica Kingsley Publishers. 214pp.

- ⑧ Lev, Arlene I., & Gottlieb, Andrew R. 2019. *Families in Transition: Parenting Gender Diverse Children, Adolescents, and Young Adults*. New York: Harrington Park Press. xviii, 473pp.

- ⑤ Matson, L., & Mckendry, S. 2019. *Supporting Transgender and Non-Binary Students and Staff in Further and Higher Education: Practical Advice for Colleges and Universities*. London, UK: Jessica Kingsley Publishers. 232pp.

2020 年 :

- ⑤ Arnberg, B. 2020. *Queer Campus Climate: An Ethnographic Fantasia*. New York: Routledge. 250pp.

Daum, Courtenay W. 2020. *The Politics of Right Sex: Transgressive Bodies, Governmentality, and the Limits of Trans Rights*. New York: SUNY Press. 252pp.

- ⑥ Duran, A. 2020. *The Experiences of Queer Students of Color at Historically White Institutions: Navigating Intersectional Identities on Campus*. New York: Routledge. 217pp.

- ⑧ Gainsburg, J. 2020. *The Savvy Ally: A Guide for Becoming a Skilled LGBTQ+ Advocate*. London, UK: Rowman & Littlefield Publishers. 184pp.

- ⑤ Mangin, M. 2020. *Transgender Students in Elementary School: Creating an Affirming and Inclusive School Culture*. Cambridge, MA: Harvard Education Press. 240pp.

Manion, J. 2020. *Female Husbands: A Trans History*. UK: Cambridge University Press. 350pp.

Reay, B. 2020. *Trans America: A Counter-History*. Boston, MA: Polity. 256pp.

- ⑧ Shane, K. 2020. *The Educator's Guide to LGBTQ+ Inclusion*. London, UK: Jessica

Kingsley Publishers. 240pp.

Shrier, A. 2020. *Irreversible Damage: The Transgender Craze Seducing Our Daughters*
Washington, D.C.: Regnery Publishing. 276pp.

Soh, D. 2020. *The End of Gender: Debunking the Myths about Sex and Identity in Our Society*. New York: Threshold Editions. 336pp.

2. 英文学術雑誌リスト (雑誌名、創設年、出版社)

- *Journal of Homosexuality*, 1976- present, (Routledge.)
- *Journal of Feminist Cultural Studies “differences,”* 1989-present, (Duke University Press.)
- *Journal of the History of Sexuality*, 1990- present, (University of Texas Press.)
- *Journal of Lesbian and Gay Studies*, 1995- present, (Duke University Press.)
- *International Journal of Transgender Health*, 1997- present, (Taylor & Francis.)
- *Sexualities*, 1998-present, (Sage Publications.)
- *Journal of LGBT Youth*, 2008- present, (Taylor & Francis.)
(Formerly known as Journal of Gay & Lesbian Issues in Education (2003 - 2008))
- *Transgender Studies Quarterly*, 2014- present, (Duke University Press.)
- *Transgender Health*, 2016- present, (Mary Ann Liebert, Inc.) など

※この他、Gay, Lesbian, Queer, Sexuality, LGBT, feminist, genderなどを冠するジャーナルが数多く発行されており、そうしたジャーナルの中でトランスジェンダーに関する論文も数多く掲載されている。上記掲載のジャーナルはその一部に過ぎない。

3. LGBT の子ども・若者たちの支援団体など

全米

○ GLAAD (Gay & Lesbian Alliance Against Defamation) <<https://www.glaad.org/>>

この非営利組織は、1985 年当時、HIV や AIDS に対する中傷やセンセーショナルな新聞記事に抗議するため、ニューヨーク市で発足したのが始まりである。以後、LGBT の人々が社会に受け入れられることを促進し、文化変化の最前線基地として今日に至っている。この組織は、LGBTQ の人々の様々な物語・話題を広く社会と共有すべく、エンターテインメント、ニュース、デジタルメディアなどを通じて積極的に人々へと働きかけている。

出版物も発行しており、*Where We Are on TV* <<https://www.glaad.org/whereweareontv20>> は TV 番組を対象として、*Studio Responsibility Index* <<https://www.glaad.org/sri/2019>> は大手映画会社配給の映画を対象として、登場人物の LGBTQ 等の多様性や人物の描き方など

を検証し、その結果をまとめて報告している。さらに、GLAAD Media Awards（2021 年は第 32 回目の授与）を設けるなど、幅広い活動を行っている。

○ **GLSEN (the Gay, Lesbian & Straight Education Network)** 〈<https://www.glsen.org/>〉

この組織は、1990 年以降、LGBTQ の児童や生徒が、学校環境の中でいじめや迷惑行為によって悩まされることなく、学びかつ学習することを保障するために活動を行っている。共に協力しあうことで、自分たちの国の学校環境を、全ての若者が安全で肯定的に捉えることができるように変えていけるとの信念の下、活動を行っている。

2001 年以降、2 年ごとに LGBTQ の子どもたちの学校における経験を尋ねる全国学校風土調査 (National School Climate Survey) を行っており、彼 / 女らが直面する困難や学校における資源などを明らかにすることで、子どもたちが安心できる学校生活の支援に繋げようとしている。2019 年調査は、16,000 名以上の子どもを対象としたものである。下のアドレスから、これまでの全ての調査結果をダウンロードすることができる。

- Kosciw, J. G., Cullen, M.K. 2002. The GLSEN 2001 national school climate survey: The school-related experiences of our nation's lesbian, gay, bisexual and transgender youth. (<https://www.glsen.org/researchlist?program=All&type=100&issue=All&topic=All&grade=All>)
 - Kosciw, J.G. et al., 2018. *The 2017 National School Climate Survey: The Experiences of Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, and Queer Youth in Our Nation's Schools*. New York: GLSEN. xxiii,165pp. (<https://www.glsen.org/sites/default/files/2019-10/GLSEN-2017-National-School-Climate-Survey-NSCS-Full-Report.pdf>)
 - Kosciw, J. G., Clark, C. M., Truong, N. L. & Zongrone, A. D. 2020. *The 2019 National School Climate Survey: The Experiences of Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, and Queer Youth in Our Nation's Schools*. New York: GLSEN. xxix,189pp. (<https://www.glsen.org/sites/default/files/2020-11/NSCS19-111820.pdf>)
- ※ 2004、2006、2008、2012、2014、2016 年にも報告書が出されており、アクセス可。

○ **GSA (gay-straight alliances) Network** 〈<https://gsanetwork.org/>〉

1998 年にサンフランシスコにて、若者が運営する団体として創設された。LGBTQ+ の若者と彼らを支援する若者とが一緒になって、学校（主に中学校や高等学校）を拠点とする GSA (gay-straight alliances) クラブを拠点に、ピアサポート、リーダーシップの育成、コミュニティづくり、アドボカシー（権利擁護）を行うことを通して、互いにつながっていかうとするものである。Gay と Straight（性的マイノリティでない者）の集まりから始

まっているが、今日では LGBTQ 等性的マイノリティ全般が対象となり、全米の多くの学校にクラブが作られ、性や人種の公正さを実現すべく、繋がり合おうとしている。

○ **the Human Rights Campaign (HRC)** 〈<https://www.hrc.org/about>〉

1976 年にワシントン D.C. で the Gay Rights National Lobby として組織され、LGBT が平等を獲得するため、公民権獲得運動、政治的ロビー活動などを積極的に推し進めてきた。LGBTQ への差別を終わらせるように取り組んでおり、LGBTQ やその家族たちが、法の下で平等に、差別を恐れることなくありのままの姿で生きる自由を持つことを目指している。300 万人のメンバーやサポーターがいる全米で最大級の組織である。

ロビー活動も活発に行っており、そうした活動内容は、毎年発行されている Annual Report に掲載されている。次のサイトからは 1999 年以降のものがダウンロードできる。

〈<https://www.hrc.org/about/annual-reports>〉

○ **National Center for Transgender Equality** 〈<https://transequality.org/about>〉

2003 年、トランスジェンダーの人々の平等を促進するためには、政策の転換が喫緊の課題だとするトランスジェンダー活動家によって創設された。トランスジェンダーの人々のアドボカシー（権利擁護）を強力に推し進めている団体である。

2015 年に行った全国調査は、トランスジェンダーの人々の生活や経験に焦点を当てた大規模な調査で、28,000 人から回答を得ている（下記のアドレスからダウンロード可能）。2011 年には、6,400 名のトランスジェンダーや性別不適合な人々へのインタビュー調査を実施した。〈<https://transequality.org/issues/us-trans-survey>〉

・James, Sandy E. et al., 2016. *The Report of the 2015 U.S. Transgender Survey*. Washington, D.C. National Center for Transgender Equality. 297pp. 〈<https://www.transequality.org/sites/default/files/docs/USTS-Full-Report-FINAL.PDF>〉

○ **the National LGBTQ Task Force “be you”** 〈<https://www.thetaskforce.org/>〉

この全米 LGBTQ 専門委員会（Task Force）は、1973 年に New York で創設された National Gay Task Force（1973-85）に起源をもつ権利擁護団体（Advocacy Group）である。その後、National Gay and Lesbian Task Force（1985-2014）への名称変更を経て、今日に至っており、この分野で初の NPO 組織とされる（現在の本部は Washington, D.C.）。

LGBTQ の人々に十分な自由、公正さと平等を行き届かせ、皆が自由で、それぞれの人生の場面、場面で、十分に自分自身であり続けられる未来を作ることを目指している。差別を終わらせようと歩んできたが、今日でも何百万人の LGBTQ の人々が生活のあらゆる場面、例えば住居、雇用、健康管理、退職後の生活、基本的人権などにおいて、壁にぶつ

かっている。こうした障壁をなくし、自分が自分であることが可能な世界になるよう、活動家を訓練し全国に派遣する活動なども行っている。

○ **The National LGBT Bar Association** 〈<https://lgbtbar.org/>〉

全米 LGBT 法曹（法律家）協会の始まりは 1987 年である。HIV や AID への関心が高まりを見せる当時、家族法の法律専門家たちが集まり、同性愛者の人々の権利擁護をするために結成された小さな団体であった。今日では LGBTQ の人々の権利擁護のために、法律家、裁判官、その他の法律専門職、法曹学生、活動家らが法律専門職の立場から、非常に多様な LGBTQ+ の人々の社会における公平性を守り促進していくための活動を行う。1992 年には、全米法律家協会の公式なメンバー（下部組織）となった。

○ **National LGBTQ Institute on Intimate Partner Violence** 〈<https://lgbtqipv.org/>〉

全米組織 National Resource Center on Domestic Violence のプログラムの一つであり、LGBTQ の虐待サバイバーによって、当事者のために創設された。LGBTQ のサバイバーと反暴力運動による主張をクロスさせ、多くの成果を生んできた。サバイバーの経験や反暴力運動の成果から学び、LGBTQ に対する暴力を予防する様々な取組みを調査し、プログラムの開発に取り組んでいる。暴力を防ぐための介入の仕方やプログラム開発、シェルターへのアクセス、調査やデータの収集などを実施している。

○ **WPATH (World Professional Association for Transgender Health)**

（トランスジェンダーの健康に関する世界専門家協会） 〈<https://www.wpath.org/>〉

（旧 HBGDA : Harry Benjamin International Gender Dysphoria Association）

トランスジェンダーの健康に貢献するために創設された学際的な専門職からなる非営利教育機関である。根拠に基づいたケアや教育、研究、公共政策を促進し、トランスジェンダーの健康を寄与することをミッションとする。〈<https://www.wpath.org/about/mission-and-vision>〉

また、学術雑誌 *INTERNATIONAL JOURNAL OF TRANSGENDER HEALTH* の編集・発行も行っている（2.「雑誌リスト」掲載）。〈<https://www.wpath.org/publications/ijt>〉

数年に一度、トランスジェンダーの人々のためのケア基準を提示しており、最新版は 2012 年に出版された第 7 版である。英語や日本語を含め、19 ヶ国語のバージョンがあり、ダウンロードが可能となっている。〈<https://www.wpath.org/publications/soc>〉

- World Professional Association for Transgender Health. 2011. *The Standards of Care for the Health of Transsexual, Transgender, and Gender Nonconforming People*, (7th version). Minneapolis: WPATH. (published in 1979, 1980, 1981, 1990, 1998, 2001)

(※前身の団体名にある Harry Benjamin は内分泌学の医師であり、ジョンズ・ホプキンス (Johns Hopkins) 大学病院にて全米で初めて性別適合外科クリニックを開設して TG 患者の診療を始め、性転換手術を先導した。その結果、彼の性転換手術方法が広まっていった。著書に 1966 年出版の *The Transsexual Phenomenon* があり、大きな影響を与えた。)

○ Transgender Law Center 〈<https://transgenderlawcenter.org/about>〉

このセンターは、トランスジェンダーの人々が中心となって 2002 年に創設した、全米で最も大きなトランスジェンダーに特定された団体である。法律や政策、方針を変えることによって、すべての人々が、その人の性自認や性的表現に関係なく、差別されず、安全に、ありのままに生きることができるようにすることを目指して活動している。トランスジェンダーの人々が運営しており、すべての人々が自分自身やその将来を自由に決められる世界になることを提唱する。法的な専門知識に基づき、人種間平等に取り組むことにより、トランスジェンダーや従来の性概念に合致しない人々が生き生きと活動し、自由のために戦い続けられるよう、コミュニティ主導のさまざまな戦略を採用している。

地域

○ Safe Schools Coalition 〈<http://www.safeschoolscoalition.org/>〉

1998 年、ワシントン州のシアトル (Seattle) にて創設された組織で、性的マイノリティの若者の声を聞いて、学校に対応を求め、提言する活動から始まった。教育者や親 / 保護者 (後見人) や若者に対して、LGBTQ の子どもたちを支援していくための資源 (トレーニングや人員の派遣を含む) を、様々な必要に応じて提供していくことを目的とする。LGBTQ に限定せず、学校でのいじめや暴力を排し、安全な学校風土づくりを目指しており、ワシントン州を中心に、様々な地域団体と連携している。

○ the CRDP LGBTQ TA Center 〈<https://lgbtq-ta-center.org/>〉

“California Reducing Disparities Project (CRDP)” を実施している。

この団体は、2004 年にカリフォルニア州でメンタルヘルスサービス法が成立したことを機に資金を提供され、活動が始まった。100 万ドル以上の収入を得ている者に 1 % の所得税を掛けた資金を基に運用されている。カリフォルニアの LGBTQ+ の人々のメンタルヘルスをサポートするための、コミュニティを土台とするプログラム (現在 35 のプログラム) を実行し、評価している。こうした取り組みを通して、人々の間にあるメンタルヘルス格差を減少させようとするものである。

大学

○ Campus Pride 〈<https://www.campuspride.org/>〉

2001年に設立され、翌年から活動を開始した。LGBTQの学生が安全な環境の中で大学生活を送っていけるように学生リーダーやグループに働きかけを行っている代表的なNPO法人である。この組織は、学生リーダーのための、学生リーダーによるボランティア主導のネットワークで構成されており、その第一の目的は、全米の大学において、LGBTQやその支援者の学生にとって必要な資源やプログラム、サービスを開発・発展させることにある。

○ Consortium of Higher Education LGBT Resource Professionals

〈<https://www.lgbtcampus.org/>〉

New Yorkに本部を置く、法人と個人の会員制団体で、LGBTQの人々とこれに関心を持つ人々の全てが、十分に解放される（自由になれる）高等教育の場をつくることを掲げ、高等教育に在籍しているLGBTQの人々を制約から自由にすることをその使命としている。多様な性的指向と性自認をもつ人々を教育し支援するために、キャンパスで取り組んでいる個々人をサポートする活動のみならず、横断的で人種間平等の枠組をもって包括的な政策や実践に向けて取り組んでいる。（Webサイトには設立年などの情報が掲載されていない）

情報

○ The Williams Institutes 〈<https://williamsinstitute.law.ucla.edu/publications/>〉

カリフォルニアUCLAのSchool of Lawにある研究所。SOGIに関する法律や公共政策について独立した調査を行っている。ステレオタイプではなく事実こそが、法律や政策、司法判断に提供すべき情報であり、事実に基づく法律や政策などがLGBTのコミュニティに影響を及ぼすことができるとの信念を基盤とする。次のアドレスから、様々な調査結果のダウンロードが可能である。

〈<https://williamsinstitute.law.ucla.edu/publications/>〉

- ・Herman, J. L, Flores, A. R, Brown, T. N, Wilson, B. D, & Conron, K. J. 2017. *Age of Individuals Who Identify as Transgender in the United States*. Los Angeles, CA: The Williams Institutes (UCLA School of Law) . 13pp.

〈<http://williamsinstitute.law.ucla.edu/wp-content/uploads/Age-Trans-Individuals-Jan-2017.pdf>〉

※ Williams Institute Reading Room: Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender Resources in Law and Public Policy 〈<https://libguides.law.ucla.edu/williamsreadingroom>〉

○ the glbtq Project (the glbtq Encyclopedia Project) 〈<http://www.glbtqarchive.com/>〉

2000 年に、出版者である Wik Wikholm が、LGBTQ の文化や歴史を記した世界で最も大きな百科事典を作りあげ、オンラインで世界に発信することを目的に始まった。その成果は、以下の出版物として上梓された。

The Queer Encyclopedia of the Visual Arts (2004)、*The Queer Encyclopedia of Music, Dance, and Musical Theater* (2004)、*The Queer Encyclopedia of Film and Television* (2005)、(いずれも Summers, Claude J. が編集し、Cleis Press より出版)。Web サイトは 2015 年に閉じられたが、archive という形で成果が公開されている。その archive は、“Arts”, “Literature”, “Social Sciences and History”, “Essays and Interviews” の 4 部門からなる。
〈<http://www.glbtqarchive.com/#about>〉

※以下は一例であるが、多くのデジタル資料を次のような様々な web サイトから検索することができる。

• **The GLBT Historical Society “Archives”**

〈<https://www.glbthistory.org/archives>〉

• **Digital Transgender Archive**

〈<https://www.digitaltransgenderarchive.net/>〉

• **University of Washington, University Libraries “History : LGBTQ: Primary Sources”**

〈<https://guides.lib.uw.edu/c.php?g=526167&p=3597669>〉

• **University of California San Diego, Libraries “Guide to Online Primary Sources: Sexuality”**

〈<https://ucsd.libguides.com/primarysources/sexuality>〉

• **The Society for the Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity (APA)**

〈<https://www.apadivisions.org/division-44/resources/websites>〉

• **Center for Disease Control and Prevention “Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Health”**

〈<https://www.cdc.gov/lgbthealth/youth-resources.htm>〉

• **New York City’s Lesbian, Gay, Bisexual & Transgender Community Center**

〈<https://gaycenter.org/archives/>〉 など

以上

学校現場における道徳教育改革への対応と 意識に関する調査研究（３）

—2019 年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として—

Research on Actuality of Correspondence to Moral Education Reform in Schools and Teacher's Consciousness (3):
Focusing on Statistical Analysis and Free Description Analysis in the 2019 Survey for Schools across Japan

押谷由夫 *・矢作信行 **・齋藤道子 **

木崎ちのぶ **・谷山優子 **

小山久子 ***・醍醐身奈 ****

OSHITANI, Yoshio YAHAGI, Nobuyuki SAITO, Michiko

KIZAKI, Chinobu TANIYAMA, Yuko

KOYAMA, Hisako & DAIGO, Mina

目次

- I. 本研究の目的と方法
- II. 調査結果の統計的分析
- III. 調査結果の特定の自由記述の分析
- IV. テキストマイニングを用いた全体的な自由記述の分析

* 武庫川女子大学教育研究所・副所長、教授

** 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士課程後期

*** 大阪芸術大学・特任教授

**** 目白大学・専任講師

1. 本研究の目的と方法

1. 研究の動機

文部科学省は、新教育課程に先駆け、道德教育の抜本的改善・充実に取り組んでいる。その中核に「特別の教科 道德」の設置があり、小学校では2018年度から、中学校では2019年度から全面実施されている。新しい道德教育への移行期にあるこの時期に、学校現場の教師の意見や具体的取組について調査し、教師がその意義を理解し、各学校が主体的に取り組み、意図される効果を上げられるようにするための対策を行うことが求められる。

2. 本研究の目的と方法

本研究は、道德教育の変革期にあるこの3年間（2017～2019年度）の学校現場の対応の実態を明らかにし、学校現場の教職員がより主体的、意欲的に道德教育改善・充実に取り組んでいただけるようにするための提案を行うことを目的とする。

本研究チームでは、第1次全国調査を、「特別の教科 道德」の設置が決定した翌年度の2018年3月に行い、第2次全国調査を、小学校が全面実施された年度の2019年3月に行い、第3次調査を、小学校、中学校ともに全面実施された年度の2020年3月に実施した。今回は第3次の調査の結果を明らかにする。

3. 調査の方法

調査対象校は、第1次、第2次、第3次調査とも同一の学校とした。調査対象校の選定は『全国学校総覧 2017年度』（原書房）より、全国47都道府県の全部の小学校・中学校から、およそ1割の学校を無作為に抽出し、アンケート用紙を送付するという方法を取った。発送学校数は、年度ごとに統廃合校があるため若干の変更がある。第1次調査では、3336校、第2次調査では3331校であった。今回の第3次調査では、3325校であり、回収学校数は1027校。回収率は、30.9%であった。

学校種別および回答者の職別、地域別のサンプルは表の通りである。

調査対象データ1

学校種別

全体	小学校	中学校	小、中一貫校 (義務教育学校)
1027 100%	644 62.7%	362 35.2%	19 1.9%

データ2

職階別

全体	校長	副校長 (教頭)	道德教育推進教師 (道德主任)	教務主任、 研究主任	それら以外
1027 100%	110 10.7%	158 15.4%	669 65.1%	63 6.1%	27 2.6%

(上段：校数 以下同じ)

データ 3

学校の地域別

全体	北海道	東北	関東	甲信越	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄	不明
1027	65	126	225	63	30	83	158	93	57	109	13	5
100%	6.3%	12.3%	21.9%	6.1%	2.9%	8.1%	15.4%	9.1%	5.6%	10.6%	1.3%	0.5%

なお、国・公・私立別学校数を示すと以下の通りである

データ 4

国・公・私立別

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
国立	54 5%	27 4%	27 8%	2 1%	7 5%	10 5%	14 5%	4 4%	10 6%	13 9%	5 4%
公立	886 89%	591 92%	295 82%	220 94%	116 89%	178 94%	248 86%	103 91%	125 80%	128 87%	114 93%
私立	60 6%	23 4%	37 10%	12 5%	7 5%	2 1%	25 9%	6 5%	22 14%	7 5%	3 3%

回答した学校は、小学校が 644 校で 62.7%、中学校が 362 校で 35.2% である。学校の国・公・私立別については、「国立」5%、「公立」89%、「私立」6% である。地域別では、学校数の関係で差はあるが、全国の学校から万遍なく回答されている。

(押谷由夫)

II. 調査結果の統計的分析

1. 各校の道徳教育への対応

(1) 道徳教育推進教師の特徴

表 1

道徳教育推進教師（道徳主任）はどのような先生がなられていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
ベテランの先生	317 32%	219 34%	98 28%	89 38%	26 21%	72 38%	79 28%	39 35%	45 29%	51 35%	33 28%
中堅の先生	517 52%	314 49%	203 57%	103 44%	74 58%	100 53%	155 55%	54 48%	84 54%	68 46%	61 51%
若手の先生	162 16%	107 17%	55 15%	41 18%	27 21%	17 9%	51 18%	19 17%	27 17%	29 20%	26 22%

道徳推進教師は、どのような教師が割り当てられているのかを尋ねると、「ベテラン」と「中堅」の教師が、84% を占めている。2017 年度・2018 年度調査と同様の結果である。「ベテラン」と「中堅」については、地域別では、「北海道・東北」が 91% で一番高

い。「若手」の教師は、「九州・沖縄」が22%で高い。校種別、学校規模、地域別を比較して見ると、おおそ「ベテラン」3割、「中堅」5割、「若手」2割の実態を指摘できる。

(2) 道徳教育を重視している学校の割合

表2

学校経営において道徳教育が重視されていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
重視されている	351 35%	246 38%	105 29%	93 40%	46 36%	69 36%	92 32%	41 36%	46 30%	57 38%	49 40%
まあまあ重視されている	566 57%	346 54%	220 61%	123 52%	68 53%	111 58%	162 56%	61 54%	94 60%	80 53%	62 51%
あまり重視されていない	77 8%	45 7%	32 9%	17 7%	14 11%	10 5%	30 11%	11 10%	14 9%	11 7%	10 8%
重視されていない	8 1%	5 1%	3 1%	2 1%	1 1%	0 0%	3 1%	0 0%	2 1%	2 1%	1 1%

学校経営において、道徳教育が「重視されている」「まあまあ重視されている」と回答した学校が9割である。校種別、学校規模別、地域別にみても、ほぼ同様である。この傾向は、2017年度・2018年度の結果と同じである。この3年間、ずっと道徳教育が重視されてきたことになる。

2. 全体計画について

(1) 道徳教育を推進させるための組織

表3

学校全体で道徳教育を推進するための組織を作っていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
前から作っている	566 59%	348 57%	218 63%	102 45%	90 73%	61 46%	194 71%	53 48%	108 70%	73 50%	67 59%
今年度作った	33 3%	14 2%	19 6%	7 3%	2 2%	6 3%	10 4%	1 1%	7 5%	4 3%	5 4%
作っていない	359 38%	249 41%	110 32%	118 52%	31 25%	89 51%	71 28%	56 51%	39 25%	68 47%	42 37%

道徳教育推進のための組織を作っている学校は、62%である。大規模校（「701名以上」）の組織づくりの方が進んでおり、小規模校（「200人以下」）との差は、27%となっている。小規模校では「作っていない」が5割であるが、学校全体で取り組んでいる割合が高いと考えられる。地域別に見ると、差が大きい。「北海道・東北」「北陸・中部」「中国・四国」の組織づくりが低い。小規模校が多いことが原因とも考えられる。

(2) 全体計画に書かれている内容の達成度

表 4

全体計画に書かれていることがどの程度達成されていると評価できるでしょうか

	原 案														
	だいたい達成されている			まあまあ達成されている			あまり達成されていない			見直しが必要である			全体計画に示していない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 『特別の教科 道徳』の指導	39%	25%	13%	53%	34%	18%	6%	3%	3%	10%	5%	5%	3%	1%	2%
2. 各学年の道徳教育	33%	22%	12%	58%	38%	18%	5%	2%	2%	16%	10%	6%	4%	7%	2%
3. 各学級の道徳教育	34%	23%	13%	53%	31%	15%	6%	4%	3%	7%	7%	7%	3%	0%	1%
4. 各教科の授業に市 じな道徳教育	31%	19%	11%	59%	38%	20%	6%	3%	2%	13%	9%	4%	19%	7%	12%
5. 道徳教育の推進に市 じな道徳教育	11%	8%	3%	53%	37%	16%	30%	16%	13%	27%	17%	20%	8%	5%	3%
6. 特別活動における 道徳教育	12%	9%	3%	65%	39%	21%	21%	12%	9%	11%	27%	20%	5%	3%	2%
7. 総合的な学習の時間 における道徳教育	10%	7%	3%	54%	35%	19%	28%	17%	10%	50%	37%	22%	15%	7%	9%
8. 家庭等における道 徳教育	22%	15%	7%	61%	40%	21%	11%	6%	5%	17%	9%	8%	13%	5%	3%
9. 地域との連携によ る道徳教育	8%	6%	3%	48%	32%	17%	35%	19%	16%	78%	41%	37%	31%	10%	21%
10. 地域目標等による 道徳教育	7%	5%	2%	38%	27%	10%	40%	23%	16%	33%	19%	14%	14%	17%	27%
11. 総合目標等による 道徳教育	22%	16%	9%	59%	39%	20%	13%	7%	9%	37%	23%	15%	9%	3%	9%

全体計画で示している内容について、教育活動のなかでどの程度達成されていると評価できるかを尋ねた。全体で見ると「だいたい達成されている」「まあまあ達成されている」と回答した学校が、45%～93%となっており、項目間で大きな開きがある。

達成の評価が高い項目は、上位から「各学年の道徳教育」93%、「『特別の教科 道徳』の指導」92%、「各学級の道徳教育」91%である。反対に、「あまり達成されていない」「見直しが必要である」の回答が多いのは、「地域との連携による道徳教育」50%、「家庭との連携による道徳教育」44%である。

達成の評価が低い2項目の校種別比較では、中学校の方がいずれも、達成できていないと答えている割合が高い。2018年度結果との比較では、全体に、「あまり達成されていない」と評価した学校が増えている。期待値が上がっているともとらえられる。

(3) 全体計画の見直し（教科化以降）

表 5

「特別の教科 道徳」が実施されて、全体計画の見直しをしましたか

	全体	校種別		学校規模			
		小学校	中学校	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上
行っていない	57 6%	31 5%	26 7%	13 6%	29 6%	12 6%	4 3%
少し行った	203 21%	117 19%	86 24%	45 19%	95 21%	39 21%	27 22%
ある程度行った	322 33%	215 34%	107 30%	76 33%	150 33%	58 31%	45 36%
だいぶん行った	132 13%	84 13%	48 14%	26 11%	63 14%	26 14%	21 17%
全体的に見直した	274 28%	185 29%	89 25%	74 32%	120 26%	54 29%	28 22%

「特別の教科 道徳」が2018年に小学校で、2019年に中学校で全面実施となったことを踏まえて、本調査では、2019年度の実態について、見直しの程度を尋ねた。見直しを「行っていない」のは、6%に過ぎず、反対に「全体的に見直した」のは、28%であった。程度の差こそあれ、9割以上の学校が見直しを行っている。新しい道徳教育に合わせて、改善を図ろうとしている現場の様子が見てとれる。

(4) 各教科等における道徳教育について

表 6

道徳の指導内容項目と関連づけた教育活動を別葉として作成していますか

	全体	校種別		学校規模			
		小学校	中学校	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上
作成しており、よく活用している	135 14%	105 17%	30 9%	37 16%	62 14%	18 10%	18 14%
作成しており、ときどき活用している	373 38%	268 42%	107 31%	80 35%	171 38%	72 38%	55 44%
作成しているが、あまり活用していない	266 27%	156 25%	110 31%	68 29%	123 27%	51 27%	30 24%
作成しているが、ほとんど活用していない	56 6%	34 5%	22 6%	13 6%	26 6%	11 6%	6 5%
作成していない	155 16%	73 12%	82 23%	33 14%	74 16%	37 20%	17 14%

各教科等における道徳教育を具体的に示した別葉を作成している学校は、84%である。「作成していない」学校が16%で、小学校より中学校の方が11%高い。「作成しているが、あまり活用していない」「作成しているが、ほとんど活用していない」が全体で33%

となっている。別葉の作成が定着してきている一方で、活用しきれていないととらえている学校が、3割以上あるということである。

3. 年間指導計画について

(1) 年間指導計画に書いている内容の変化（教科化前との比較）

表 7

「特別の教科道徳」になり、年間指導計画に書かれていることが変わりましたか

	簡略になった			変わらない			詳しくした			以前も今も書いていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 基本的発問	79 6%	48 6%	31 2%	411 43%	279 45%	152 24%	269 28%	167 27%	102 30%	186 19%	128 21%	58 17%
2. 板書計画	57 6%	31 5%	26 2%	366 37%	235 37%	131 38%	185 19%	116 18%	69 20%	372 38%	250 40%	122 35%
3. 事後の指導に関すること	46 5%	26 4%	20 2%	454 47%	304 49%	150 44%	186 19%	113 18%	73 21%	236 29%	184 29%	102 30%
4. 事後の指導に関すること	41 4%	26 4%	15 4%	443 46%	300 48%	149 43%	212 22%	128 20%	84 25%	289 28%	179 28%	97 28%
5. 家庭との連携に関すること	24 3%	16 3%	8 2%	545 57%	345 56%	200 59%	150 16%	113 18%	37 11%	741 25%	145 23%	96 28%
6. 地域との連携に関すること	26 3%	20 3%	6 2%	567 59%	350 58%	208 61%	181 19%	63 10%	32 9%	234 24%	140 23%	94 27%
7. 各教科等との関連について	37 4%	25 4%	12 4%	510 53%	318 53%	192 58%	304 32%	218 35%	88 26%	85 9%	43 7%	47 13%

年間指導計画に書いている内容ごとに、教科化後の変化について尋ねた。「詳しくした」内容は、上位から、「各教科等との関連について」33%、「基本的発問」28%、「事後の指導に関すること」22%となっている。そのうち「各教科等との関連について」は、校種別で大きな差があり、小学校の方が10割高く「詳しくした」と回答している。「板書計画」について「以前も今も書いていない」学校が38%だが、逆に年間指導計画に書いている学校が62%ということになる。「板書計画」を年間指導計画に書いているのは、2017年度（24%）・2018年度（58%）の結果と比較すると、着実に上昇している。

(2) 道徳の教科書以外の教材について（補助教材としても含めて）

表 8

年間指導計画の中に、道徳の教科書の教材以外の教材が、各学年平均して、どの程度入れていますか

	入れていない			1～2教材入れている			3～5教材入れている			5教材以上入れている		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 文部科学省発行の「私たちの道徳」に掲載されている教材	539 54%	375 58%	164 46%	308 31%	171 27%	137 39%	50 5%	28 5%	24 7%	90 9%	59 9%	31 9%
2. 文部科学省で以前に開発された読みぬき教材	716 72%	477 75%	239 67%	230 24%	130 21%	100 28%	20 3%	17 3%	3 1%	13 1%	6 1%	7 2%
3. 都道府県や市町村などで開発された道徳教材	451 45%	260 41%	191 54%	388 39%	287 42%	121 34%	118 12%	88 14%	32 9%	36 4%	24 4%	12 2%
4. 民間が発行する道徳本の教材	879 89%	468 74%	211 58%	134 20%	87 15%	98 28%	35 4%	18 3%	19 5%	77 8%	49 8%	28 8%
5. 学校が独自に開発した教材	736 75%	533 85%	203 52%	504 20%	78 12%	116 33%	36 4%	12 2%	27 8%	15 2%	7 1%	6 2%
6. その他の教材	589 59%	392 91%	197 83%	55 8%	26 6%	29 12%	32 2%	8 1%	8 3%	13 2%	8 2%	5 2%

道徳の教科書の教材以外で、各項目の教材をどの程度入れているか（補助教材としても含めて）について、4段階で尋ねた。小学校、中学校ともに教科書が使われているが、他の教材も使われていることがわかる。『私たちの道徳』は、3割の学校で「1～2教材入れている」と答えており、「6教材以上入れている」学校も1割近くある。また、「都道府県や市町村などで開発された道徳教材」も「1～2教材入れている」学校が39%、「3～5教材入れている」学校が12%となっている。

なお、「学校が独自に開発した教材」を「1～2教材入れている」学校が20%、「3～5教材入れている」学校が4%となっており、どちらも中学校が3倍以上の割合になっている。道徳の授業は、身近な教材を活用することも大切である。各学校の努力をうかがうことができる。今後さらに、「学校が独自に開発した教材」の開発・活用が求められる。

（３）一定期間の道徳授業を振り返る授業の効果

表 9

年間指導計画の中に、道徳の授業全体を振り返るような時間を設けた場合の効果はどうか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
効果的であった	146 15%	61 10%	85 24%
ある程度効果的であった	339 34%	206 32%	133 37%
あまり効果的ではなかった	28 3%	16 3%	12 3%
設けていない	482 48%	355 56%	127 36%

教科化された道徳の授業においては、各時間の学習内容が積み重なって効果を上げていくようにすることが大切である。そのためには、一定期間の道徳授業を振り返る取り組みが必要になる。そのような時間を設けているか、設けている場合はその効果はどうかを尋ねた。結果は、「設けていない」学校が48%。小学校が56%に対し、中学校は36%と大きな開きがある。教科化された意識が中学校のほうが高いのかもしれない。2018年度調査と比較すると、全体ではほとんど変わらないが、中学校で16%減少している。つまり、道徳の授業を振り返る「時間を設けた」学校が、1年間で16%増えているのである。

「時間を設けた」学校のうち、「効果的であった」と答えた学校が約3割、「ある程度効果的であった」と答えた学校が7割近くある（表9では設けていない学校も含めて割合を出しているので、それぞれを2倍にしている）。中学校のほうが、「効果的であった」と答えた学校が小学校の倍近くの割合になっている。

(4) 重点的に指導した内容の効果

表 10

重点的に指導する内容項目について、効果的な指導ができましたか

	全体	校種別		学校規模	
		小学校	中学校	200人 以下	701人 以上
計画的に取組み効果も感じられた	457 46%	304 48%	153 43%	107 46%	61 48%
計画的に取り組んだが、あまり効果的ではなかった	204 21%	131 21%	73 20%	48 21%	30 24%
計画的には取り組めなかったが、効果的だった	178 18%	110 17%	68 19%	47 20%	17 13%
計画的に取り組めなかったし効果も感じられなかった	91 9%	51 8%	40 11%	19 8%	12 9%
行っていない	65 7%	42 7%	23 6%	13 6%	7 6%

重点的に指導する内容項目について尋ねた結果は、「計画的に取組み効果も感じられた」学校が46%、「計画的には取り組めなかったが、効果的だった」が18%で、計64%の学校が「効果的だった」と回答している。校種別・学校規模別においてもそれほど差がない。「行っていない」学校が7%、「計画的に取り組めなかったし効果も感じられなかった」と回答した学校が9%ある。重点的指導は、学校の状況や社会的課題などを考慮して取り組むものであり、より効果的な重点的指導の工夫が求められる。

(5) 2019年度の年間指導計画の見直しについて

表 11

今年度、どの程度年間指導計画を見直しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
見直さなかった	230 23%	132 21%	98 27%
1回見直した	582 58%	415 65%	167 47%
2回見直した	131 13%	75 12%	56 16%
3回以上見直した	55 6%	18 3%	37 10%

2019 年度に年間指導計画を見直したかどうかについて尋ねると、「見直さなかった」が小学校 21%、中学校が 27%、「1 回見直した」が小学校 65%、中学校が 47%となっている。「2 回見直した」は全体で 13%、「3 回以上見直した」は 6 %になっているが、いずれも中学校のほうが高くなっている。2018 年度と比較すると、全体的にほとんど同じような傾向にある。年間指導計画の見直しは、教科書使用前と同様に行われているととらえられる。

(6) 学校全体で道徳の授業に取り組む体制

表 12

今年度、学校全体で道徳の授業に取り組もうとする体制は機能しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
機能したと思う	296 30%	170 27%	126 35%
だいたい機能したと思う	519 52%	332 52%	187 52%
あまり機能しなかったと思う	129 13%	98 15%	31 9%
来年度見直したい	33 3%	26 4%	7 2%
体制ができていない	18 2%	11 2%	7 2%

2017 年度では、「学校全体で取り組む体制ができているか」という問いに、95% の学校が「できている」と回答していた。2018 年度は「体制ができていない」学校は 5 %、2019 年度は 2 %と、ほとんどの学校において、学校全体の体制の中で取り組まれている。なお、2018 年度からは「体制が機能したか」という問いにしたところ、肯定的に「機能したと思う」「だいたい機能したと思う」と回答した学校が 80% であった。2019 年度は、「機能したと思う」「だいたい機能したと思う」と回答した学校が 82% であり、ほとんど変わっていない。学校別でみると、中学校が、「機能したと思う」と回答した学校が 13 校増えている。

(木崎ちのぶ)

4. 「特別の教科 道徳」の授業について

(1) 教科書による授業

表 13

教科書を使うようになって、道徳の授業はしやすくなったように思いますか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変しやすくなったと思う	136 14%	97 15%	41 12%
だいぶんしやすくなったと思う	279 29%	197 31%	82 24%
まあまあしやすくなったと思う	259 27%	162 26%	97 28%
あまり変わらないと思う	224 23%	150 24%	74 21%
少ししにくくなったと思う	58 6%	16 3%	42 12%
だいぶんしにくくなったと思う	20 2%	7 1%	13 4%

「道徳の教科書を使うようになって、道徳の授業がしやすくなったか」という問いに、全体で、「大変しやすくなったと思う」が14%、「だいぶんしやすくなったと思う」が29%、「まあまあしやすくなったと思う」が27%で、肯定的な回答をした学校が全体で70%であった。学校段階別では、小学校は72%、中学校は64%であった。小学校については、2018年度も同じ質問をしたが、ほとんど同じ回答であった。ただし、「大変しやすくなった」が、わずかではあるが3割増えている。

なお、「少ししにくくなったと思う」が、小学校3%に対し中学校は12%、「だいぶんしにくくなったと思う」が、小学校1%に対して中学校は4%になっている。

(2) 教科書の活用

表 14

教科書をどの程度活用しましたか

	活用状況											
	そのまま活用した			少し変えた			ある程度変えた			だいたい変えた		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 学習指導要領の主題等別 (道徳の動きが教科書通りであったかどうか)	303 31%	210 33%	93 28%	415 42%	280 45%	125 35%	158 16%	87 14%	71 20%	118 12%	52 8%	68 18%
2. 教科	818 62%	424 66%	194 55%	303 30%	175 27%	128 36%	60 8%	35 6%	25 7%	15 2%	8 1%	8 3%
3. 教材	575 58%	374 58%	201 57%	342 34%	215 34%	126 35%	63 6%	41 6%	22 6%	16 2%	9 1%	7 2%
4. 授業の進め方	220 22%	147 23%	73 21%	508 51%	337 53%	171 48%	211 21%	123 19%	88 25%	97 6%	38 5%	24 7%
5. 重点的指導	338 39%	269 42%	118 33%	488 47%	293 46%	175 49%	112 11%	61 10%	51 14%	28 3%	12 2%	11 3%

2019年度「教科書をどの程度活用したか」を尋ねた結果は、年間指導計画の主題配列に関わっては、「そのまま活用した」が小学校で33%、中学校で26%であった。「だいぶん変えた」が小学校で8%、中学校で19%であった。使用している教科書を発行している出版社が提供する主題配列をそのまま使うのではなく、7割の学校において、自校に合う形で修正されている。その傾向は中学校のほうが強い。

具体的な修正内容としては、「教材」に関して、小学校が34%、中学校が45%の学校において変えている。「少し変えた」学校がほとんどであり、小学校は全体の27%、中学校は36%であった。「ねらい」は、「変えた」学校が小学校42%、中学校43%となっており、「少し変えている」学校が多い。

また、「授業の進め方」においては、小学校、中学校ともに8割近くの学校において変えており、「少し変えた」が小学校53%、中学校が48%である。「ある程度変えた」学校も、小学校で19%、中学校は25%となっている。

さらに、「重点的指導」においては、小学校で58%、中学校で67%の学校において変えている。「少し変えた」が全体で47%、「ある程度変えた」が11%になっている。指導の時期や、重点的に指導する内容や、実際の授業展開においては、児童生徒の状態や学校・学級の状況に応じて、柔軟に対応しているととらえられる。

(3) 授業について

表 15

貴校の道徳授業を全体的に見て、よくなってきていると感じますか

	回 答											
	かなりよくなっている			だいぶんよくなっている			ほとんど変わっていない			よくなっていると感じない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 修学年の道徳授業 (中学校では1年)	177 18%	105 17%	72 20%	548 55%	430 68%	218 61%	163 16%	100 16%	63 18%	6 1%	2 0%	4 1%
2. 前半年の道徳授業 (中学校では2年)	163 16%	99 16%	64 18%	657 66%	428 67%	229 64%	168 17%	106 17%	62 17%	7 1%	4 1%	3 1%
3. 後半年の道徳授業 (中学校では3年)	157 16%	91 14%	66 19%	542 65%	427 67%	215 60%	184 19%	114 18%	70 20%	11 1%	5 1%	6 2%
4. 事前の指導の工夫	84 9%	48 8%	36 10%	465 47%	296 47%	169 47%	434 44%	286 45%	148 42%	9 1%	5 1%	4 1%
5. 導入の工夫	145 13%	97 16%	48 13%	626 63%	398 63%	228 64%	219 22%	139 22%	80 22%	4 0%	2 0%	2 1%
6. 教材提示の工夫	158 16%	106 17%	52 15%	604 61%	391 62%	213 60%	229 23%	137 22%	92 26%	2 0%	2 0%	0 0%
7. 展開の工夫	159 16%	99 16%	60 17%	633 64%	406 64%	229 63%	197 20%	124 20%	73 20%	5 1%	5 1%	0 0%
8. 終末の工夫	127 13%	77 12%	50 14%	599 60%	382 60%	217 61%	262 26%	174 27%	88 25%	5 1%	3 1%	2 1%
9. 教材の多様性	97 10%	53 8%	44 12%	483 49%	316 50%	167 47%	382 38%	249 39%	133 37%	32 3%	16 3%	14 4%
10. 事後の指導の工夫	81 8%	37 6%	24 7%	486 49%	314 49%	172 49%	433 44%	280 44%	153 43%	11 1%	5 1%	6 2%
11. 板書の工夫	168 17%	121 19%	47 13%	555 56%	379 60%	176 49%	263 27%	134 21%	129 36%	8 1%	2 0%	6 2%
12. 子どもたちへの対応	160 17%	101 16%	54 18%	623 63%	411 65%	212 59%	203 20%	122 19%	81 23%	2 0%	2 0%	0 0%
13. 授業の評価	178 18%	98 16%	80 23%	644 65%	422 67%	222 62%	166 16%	106 17%	49 14%	12 1%	7 1%	5 1%

「貴校の道徳の授業がよくなっていると感じるか」を、授業を充実させるポイントなど13項目にわたって尋ねた。すべてにおいて、「よくなっているとは感じない」という回答が、小学校、中学校ともに1%前後であった。学校現場では、道徳の授業改善に向けて積極的に取り組み、効果も実感されている様子を読み取ることができる。

「ほとんど変わっていない」と感じている学校が多い項目は、まず、「事前の指導の工夫」と「事後の指導の工夫」で、ともに44%であった。小学校、中学校ともほぼ同じ割合である。次が、「教材の多様性」で38%。ここでも小学校、中学校ともにほぼ同じ割合である。事前指導の工夫や事後指導の工夫、教材の多様性については、道徳の授業を充実させる大きなポイントであり、より意識的に取り組んでいく必要がある。

なお、これら以外の項目については、「ほとんど変わっていない」と回答した学校は少ないが、「かなりよくなっている」と回答した学校は15～18%である。さらにこれらの項目についても、より効果的な指導ができるように取り組んでいく必要がある。また、小学校と、中学校を比較すると、「板書の工夫」については、「かなりよくなっている」と回答した学校では、中学校が小学校より6%低くなっている。中学校における道徳の授業改善の大きなポイントといえそうである。

(4) 授業についての効果

表 16

次のような道徳の授業について、どの程度効果を感じていますか

	回 答								
	効果を感じている			まあまあ効果を感じる			あまり効果を感じない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 登場人物への自我関与が中心の授業	250 26%	174 28%	76 22%	642 66%	408 65%	234 67%	83 9%	46 7%	37 11%
2. 問題解決的な授業	261 27%	166 26%	95 27%	616 63%	404 64%	212 61%	101 10%	59 9%	42 12%
3. 道徳的行為に関する体験的な授業	210 22%	127 21%	83 25%	584 62%	391 64%	193 58%	148 16%	91 15%	57 17%
4. 各教科との関連を重視した授業	76 8%	59 10%	17 6%	502 55%	374 61%	128 42%	341 37%	184 30%	157 52%
5. 学級活動との関連を重視した授業	181 19%	113 18%	68 20%	631 66%	424 68%	207 61%	150 16%	87 14%	63 19%
6. 学校行事との関連を重視した授業	225 23%	138 22%	87 25%	603 62%	394 63%	209 60%	143 15%	91 15%	52 15%
7. 総合的な学習の時間との関連を重視した授業	124 13%	82 13%	42 13%	539 58%	357 58%	182 56%	271 29%	172 28%	99 31%
8. 学級経営との関連を重視した授業	255 26%	187 30%	68 20%	606 62%	390 62%	216 63%	112 12%	55 9%	57 17%
9. 日常生活との関連を重視した授業	296 31%	205 33%	91 27%	598 62%	379 60%	219 64%	77 8%	45 7%	32 9%

道徳の授業について、様々な方法が提案されているが、その効果を9項目にわたって尋ねた。まず、「道徳教育にかかわる評価等の在り方に関する専門家会議」の報告に添付された「道徳科における質の高い多様な指導方法について」で提案された3つの学習について見てみると、「登場人物への自我関与が中心の授業」は、小学校で93%の学校が、中学校では89%の学校で「効果を感じる」「まあまあ効果を感じる」と回答している。「問題解決的な授業」は、小学校が90%、中学校が88%、「道徳的行為に関する体験的な授業」は、小学校が85%、中学校が83%の学校において何らかの効果を感じている。

また、学校全体で取り組む道徳教育の要の役割を果たすのに大切な、様々な教育活動や日常生活と関連を図る指導については、次のような結果になっている。最もよく効果を感じているのは、「日常生活との関連を重視した授業」である。小学校で93%、中学校で91%の学校で「効果を感じている」「まあまあ効果を感じている」と回答している。「学級経営との関連を重視した授業」でも、小学校で92%、中学校で83%であった。

逆に、これからの課題としてとらえられるのは「各教科との関連を重視した授業」である。「効果を感じている」「まあまあ効果を感じている」と回答した学校は、小学校で71%、中学校で48%である。教科担任制をとる中学校では難しい点が多くあるが、まずは自分の担当する科目と連携することが考えられる。「特別の教科道徳」が道徳教育の要としての役割を果たすためには、各教科との関連をいかに図るかが大きな課題であるといえよう。

「学級活動との関連を重視した授業」では、何らかの効果を感じている学校が、小学校で86%、中学校で81%。「学校行事との関連を重視した授業」は、小学校が85%、中学校が85%。「総合的な学習の時間との関連を重視した授業」は、小学校71%、中学校が69%となっている。これらは小学校と中学校の差がほとんどない。特に「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通してよりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力」を養うことを目標とする総合的な学習の時間との関連を重視した授業を、一層取り組む必要がある。

(5) 道徳ノート、道徳ファイル、指導用のノート等の効果

表 17

道徳ノートは効果的でしたか

1. 道徳ノート	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	152 15%	99 16%	53 15%
ある程度効果的であった	325 33%	238 38%	87 25%
少しは効果的であった	84 9%	50 8%	34 10%
改善を必要とする	42 4%	28 4%	14 4%
持たせていない	383 39%	219 35%	164 47%

表 18

道徳ファイルは効果的でしたか

2. 道徳ファイル	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	126 13%	74 12%	52 15%
ある程度効果的であった	357 36%	229 36%	128 36%
少しは効果的であった	117 12%	64 10%	53 15%
改善を必要とする	28 3%	16 3%	12 3%
持たせていない	359 36%	252 40%	107 30%

道徳ノートと道徳ファイルの効果について尋ねた。道徳ノートは、「持たせていない」という回答が小学校 35%、中学校 47%であった。持たせれば、「大変効果的」「ある程度効果的」「少しは効果的」という回答が小学校 62%（2018 年度 67%）、中学校 50%（2018 年度 40%）となっている（「持たせている」学校のみで評価を計算すると、それぞれの割合がさらに高くなる）。道徳ノートを持たせて活用の仕方を工夫していくことが求められる。

道徳ファイルについても同様に、「持たせていない」という回答が小学校 40%、中学校 30%であった。持たせれば、「大変効果的」「ある程度効果的」「少しは効果的」という回答が小学校 58%（2018 年度 48%）、中学校 66%（2018 年度 51%）となっている（道徳ノートと同様に、「持たせている」学校のみで評価を計算すると、それぞれの割合がさらに高くなる）。道徳ファイルの方が活用されやすい傾向がみられる。特に、中学校では、様々な資料を配布して授業をし、それらを綴じていくという方法がとられているのではないかと考えられる。

表 19

道徳教育の重点的指導用のノートかファイル（冊子も含む）は効果的でしたか

3. 重点的指導用のノートかファイル	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	45 5%	27 4%	18 5%
ある程度効果的であった	148 15%	97 15%	51 15%
少しは効果的であった	61 6%	38 6%	23 7%
改善を必要とする	23 2%	15 2%	8 2%
持たせていない	703 72%	452 72%	251 72%

道徳教育の重点的指導用ノートやファイルの効果について尋ねた。まず、そのようなノートやファイルを「持たせていない」という回答が、小・中学校ともに72%であった。持たせている学校においては、「大変効果的」「ある程度効果的」「少しは効果的」という回答が、26%であった（「持たせている」学校のみで評価を計算すると、約3倍の75%近くになる）。道徳教育の重点的指導用のノートやファイルがあれば、より自覚的に、より集中的に道徳学習に取り組むことができる。今後の課題といえよう。

（６）現在使用している教科書についての意見

表 20

現在使用している教科書について、どのような意見をおもちでしょうか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
このままでよい	628 63%	423 66%	205 58%
少し改善してほしい	286 29%	179 28%	107 30%
かなり改善してほしい	63 6%	28 4%	35 10%
大幅に改善してほしい	16 2%	8 1%	8 2%

現在使用している教科書についての意見を尋ねた。「このままでよい」という回答は、小学校66%、中学校58%で、6割である。「少し改善してほしい」は全体で3割、残り1割（小学校では5%）が「かなり改善」「大幅改善」を求めている。9割がおおむね満足しているととらえられる。

なお、改善してほしい点について自由記述で尋ねている。詳細は、自由記述の分析で述べる。

（７）「特別の教科 道徳」の評価について

表 21

「特別の教科道徳」の評価について、今年度どのようにしましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人 以下	701人 以上	北海道・ 東北	関東・ 甲信越	北陸・ 中部	近畿	中国・ 四国	九州・ 沖縄
各学期ごとに行った	426 43%	309 48%	117 33%	99 42%	54 43%	58 31%	167 59%	38 34%	73 47%	48 32%	48 39%
年度末にまとめて行った	496 50%	277 43%	219 61%	118 50%	60 47%	109 57%	105 37%	65 58%	73 47%	88 59%	66 54%
その他	75 8%	54 8%	21 6%	18 8%	13 10%	23 12%	13 5%	10 9%	9 6%	13 9%	8 7%

「特別の教科 道徳」の評価の時期について尋ねた。全体でみると「各学期ごと」が43%、「年度末」が50%、「その他」の回答も8%であった。2018年度の調査で、小学校のみに尋ねたが、今回とほぼ同じ結果であった。

校種別では、小学校は「各学期ごと」が若干多く（48%）、中学校は「年度末」が多い（61%）。学校規模では、200人以下と700人以上で見ると、200人以下の学校の方が、若干ではあるが「年度末」が多い。

地域別では、「各学期ごと」が多いのは、関東・甲信越が59%（「年度末」は37%）、近畿が47%（「年度末」と同数）である。「年度末」が多いのは、北海道・東北や北陸・中部、中国・四国、九州・沖縄で6割近くである。

各教科の評価は学期ごとに行われていることから「特別の教科 道徳」も学期ごとに行うようにすることが求められる。

（８）学校全体での道徳授業研修

表 22

今年度、学校全体で道徳授業の研修をどの程度行いましたか

	全体	校種別		学校規模	
		小学校	中学校	200人以下	701人以上
行っていない	174 18%	137 22%	37 10%	48 21%	30 24%
1～3回行った	683 69%	416 65%	267 75%	149 64%	76 60%
4～6回行った	73 7%	43 7%	30 8%	16 7%	15 12%
7回以上	63 6%	41 6%	22 6%	21 9%	6 5%

学校全体での道徳の授業研修を「行っていない」のは、全体では18%である。学校段階別では小学校が22%、中学校が10%である。2018年度は小学校10%、中学校16%であったものが、大きく逆転している。「特別の教科 道徳」が全面実施されて一年目と二年目の違いが出ているのであろうか。最も多いのは「1～3回行った」で、小学校65%、中学校75%である。学期に1回あるいは夏休みに研修を行うのが一般的かと推測される。2018年度、「4～6回行った」は小学校、中学校ともに14%で、2019年度はともに半減している。大きな課題を指摘できる。

(9) 道徳授業についての話し合い

表 23

各学年や学年段階で、道徳授業の話し合いはどの程度行われていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人 以下	701人 以上	北海道・ 東北	関東・ 甲信越	北陸・ 中部	近畿	中国・ 四国	九州・ 沖縄
よく行われている	161 16%	72 11%	89 25%	35 15%	19 15%	30 16%	43 15%	11 10%	34 22%	25 17%	20 16%
ときどき行われている	530 53%	337 53%	193 54%	106 46%	69 54%	89 47%	156 55%	59 53%	89 57%	75 50%	69 56%
あまり行われていない	219 22%	163 26%	55 16%	59 25%	26 22%	46 24%	62 22%	30 27%	26 17%	32 22%	25 21%
ほとんど行われていない	83 8%	64 10%	19 5%	33 14%	11 9%	24 13%	23 8%	11 10%	6 4%	17 11%	8 7%

では、各学年などで道徳授業の話し合いはどの程度なされているであろうか。2019年度に「よく行われている」「ときどき行われている」と回答した学校が、全体で69%（2018年度は74%、2017年度は61%）であり、2018年度と比べて5%下がっている。しかし、中学校は79%（2018年度は74%）で5%上昇している。地域別では、近畿79%、九州・沖縄71%、関東・甲信越70%と近畿が高い。道徳の授業について、職員室や学年会議で話題になっていることがうかがえるが、「ほとんど行われていない」と回答した学校が、小学校で10%、中学校で5%ある。

5. 道徳教育に関する先生方の意識

(1) 道徳教育に対する先生方の意識

表 24

回答者の勤務する学校における教員の実態についての意識

	回 答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 道徳教育の大切さについて理解している	479 48%	323 50%	156 44%	481 48%	296 46%	185 52%	35 4%	18 3%	17 5%	4 0%	4 1%	0 0%
2. 道徳教育の目標について理解している	296 30%	200 31%	96 27%	598 60%	386 60%	212 59%	96 10%	48 8%	48 13%	9 1%	6 1%	3 1%
3. 「特別の教科 道徳」の大切さについて理解している	398 40%	273 43%	125 35%	536 54%	329 52%	207 58%	56 6%	32 5%	24 7%	8 1%	5 1%	3 1%
4. 「特別の教科 道徳」の目標について理解している	252 25%	180 28%	72 20%	629 63%	399 62%	230 64%	109 11%	55 9%	54 15%	8 1%	5 1%	3 1%
5. 「特別の教科 道徳」の指導方法について理解している	202 20%	132 21%	70 20%	653 65%	420 66%	233 65%	134 13%	82 13%	52 15%	10 1%	6 1%	4 1%
6. 「特別の教科 道徳」の評価について理解している	190 19%	122 19%	68 19%	624 63%	410 64%	214 60%	167 17%	99 16%	68 19%	18 2%	9 1%	9 3%
7. 道徳教育に熱心な教師が多い	171 17%	109 17%	62 17%	561 56%	376 59%	185 52%	248 25%	142 22%	106 30%	18 2%	12 2%	6 2%
8. 道徳の授業に熱心な教師が多い	163 16%	103 16%	60 17%	543 55%	368 58%	175 49%	273 27%	157 24%	116 32%	18 2%	11 2%	7 2%
9. 道徳教育は自分自身のことでもあると思っている教師が多い	121 12%	81 13%	40 11%	515 52%	341 54%	174 49%	330 33%	195 31%	135 38%	24 2%	15 2%	9 3%
10. 道徳の授業を楽しんでいる教師が多い	71 7%	44 7%	27 8%	404 41%	286 45%	118 33%	482 49%	285 45%	197 55%	36 4%	21 3%	15 4%

次に、回答している先生から見た、勤務している学校の教員の道徳教育に対する意識について、尋ねた。「道徳教育の大切さ」「道徳教育の目標」「『特別の教科 道徳』の大切さ」「『特別の教科 道徳』の目標」「『特別の教科 道徳』の指導方法」については、理解している（「そう思う」「だいたいそう思う」）が95%～86%である。「評価についての理解」は、「あまり思わない」が17%で、2018年度25%であったのが8%少なくなっており、理解が進んでいるととらえられる。これらの項目は、小学校と中学校でほとんど同じような傾向にある。

しかし、「道徳の授業に熱心な教師が多い」については、「あまり思わない」「ほとんど思わない」が全体で29%、小学校では26%、中学校では34%であった。「授業を楽しんでいる教師が多い」は、「あまり思わない」「ほとんど思わない」が全体で53%、小学校では48%、中学校では59%であった。小学校と中学校で比較すると、中学校の方がいずれも10%前後高い。道徳の授業に熱心なあまり、授業が楽しめなくなっていることも考えられる。どうすれば道徳の授業を楽しくできるかを考えながら、授業の展開を熱心に考えるという姿勢が求められる。

「道徳教育は自分自身のことであると思っている教師が多い」に対し、64%が肯定的に回答している（2018年度63%であり、ほとんど変わらない）。道徳教育は、子どもの課題であると同時に、大人の課題でもある。自分自身の道徳教育でもあるという認識で、児童生徒とともに取り組んでいく心構えが求められる。

（2）教師から見た家庭や地域の人々への意識

表 25

先生から見て、この1年を振り返って家庭や地域の様子はいかがですか

	回 答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 子どもの道徳教育に関心・熱心な保護者が多くなった	27	17	5	220	188	51	878	398	230	172	53	89
	2%	3%	1%	22%	27%	14%	63%	63%	65%	12%	8%	19%
2. 子どもの道徳教育について熱心な地域の人たちが多くなった	20	15	5	193	157	36	830	897	238	151	68	23
	2%	2%	1%	19%	25%	10%	63%	62%	65%	15%	11%	23%
3. 地域の人たちの協力が得られるようになった	26	37	9	248	188	60	846	336	210	151	64	87
	5%	6%	3%	25%	31%	14%	55%	53%	58%	15%	10%	24%
4. 保護者の協力が得られるようになった	33	27	6	297	226	71	528	828	200	181	53	78
	3%	4%	2%	30%	36%	20%	55%	52%	56%	13%	8%	22%

回答している先生から見た家庭や地域の人々の意識について尋ねた結果を見ると、「子どもの道徳教育に熱心な保護者が多い」では、否定的に答えた先生が小学校71%（2018年度56%、2017年度53%）、中学校は84%（2018年度72%、2017年度61%）で、大幅に増えていっている。家庭では、いろいろな考えをもつ保護者に育てられており、それぞれの家庭において何らかの道徳教育が行われている。それらを大切にしながら、共に生きるという視点から学校で学ぶ道徳教育と関連を図っていくことが求められる。

また、「地域の人たちの協力が得られている」や「保護者の協力が得られている」については、肯定的に答えた回答者は3割である（2018年度は5～6割）。2018年度と比べて大幅に減少している要因として、学校側の要求や期待が高まっていることも挙げられるかもしれないが、大きな課題である。学校の取り組みを保護者や地域の人々にわかるように広報活動を工夫したり、保護者参観などに道徳のノートを見せて、心を豊かに育んでいる様子を伝えたりすることなどを工夫して、保護者や地域の人々が自発的に協力したいと思える状況を創っていくことが求められるといえよう。

（３）「特別の教科 道徳」になったことについての意識

表 26

「特別の教科道徳」になったことについて、どう思いますか

	全体	校種別		地域の環境	
		小学校	中学校	農山漁村	近郊・新興住宅地
よかったと思う	316 32%	215 34%	101 29%	126 31%	149 30%
まあまあよかったと思う	440 45%	278 44%	162 46%	185 45%	228 46%
あまりよかったとは思わない	180 18%	111 18%	69 20%	78 19%	95 19%
よかったとは思わない	46 5%	24 4%	22 6%	20 5%	23 5%

道徳が教科化になったことについてどう思うかを尋ねた。「よかった」「まあまあよかった」という肯定的回答が、全体で77%であり、小学校では78%、中学校では75%であった。地域環境で比較すると、農山漁村にある学校と、近郊・新興住宅地にある学校とでは、ほとんど差がなかった。ほぼ4分の1の先生において道徳の教科化に否定的であるということを、今後の課題として真剣に考える必要がある。自分の考えを聞いてもらえる道徳の授業は好きだという子どもたちも多い。子どもたちの言動が変わってくると手ごたえがあり、毎週授業をすることへの負担感が、期待感に変わるのではないだろうか。

なお、この問いに対する自由記述については、後ほど詳しく見ていく。

(4) 教師の道徳教育に対する意識

表 27

道徳教育に対する先生の意識

	回 答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任
1. 道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる	946 96%	97 92%	151 96%	637 96%	61 98%	41 4%	9 9%	6 4%	25 4%	1 2%
2. 教師は、自分の生き方を子どもたちにもっと話すべきだ	910 92%	105 97%	143 91%	605 91%	57 92%	80 8%	3 3%	15 10%	57 9%	5 8%
3. 道徳教育は、他律的な道徳性の育成が前提にあって、自律的な道徳性が高められる	901 92%	98 94%	144 92%	603 92%	56 90%	76 8%	6 6%	13 8%	51 8%	6 10%
4. どのような子どもたちも、学校に來ればしっかりと成長できる	854 87%	93 86%	136 88%	571 87%	52 84%	132 13%	15 14%	19 12%	86 13%	10 16%
5. 学力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	881 90%	95 89%	139 89%	590 90%	57 92%	102 10%	12 11%	17 11%	68 10%	5 8%
6. 体力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	700 71%	80 74%	117 75%	460 70%	43 69%	286 29%	28 26%	39 25%	200 30%	19 31%
7. いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである程度改善される	962 97%	102 94%	155 98%	645 98%	60 97%	27 3%	6 6%	3 2%	16 2%	2 3%
8. 道徳教育を充実させることで教師との連携が深まる	842 85%	99 93%	136 87%	556 84%	51 82%	146 15%	8 8%	21 13%	105 16%	11 18%
9. 道徳教育を充実させることで地域との連携が深まる	802 81%	100 96%	129 82%	523 79%	50 81%	184 19%	7 7%	28 18%	137 21%	12 19%
10. 「特別の教科 道徳」の授業時数を40時間くらいにすると、もっと多様な授業ができる	391 40%	44 41%	72 46%	251 38%	24 39%	894 60%	64 59%	85 54%	407 62%	38 61%
11. 教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	773 79%	79 75%	117 75%	529 80%	48 77%	209 21%	27 26%	39 25%	129 20%	14 23%

次に、回答している先生の道徳教育に関する意識を尋ねた。2018 年度、2017 年度に比べ、どの項目も大幅に肯定的回答が上昇している。特に高いのが「道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる」（2019 年度 96%、2018 年度 91%）や「いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである程度改善される」（2019 年度 97%、2018 年度 85%）である。ほかにも多くの項目が 9 割を超えている。

回答者に注目すると、職階別の回答には、ほとんど差がみられない。道徳と体力との関連については、3 割（2018 年度 5 割）が「そう思わない」と回答しており、2018 年度より 2 割減少している。健康意識の高まりで、体力や健康の維持はよりよく生きることと関連づけられつつあるととらえることもできるのではないか。道徳の授業を年間 40 時間するという意見については、否定的な回答が 6 割（2018 年度 8 割）で、ここでも 2 割減少している。これも、道徳の授業の大切さを実感されている先生方の意識が反映しているとも考えられる。副校長（教頭）の肯定的な回答が高いので、将来校長になられたときに道徳の時間数についてもっと柔軟に対応できていくのではないだろうか。教員養成においても、「もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図る」べきだとする意識に対する回

答が、2018 年度は 6 割であったのに、2019 年度は 8 割と大きく伸びている。特に推進教師がそのように考えている傾向がある。道徳教育に関して専門性の高い教員の養成が、大学での教員養成段階から求められているといえよう。

(5) 道徳教育に対する要望

表 28
道徳教育に対する先生の要望

	回 答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任
1. 道徳教育を充実させるための特別予算がほしい	465 47%	62 57%	76 50%	302 45%	23 37%	519 53%	47 43%	76 50%	355 54%	39 63%
2. 道徳教育の指定校を多くしてほしい	196 20%	20 18%	29 19%	142 21%	5 8%	797 80%	89 82%	128 82%	523 79%	57 92%
3. 道徳教育の専門教師を加配してほしい	535 54%	50 46%	81 52%	375 56%	29 47%	458 46%	59 54%	76 48%	290 44%	33 53%
4. 道徳教育研修の機会を多くしてほしい	673 68%	64 59%	89 63%	474 71%	36 58%	319 32%	45 41%	58 37%	190 29%	26 42%
5. 文部科学省は道徳教育の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	665 67%	54 50%	89 57%	481 72%	41 66%	329 33%	55 51%	68 43%	185 28%	21 34%
6. 文部科学省は「特別の教科 道徳」の授業の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	696 70%	59 55%	98 62%	496 75%	43 69%	295 30%	49 43%	59 38%	159 25%	19 31%

これからの道徳教育に対する要望では、道徳教育や「特別の教科 道徳」の授業の進め方についての資料がほしいという要望が 70%（2018 年度 79%）と高い。「研修の機会を多くしてほしい」は、68%（2018 年度 79%）、「特別予算がほしい」は、47%（2018 年度 62%）で、予算や資料等への要望より研修がしたいという傾向にある。しかし、いずれも「そう思う」率は低下している。これらについては、自由記述の内容分析で詳細を見ていく。

（谷山優子）

6. 教師の道徳教育に対する意識の傾向性（因子分析による検討）

教師の道徳教育に対する意識（表 28）について、因子分析による検討を行った。回答している教員が 11 項目の意見についてどう思うか、主因子法による因子分析を行った。3 因子構造が妥当であると考えられ、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。明確な 3 つの因子が得られた。累積寄与率は、48.92 であった。

取り出した 3 因子について、次のように解釈された。第 1 因子は、「道徳教育を充実させれば、学校教育を高めたり育むことができる」「道徳教育を積み重ねていけば、道徳性が高められる」などが密接に関連しており、「道徳教育有効性・道徳性向上因子」と名付けた。第 2 因子は、「道徳教育を充実させることで、地域との連携が深まる」「道徳教育を

充実させることで、家庭との連携が深まる」が密接に関連しており、「地域・家庭連携因子」とした。第3因子は、「教員養成において、もっと道德教育の単位をとれるようにして充実を図るべきだ」「『特別の教科 道德』の授業時数を40時間くらいにすると、もっと多様な授業が工夫できる」が密接に関連しており「制度充実因子」とした。これら3つの因子が、教師の道德教育に対する意識の傾向性の背景にあることが明らかになった。

表 29

教員意識尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

	因子		
	I	II	III
5. 学力の育成は、道德教育を充実させることで高められる	.708	.078	-.014
4. どのような子どもたちも、学校に来ればしっかりと成長できる	.624	-.065	.015
1. 道德の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道德性は高められる	.619	.09	-.051
3. 道德教育は、他律的な道德性の育成が根幹にあって自立的な道德性がはぐくまれる	.612	-.033	-.009
6. 体力の育成は、道德教育を充実させることで高められる	.505	.181	.075
2. 教師は、自分の生き方を子どもたちにもっと話すべきだ	.499	-.111	.098
7. いじめなどの子どもたちの問題行動は、道德教育を充実させることである程度改善される	.418	.288	-.039
8. 道德教育を充実させることで、家庭との連携が深まる	-.035	.967	.006
9. 道德教育を充実させることで、地域との連携が深まる	-.02	.923	.014
10. 「特別の教科道德」の授業時数を40時間くらいにすると、もっと多様な授業が工夫できる	-.066	.071	.715
11. 教員養成において、もっと道德教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	.144	-.06	.526

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 a

a 5 回の反復で回転が収束した。

(木崎ちのぶ)

III. 調査結果の特定の自由記述の分析

(「教科書について」、「『特別の教科 道德』について」)

本調査においては、特定の自由記述を、2カ所をお願いした。それぞれについて、以下その内容を紹介し分析する。

1. 教科書についての意見

まず、教科書についての意見を見てみたい。設問は、「現在使っておられる教科書につ

いて、どのような意見をおもちでしょうか。()内の番号で教えてください。「1 このままでよい」以外の番号を選択された方は、どのようなところを改善してほしいとお考えになられているかをいくつでも結構ですとお書きください。」というものである。

なお、「1 このままでよい」は63%、「2 少し改善してほしい」は29%、「3 かなり改善してほしい」は6%、「4 大幅に改善してほしい」は2%であった。

(1) 教科書そのものについての意見

教科書そのものに対する意見を頻度順に挙げると次の通りである。()内は件数。

- ◆ もっと身近な話題や関心をもてるものを取り上げてほしい (33)
- ◆ 内容が難しい・児童生徒の発達段階に合わせてほしい (31)
- ◆ 教材文の分量を少なくしてほしい・長すぎる (31)
- ◆ 子どもがもっと自分で考えられる教材にしてほしい (18)
- ◆ 内容項目が目立ち過ぎる・価値の押し付けになっている (18)
- ◆ 内容と道徳的価値・ねらい等を合わせてほしい (17)
- ◆ 挿絵のイラストや色彩を工夫してほしい (14)
- ◆ 葛藤のある教材を増やしてほしい (10)
- ◆ もっと多くの教材から選択できるようにしてほしい (8)
- ◆ 教科書に発問や考える視点等を入れないでほしい (7)
- ◆ 学校や地域の実態に即した教材を使わせてほしい (6)
- ◆ 文中に答えが書いていないものを増やしてほしい (5)
- ◆ 動画やDVDが見られるよう工夫してほしい (5)
- ◆ 問題解決的な内容を増やしてほしい (4)
- ◆ 教材数や説明を増やしてほしい (4)
- ◆ ソーシャルスキルの内容を増やしてほしい (3)
- ◆ 子どもがもっと議論できる内容を入れてほしい (3)
- ◆ 教材の並び順を工夫してほしい (3)
- ◆ 家族やいのち等の教材は多様な家庭環境に配慮してほしい (3)
- ◆ 登場人物の名前やカタカナの名前をわかりやすくしてほしい (3)
- ◆ 実在の人物の生き方についての教材を増やしてほしい (3)
- ◆ 内容項目を減らしてほしい (1)
- ◆ もっと多くの教材から選択できるようにしてほしい (1)
- ◆ 誰もが授業ができる内容にしてほしい (1)

以上の意見をまとめると、次のようになる。

- 1) 内容に関心や興味がもてない・児童生徒の実態に合わない・心に響く感動的な教材が少ない等の理由から、教材をもっと児童生徒にとって身近な話題や関心もてる内容を求める意見が多い。
- 2) 特に中学生の教材は一度読んで内容を理解するのが難しい・発達段階に合っていない等の理由から、内容理解がしやすく発達に即した教材を求める意見が多い。
- 3) 特に高学年・中学校の教材文が長いいため考えさせる時間が十分にとれない・取り扱う内容項目が多い等の理由から、教材文を短くしてほしいとの意見が多い。
- 4) 道徳的価値に対して誘導的・押し付け的・教え込み的な感じがある・もっと児童生徒の多様な意見を引き出せるような内容にしてほしいとの意見も比較的多い。
- 5) 葛藤のある教材・問題解決型の教材を求める意見等から、児童生徒がもっと考えを深められる教材を求める意見も比較的多い。
- 6) 教材の内容と道徳的価値やねらいが合致していない・展開が難しい等との理由から、更なる教材の吟味と精選を求める意見も比較的多い。
- 7) 時代背景が古く、児童生徒が理解しにくかったり、内容に入りにくかったりしている・もっと現代的な課題を取り上げてほしい等の理由から、今の児童生徒の実態に即した教材の内容を求める意見も比較的多い。

(2) 指導書に対する意見

指導書に対する意見を多い順に挙げると次のようになる。

- ◆ 発問が児童生徒の考えから離れている・難しい (16)
- ◆ 発問がねらいを意識し過ぎている (11)
- ◆ 一つの教材に様々なバリエーションを持たせた発問や展開がほしい (6)
- ◆ 発問が多すぎる (6)
- ◆ 議論できる発問を載せてほしい (2)
- ◆ 終末では教材から離れて考える発問例や展開例の工夫をしてほしい (2)
- ◆ 児童生徒の考えが深まるような発問を工夫してほしい (1)
- ◆ ねらいと指導がつながるような展開を工夫してほしい (1)
- ◆ 評価に係る児童の反応例をもっと入れてほしい (1)
- ◆ 内面的資質を重点的に育む指導書にしてほしい (1)

これらを整理すると、次のようにまとめられる。

- 1) 指導書の展開に準じて授業を行っている教員の意見として、発問が児童生徒の実態にそぐわない・深まらない・難しい等との理由から、発問の更なる吟味と精選を求める意見が多く見られる。

- 2) 指導書の発問が、ねらいを意識し過ぎるため児童生徒の多様な意見が出にくい・ねらいと発問が合っていない・展開に無理がある・授業の流れが児童生徒の思考の流れに合わない等の理由から、発問がねらいを意識し過ぎていて、児童生徒の思考に合っていないという意見も多く見られる。
- 3) 指導書に一つの展開や発問例を載せるのではなく、様々なバリエーションを考えた指導例を載せてほしいとの意見も比較的多く見られる。
- 4) 指導書の発問の数が多過ぎるとの意見も見られる。
- 5) 終末での教材を離れた展開例や具体的な発問例を求める意見も見られる。
- 6) 議論できる発問・児童生徒の考えが深まる発問・ねらいと展開が一致する発問・評価に係る児童生徒の反応例の掲載・内面的資質を重点的に育む指導書を求める意見も見られる。

(3) 道徳ノート・学習ノート・別冊ノート・ワークシートに対する意見

最後に、道徳ノート・学習ノート・別冊ノート・ワークシートに対する意見としては、次のものがあつた。

- ◆ 道徳ノートやワークシート等が使いづらい (40)
- ◆ ワークシートや教科書への記入欄を工夫してほしい (7)
- ◆ ワークシートがデジタル教科書以外で使えるようにしてほしい (1)
- ◆ 応用がきかない (1)

このような意見をもう少し詳しく見ていくと次のようになる。

「道徳ノートやワークシートの使いづらさ」に寄せられた意見には、「道徳ノートに発問が記載されているため教師が考えた発問と異なる時に使えない」「記入欄のスペースが児童生徒の実態に合わせられない」「道徳ノートに発問が書いてあるため誘導的になる」「書くことが多くて話し合う時間が取られる」「自由記述にした方がよい」「教科書と一体型の学習ノートがよい」等の理由から、全体として道徳ノート等は使いづらいとの意見がかなり多く見られた。

(齋藤道子)

2 「特別の教科 道徳」についての意見

次に、自由記述で意見を求めた設問は、「道徳の時間が『特別の教科 道徳』になったことについて、あなたのご意見をお聞かせください。まず、()内の番号を選んで、その理由を、書いてください。」というものである。なお、「1 よかったと思う」は32%、「2 まあまあよかったと思う」は45%、「3 あまりよかったとは思わない」は

18%、「4 よかったとは思わない」は5%であった。

(1) 断然多い意見

全体の意見を見ると、次の3つの意見が突出している。

- ◆ 評価が難しい・課題がある (159)
- ◆ 教員が道徳や道徳教育を大切に考えるようになった・意識の変化があった (120)
- ◆ 授業の時間数が確保できるようになった・時数が増えた (120)

まず、評価に関する課題を多くの教員が抱えている。この傾向は今後も続くと考えられる。また、道徳教育に対する教員の意識の変化やそれに伴う授業数の確保に対する好意的な意見は、今までの「道徳の時間」における課題が克服されている実態を確認することができる。

(2) 教科化に肯定的な意見

次に、教科化について肯定的にとらえている意見についてまとめると、次のようになる。

- ◆ 授業の質・教師の指導力が向上した・変化した (54)
- ◆ 子どもの意識・道徳性の変化があった (37)
- ◆ 目標・ねらい・評価などが明確になった (33)
- ◆ 教科書ができた・指導がやりやすくなった (26)
- ◆ 年間指導計画がより活用されるようになった (25)
- ◆ 子どもの実態を教師がよくみとれるようになった・把握しようと努力している (21)
- ◆ 授業研修・校内研修・公開授業が増えた、実施しやすくなった (21)
- ◆ 担任やクラスごとの力量差が緩和された・バラツキが減った (11)
- ◆ 評価ができるようになった・評価が入ることで真剣に取り組むようになった (11)
- ◆ 人間理解（人の強さ・弱さ・自己や他者理解など）ができるようになった (10)
- ◆ 保護者との連携がとりやすくなった・理解が得やすくなった (7)

上位3つの意見に次いで多かった意見は、道徳の授業の質に関係する意見であった。道徳の授業や道徳教育を大切にしようとする意識や授業時数の確保が、授業の質や指導力の向上、更に研修の充実に繋がっていると考えられる。

また、「子どもの意識や道徳性の変化」を確認できたことや「人間理解（人の強さ・弱さ・自己や他者理解など）ができるようになった」ことは、授業が順調に行われているということでもある。その大きな要因として、目標・ねらい・評価などが明確になったことや、教科書の使用による指導のしやすさ、年間指導計画のより効果的な活用があるととら

えられる。それらによる教師の授業への姿勢とゆとりが、子どもの実態をしっかりと把握して授業を行うことにつながり、子どもの意識や道徳性の変化へとつながっているのではないかと考えられる。

さらに、保護者との連携もしやすくなったという意見の背景には、保護者が「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の効果を、子どもたちの姿で感じ取っておられることがあるのではないかととも考えられる。

(3) 教科化に否定的な意見や課題についての意見

教科化に対する否定的な意見や課題を指摘する意見として、次のようなものがある。

- ◆ 道徳評価欄が増えるなど、業務が増えた (17)
- ◆ 教科になってもあまり変化が見られない (10)
- ◆ 教科にする意味があったのかわからない (8)
- ◆ 教科としての質・内容についての疑問がある (7)
- ◆ 教科書に課題がある・扱いにくい (7)
- ◆ 熱心に道徳について取り組む教員は増えていない・十分とはいえない (4)
- ◆ 学校の実態と離れてしまっているのではないか (4)
- ◆ 価値の押し付けになっている (3)
- ◆ 授業や指導に自信がもてない (2)
- ◆ 年間 35 時間は長い (2)
- ◆ 現場任せになっている (1)
- ◆ 他の教育課程にしわよせがきている (1)
- ◆ 子どもたちが正解を出そうとしてしまう (1)
- ◆ 教師が授業などの工夫・研究をしなくなった (1)

教科化に否定的な意見としては、指導要録や通知表に記入する「特別の教科 道徳」の評価は、個人内評価による記述方式によることから、どうしても負担感を感じるということである。この部分は、最も多くあった意見である評価に関する悩みと、併せて対応を考える必要がある。また他の記述方式の評価の欄と合わせて調整を図ることも求められる。

また、「教科になってもあまり変化が見られない」「教科にする意味があったのかわからない」「教科としての質や内容に疑問がある」といった意見は、以前の「道徳の時間」のときの実態と比べてであるとも考えられる。「道徳の時間」でも充実していたのに、「教科化する意味があったのかわからない」という意見になっているとも考えられる。「教科書に課題がある」「熱心に取り組む教師が増えていない」などの意見は、むしろ道徳の授業を充実させるという立場からの批判とも考えられる。

その次からの意見は、件数は少ないものの、これからの道徳の授業の改善にとって貴重な意見であるといえる。「学校の実態と離れてしまっているのではないか」や「価値の押し付けになっている」「授業や指導に自信がもてない」「年間 35 時間は長い」「現場任せになっている」「他の教育課程にしわよせがきている」「子どもたちが正解を出そうとしてしまう」「教師が授業などの工夫・研究をしなくなった」といった意見は、これからの大きな検討課題としてとらえられる。学校の実態に応じて、行政の協力も得ながら（チーム学校体制で）、年間指導計画も魅力的なものにし、研修機会も多く設けて教師が自信をもてるようにし、子どもたちが主体的に学べる授業を工夫することが大切である、といったことをポイントとして挙げるができる。

（矢作信行）

IV. テキストマイニングを用いた全体的な自由記述の分析

アンケートでは、今回も道徳教育や「特別の教科 道徳」について、全体にわたって自由に意見を述べてもらう欄を設けている。そこに記述されている内容について、テキストマイニングを用いて分析する。今回も、この技法の代表的なフリーソフトウェアで、現在もバージョンアップを続けている KH Coder を用いる。

また、前回同様、主に 3 種類の基本的な分析を行う。それは、①抽出語リスト、②元の文から検索して「語」の使われ方を確認する KWIC コンコーダンス、そして③抽出語間および外部変数との関連性と強さを確認できる共起ネットワークである。

#	抽出語	品詞/活用	頻度
1	道徳	名詞	292
2	授業	サ変名詞	156
3	思ふ	動詞	149
4	評価	サ変名詞	117
5	教育	サ変名詞	89
6	教科書	名詞	86
7	時間	名詞可能	68
8	教材	名詞	57
9	教師	名詞	56
10	指導	サ変名詞	56
11	学校	名詞	55
12	教員	名詞	53
13	必要	形容動詞	49
14	教科書	名詞	46
15	子ども	名詞	45
16	考える	動詞	44
17	先生	名詞	43
18	感じる	動詞	40
19	大切	形容動詞	38
20	研究	サ変名詞	37
21	研修	サ変名詞	34

図1 2019年度4項目合同抽出語リスト

1. 抽出語リスト（上位 10 語、降順）から読み取れること

まず、どのような語が抽出されているのか、出現回数は何回かを確認する。次に、抽出された上位 10 語がアンケートの各質問項目でどのような意味をもつのかについて推測する。

自由意見の欄は、「1. ぜひ伝えたいこと」「2. 要望」「3. 意見」「4. その他」に分かれている。それぞれの枠に記述されている上位 10 語の中には、共通抽出語が 6 語（「その他」においてのみ 5 語）、各質問項目における独自に存在する抽出語は、質問項目 1 では「時間」「学校」、2 では「研修」、3 では「子ども」「必要」、4 では「担任」である。ここでは、特に、

独自に存在する抽出語について検討する。

※各質問項目 10 位以内において、 は各質問項目にわたる共通抽出語、 は 2018 年度と比較して新出の抽出語、 は各質問項目独自の抽出語

1. ぜひ伝えたいこと

「道徳」「授業」「思う」「教育」「評価」 「時間」「教科」「学校」「教材」「教師」

※「時間」「学校」は、新出語でもある。

2. 要望

「道徳」「授業」「思う」「評価」「指導」 「教育」「教材」「研修」「資料」「教科」

※「資料」とは、「教材」or「映像資料」or 指導資料（教師の指導や評価等の参考となるもの・子どものワークシート）の意味で使われている。

3. 意見

「道徳」「評価」「思う」「授業」「教育」「教科」 「子ども」「必要」「感じる」「教員」

※「子ども」は、新出語でもある。

4. その他

「道徳」「思う」「教科」「授業」「教師」「評価」「教員」「指導」「感じる」「担任」

※「教師」は「道徳教育推進教師」or「教員」、「教員」は「教師」「担任」を含む教職を司る者、「担任」は「学級担任のみが授業をすることに無理がある」という文脈で使われており、新出語でもある。

「時間」という語が含まれている意見は、「週一回の授業を大切にしていきたい」「全学級一斉道徳授業の公開」「教科書の効用」「教科化の効用」「総合的な学習の時間との関連させることの重要性」「時数の確保が難しい」「道徳を検討する学年会を開くための時間や研修の時間確保が必要」「35 時間中に 22 項目の指導にゆとりが必要」「子ども達と向き合う時間的・精神的余裕が必要なので道徳の教科には反対」「〇〇教育が増えすぎ任せっぱなしにされても応える時間がない」等の記述の中で使われている。過重負担がかかっている厳しい学校の状況が述べられている。

「研修」という語が含まれている意見は、2018 年度は、質問 4 項目中 3 項目において上位 10 語の中に「研修」があり、多くの意見が述べられていたが、2019 年度は、「2. 要望」のみに留まっており、件数は減少している。2018 年度は、小学校で研修の効果性について述べられ、中学校では研修を行い全面実施の準備をしているといった、小・中学校共に新しい道徳科に向けて取り組まれている様子が伺われた。2019 年度も小・中学校共に、「授業公開をしながら研修の充実を図っている」「道徳教育や道徳科を充実させることはとても大切なことであり、そのために教員は時間を生み、研修に励んでいるが、研修に費やす時間が限られていることが課題であり、もっと時間がほしい」と、引き続き熱心に

取り組んでいるものの、研修時間の確保の難しさを指摘している。

また、「授業の進め方について、研修の機会が多くあるとよい。実践で悩んでいる教師が多い。」とさらなる研修の機会をもつことを望むと共に、クラス担任の限界を感じている表現もある。また、実施してみて、さらに道徳科の授業の進め方、評価・発問のあり方について悩んだり、大きな負担感を感じたりしている、だから、教科化にはやはり反対と考えている教員もいるという記述もあった。一方、推進していこうとする意見の中では、研修・セミナーの開催・文科省からの指導資料の配信、教科書の充実を強く望む記述が多く見られる。

「子ども」という語が含まれている意見では、「子どもの成長の中でも変化の見えにくい心の部分に大きくかわる内容なので、まずは方向性の共有ができ授業改善を進めつつあることで今年度はよかったと考えている」「大人の生き方そのものが道徳教育だと思い、子どもたちと一緒に自分を見つめ変わっていきたい」「いろいろな意見や考えがあっていいんだという点で子どもたちの多様性を引き出すことができる教科」「子どもの真の成長に繋がるか評価に懸念」「道徳教育を支える教師集団のあり方、限りある時間の中で効果的に道徳科を進めるための資料等の必要性」等について述べられている。

2. 共起ネットワーク（抽出語間）から読み取れること

まず、質問項目と語の共起ネットワーク分析を行った（図 2-1、図 2-2）。その結果、質問 4 項目において共通抽出語が多いこと、上位 10 位以内には入っていない抽出語も、順位を下げていくとどの質問項目にも存在することなど、両年度とも質問 4 項目と抽出語との関わりが大変強いことから、これ以降、4 項目を一括して分析を行う。

4 項目合同で共起ネットワーク分析を行った結果が図 3-1 と図 3-2 である。一般に、共起ネットワーク図では、抽出語数・抽出語間の関連性の強さを円弧の大小及び線の太さで可視化できる。2019 年度における抽出語と抽出語との関連性を 2018 年度と比較しながら分析・考察すると、以下のような 7 つの語群が見られる。

- 1 「道徳教育、道徳科推進における概要」
- 2 「様々な教育内容の対応による負担感」
- 3 「時間確保の必要性」
- 4 「道徳科推進のための研修」
- 5 「道徳科推進の具体的方策」
- 6 「子どもに関わる評価と所見」
- 7 「道徳科・道徳教育への力の入れ方」

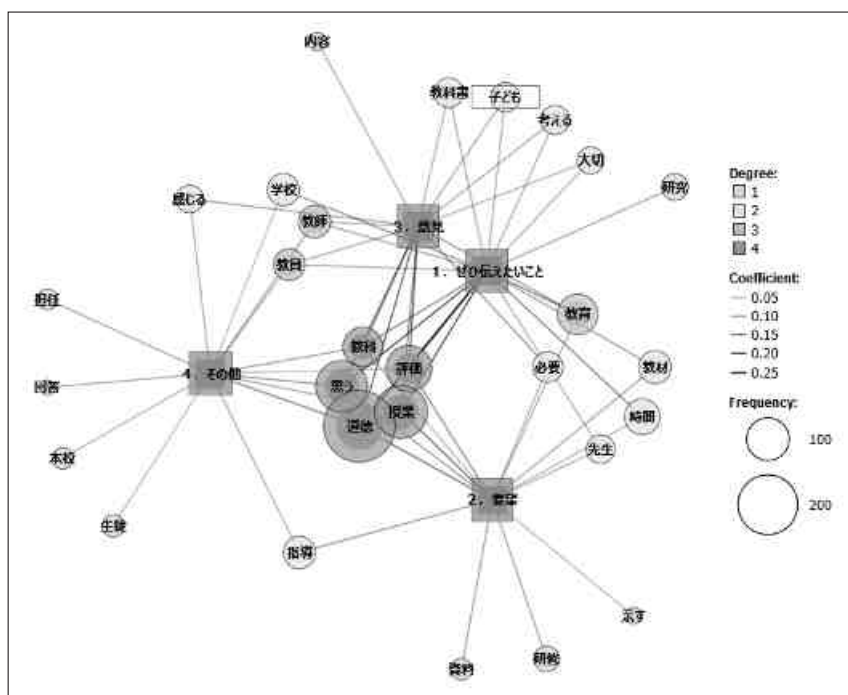


図2-1 2019年度質問項目と語の共起ネットワーク

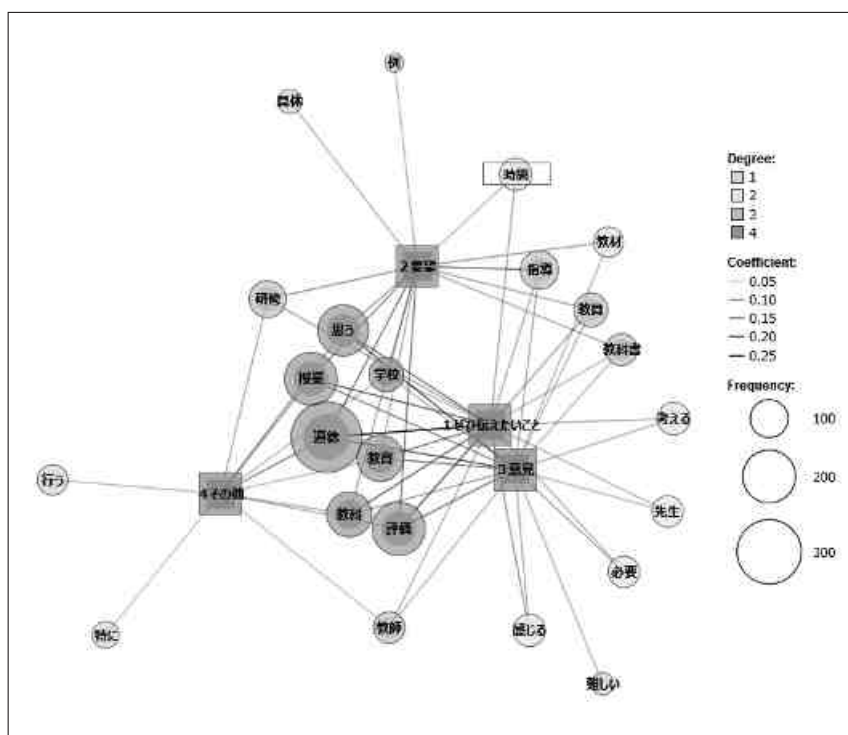


図2-2 2018年度質問項目と語の共起ネットワーク

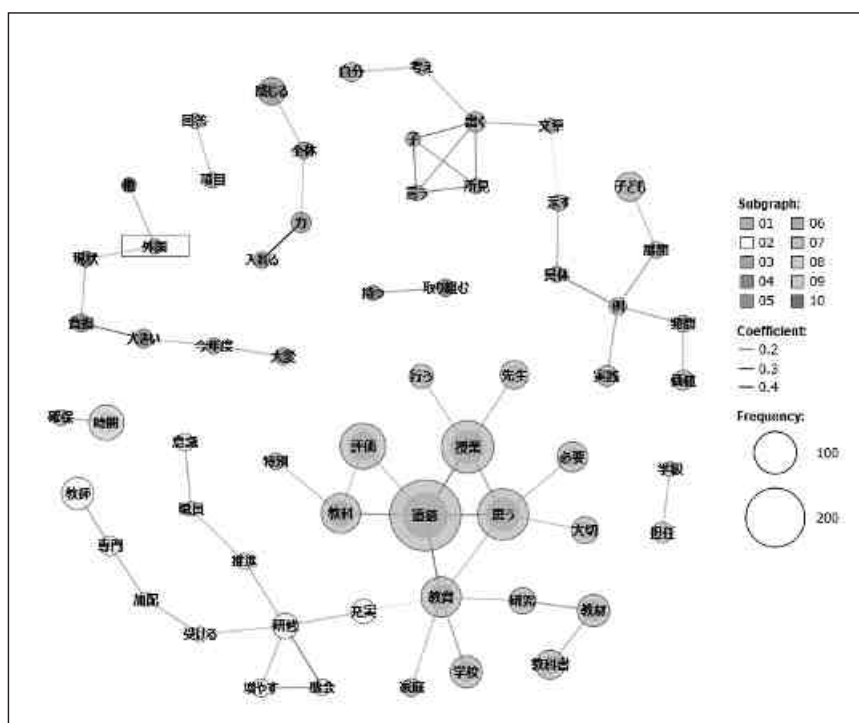


図3-1 2019年度4項目合同共起ネット

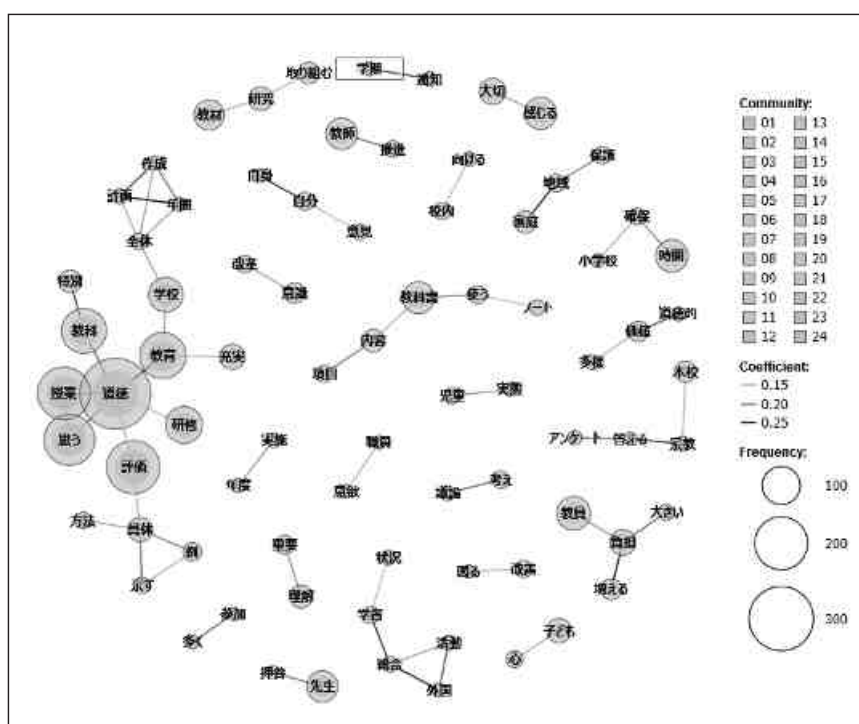


図3-2 2018年度4項目合同共起ネット

2018年度と2019年度には類似した語群が見られる（1～4）が、2019年度では中学校においても全面実施されたことから、回答内容により具体性が見られる（5～7）。

1の「道徳教育、道徳科推進における概要」では、抽出語リスト上位10位の内、特に6つの共通抽出語がその中心に位置している。2018年度では中心に位置していた『研修』が、2019年度では中心から離れ、より具体性を帯び、別の語群4を作っているところに変化が見られる。元の文章で見ると「放課後の多くの時間を使って、教材研究・評価の研修を進めている」「道徳の授業づくりを通して教師が互いに良き研修を行えている」「地方の教員にも文科省の研修を受けられる機会がほしい」と、小・中共に熱心な取り組みや要望が見られる。

一方、2、3にも関連するが、道徳・外国語・特別支援・IT等、新しい教育内容が次々と現場に求められ、大きな負担を強いられている状況が多く語られている。「移行期間は研修が充実していたが、現在では減少している」という状況もあることを踏まえ、今後も道徳教育の充実のために、教員の負担軽減のための予算と加配、時間の確保を要望する声も多く挙がっている。

5～7にも、元の文章で見ると、小・中学校における実践を通しての願いや思い、また不安も記述されている。

5では、「子どもは道徳が好き」「道徳科は子どもの変容を見る上で大切な教科、多様性を引き出せる」「子どもの心が動く授業でありたい」「子どもの実践意欲が増してきている」という肯定的な思いから、よりよい授業の実現のために、「力のある教材」「展開方法等多くの実践例」「発問の後の問い直しの具体例」を多く知りたいという強い要望が見られる。

6では、「もし自分だったらと考える問題解決型の授業で自分とは違う多様な考えを受け止める資質を育てていく」という思いや「考えや思いを書いたり発表したりする子はある程度見取ることができるが、表出しない子の変容を見取るのが難しい」という、実践から来る悩みが見られる。さらに、「行動の所見をはじめ、通知表で記入しなければならないことが多すぎる」ことから、「教科化されたことにより、教師の意識が授業づくりから評価としての通知表、評価文章がどうあるべきかということにシフトされている」ことを懸念する記述もみられる。

7では、「今年度公開研究会で最も集客したのは道徳科だった。しかし、道徳科研究部の教員は1名。主要教科に比べたら力の入れ方が弱いことは明らか。管理職の考えにもよるが、教育界全体で（特に管理職層での）道徳科への力のかけ方の弱さを感じる。」という研修の必要性和対応のずれを感じている記述がある。このことを含め、「移行期間は研修が充実していたが、現在では減少している」という記述や、質問4項目中3項目において「研修」という抽出語が上位10位以内から消えたことは気になる。スタートしたばかり

りで各校の研修が軽減されることは、避けなければならない。2019 年度では、2018 年度より今後進めるべき研修の内容（展開の工夫・評価の具体例・学びの姿の共有・学習課題と中心発問との関連）等、積極的な実践を伴ったより具体的な考えが示されていることは、心強く思われる。

3. 共起ネットワーク（関連語検索）から読み取れること

①の「道德教育、道德科推進についての概観」において中心となる抽出語「道德」に一番強く関係しているのは、「授業」「評価」である。ここでは、この2つの抽出語を取り上げ関連語検索を行い、内容の把握を試みた。

(1)『授業』について

『授業』では、大きく7つの語群ができた。

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1 は、授業の「必要性」と「担任」について | 2 は、授業に対する教師の「意識」 |
| 3 は、「加配」の要望 | 4 は、「教科書」を使ってみて |
| 5 は、授業の「大切」さとその「方法」 | 6 は、「発問」等について |
| 7 は、子どもの心の育ちに関わって | 8 は、「教材研究」するための時間の確保 |

ここには、『授業』にかかわる現場の率直な思いが見られる。

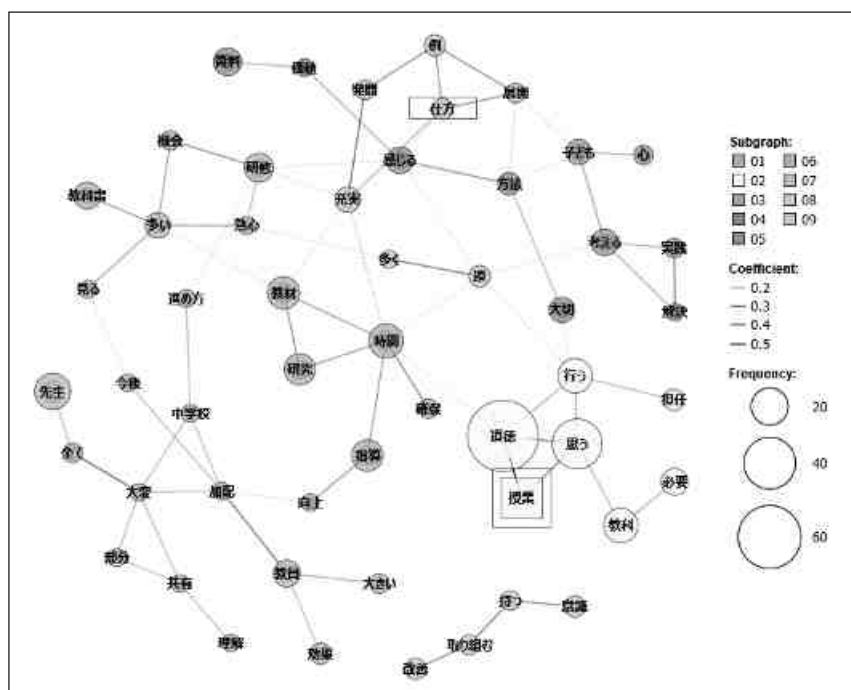


図4 2019年度関連語検索「授業」の共起ネットワーク

語群1には、『授業』の関連語である「必要」「担任」というキーワードが存在する。

まず「必要」の語が書かれている元の文章を見ると、「道德教育は教育活動に大変必要」だからこそ、担任には「時間的精神的な余裕が必要」であるという思いが伺える。同様に、多忙となる「授業改善は必要だが、(通知表等の)評価は必要ではない」、推進するならば「道德科専門教師(加配)が必要」という要望が見られる。

一方、よりよく推進するために「しばらく全員対象で研修を行い、より道德科に対して周知する必要がある」「授業は実施されるようになったが、レベルアップが必要」という。また、担任のみならず、副担・管理職、若手、ベテラン等、立場や経験に関わらず、責任と矜持をもつて取り組んでいる現状を紹介する記述も見られる。

語群2は、小さな語群ではあるが、キーワードが存在している。「もつ」は、関連性・ゆとり・苦手意識・熱意・意欲を「持つ」という記述内容において使用されている。「他教科等との関連性を持って道德科を進める」ことの大切さ、「教師にゆとりがあってはじめて新しい取り組みを推進できる」という内容が含まれている。さらに、「意識」は「教科化によってより意識して取り組むようになった」「教えるというより、気づかせるという意識改革を図ってほしい」「苦手意識を持つ先生も少なからずおられるが、多くの先生方が意欲や熱意を持って道德科の授業に取り組んでいることも知っていただきたい」「教科化されたことにより、我々教師の意識が、授業づくりという観点から、評価として通知表や要録に記載する文言、評価文章はどうあるべきかという観点に大きくシフトしたように感じる」といった内容になっており、大変前向きに取り組んでいる先生方の姿があるものの、本来の評価のあり方とは異なる方向に傾斜しているという気付きも見られる。

語群3では、「大変」「加配」「今後」がキーワードとなり、担任だけに負担がかかっている現状から加配によるサポート体制、学校全体としての道德教育推進体制の必要性を述べている。

語群4では「教科書」、語群5では「大切」、語群6では「発問」、語群7では「子ども」、語群8では「時間」がキーワードとなり、『授業』について物語っている。

(2)『評価』について

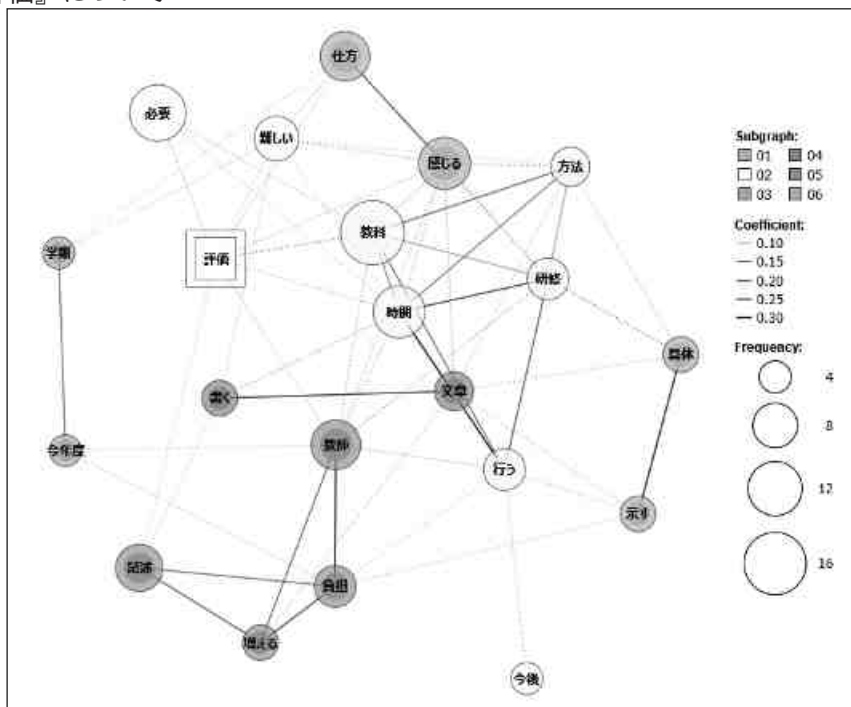


図5 2019年度関連語検索「評価」の共起ネットワーク

次に『評価』について見ていく。各質問項目の抽出語リストを見ると、『評価』は、どの質問項目においても多く抽出される。毎年度、「評価」の必要性については異論が多くある。ここでは、「必要」「感じる」「難しい」「今後」を関連語として挙げることができる。

例えば、「必要」については、『授業』におけるものと同様であるが、ここに位置づけられている「必要」が含まれている意見は「評価については必要でないとの声が多い」「授業改善、評価は必要だが、教科にする必要はない」「評価をするなら、具体的な成績のつけ方を提示し、一定の基準を明記し伝達する必要がある」「評価は必要だが、評価のための評価になっている」という一方で、「スタートしたばかりである。成果と課題はこれから練られていくと思う。1年や2年で判断できるものではない。継続した反省と改善が必要」、さらに、「子どもの変容を丁寧に見れば見るほど、評価（文章記述）に力が入る。時間をどのように生み出すのか、学校組織として考える必要がある」との意見もある。多様な思いや考えが入り混じっている。

「難しい」という語が使われている意見は、「子ども達の道徳心や道徳性を授業のみで見取るのは難しい」「考えや思いを書いたり発表したりする子はある程度見取れるが、表出しない子の変容を見取るのは難しい」「通知表や要録に記述するのに、ほとんどの教師が

苦勞している。教科なので評価するのは当然だが、本人や保護者に伝えるのが難しい」。だから、「評価方法の実践例等、ある程度のテンプレートが必要」「文部省からもう少し具体的な例を示してほしい」「ある程度のガイドラインが必要である」「保護者には具体的な授業の様子がある方が伝わりやすいし、要録には教材や内容項目が載ることはよくない」という部分で、NG の見極めが大変だった。やはり文例が必要、現場の判断に任せると厳しい」という道徳科を推進しているからこそその困惑も見られる。

4. 共起ネットワーク（外部変数と抽出語間）について

次に、共起ネットワークによる分析において、外部変数と抽出語間の関係性を見てみたい。ここでは、外部変数として「回答者の職階」を取り上げる。「道徳に関する抽出語」に、「回答者の職階」がどのようにつながっているのか、換言すると、回答者の立場（1 校長 2 副校長（教頭） 3 道徳教育推進教師（道徳主任） 4 教務主任、研究主任 5 それら以外）による道徳に関する意識の相違が抽出語にどのように反映されるのかについて知ることを目的とする。

図 6 を見ると、2018 年度同様、回答者の職階 1・2・3【校長・副校長（教頭）・道徳教育推進教師（道徳主任）】は、強い共起関係が見られ、職階 4・5【教務主任（研究主任）・それら以外】とは異なっている。しかしながら、2018 年度と比べてすべての職階において共起性が強まっている。当然のことではあるが、道徳教育推進教員（道徳主任）は「道徳」との共起関係をはじめ、「授業」「評価」等、どの抽出語、どの職階とも共起性が強い。道徳教育推進の役割を果たすべく、校長の指針を受け道徳教育推進者として、学校組織の中心に位置していることが見て取れる。

道徳教育（道徳科）推進のために、それぞれの職階において、それぞれが果たすべき役割を果たすことによって、課題は多くあるものの、子どもたちのよりよく生きるための道徳性を育むべく、取り組んでおられるととらえられる。

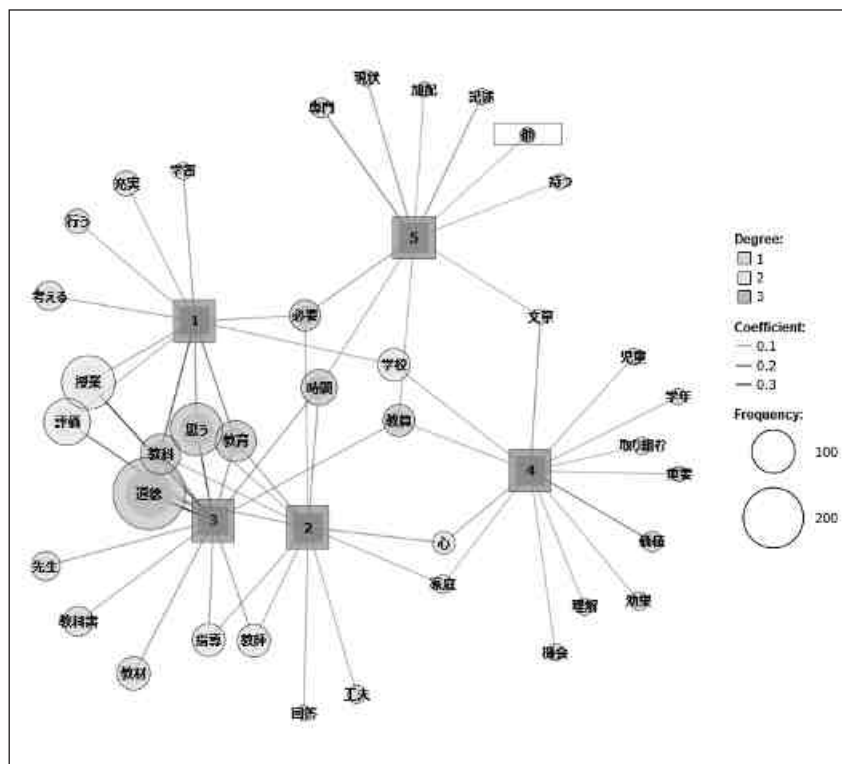


図6 2019年度共起ネットワーク 外部変数「職階」

以上、2019 年度も当該アンケート調査の最後の欄に記された自由記述文について、テキストマイニングを用いて抽出語リストと共起ネットワークをもとに分析し、結果を考察した。当該自由記述から回答者の率直で多様な意識を知ることができた。

『評価』については、今はまだ通知表や指導要録の評価の記述の仕方に関心が向いており、多忙な現場への説明（わかりやすい配信や例示）が必要かと思われる。分析の中でも見られたように、授業にフィードバックするという評価の基本的な在り方に向かえるよう舵を切るべきであるとする。

また、2 共起ネットワーク（抽出語間）から読み取れることの最後に記載した「研修の必要性和対応のずれを感じている」や、「移行期間は研修が充実していたが、現在では減少している」という記述、さらに、質問4項目中3項目から上位10位の中に「研修」という抽出語が消えたこと等が気になる。道徳教育の抜本的改善・充実の中核となる「特別の教科 道徳」が、全面実施され、新しい道徳教育がスタートしたばかりであるのに、早くも研修体制が低下していくようであれば、これから進められる新教育課程による改革も、十分に成果を上げることが難しくなる。これからの教育改革は、世界的な新型コロナウイルス禍への対応や未曾有の科学技術の発達による社会の変化への対応において、「人

間として自分らしくどう生きるか」を正面から問いかける道徳教育の役割がますます大きくなる。道徳教育や道徳の授業についての「研修」は、継続的・発展的に取り組む必要がある。

2019年度の自由意見には、2018年度より今後進めるべき研修の内容（展開の工夫・評価の具体例・学びの姿の共有・学習課題と中心発問との関連）等、積極的な実践を伴ったより具体的な考えが示されていることや「3 共起ネットワーク（外部変数と抽出語間）」の分析における学校の推進体制の活性化の様子を見ると、新しい道徳教育（道徳科）の推進に向けて着実に取り組まれていることが伝わってくる。

そのような研修と実践が継続発展していくためには、教師の働き方改革とも併せて考える必要がある。研究機関等との連携も含めて、今後提案していきたい。

（小山久子）

※ 本研究は、科学研究（課題番号 17H02706）の成果の一部である。

Michael Joseph Di Stasio 嘱託研究員の紹介

Introduction of Michael Joseph Di Stasio
as a Fixed-term Researcher of Institute for Education

教育研究所所長 河合優年 *

Dean of Institute for Education KAWAI, Masatoshi

* 武庫川女子大学教育研究所・所長

Michael Joseph Di Stasio 嘱託研究員の紹介

Introduction of Michael Joseph Di Stasio as a Fixed-term Researcher of Institute for Education

教育研究所所長 河合優年

Dean of Institute for Education KAWAI, Masatoshi

マイケル・ディスタシオ先生は2018年度より、本教育研究所の嘱託研究員となり、日本での研究活動の拠点とし、研究所の『研究レポート』を通じてその研究成果を発表しています。今回でディスタシオ先生の論文は3編になりました。教育研究所では、国際的な教育研究交流を目指して、「国際セミナー」などを開催しております。このような活動を通して、国際的な視野から、子どもの育ちや教育のあり方について議論し、今日の日本の教育を相対的に捉えられればと考えております。

今回、教育研究所の国際的な活動を紹介する意味で、ディスタシオ先生について、前書きのような形で書かせていただきます。ディスタシオ先生は、メルボルン出身のオーストラリア人で、メルボルン大学（The University of Melbourne）を卒業し教育学士号を授与された後、グリフィス大学（Griffith University）において教育学とビジネスの修士号を授与されています。研究領域は、広い意味で子どもの発達と教育ですが、とりわけ“メディアが子どもの発達にどのような影響を及ぼすのか”について、実践活動を含めた研究を行っています。その実践活動内容については、『研究レポート』50号掲載の論文「The Rock Challenge Phenomenon : A Cross-cultural Study into the Effects of Using Arts Projects to Foster the Growth of Self-esteem, Resilience, and Creativity in Children」において紹介と議論がなされました、彼は継続して、イギリス、オーストラリア、カナダ、日本の子どもたちを対象にロックチャレンジ（The Rock Challenge）活動を実施しています。東日本大震災の時は、東北大学教育学部と共同でロックチャレンジを展開しました。

研究活動としましては、メディアというバーチャルな環境が子どもたちにどのような影響を与えているのかを、文献の展望の中で捉えようとしています。2018年の『研究レポート』49号掲載論文「Window on the World (WoW) : A shifting paradigm」において、飛行機の窓から下をみていた子どもが母親に、「グーグルアースみたい」と感想を述べたエピソードを紹介しており、これは子どもたちにとってメディア空間が現実として受け止められていることへの警鐘でもあったと思います。

現在ディスタシオ先生は日本に在住し、“Amphion Loudspeakers”という音響機器販売のインド・アジア・太平洋総支配人として活動するとともに、公立のオーストラリア・ロイヤルメルボルン工科大学（Royal Melbourne Institute of Technology）の非常勤講師として教育活動を続けています。研究については、武庫川女子大学教育研究所を拠点として活動をされています。

2020年度で教育研究所の嘱託研究員として3年目になりますが、どこかで研究成果を講演していただき、大学院生や教員に今日の情報社会について、国際的視点から議論できることを願っています。

Listening Context and Listening Mode: Towards a Unified Approach for Examining the Connection between Music, Emotion, and Mood.

音楽聴取の背景と様式

—音楽、情動、気分の関係进行分析するための統合的方法をめざして—

DI STASIO, Michael J.*

マイケル・ディスタシオ

目次
Abstract
1. Introduction
2. Organized Sound - The Elements of Music
3. Listening Diet - Music Genres
4. Exploring the Music Genre “Trichotomy”
5. Extended Listening
6. Informed Listening
7. Tracking Listening
8. Music for the Screen
9. The Music Video Experience
10. Music Live
11. Sound Engineering
12. Defining Emotion & Mood
13. The Mind of the Listener
14. The Listener Context
15. Listening Mode
16. Music & Cognitive/Perceptual Enhancement Attempts
17. Music & Physiological/Psychological Triggers
18. Discussion
19. Conclusion
References

* Mukogawa Women’s University - Visiting Academic Researcher (嘱託研究員)

アンフィオンスピーカー 極東総支配人

Listening context and listening mode: Towards a unified approach for examining the connection between music, emotion, and mood.

MICHAEL J. DI STASIO, Mukogawa Women's University - Visiting Academic
michaeldistasio@ieee.org
September 29, 2020

ABSTRACT

A comprehensive investigation into music and emotion/mood research models (Eerola & Vuoskoski, 2013)¹ uncovered notable shortfalls in the selection of test instruments (primacy of classical recordings); limitations of testing conditions (clinical, theoretical, or self-reporting); opportunistic choice of test participants (selected out of convenience); and research practice following historical models (scientific or sociological methodologies). This paper sought to address these issues and presented a considered approach to sourcing music stimuli; identified a wider participant cross-section and testing options; and pinpointed the need for the application of a unified, interdisciplinary research method - a model that can integrate music's disciplines, forms, and types of engagement (ie. systematic musicology)² with a human's neural, physiological, behavioural, and expressive elements (ie. psychophysiology):

(Systematic) Musicology today covers all disciplinary approaches to the study of all music in all its manifestations and all its contexts, whether they be physical, acoustic, digital, multimedia, social, sociological, cultural, historical, geographical, ethnological, psychological, physiological, medicinal, pedagogical, therapeutic, or in relation to any other musically relevant discipline or context. (Parncutt, 2007. Ibid.).

Scientific methodologies (biological/neurological) measure *physiological* responses at the expense of *psychoacoustic* responses - an assumption that clinical measurement techniques and algorithmic solutions present an efficient model to classify or explain the relationship between music and emotion/mood. Sociological methodologies (psychological/theoretical) suppose that *symbolic interactionism* or *structural functionalism* in music drives an emotional response and affects mood - an assumption that music is a semiotic system, and its constructs are either reflections of the cultural genre around which that music grew or inherent personality traits - and are imbued with messages and meaning. Therefore, this paper proposed a mixed method analysis to measure the true effect of music manifestations on emotion/mood.

Outlined in this document are four aspects central to performing a critical investigation into music vs emotion/mood: a) the need for clear principles and criteria in the curation of test instruments and test subjects, b) the importance of the listening context (profile, orientation, and acrophase) of respondents, c) the significance of the listening mode (cause-based, semantic-focus, or ambient-type) of respondents in the research process, and d) the recognition of music-induced emotions and their physiological/psychological triggers on respondents is temporal, as music means different things to different people at different times.

This paper annotated key musical stimuli (music elements/genres), examined listening contexts (situational macro-variables), and explored listening modes (cognition/appreciation factors) that impact upon listening experiences using a 5W+1H¹ inquiry method for compilation. Selected historical cases of claimed music-induced emotional responses or behavioural modification, as well as consciously constructed works by composers to elicit emotional responses, were presented side-by-side with theoretical templates used to map emotion/mood.

¹ Eerola, T., and Vuoskoski, J. (2013, February). A Review of Music and Emotion Studies: Approaches, Emotion Models, and Stimuli. In *Music Perception. An interdisciplinary Journal*. Volume 30, Issue 3, pp. 307-340.

² Parncutt, R. (2007, Spring). Systematic musicology and the history and future of western musical scholarship. In *Journal of Interdisciplinary Music Studies*. Volume 1, Issue 1, pp. 1-32.

As music-listening experiences today integrate a substantial visual/interactive component in their consumption, via a proliferation of audio-visual device options (screen music, music video, promotional/commercial contents), a diverse range of samples were also included in the paper's discussion. The general recommendations and conclusions of this paper were that:

- i) in the development-stage of the music/emotion/mood research plan, it is paramount that a *curated menu* of test instruments, applicable across a *representative spectrum of listeners*, and measurable in *varying listening environments*, be created prior to undertaking research.
- ii) using test instruments without a qualifying *listening context* template, and using test procedures without distinguishing *listening mode* foci, will diminish research results. Participant-profiling will determine listening backgrounds/purposes and fine-tune testing.
- iii) via the lens of *systematic musicology* which encompasses all music disciplines, and an integrated quantitative/qualitative data collection and analysis or *mixed method* research model (Creswell & Plano Clark, 2011)³, this will address shortcomings of prior research.

Categories & Subject Descriptors: systemic musicology; music therapy; music psychology; psychoacoustics; physiological response; cognitive penetration/recognition; music semiotics.

General Terms & Key Words: loudness/pitch; timbre/texture; consonance/dissonance; harmonics/resonance; groove/meter; monophony/homophony/polyphony/heterophony.

Additional Key Words: frisson/goosebumps; perception/perspective; familiarity/habituation; acrophase/circadian rhythm; genres/subgenres/microgenres; Mondegreen/McGurk effects.

INTRODUCTION

The composition of participants in music and emotion/mood research has largely been drawn from an easy-to-access field of institute attendees who are investigated in clinical surroundings. While emotion/mood research findings should apply broadly to any human, the absence of a background profile on respondents and their relative familiarity with music, music genre, and music engagement; the conducting of tests outside of the natural contexts of listening in homes, venues, or commuting; and the omission of real-world listening situations in a music study is incongruous with the nature of measuring humans for genuine response.

On Musicians: Clinical research determined that the act of *music performance* (doing)⁴ gave greater emotional cardio-modulation than *music perception* (listening)⁵; that heart rate (HR) and its variability (HRV) were significantly greater during music performance than during music perception. It also indicated that conscious insight of a musically trained listener (incl. recording engineers) can increase the emotional effect of music and vice-versa⁶ via the accumbens nucleus' two neural transmitters - *dopamine* (desire/reward) vs *serotonin* (inhibition/appetite). Additional clinical findings showed that musicians exhibited different patterns of emotion to non-musicians when listening⁷, and that they mentally insert sounds while score-reading or composing or listening⁸.

³ Creswell, J. and Plano Clark, V. (2011). *Designing and conducting mixed methods research*. Sage.

⁴ Burunat, I., Brattico, E., Puolavali, T., Ristaniemi, T., Sams, M. & Tioviainen P. (2015). *Action in Perception: Prominent Visuo-Motor Functional Symmetry in Musicians during Music Listening*. PLoS ONE 10(9): e0138238.

⁵ Francis, P., Furuya, S., Masuko, T., & Nakahara, H., (2011, June). International Journal of psychophysiology 81(3): 152-8. *Performing music can in duce greater modulation of emotion-related psychophysiological responses than listening to music*.

⁶ Schaefer, H. (2017, November). Music-evoked emotions - Current Studies. In *Frontiers in Neuroscience*. 11:600. Retrieved from <https://doi.org/10.3389/fnins.2017.00600>

⁷ Mikutta, C., Maissen, G., Altorfer, A., Strik, W., & Koenig, T. (2014, May 30). Professional musicians listen differently to music. In *Neuroscience*. Volume 268: 102-111

⁸ Bailes, F., Bishop, L., Stephens, C., & Dean, R. (2012, December 3). Mental imagery for musical changes in loudness. In *Frontiers in Psychology*. Retrieved from <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2012.00525>

Musical training leads to sensory and motor neuroplastic changes in the human brain ... suggests that motor training affects music perception. (Burunat et al. 2015. Ibid)

The research found that the musician's brain was wired to process music at a special level. Zatorre and Krumhansl (2003) were able to identify this core neural system. Parallel genetic research also suggested that a predilection for music was a hereditary trait⁹:

Music depends on specific brain circuitry which dissociates itself from processing all other forms of sound including speech, song lyrics. (Zatorre & Krumhansl, 2003¹⁰).

Between *professional musician* and *general listener* is the *music aficionado*, and a test-group often omitted in research. "Mood" is secondary to their listening *raison d'être*.

On Music Aficionados: A *music connoisseur's* listening primacy is with the creative and performative musical effects; artistry/virtuosic skills of the performer; and backstory/details of the composition. They can critique or judge a work against other versions or periods or genres. Listening for them is about absorbing a work in its entirety, rather than cherry-picking music-tracks or forming playlists. An *audiophile's* listening primacy centres on supreme high-fidelity sound reproduction. Audio technologies, components, power-sources, listening space, and collectable recordings define them. Jazz, AOR, and Classical are their preferred genres, as their listening-target is for their sound system to re-produce music as if the artists or band are in the room. From Alan Parsons, Grammy-winning recording engineer: "Audiophiles don't use their equipment to listen to your music. Audiophiles use your music to listen to their equipment."¹¹

On General Listeners: A professional music-work's evolution takes the following pathway: from composer (creation) to performer (interpretation) to studio (manipulation) to stage (live-interaction) or consumer (passive-consumption). Along this continuum, the music's meaning and format have been subjected to inputs by multiple collaborative agents (songwriters, artists, studio-engineers, live-engineers, producers) by the time the final product reaches the listener's ears. On pre/post-release, the effects of commercial marketing (reviews, press, interviews) and peer-group factors (fan-club, social-media, peers) contribute to forming pre-conceptions and perceptions towards the musician and their music ie. listener responses can be pre-shaped by both internal (production) and external (conditioning) forces¹² impacting research implications.

Analogue to Digital: Platforms for music content delivery and consumption have significantly changed with the advent of the Digital Age in the early 21C. Digital music sales¹³ account for over 80% of the music industry's revenue. The disruption to the physical music market (from vinyl/cassette/compact disc to downloading/streaming); the shift in delivery systems (from broadcast to narrowcast to pointcast); the developments in sound technologies (from mono to stereo to high-resolution); and the portability/functionality of devices (from fixed/passive to wired/interactive) have seen a quantum shift in consumption patterns. The sheer volume of content and levels of accessibility, connectivity, and penetration have ramifications on consumption patterns such as purchasing, valuing, interaction, and experience.

In Summary: User-portraits above illustrate three fundamental listener profiles - professional musician/engineer (informed listener), music aficionado (hobbyist listener), or music consumer (generalist listener). Each has subsets of listener-patterns (eg. audiophile: entry-level, hobbyist, hardcore, cult-influencer). Each core-stream or subset-user also engages with music in unique ways. In addition, market forces and new technologies add another layer of consideration for

⁹ Driscoll, M., Bollu, P., & Tadi, P. (2020, July 31). *Neuroanatomy, Nucleus Caudate*. StatPearls Publishing. FL.

¹⁰ Zatorre, R. & Krumhansl, C. (2003, January). *Mental models and musical minds*. Science. 298(5601):2138-9

¹¹ Waldrep, M. (2015, October 1). Real HD-Audio. *Alan Parsons: The Audiophile Mixup*. Retrieved from www.realhd-audio.com/?p=5260

¹² Brown, S. & Volgsten, U. (2006). *Music and manipulation: on the social uses and social control of music*. NY: London. Berghahn Books.

¹³ Routley, N. (2018, October 6). *The visual capitalist: visualizing 40 years of music industry sales*. Retrieved from <https://www.visualcapitalist.com/music-industry-sales/>

research preparation. Therefore, profiling respondents prior to testing is critical to determine that test instruments (genre-materials, playback gear) match their daily environment; and that source-material selection matches user-profile experience - to prevent skewed research results.



Figure 1: Nature or Nurture: Cultural transmission, learning environment, environmental conditioning ... or a hereditary trait? Driscoll, M., Bollu, P., & Tadi, P. (2020 Ibid.) proposed the latter - as evidenced in John Lennon (L.) to Julian Lennon (R.)¹⁴. Julian and his brother Sean followed in the musical footsteps of father, John.

“Too Late For Goodbyes” - Julian Lennon
 Virgin, Charisma JL1 UK 1984 (7" Single)
<https://youtu.be/DewlxVPyz4U>



Figure 2: Cognitive penetrability: To what degree can a cognitive process consciously influence a listener? A father with Alzheimer's gains respite with his son¹⁵, experiencing periods of lucid memory triggered by popular music. First reported therapeutic use of music was in 1789, from which evolved the Field of Music Therapy¹⁶.

“Quando Quando Quando” - Father/Son: Car Karaoke
 Teddy Mac Studios SAM004 2017 (Vinyl LP)
<https://youtu.be/Pf0sFRm5yyI>

The structure of this paper takes the following form:

Organized Sound: Description of music stimuli - in particular, the 7 Elements of Music as the core sonic components, used singly or in combination - and an annotated list of test-aspects used to measure music for emotion/mood response within each element.

Listening Models: A taxonomy of music types - genre, subgenre and microgenre - and a presentation of alternate models and real-world applications of music forms as a source-menu for the development of a fresh approach to test instrument design.

Music and Emotion | Mood: Defining the difference between emotion and mood; examining separate models of emotion and mood; and exploring the core research question of “Does music induce emotion?”

Listening Contexts & Modes: Investigating situations and macro-variables that shape listening experiences - via the 5W+1H lens of “Who?, What?, Where?, When?, Why?, and How?” - and selected historic samples of cognitive/perceptual behaviour enhancement claims.

Discussion and Conclusions: Overview and benchmark-samples of psychological triggers and techniques used by seminal composers to elicit both conscious and unconscious emotion/mood responses, and recommendations on developing a unified research model.

Special Note: Music examples listed in this paper include recording label and catalogue data from the music industry reference site DISCOGS (<https://www.discogs.com>); a reference liner-note for soundtrack insights; and in selected cases, a YouTube cue for music previewing. For maximum auditory/sensory impact, a quality listening environment (acoustically treated room-setting) and high spectral resolution equipment (audiophile-grade playback and speaker system) are recommended.

¹⁴ Morley, R. [Roberta]. (n.d.). *Beatles Sons and Daughters*. [Pinterest post]. Retrieved September 11, 2020.

¹⁵ Carpool Karaoke. (2016, August 5). *Quando Quando Quando | The Songaminute Man*. [Video file]. YouTube. URL <https://youtu.be/Pf0sFRm5yyI>

¹⁶ Howland, K. & Rogers, K. (2016, July). *Music Therapy*. Encyclopedia Britannica. Retrieved from <https://www.britannica.com/topic/music-therapy>

ORGANIZED SOUND - THE ELEMENTS OF MUSIC

The standard clinical approach used to measure and identify causal factors in music-emotion responses has been through the preparation of music stimuli drawn from the fundamental building blocks of music - its seven elements: *Melody, Harmony, Rhythm, Form, Tempo, Dynamics, and Tone Colour*. These sonic elements apply across all historical periods, genres, or cultural styles. Terminology in this paper follows a western music paradigm. Each descriptor below expresses in its simplest sonic form the characteristic of that element and a breakdown of the music test-cues used to generate responses from various clinical trial materials.

Melody: The rise and fall of sound. Experimental trials measured responses to pitch (sound) weight vs pitch range; pitch duration vs pitch induction; audio source vs simultaneous audio/visual (score) recognition; melody vs monotone samples; familiar melodic phrases vs altered melodic phrases; melodic shape variations; continuous vs sectional melodies; theme vs variations (augmentation, diminution, retrograde, sequence, inversion compositional devices); motifs and repetition; counterpoint/canon/fugue recognition and differentiation (simultaneous, multiple melodies in a song) etc.

Harmony: The blending of sound. Experimental trials measured responses to consonance and dissonance; chord progressions; melody v accompanied melody; functional v non-functional harmony; statement v stasis v waiting harmonic frameworks; tonal centres v chromaticism etc.

Rhythm: The distribution of sound-packets (notes) over a period-of-time. Experimental trials measured responses to simple rhythms v complex rhythms; syncopation etc

Form: The shape of a song - commonly recognized as chorus-verse-chorus. It is the song's plan or blueprint. Experimental trials measure recognition of returning phrases or sections; contrasts and variations etc.

Tempo: The speed or speed change in music either expressed as a word or a metronome setting (MM - Malzel's Metronome). Experiments in music-and-emotion measure beat vs no beat; beat vs metre; beat vs shifting beat; speed vs speed change etc.

Dynamics: Graduations of loudness and softness. Experiments in music and emotion in this element measure volume vs volume change; crescendo vs decrescendo; ranging volume change durations; impact of accents and articulations etc.

Tone Colour: The quality of sound which distinguishes one instrument (timbre); or group of instruments (ensemble, band, orchestra texture); or music genre/style, period, or ethno-music culture from another. Also referred to as sound texture, it has four forms - monophony, homophony, polyphony, and heterophony. Measuring for music-and-emotion included testing: tone (sine wave) vs noise (white noise); harmonic series detection (fundamental vs upper-partials); simple tones vs complex vibrations; psychoacoustics phenomena (mood, genre), and synesthesia phenomena (sound produces an inter-sensual results).

NB: Of all music elements, **tone colour** stimuli provided the highest percentage response-rate.

LISTENING DIET - MUSIC GENRES

Researchers in musicology define genre in a more cultural sense. Seminal researcher Philip Tagg (Tagg, P., 1987)¹⁷ classifies music via a trichotomy - *art* (classical/formal) vs *folk* (traditional/world) vs *popular* (mass-media disseminated/commercialized) ie. the notion that music can only be divided into three categories with variants of each described as "styles".

¹⁷ Tagg, P. (1987). *Musicology and the semiotics of popular music*. Semiotica. 66: 1-3. Mouton de Gruyter. Amsterdam.

Franco Fabbri (Fabbri, F. 1981)¹⁸ likens music genres to “events” and describes sub-genres as different “sets” whose construct is determined by the various groups that adhere to them ie. “a set of musical events (real or possible) whose course is governed by a definite set of socially accepted rules”. Further, we see his rule supporting micro-genres too:

The notion of set, both for a genre and for its defining apparatus, means that we can speak of sub-sets like “sub-genres”, and of all the operations foreseen by the theory of sets: in particular a certain “musical event” may be situated in the intersection of two or more genres, and therefore belong to each of these at the same time. For “musical event”, the definition of “music” ... any type of activity performed around any type of event involving sound.

Fabbri further describes the spawning of music genre “variance” as following both a semiotic (symbolism) and codifying (system) process:

Of course, all the rules of genre are semiotic, since they are codes which create a relation between the expression of a musical event and its content. A new genre is not born in an empty space but in a musical system that is already structured. Therefore, a considerable part of the rules that define it are common to other genres already existing within the system, those that individualize new genre being relatively few.

Music-genre maps are visually represented as a “tree” ie. *broad genres* (eg. *Rock, Pop, Jazz, Classical, Folk, Country, Metal* et al) - as the main boughs of the music tree; *subgenres* (eg. *Soft Rock, Hard Rock, Art Rock, Folk Rock, Punk Rock, Glam Rock* et al) - as the branches of the music tree boughs; and *micro-genres* (eg. *Mumble Rap, Chillwave, Acidhouse, Hipster Hop* et al) - as derivatives of sub-genres or the leaves of the music tree. Google’s “big data” algorithm (Figure 3.) sampled albums/artists from the 1950s~Present, representing genres as “streams” changing width to indicate permeance or influence:

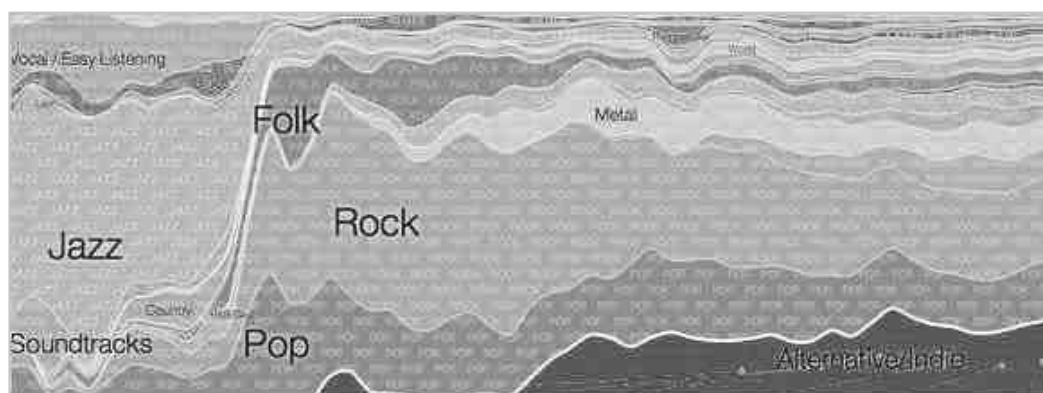


Figure 3. Google Big Picture & Music¹⁹ | Album/Artist Statistics from 1950s ~ Present

General mapping or concept mapping for music genre classification usually takes the form of a pictorial visualization showing interrelationships ie. 2-D infographic or mind-map or genre-tree format to represent a *music genealogy* (Figure 5.). A more effective model is a systematic mapping approach in 3-D format ie. digital, online representation which allows for genre, sub-genre, micro-genre sizing-scale, adjunct genre background information, artist discography, playable track samples, and direct links to similar artists in the genre (Figures 4., 6., and 7.).

¹⁸ Fabbri, F. (1981). *A theory of musical genres: two applications*. Popular Music Perspectives. (ed. D. Horn and P. Tagg; 1982, Göteborg and Exeter: International Association for the Study of Popular Music, p. 52-81)

¹⁹ Big Picture Group | Google Brain (n.d.) *Music Timeline*. Google Research. Retrieved from <http://research.google.com/bigpicture/music/#>

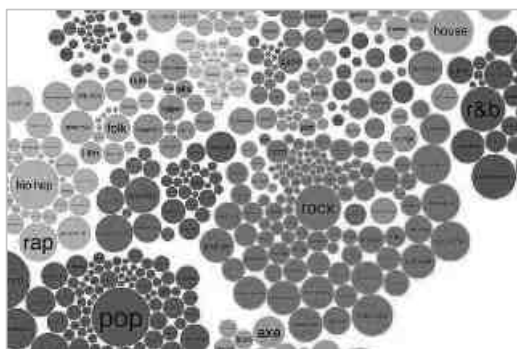


Figure 4. 2-D and 3-D Bubble Mapping²⁰ | AI

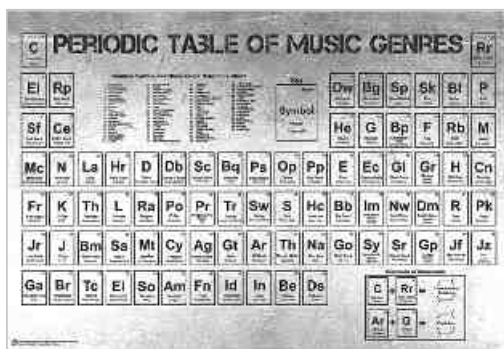


Figure 5. 2-D Periodic Table of Music Genres²¹



Figure 6. 2-D Text - Every Noise²² | Scatterplot AI

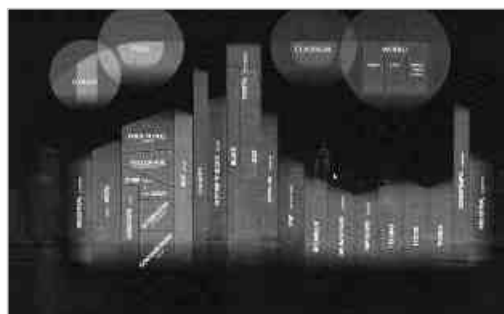


Figure 7. 3-D Musicmap²³ | AI

EXPLORING THE MUSIC GENRE “TRICHOTOMY”

Merging Tagg’s (ibid.) trichotomy of genre streams (art | folk | popular) with Fabbri’s (ibid.) concept of events (genre) and subsets (sub-genres), this musicology-based perspective examined music under its fundamental streams ie. “formal” or classical music (western music systems), “ethnocentric” or folk music (global music forms), and “mass-market” or popular music (distribution and consumerism) and provides a global structure for emotion | mood testing. In this paper, one style from each of these genre streams has been selected to include lauded artists and works of its type - *Art Music*, *World Music*, and *Adult Oriented Rock* (AOR).

ART MUSIC: As with terms *Early Music*, *Medieval*, *Renaissance*, *Baroque*, *Classical*, and *Romantic* periods, Art Music is its own distinct period, and is a form of music inspired by “Art”. Spawned in the Romantic period (Late-19C), the main catalysts for change were wars (WW1, WW2), breakthroughs in science (Einstein & Schrodinger), birth of psychoanalysis (Freud & Jung), new wave paintings/sculptures (Picasso & Rodin), and a new language of music tonality (Debussy & Schoenberg).

Prior to 1900, the principle of organizing pitch around a central tone was the governing music system. For hundreds of years prior to the 20C, composers had created an interrelationship of tones and chords - “tonic would follow dominant” (first and fifth degrees of a scale), and substituting one chord for another created suspense, melancholy, or emotion. “Art” musicians

²⁰ Lamere, P. [Peter] (n.d.). *Music Pop-corn*. [Web]. Spotify for Developers - Web API. Retrieved from <https://developer.spotify.com/community/showcase/music-popcorn/>

²¹ Zapista A. (2019, July 6). *The Periodic Table of Music Genres*. [Poster] Retrieved from <http://www.posterswholesale.com/resize/Shared/Images/Product/Periodic-Table-of-Music-Genres/51519.jpg>

²² McDonald, G. [Glenn] (n.d.). *Every Noise At Once*. [Web] Retrieved from <http://everynoise.com>

²³ Crauwels, C. [Kwinten] (n.d.) *Musimap* | *The Genealogy and History of Popular Music Genres*. [Web] Retrieved from <https://www.musicmap.info/>

of the 20C dispensed with this conventional approach. There was now no hard-and-fast rule for how tones must relate to each other. And with technology advancements in transportation, communication, and recording, 20C composers were able to access a wider range of music for inspiration. Creativity became borderless, and internationalization was a driving force. Music from different continents and cultures was like a painter's palette for the composer of the 20C.

Music reaches our ears in four textural varieties: *monophony* (a single-line), *homophony* (primary-line with backing), *polyphony* (multiple, independent lines), *heterophony* (simultaneous single-line variations). Polyphony - both tonal and atonal - drives the construct of music in this Art period. It is very texture-rich with a convergence of diverse tone-colours and complex harmonies. Below (Figure 8.) are ten critical works from each sub-genre of this period. While some of the pieces featured (especially *Impression*, *Neo-Classicism*, *Folk*, and *Nationalism*) are easier to consume as they fit a tonal "comfort zone", other samples in this sub-genre take time and perseverance to understand. Each contains a liner-note descriptor. Given the complex compositional techniques, rich texture soundscapes, and extended-duration recordings, the Art Music genre is a particularly powerful source-material test instrument field for *music aficionados* - in particular "music connoisseurs" - from which to draw selections.

IMPRESSIONISM: CLAUDE DEBUSSY | "Prelude to Afternoon of a Faun" | Columbia ML 5112
Inspired by a poem. Debussy's most famous work. Changed the course of music composition.

NEO-CLASSICISM: GUSTAV MAHLER | "Symphony No.2" | Decca 325-6
Renowned for large symphonic orchestras, No.2 is one of Mahler's most-loved works.

EXPRESSIONISM: ARNOLD SCHOENBERG | "Five Pieces for Orchestra" | Philips 838 409 AY
A musical-heavyweight. Exponent of the initially divisive, atonal 12-Tone Row Technique.

FOLK | CULTURAL MUSIC: BELA BARTOK | "Romanian Folk Dances" | Deutsche Gram. 415 668-1
Celebrated for his String Quartets, he had a lifelong passion for writing/collating Folk-music.

NATIONALISM: AARON COPLAND | "Fanfare for the Common Man" | Turnabout TV 34169
Inspired by speech of a US VP. His works are a significant part of American national psyche.

SERIALISM: KARLHEINZ STOCKHAUSEN | "Kontakte" | Deutsche Grammophon 138 811
A great name in 20|21C music, but his work was a radical departure from traditional tonality.

MUSIQUE CONCRETE: PIERRE SCHAEFFER | "Apostrophe" | Doxy DOZ401
Approach was to "collect" concrete sounds rather than sounds generated by music notation.

ALEOTORIC | CHANCE MUSIC: JOHN CAGE | "4' 33" | Sonoros Records SON-030
Introduced concept "any sounds constitute music". In this case, audience generated sound.

ELECTRONIC MUSIC: EDGARD VARESE | "Poeme Electronique" | CBS Masterworks MP 38773
Electronic work for playback in a pavilion. Created "noises not considered musical".

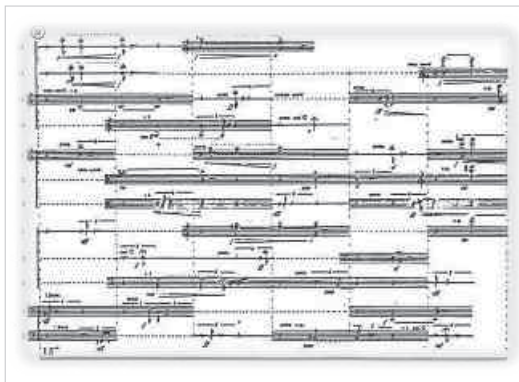
AVANT-GARDE | EXPERIMENTAL: OLIVER MESSIAEN | "Exotic Birds" | Victor VIC-28044
A Composer/Ornithologist - Messiaen combined his two passions: music + birdsong.

Figure 8. Art Music: sub-genre name, composer, liner-note, composition title, and catalogue data

All Art Music is underpinned by a primacy on expressing meaning over form or beauty. Avant Garde or Experimental Music is a powerful music style with which to generate an emotional response. A standout musical experience is "Threnody for the Victims of Hiroshima" (1960)²⁴.

²⁴ Bannach, A. (2013). *An extended analysis of Krsysztof Penderecki's Threnody to the Victims of Hiroshima*. Retrieved from <http://www.anthonybannach.com/uploads/2/1/6/7/21674290/pendereckipaper.pdf>

As human-horrors go, instantaneous mass-destruction is the most extreme. Lauded Polish composer Krsysztof Penderecki sought to represent this great human tragedy through a deeply considered work and in a sonic format that aimed to capture this horrendous moment in time. Penderecki realized that relying on traditional forms of music notation and instrumental performance techniques would fall short in expressing his full idea - hence his annotated and graphical score (Figure 9.). This is a remarkable work, and a pivotal composition of the late 20C with the capacity to draw out strong emotional responses in its listeners, regardless of their music grouping or music background. Using 52 string instruments, and the sonic phenomena of *sonorism* (a focus on timbre, texture, and dynamics elements) Penderecki places us “virtually” in Hiroshima, Japan at 8:15am on August 6, 1945.



“And here an important question arises, whether in the context of modern music's achievements in the field of construction, harmonics and tone quality, the traditional system of notation is still operative. Undoubtedly, this notational system has been most efficient in the time of Mozart, or even Debussy. In relation to the music of that period, it was the most adequate form (then known) of transmitting the composer's idea to the performer. However, music from that time progressed, while the notational system, which, after all, is a par excellence convention, remained.” (Penderecki. Ibid.).

Figure 9. Score Excerpt²⁵: “Threnody to the Victims of Hiroshima” (1960)²⁶ Krsysztof Penderecki.

WORLD MUSIC: This genre-label was first used to define non-Western music in the 1960s. It gained further prominence as a term from the 1980s, and now is applied to “non-English” music. The genre-title's aim appears to bundle the music of the world's cultures (whether indigenous, cultural/folk, cultural/fusion etc) under one heading - ostensibly for the convenience of the music-industry, the media, and the merchandizers (Pachet & Cazaly, 2000)²⁷. However, in the last decade, this classification is now seen as controversial and outdated, and at times, a disparaging and patronizing term. But placing the politics of nomenclature aside, the focus here is purely on the music and its broad range of timbres, rhythms, and capacity to trigger emotion or mood.

The indigenous or traditional music of each country has its own genres and sub-genres eg. South Pacific (*Waita* | Love-songs/Lullabies; *Karanga* | Ceremonial; *Moteatea* | Chants - of Maori-New Zealand) or in the Orient (*Hogaku* | 邦楽 | Country Music; *Gagaku* | 雅楽 | Court Music - of Japan). It is when musical “cross-pollination” or fusions of traditional-and-western styles occur that we see bands appear such as *Ladysmith Black Mambazo* (South Africa), *The Gipsy Kings* (France/Spain), *The Chieftains* (Ireland), and *Buena Vista Social Club* (Cuba) grouped as “World Music” when promoted outside their own native country.

Music & Nations: Each of the world's 235 countries or dependencies has its own national music-identity, regional music-identities, and sub/micro-genres. Additionally, there is a fusion or intermingling of genres across borders (“worldbeat”), and a nation's own millennia-old music (“indigenous”). This provides so many permutations and combinations of musical possibility. The tuning systems, tonality/atonality, timbral qualities, and language variance add even more layers to peel-back to try to understand and absorb their music content.

²⁵ Penderecki, K (1960). *Threnody for the Victims of Hiroshima*. [Score]. Alfred Music. SB00902.

²⁶ Pang, A (1960, June 25). *Twin Peaks 2017 - The atomic bomb (July 16, 1945)*. [Video]. YouTube. URL <https://tinyurl.com/yc07me8x>

²⁷ Pachet, F. and Cazaly, D. (2000, January). *A Taxonomy of musical genres*. Conference: Computer-Assisted Information Retrieval - RIAO 2000, 6th International Conference, France. Proceedings.

Sourcing & Selecting Samples: World Music Festivals (WOMADⁱⁱ), World Music awards (WOMEXⁱⁱⁱ), World radio (public broadcast stations, web-streaming events), and World Charts (Billboard^{iv} World Album Charts), are the most prominent conduits for content and information on current and historical world music artists and music forms. Curating a selection of suitable recordings is challenging, as the genre of World Music is both voluminous and diverse. From steel drums to throat singing to pan-pipes to mbiras, the instrumentation-diversity and timbral variations alone are enormous, as this Mongolian band demonstrates:

Wolf Totem (2018) The HU | Eleven Seven Music ESM-569-1
Integration of traditional instrumentation, Mongolian throat harmony, and fusion with Heavy Metal.

A strategic approach is to collate a “regional” sampling of tracks for sourcing mood/emotion test instruments in this genre. Using the Olympic Games “five rings” concept as a grouping model and sampling a representative artist/band from each of the Games’ “five continents”, this shortlist can generate a sufficient variety of soundscapes for *global representation* as well as *indigenous* vs *internationalized* forms. Selections can be refreshed by choosing alternate countries within a region, or solely focusing on a region’s sound-world. Figure 10. (below) is an application of a five-continents | five nations | five seminal artists sampling approach ie. two versions from or by the same artist/s are provided for a sonic A|B comparison-test.

[A] *original/native* style vs [B] *commercialized/westernized* form ie. the cultural | indigenous identity, followed by its fusion of western popular music (aka “Worldbeat”):

[A] ORIGINAL | NATIVE SOUNDSCAPE

AFRICA **STH AFRICA** | **LADYSMITH BLACK MAMBAZO “Shaka Zulu” (1987)** | Warner 9255821
All male a cappella/choral group with repertoire performed in Zulu dialects

ASIA **JAPAN** | **YOSHIDA BROTHERS “Ibuki” (1999)** | Victor VZCG-161
Traditional Japanese instrumental music (Tohoku area) - using shamisen (tsugaru-jamisen)

EUROPE **FRANCE/ANDALUSIA** | **GIPSY KINGS “Gitana Negra” (1988)** | Sony 88725475882
A fusion of rumba, salsa, and flamenco styles

OCEANIA **AUSTRALIA** | **INDIGENOUS MUSIC** From “Yothu Yindi” band’s **Arnhem Land Region**
Music of northern-Australian indigenous tribes utilizing traditional instruments

AMERICAS **BRAZIL** | **JORGE BEN “Mas Que Nada/Chove Chuva” (1977)** | RCA JD-11092
Fusion of bossa nova, samba, baião, Música Popular Brasileira (MPB) ie. Portuguese language music

[B] COMMERCIALIZED | WESTERNIZED FUSION

AFRICA **SOUTH AFRICA** | **PAUL SIMON • LBM “Graceland” (1986)** | Warner 1-25447
In partnership with Paul Simon (of Simon & Garfunkel) LBM became internationally known

ASIA **JAPAN** | **YOSHIDA BROTHERS “Rising” (2005)** | Sony Records SRCL-5866
Fusion of western and traditional instruments (percussive shamisen with electrophones)

EUROPE **FRANCE/ANDALUSIA** | **GIPSY KINGS “Bamboleo” (1987)** | P.E.M. GK 001
Fusion of rumba-flamenca with pop styles

OCEANIA **AUSTRALIA** | **YOTHU YINDI “Treaty” (1991)** | Mushroom K10344
Aborigine and non-Aborigine member band fusing indigenous/western sounds and themes

AMERICAS **BRAZIL** | **SERGIO MENDES “Mas Que Nada” (1966)** | A&M TOP-1095
Bossa nova, jazz, Latin, funk crossover music strongly influenced by Brazilian rhythms

Figure 10. World Music test-instrument curated track samples, label data, and video reference.

AOR: The "AOR" acronym can be a little confusing, but it refers to *Adult Oriented Rock* - a subgenre of Rock originating from the late 60's. It is often confused with *Album Oriented Rock* (a radio-broadcast format featuring tracks from *Albums* - in contrast to mainstream-radio that plays *Singles/Hits*), and also with *Arena Oriented Rock* (as its name suggests, highly produced music-and-stage events for stadium shows). Musically, they share some of the same characteristics - album-focused, adult-themed, memorable melodies/hooks/riffs, iconic lead vocalists, and stand-out guitar solos.

Some of Adult Oriented Rock's distinguishing features are: that it shies away from the *Glam Rock* (aka *Arena Oriented Rock*) spectacle and anthem-type choruses/chants; it is musically more elaborate than the *Soft Rock* (aka *White/Safe Rock*) conventional/predictable format; and it is non-reliant on Album Oriented Rock's boutique radio-programming format (aka Long-play vs Hit-play) for longevity/appeal. Adult Oriented Rock is about melodic | harmonic | rhythmic | formatic layers of musical sophistication - stylistics borne-of or shared-with the following sub-genres such as *Progressive Rock* ("Jethro Tull"), *Symphonic Rock* ("Electric Light Orchestra"), *Art Rock* ("Pink Floyd"), *Classical Rock* ("Queen").

As a result, the performative standards, studio production benchmarks, and thematic material make this genre a suitably broad test instrument for drawing emotion/mood responses from professional musicians (informed listener), music aficionados (hobbyist listener), and music consumers (generalist listener), as they dovetail with the dynamic of each respondent's listening-profile. However, as with the previous genre discussed - World Music - the catalogue of AOR recordings is similarly immense. Track or album choice requires a process to filter or guide recording selections for appropriate content. For this paper, two industry professionals linked to the author provided a list of their Top-10 most influential AOR albums - from the perspective of their life's work ie. a Grammy-winning Pop Music icon of the 1970s/1980s and a notable AOR Music Journalist and Music Producer.

One Man Band²⁸: Leo Sayer (<http://www.leosayer.com/>) has a five-decade career in the music industry; sales of more than 80 million records globally; and is an award-winning singer-songwriter respected for his deep knowledge of the rock industry. One of Sayer's signature looks was his "Pierrot" character to reflect an inner sad, lonely figure - notable in his ballad "One Man Band". The solo "ballad" is a type of musical Shakespearean soliloquy in which the artist is pouring out their heart in song form - expressing feelings and emotions which may resonate with the listener or research-respondent - particularly an aficionado or fan.

Sayer (L. Sayer, personal communication, April 18, 2020) was tapped for his AOR selections (Figure 11.) as his profile as a music performer and aficionado provided dual perspectives. In addition, he offered interesting backstories on each recording, most notably on the Beach Boys' album "Holland" (1973) which critics decried on its release, though now regarded as a musical masterpiece - and also on album "Dreamer" (1974) by soul/blues vocalist Bobby Bland:

Bobby could neither read nor write. Michael Omartian, the album producer, had to whisper the words of the lyrics into Bobby's ear line-by-line for each song during the recording session. I wrote some of the songs on this album too. And with Larry Carlton and Dean Parks on guitars, and Ed Greene on drums, the artists involved in the Bobby Bland production certainly were the crème-de-la-crème of the 1970s. Omartian was also the person who discovered and produced Christopher Cross.

These types of recording and production insights are just the fodder that music aficionados crave ie. the inside stories by the creators and performers of iconic recordings that provide additional, fresh listening dimensions on the next play. This backstory/knowledge of the source material by a researcher can also be used as a trigger to prepare or draw-out deeper reactions from music aficionados. Understanding the respondent's "culture" (eg. fan/aficionado) is critical to unpacking and synthesizing their emotional responses to content.

²⁸ Rawkhead1. (2008, November 24). *One Man Band*. [Video]. YouTube. URL https://youtu.be/dli_cWbS6WY

①	"Blood On The Tracks" (1973)	Bob Dylan Columbia 33235
②	"After The Gold Rush" (1970)	Neil Young Reprise Records RS 6383
③	"Songs In The Key Of Life" (1976)	Stevie Wonder Tamla T13-340C2
④	"Bop Till You Drop" (1979)	Ry Cooder Warner Bros. Records BSK 3358
⑤	"Ladies Of The Canyon" (1970)	Joni Mitchell Reprise Records RS 6376
⑥	"Dreamer" (1974)	Bobby Bland ABC/Dunhill Records DSX-50169
⑦	"Holland" (1973)	The Beach Boys Reprise Records MS 2118
⑧	"Heavy Weather" (1977)	Weather Report Columbia PC 34418
⑨	"Arc Of A Diver" (1980)	Steve Winwood Island Records ILPS 9576
⑩	"Live" (1975)	Bob Marley and the Wailers Island Records ILPS 9376

Figure 11. Leo Sayer - AOR “Top-10” most influential album samples, label data, and video reference

AOR and the Orient: Toshiki Nakada is a music journalist/author, music producer, and record label owner (180+ CDs released), and a recognized AOR authority based in Tokyo, Japan. His magazine AOR AGE (<https://www.shinko-music.co.jp/series/aor-age/>) is a top-selling music publication. Nakada’s other claim-to-fame is as the liner-notes' writer/translator for US & UK albums released in Japan since the 1980s (400+ Albums). He is associated with some of the most recorded and recognized musicians in the industry. In an interview (T. Nakada, personal communication, April 17, 2020) he described the two forms of local AOR music connoisseur:

In Japan, we tend to divide AOR fans into two groups – the "atmosphere" type and the "data" type. The atmosphere types enjoy and care about the mood. AOR-aired music here is not of a specific genre, but comes from many different styles - jazz, soul, rock, bossa etc. On the other hand, the data types are most interested in the facts: who produced it, who performed the backing, who wrote the lyrics etc. If, for example, they know that a piece is produced by David Foster, or that Steve Lukather is playing guitar on it, they buy it without thinking twice.

Nakada also provided his personal "TOP 10" AOR Albums (Figure 12.). He stated that it was a difficult task for him to objectively narrow his choice to "ten", especially after having met, interviewed, and formed friendships with the likes of David Foster, Joseph Williams, and many others over four decades. Of interest was Nakada's final choice on the list - Randy Goodrum. Pressed for "just one" album, he found this the most difficult, as Randy's body of work, list of awards - from *Nashville Songwriters Hall of Fame* to *Artist Grammy Awards* - and the respect of his peers, are substantial. An “emotional connection” to an artist can impact objectivity.

①	"Airplay" (1980)	Self-titled RCA Victor AFL1-3099
②	"Maxus" (1980)	Self-titled Warner Bros, Records BSK 3634
③	"Gauche" (1984)	Steely Dan MCA Records MCA-6102
④	"Pages" (1981)	Self-titled Capitol Records ST-12123
⑤	"Nightwalker" (1980)	Gino Vannelli Arista AL 9539
⑥	"If That's What It Takes" (1982)	Michael McDonald Warner 923703-1
⑦	"Anywhere You Go" (1985)	David Pack Warner Bros. Records 1-25336
⑧	"Sneaker" (1981)	Self-titled Handshake Records FW 37631
⑨	"Toto IV" (1989)	Toto Columbia FC 37728
⑩	"Caretaker Of Dreams" (1993)	Randy Goodrum NOVA 9352-2

Figure 12. Toshiki Nakada - AOR²⁹ “Top-10” most influential album samples, label data, and video reference.

Sonic Risks: Musically, performatively, and production-wise, iconic albums such as "Kind of Blue", "Brothers In Arms", and "Hotel California" are all excellent works. But their downside is over-exposure due to sonic-familiarity (no element of surprise) or awe-factor (fan-worship) or over-use (mundane/prosaic/cliché music). Known as *habituation effect*, test conditions need

²⁹ Nakada, T. (2014). AOR Disc Collection. (800 Discs). Shinko Music. ISBN-13: 978-4401638956

to account for the pre-existing listening diet of respondents. Repetition decreases the impact of stimuli and, as a result, diminishes the emotional response sought in the research.

Related Genre: The genre *Adult Contemporary*, also referred to as *Middle-of-the-Road Music*, *Easy Listening Music*, and *Yacht Rock* (eg. music of Frank Sinatra, Burt Bacharach, Dionne Warwick, Michael Bolton, Adele et al) shares certain AOR features, but differs in construct. It is heavily into romantic or sentimental themes, ballad focused, acoustic instrument driven, and uses synthesized or orchestral backing. It draws from the *Soft Rock* genre, and encompasses rock, pop, soul, and blues music-elements. Its unimposing and inoffensive nature makes it suitable for arena-orientated events to broadcast to background/elevator/call-waiting music. With its softer-textured form, and primacy of lyric-narrative and performer imagery, it has a more subtle impact and likely to stir *memories* and *nostalgia* as core responses.

EXTENDED LISTENING

The rise of the vinyl LP (Long Play: 10~12 tracks | ~45min) and vinyl EP (Extended Play 2~4 tracks | ~15min) in the 1950s, listening to music meant designating time - an extended listening time. These audio products were created to be played in one session and in track-order, rather than a cherry-picking of tracks or creating play-lists. The following eight albums (Figure 13.) are highly respected amongst professional musicians, music connoisseurs, and audiophiles worldwide, and the tracks are drawn from the broad music genres of *Rock*, *Jazz*, *Classical*, *World*, *Film*, *Blues*, *Experimental*, and *Ancient* Era. Each is a “concept album” designed to take the listener on a musical journey - for the listener to give undivided listening-attention to as they would when reading a novel or watching a movie.

ROCK: “Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band” (1967) - The Beatles (Lennon-McCartney)

One of the earliest Rock Concept Albums, songs segued into each other - not separate tracks.

Capitol Records SMAS 2653 | Psychedelic/Pop Rock

JAZZ: “Maiden Voyage” (1965) - Herbie Hancock

Concept Album with the “ocean” as its theme-source for music/atmospherics.

Blue Note Records BLP 4195 | Hard Bop Jazz

CLASSICAL: “Scheherazade” - Opus 35 (1888) - Nikolai Rimsky-Korsakov

A symphonic poem, based on The Arabian Nights, melding oriental and Russian themes.

Deutsche Gramm. SLPM 139 022 (1967) | Classic/Romantic

WORLD: “Buena Vista Social Club” (1997) - Afro-Cuban All Stars & Ry Cooder (Producer)

A studio album, it was a revival of traditional Cuban ballad/music forms.

World Circuit WCD 050 | Afro-Cuban Jazz

FILM-MUSIC: “Bullitt: Original Motion Picture Soundtrack” (1968) - Lalo Schiffrin

Movie music has received the scorn of music critics - yet celebrates the greatest composers.

Warner Bros Seven Arts Records WS 1777 | Smooth/Funk Jazz

BLUES: “It Serve You Right To Suffer” (1966) - John Lee Hooker

John Lee Hooker was partnered with the greatest session-musicians of the time on this album.

His Master's Voice CSD 3542 | Delta Blues/Electric Blues

EXPERIMENTAL: “Eight Lines” (2000) - Steve Reich

Originally composed/performed in 1979, its origins are experimental, serial, avant-garde music.

Nonesuch 7559-79481-2 | Minimalist/Electronic Music

ANCIENT: “Salve Regina” (1987) - Benedictine Monks of the Abbey of Saint-Maurice

Composed in the Middle Ages (11C), it epitomizes traditional, ancient western-religious tonality

Philips 420 879-2 | Gregorian Chant/Medieval

Figure 13. Annotated Concept Album play-list.

Concept albums make for a fresh test instrument model in measuring emotion and mood responses. While vinyl formats may not be as easily accessible, their digital versions are readily available as physical data or streaming/download, and their play-duration has a reasonable time duration. Contemporary artists are exploring even longer-form releases, as they do not face the time/size limitations of vinyl. Drake (Aubrey Drake Graham | Producer, Singer, Songwriter | Rap/Hip Hop Genre) released the album “Scorpion” (2018) with a staggering 25 tracks and listening time of 90 minutes. However, producers and artists believe current listener attention spans do not stretch that far, and do not recommend single-sitting listening session. There is a notable research gap in the evaluation of extended listening experiences vs emotion | mood.

INFORMED LISTENING

Informed listening as it relates to music involves the skills of discriminative and critical analysis - a skillset of professional musicians and music aficionados. Not only do these types of respondents provide cognizant answers to emotion and mood, but they can also explain what they have heard and the music’s construct. Regarded as one of the most iconic of movie soundtracks, “Jaws” (1975) leans heavily on the soundscape and motifs created by Stravinsky and Debussy some 70 years before. Almost every adult-aged person would be familiar with the original theme, but only formal tuition or an aficionado would be aware of the music history of the lush compositions that pointed the way for its composer, John Williams.

The ballet “The Rite of Spring” (1913) and the symphonic sketches “La Mer” (1905) both had checkered public launches - rejected by audiences and critics due to their tonality/atonality mix for the times - generating physical violence in during the ballet (The Rite of Spring) and described as “agitated water in a saucer”³⁰ rather than imagery of the sea in the symphonic performance (La Mer). Today they resonate for both the experienced and amateur listener alike.

“The Rite of Spring | Le Sacre Du Printemps” (1913) - Igor Stravinsky

The ballet soundtrack that caused a riot in the theatre at its opening.

Columbia Masters MS 6319 (1961) | Classical/Neo-Classical

“La Mer | The Sea” (1905) - Claude Debussy

Three-part symphonic sketch, initially not well-received, now one of Debussy's most admired.

CBS Masters 32 11 0056 (1966) | Classical/Neo-Classical

“Jaws: Original Motion Picture Soundtrack” (1975) - John Williams

Film score derived its themes and treatment from the works of both Stravinsky and Debussy.

MCA Records MCA-2087 | Modern Classical/Soundtrack

Figure 14. Informed listeners would be able to detect the compositional characteristics that inspired Williams.

These works had in common the use of sudden dissonant sounds or chords; high-pitched musical shrieks; or an absence of a beat to induce a dream-like state. Blumstein, Bryant, and Kaye (2012)³¹ propose that biologically ingrained triggers explain why such sonic treatments stir fear, chaos, and apprehension. The marriage of the music with the visuals in “Jaws” augments the experience. In the Chicago Symphony Orchestra’s “Sound & Stories” magazine³², John Williams described his “Jaws” theme as “grinding away at you, just as a shark would do, instinctual, relentless, unstoppable. I just began playing around with motifs that could be distributed in the orchestra and settled on what I thought was the most powerful thing, which is to say the simplest.” The simplest refers to his motif alternating between two

³⁰ Branger, J. (2019, January). Un critique musical et musicologue a l’ecoute de son temps: Louis Schneider et Claude Debussy (1895-1934). In *Revue de musicologie*, JSTOR, 2019, 105 (2), pp.317-356.

³¹ Blumstein, D., Bryant, G., and Kaye, P. (2012, June 13). The sound of arousal in music is context dependent. In *Animal Behaviour*. The Royal Society Journal.

³² (n.a.). (2017, June 8). Two notes that changed the film world: John Williams’ theme for ‘Jaws’. In *CSO Sound & Stories*. [Magazine] Retrieved from <https://csosoundsandstories.org/two-notes-that-changed-the-film-world-john-williams-theme-for-jaws/>

notes - either an E and F or F and F# - of a semitone distance, which is the smallest interval in western music.

“Fear” is a primal emotion and deeply wired into the biology of humans. The *fight or flight* response is studied in the field of neurobiology and postulates that “context” is a key determinant in response. Studies by Maren, Luan Phan & Liberzon (2013)³³ define contexts as:

The internal (cognitive and hormonal) and external (environmental and social) backdrop against which psychological processes operate. Context includes perceptions of time, thereby framing the memory of an experience (for recollection, recognition, and familiarity) and shaping future expectations of similar experiences (for anticipation, foresight, and planning). (Ibid.)

Similarly, the music and emotion | mood test instrument stimuli and the profile of the respondent are critical contextual frameworks. Awareness of the social, cultural, and cognitive profile of a respondent is essential to determine how emotion | mood context is encoded in the brain. “Contexts surround and imbue meaning to events” (Maren, Luan Phan & Liberzon, 2013. Ibid.), and these factors will contribute to a respondent’s recollection in a test environment. The fear response region of the brain is called the amygdala. It is from here that the emotional salience of any set of stimuli is detected by the brain.

TRACKING LISTENING

The Music Score: As well as “pure listening”, “tracking listening” is also a form of music experience that is applicable as a research test instrument. Score reading can enhance the music listening experience - both functional and perceptual - for musicians or students of music. For non-musicians too, “eye” can direct a listener to instrument/s, voice/s, cues, or nuances that the “ear” may miss while listening or were “omitted” from the actual recorded performance. In addition to providing a lens on the technical/creative process in composition, it also removes sonic ambiguity/misunderstanding ie. what is heard vs what is written.

The music as it is perceived can differ substantially from the music that is notated in the score, or as might be imagined from reading the score. (Deutsch, 2007³⁴)

Deutsch (2007) identified a diverse range of compositional devices that composers exploit to generate auditory perceptions eg. continuity effects, tone sequences, pitch groupings, timbral groupings, spatial effects, etc. The music scores illustrate these music treatments.

Common Scores: *Piano scores, Jazz Scores, Rock Scores, Ensemble Scores, Choral Scores, Orchestral Scores, Guitar Tablature, and Ancient Chant* are the general variations. A score contains all parts, so music can be viewed vertically against other parts as if reading an EXCEL spreadsheet eg. the left-hand “column” lists the instruments, and each “row” has the individual parts. Each “column” shows the music played simultaneously - with the beat aligned. The larger the ensemble, the more rows. Variations in ensemble-size range from dual-lines (piano) to 40+ lines (“Mahler” orchestra). Parts are ordered from highest (top) to lowest (bottom), and bars of music are numbered. Performers receive transcribed parts from the score called sheet music.

The following music excerpts (Figure 15.) form a potential menu of options for application in a test setting - from simple to complex samples of music ensemble type - to integrate a “listening tracking” test instrument into an overall research model. In score form, the music notation allows the respondent to visualize the music they hear. The accompanying YouTube *cues* provide a selection of recognizable works and scores from a range of genres - with a page/bar/note tracking-feature to assist respondents with no or limited music skills in following the various instruments or ensembles.

³³ Maren, S., Luan Phan, K., and Liberzon, I. (2013, June). The contextual brain: implications for fear conditioning, extinction, and psychopathology. In *Nature reviews. Neuroscience*. 14(6): 417-428.

³⁴ Deutsch, D. (2007). Music Perception. In *Frontiers in Bioscience*. 12(8-12):4473-82.

MELODY: Horizontally tracing the rise and fall of melody, using a simple and familiar piano-score, is a standard start-point for reading. (Written by Bach for his wife - a beginner pianist):

“Minuet in G Major” (1725) J.S. Bach | Telarc CD-83693 | <https://youtu.be/p1gGxpitLO8>

The next work is the complete opposite in difficulty. This extremely complex piano piece is a transcription of a jazz piano improvisation, but the melody is distinct:

“Watermelon Man” (1962) Herbie Hancock | Blue Note 45-1862 | <https://youtu.be/VPxdiwrQLYI>

HARMONY: The next stage in score reading is to vertically-widen the eye’s view to take in more than one-line at a time: eg. from the movie “Scent of a Woman” (1992) - a string quartet/tango:

“Por Una Cabeza” (1935) Carlos Gardel | RCA Victor 82858 | <https://youtu.be/bOPCDg21gi4>

This next track also uses the four members of the string family, but in this case, there are multiple instruments in each of the four sections. This creates a string "chorus" effect.

“Eine Kleine Nachtmusik” (1787) W.A. Mozart | Deutsche 139 004 | <https://youtu.be/YqN-5EujaM>

TABLATURE (TAB): Used from Gregorian chant, European lutes, Blues-Harp/Harmonica to Guitar, "TAB" notation was invented to indicate the finger-positions on a guitar fretboard:

“Stairway to Heaven” (1974) R. Plant | Atlantic SD-7208 | <https://youtu.be/vYI4QwthadU>

The following samples move to the next level - tracking large ensembles with more involved polyphony. They integrate all "music families" (brass vs woodwind vs strings vs percussion):

FILM MUSIC SCORE: This is a Full Score "reduction" (compressed score). It also has analysis-cues embedded to explain the composer’s ideas and musical-cues:

“The Avenger’s Theme” (2012) Alan Silvestri | Intrada D001759402 | <https://youtu.be/Z9ojNzsrP3Y>

BIG BAND: In this case, the music’s rhythmic patterns are blocked together, so they are easier to see-as-a-whole. Solos stand out on the page more easily:

“The Count” (2014) Tony Guerrero | RCA Camden CAL 395 | https://youtu.be/ITVvPoPX_fc

ORCHESTRA: Following a full orchestral score is the apex-skill in score reading due to its complex polyphony and wide instrumentation. The key music feature in the following example is “motifs”:

“Symphony No.5” (1795) Beethoven | London Records CS6930 | <https://youtu.be/NWEVKyEwi4A>

eg. a *motif* is a very-short musical phrase or music fragment that is repeated or inserted in various forms into a composition eg. “Symphony No.5” opening “4 x Notes”. Composers embed/disguise these motifs in many ways using compositional devices: *diminution* (shorten each note’s length); *augmentation* (elongation of each motif note); *inversion* (turn the motif upside-down); *retrograde* (motif written in reverse order); *retrograde-inversion* (turn motif upside-down & back-to-front); and by spreading/sharing motif across each instrumental section.

Figure 15. Sample score reading test-instrument selection - in ascending order of music/ensemble complexity.

On a "printed" score, without the visual guide of a superimposed music tracking-system, the general technique or approach for beginner score-reading is to: **a)** follow the melody line as a "group or shape" rather than read the "individual" notes. **b)** look for notable "leaps" between notes, or "step-by-step" sequence of notes, or repeated rhythmic "patterns" as *markers*.

MUSIC FOR THE SCREEN

From drowning-out the projector noise in the Silent movie era, to being a critical part of the modern movie experience, music for the screen has found its own voice. This creative artistic genre is ripe with opportunities for examining emotion | mood responses but in a dual-sense impact. However, as with the music creative channel of composer-thru-to-listener discussed earlier, the pathway is now director to composer to viewer. And the level of collaboration in the creative process is more complex, as it involves the creative vision of multiple actors.

Lost in Translation: Whether communication channels are *cultural exchange* (English → Interpreter → Non-English), an *expressive medium* (Book → Director/Composer → Movie), or *sound product* (Composer → Artist/Studio → Receiver), there is always the risk that meaning, nuance, or clarity can be diminished if "translation" (Interpreter | Script | Recording) is sub-par. Many elements were changed in the adaptation of the book to the movie (location, character profiles, backstory, situation etc). As we can see from the localization of the movie's title, transferring English idioms across cultures is not without difficulty either.

"Lost In Translation" (2003) Director.: Sofia Coppola | Music: Kevin Shields
From a Novel (Set in China) to a Script (Set in Japan) to a Movie (USA/JPN - Global Release)
Music from the Motion Picture | Emperor EMN7068-2

The challenge of "translation", and the struggle to express an "artistic concept" across cultures (ethnic or social) is no more easily demonstrated than in this script excerpt from the movie³⁵:

DIRECTOR
(in Japanese to Translator) The translation is very important,
O.K.? The translation.

TRANSLATOR
(in Japanese to Director) Yes, of course. I understand.

DIRECTOR
(in Japanese to Bob) Mr. Bob-san. You are sitting quietly in
your study. And then there is a bottle of Suntory whiskey on top
of the table. You understand, right? With wholehearted feeling,
slowly, look at the camera, tenderly, and as if you are meeting
old friends, say the words. As if you are Bogie in 'Casablanca',
saying, 'Cheers to you guys', 'Suntory time'!

TRANSLATOR
He wants you to turn, look in camera. O.K.?

BOB
That's all he said?

TRANSLATOR
Yes, turn to camera.

UK | USA | CANADA | AUSTRALIA | NEW ZEALAND: Lost In Translation
KOREA: 사랑도 통역이 되나요? - Can love be translated too?
TAIWAN: 爱情, 不用翻译 - Love, no need for translation
CHINA | HONG KONG: 迷失东京 | 迷失東京 - Lost in Tokyo
JAPAN: ロスト・イン・トランスレーション - [Japanese phonetic-pronunciation] Lost In Translation

Figure 16. "Lost In Translation" (2003. Ibid.). Translated movie titles as they appear in North East Asian nations.

Music critics have often unfairly scorned or downplayed the screen composer's position and contribution compared to the traditional classical composer. But since the Golden Age of Film, from Elmer Bernstein's rousing Americana soundtrack "Seven" in "The Magnificent Seven" (1960), to John Williams' leitmotif "Darth Vader's Theme" in the "Stars Wars" (1977), there have been many celebrated scores written that generate a diverse range of emotional responses as stand-alone musical works - without the need for accompanying visuals.

³⁵ Coppola, S. (2002, September 2). Lost In Translation. Shooting Draft. [Film Script]. Lost In Translation Inc.

A watershed-moment in film-music occurred in 1985 and resonated globally amongst screen composers. Japanese composer Toru Takemitsu had created a new standard where the music took a pivotal role in the movie's tone. His orchestrations and music treatment for the movie "Ran"³⁶ were full of complex layers of meaning that both augmented and wrestled with the director's own vision for the film. His music provided viewers a previously hidden dimension - the character's mind. Legendary film director Kurosawa instructed Takemitsu to compose in the style of acclaimed Austrian/Bohemian Gustav Mahler - a 20th Century Neo-Classical composer. The final score matches-to-perfection the dark, mystical visuals of the film. While the music was Mahler-inspired, its sounds/sense are unmistakably Japanese, drawing from its cultural and folk-music. YouTube *cue* below sees score dominate the sound-effects and script.

"Ran" • 乱 (1985)
Director.: Akira Kurosawa
|
Music: Toru Takemitsu

Quasi-remake of "King Lear" set in Japan, composer's music wrestled with the approach of director

Original Movie Soundtrack
|
Silva Screen SILLP1518
|
<https://youtu.be/T4Nb5SiYvQ4>

The shower scene ("The Murder" cue) from "Psycho" (1960) used 78 camera set-ups and took 7 days of shooting for just 45 seconds of final footage. The shower-rose itself was 180cm in diameter - specially made for the low-angle camera shot of the shower-spray. Hitchcock was reportedly so disappointed with the footage of this movie that he binned it after viewing the rushes - until his film-composer, Bernard Herrmann³⁷, told him he could "rescue" it. Herrmann, using only a string ensemble, created what has now become an iconic film + soundtrack. The impact of the "Herrmann Chord"³⁸ in this YouTube *cue* below remains spine-chilling today.

"Psycho" (1960)
Director: Alfred Hitchcock
|
Music: Bernard Herrmann

A Neo-Romantic composer who regarded music as a highly personal and emotional form of expression.

Original Movie Soundtrack
|
Unicorn RHS 336
|
<https://youtu.be/0WtDmbr9xyY>

Purposes of Screen Music: The core function of music in film is to assist/enhance the story-telling and emotional connection for the receiver. Its *five key purposes*³⁹ are ...

① EMOTION:	Creates and amplifies fear, humour, joy, mystery, sadness, or pity.
② SUSPENSE:	Prepares us, positions us, manipulates us, explains plot relationships.
③ INFORMATION:	Locates us in social or geo-setting, culture, time, space, or period.
④ MOOD:	Generates atmosphere more effectively/faster than script or images.
⑤ CHARACTER:	Tells us state-of-mind of character not evident in script or images.

Placement of music cues in film follows these *six general patterns*⁴⁰ (Figure 17.). Key themes or dramatic scores are the moments when the music's presence is the most striking.

① DRAMATIC SCORE:	Music reflects visuals. No dialogue. No limits.
② UNDERSCORE:	Music under dialogue or SFX or incidental music.
③ VISUAL SOURCE:	Music that is part of the scene - radio, live band etc.
④ SCORED SOURCE:	Visual Source is musically developed into the scene.
⑤ THEME/SIGNATURE:	Opening/Closing Music or Leitmotif.
⑥ SONG-SCORE:	Pre-recorded Popular, Retro, or Classic songs.

Figure 17. Music placement-patterns in film.

³⁶ Lehrich, C. (2014). Hearing transcendence: distorted iconism in Toru Takemitsu’s film music. In *Signs and Society. Representing Transcendence*. Volume 2, Number S1.

³⁷ Siegel, R. (2000, October 30). *Bernard Herrmann’s score to Psycho*. In *The NPR 100*. Retrieved from <https://www.npr.org/1000/10/30/1113215/bernard-herrmanns-score-to-psycho>

³⁸ Wrobel, W. (2017, July 8). *Half-diminished Seventh: The Bernard Herrmann Chord*. Retrieved from <https://www.filmscorerundowns.net/herrmann/herrmannchord.pdf>

³⁹ May, B. (1995). *Film and Television Music Scoring*. Personal Collection of Brian May. Griffith University. Southport, Queensland.

⁴⁰ May, B. (1995). *Arranging and Orchestration*. Personal Collection of Brian May. Griffith University. Southport, Queensland.

Below (Figure 18) are corresponding YouTube *cues* for each placement-pattern above. Track selection for song-score, scored source, or visual source are critical for narrative coherence.

① “Dances with Wolves” (1990)	Music: John Barry https://youtu.be/ahW9jOS0-pY
② “Forrest Gump” (1994)	Music: Alan Silvestri https://youtu.be/nFvASiMTDz0
③ “Shine” (1996)	Music: Nikolai Rimsky-Korsakov https://youtu.be/8_p6-cAMr_g
④ “Indiana Jones” (1989)	Music: John Williams https://youtu.be/o4lq3SOB8sw
⑤ “Star Wars” (1977)	Music: John Williams https://youtu.be/-bzWSJG93P8
⑥ “Pulp Fiction” (1994)	Music: Dick Dale https://youtu.be/1hLIXrlpRe8

Figure 18. Corresponding Music Placement and Music Cues for six film music forms.

The Screen Music genre presents a rich source for exploring music’s capacity to elicit emotion/mood in a specialized “context” - how music performs in tandem with visual stimuli.

THE MUSIC VIDEO EXPERIENCE

Another sound-and-visual product is the music video as it adds contextual framework, cultural insight, and an extra-dimension to the music listening experience - regardless of its genre or period. As the reverse process of music-to-film, the music video is film-to-music through a visual-interpretation of the song’s meaning or intent married to the original soundtrack. As a result, this dual layer of visual/audio experience facilitates a wider range of perceptions, and possibly a deeper impact into the music itself. But as with screen music, it is a step away from pure “listening” when we introduce “gaze” into the music experience. A music video’s visual design is similar to fast-paced television commercials - whose core task is to engage, impress, pitch, and convert a viewer to their product in a very short exposure period. Both a television commercial and music video have a brief window of time to interact and capture the imagination and appeal of the viewer. They do so by combining the grammar of filming (technical features/conventions) with sales-business and creative intent (purposes/formats).

“Sledgehammer” (1986)⁴¹ Director: Peter Gabriel | Composer: Peter Gabriel

A milestone in music video production amongst the music video auteur-director fraternity.

Virgin 207587-8 | <https://youtu.be/OJWJE0x7T4Q>

Music Videos - Origins: An outgrowth of the screen-musical format - but greatly reduced in length and absent of the dialogue - the music video has catered for youth subcultures, varied music tastes, and creative-product narratives since the rise of MTV in 1980 ... but even earlier from song-embedding in films. Artists either develop their own music video *identity* (originality/message) or *follow-the-pack* (stereotypical/stock-treatment). In 125 years of film and 70 years of broadcast, music video has touched each generation and covered every genre. The development of the music video form can be easily traced, as film/sound technical milestones are clear. Below (Figure 19.) is the notable historical periods - paired with iconic music video samples of that time. While the first three periods did not specifically craft stand-alone music/film products, from c.1980 (MTV) onwards, this became the music industry staple. From the 2000’s though, the industry took another quantum-leap forward due to the digital age:

1890s THE TALKIES	“The Jazz Singer” (1927) https://youtu.be/Yqk6EJc8PRc
1920s THE SOUNDIES	“Singing In The Rain” (1952) https://youtu.be/w40ushYAaYA
1950s BIRTH OF R’N R	“Jailhouse Rock” (1957) https://youtu.be/MfrC8PAQtlg
1980s MTV	“Video Killed The Radio Star” (1979) https://youtu.be/Iwuy4hHO3YQ
1990s AUTEUR -DIRECTOR	“Virtual Insanity” (1996) https://youtu.be/4JkIs37a2JE
2000s RISE OF INTERNET	“Fall” (2014) https://www.dailymotion.com/video/x2dityg
2010s MOBILE INTERFACE	“I Feel Like That” (2019) https://youtu.be/CZaW0I_X1Po

Figure 19. Historical periods of music and video development from the advent of film to today.

⁴¹ Gabriel, P. (1993). *Xplora1: Peter Gabriel’s Secret World*. [Interactive CD-ROM]. MacPlay.



Figure 20. YouTube still-image from “Fall” (2014)⁴² YouTube “I Feel Like That” (2019)⁴³ collage

The 1980s brought music video to a new level via MTV. But 2000s delivered a new experiential sensation – global and on-demand. With the rise of the internet, music contents were accessible from *any country* (“Fall” (2014) | Noriyuki Makihara | Japan) and no longer locking people to monitors or televisions, as tablets, phablets, and smartphones giving a more “intimate” experience ie. people were literally holding the artist in their hands (“I Feel Like That” (2019) | Kanye West | *vertical video* format for smartphone). (Figure 20.).

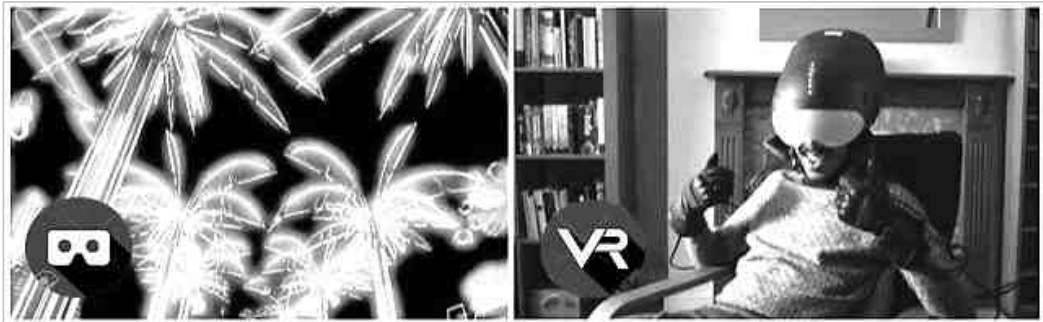


Figure 21. Still-image “Show It 2 Me” (2017)⁴⁴ - 360° YouTube still-image “I Got U” (2014)⁴⁵ - MR

Music Videos - Future: The question of “Where to next?” has already been addressed by the music industry creatives. They have taken the concept of “audio-visual” and have re-fashioned it into “visual-audio”. An *immersive experience* is the next level of music video development → **MR** (Mixed Reality), **AR** (Augmented Reality), **VR** (Virtual Reality). Google Cardboard eyewear allows 360° VR experience with a smartphone, (“Show It 2 Me”), while various VR headsets allow for intense immersive experiences of music video. (Figure 21.).

Music Videos - Influencer/Auteur Past & Present: In the search for high-quality music video products, an effective route is sourcing the contents of influential creative-directors in the field ie. an auteur/director approach. Some seminal names in the business are (Figure 22.):

PAST INFLUENCERS: McG, David Fincher, Michael Bay, Mary Lambert, Stephen Johnson, Tarsem Singh, Steve Barron, Brian Grant, Weird Al Jankovic, David Mallet.

PRESENT INFLUENCERS: Jonathan Glazer, Anton Corbijn, Mark Romanek, Stephane Sednaoui, Spike Jonze, Melina Matsoukas, Sophie Muller, Hiro Murai.

Figure 22. Short-list of global names in music video production.

⁴² Makihara, N. (2014, November 19). *Fall*. [Video]. YouTube. URL <https://youtu.be/6ZJeKXW8Ewc>

⁴³ West, K. (2019, February 27). *I Feel Like That*. [Video]. YouTube. URL https://youtu.be/CZaW0I_X1Po

⁴⁴ Carter, D. (2017, December 19). *Show It 2 Me*. [Video]. YouTube. URL <https://youtu.be/SsFa5JhSDH4>

⁴⁵ Dumont, D. (2014, February 20). *I Got U*. [Video]. YouTube. URL https://youtu.be/FHCYHldJi_g

Music Videos - Formats: Music videos are divided into *three formats*⁴⁶ each having its own sub-format too. A popular type since the advent of MTV programming is the Conceptual model, as it combines all three types in one product - performance + story + creative elements.

PERFORMATIVE	"Green Onions" (1967) Booker T. & MGs
NARRATIVE	"Let's Dance" (1983) David Bowie
CONCEPTUAL	"Freak On A Leash" (1999) Korn

The Conceptual music video has no creative limits. However, some clever and celebrated *sub-types* of Performative and Narrative music videos that have maximized their product's impact - through exploring novelty-viral, message-focus, or dream-state elements - are:

CROWD-SOURCE	"It's A Long Way To The Top" (1975) AC/DC
CROSSOVER	"Everyday Is A Winding Road" (1996) Sheryl Crow
LYRIC	"Subterranean Homesick Blues" (1965) Bob Dylan

Music video appears in television and film ("The Monkees" (1965~), "The Beatles" (1964)), in Interactive CD-ROM | DVD form ("Xplora1" (1993)~ Peter Gabriel, "Voodoo Lounge" (1994) - Rolling Stones), and in long-form + mini-movie + super-screen formats:

LONG-FORM (24-HR)	"Happy" (2013) Pharrell Williams
MINI MOVIE/MUSICAL	"Thriller" (1983) Michael Jackson
SUPER SCREEN	"Shine A Light" (2008) Rolling Stones

The above three samples are particularly impactful - a combination of extended duration, visual spectacle, and intense soundtracks. Musically excellent, they have also been produced by iconic film directors eg. Scorsese, Landis. Some further stylistic themes and variations:

WOMEN IN MUSIC	"A Kind Of Sorrow" (2018) A-Lin
WORLD MUSIC	"Jai Ho!" (2009) A.R. Rahman
GUERRILLA	"Carpool Karaoke" (2015) Stevie Wonder & James Corden

Music Videos - Purposes: The oft-held view is that music videos are for "entertainment" or "marketing". However, there are *four forms* (Di Stasio, M., 1996. Ibid), with the "art" focus and the notion of (mental) "manipulation" not generally recognized as significant purposes of the product. This is an effective genre as a test instrument for emotion | mood response.

ART	"Dark Side Of The Moon" (1973) Pink Floyd
ENTERTAINMENT	"It's Oh So Quiet" (1988) Bjork
MARKETING	"Uh Huh - Pepsi" (1991) Ray Charles
MANIPULATION	"This Is America" (2018) Donald Glover

MUSIC LIVE

Up to this point in the paper, the discussion of music formats and emotion | mood research has centred on "music and playback" ie. listener as opposed to audience. Clinical measurement is logically most effective when collected in a controlled environment with a control group. Yet the natural experience of music interaction occurs in the home, public transport, vehicular transport, hospitality venues, and entertainment venues - with the latter two being "live music" contexts. In Liu, Liu & Yang's (2014)⁴⁷ examination of music listening behaviour in order to:

understand the interrelationship among the personal, situational, and musical factors of music listening ... as the dataset is characterized by the great diversity of real-life listening contexts where people and music interact.

⁴⁶ Di Stasio, M. (1996). Lights, camera, action. In *Queensland Journal of Music Education*. 4(1). 24-31.

⁴⁷ Liu, J., S. Liu and Y. Yang (2014). LJ2M dataset: Toward better understanding of music listening behavior and user mood. *2014 IEEE International Conference on Multimedia and Expo (ICME)*, Chengdu, 2014, pp. 1-6.

... they sought to evaluate the interaction between context and content. While they focused on internet and multimedia consumption, the live environment of “listening contexts where people and music interact” (Liu et al, 2014) is the premium experience of music engagement. While every listener has their favourite genres or artists, all are “wowed” by the virtuoso. Magical performances are recognized by all, and their appreciation transcends subjective favourites. We define a true “virtuoso” not merely in terms of dexterity and motor skills (Furuya, S., Oku, T., Miyazaki, F. et al., 2015)⁴⁸, but by the way they transport us and transfix us. Their effortless giftedness makes us focus on the “art”. Dexterity and motor skills are just tools-of-the-trade.

Two sample YouTube *cues* follow (Figure 23.): Itzhak Perlman and Luciano Pavarotti - both virtuosos, both playing to live audiences, and both performing highly complex musical works:

Itzhak Perlman - Classical Violinist

“Danse Espagnole” (1982) Manuel de Falla | Angel Records R 124603

Luciano Pavarotti - Operatic Tenor

“Nessun Dorma” (1990) Giacomo Puccini | DECCA 430 433-1

Figure 23. The primacy of artist/audience emotional connection through live performance.

Itzhak Perlman: This work, “Danse Espagnole”, is an excerpt from an opera (“La Vida Breve”) by Manuel de Falla (1913). Being a “dance”, it moves at a frenetic pace, and is a fusion of Spanish melodic, harmonic, rhythmic, and folk-music characteristics. The pure energy and sensuality in the piece are unmistakable, and it remains the feature-song in this opera.

Featuring Perlman at “In Performance at the White House”⁴⁹ with Japanese pianist, Ken Noda, the audience have already witnessed a large program of the music from Mozart and Chopin in the company of then-US President Reagan and his guests. The final piece is “Danse Espagnole”. A number of aspects stand out both prior to and during the performance itself - the “pre-performance” banter - relaxing/entertaining this audience of dignitaries; but instilling in them an element of “quasi-fear” (“*These are props. We don't know any of these ...*”) as though he is not prepared for this finale and will be “sight-reading” it unprepared. His clever and disarming style belies his true artistry. While it is all part of his witty schtick, the emotional journey he takes his audience on, from humour-tinged-doubt to tears-of-joy, is crafted to draw his listeners in to focus more deeply on the music itself. And we see his own wry smile throughout the video-performance as he enjoys the audience’s wonderment.

Luciano Pavarotti: The finale song “Nessun Dorma”⁵⁰ (“Let no one sleep”) is an aria written in a tenor’s *tessitura* range (most comfortable vocal-range) from the opera “Turandot” (Giacomo Puccini, 1926), and globally familiar for many reasons - not the least being its performance by Pavarotti - who stipulated that this song would close any performance he was contracted to.

Whether live or in a studio recording setting, it is the tenor himself who leads the performance in this aria ie. forcing the conductor/orchestra to follow him - with sustained-notes, pauses, tempo-changes etc. Its composer, Puccini, did not envisage such a performance dynamic, but it has evolved into this performance-style with the modern operatic tenors. We hear two distinct melodic parts: conjunct-melody (scale-like steps) by the tenor, and disjunct-melody (large leaps) by the orchestra. There is much to de-construct and analyze but here is a key item ... The final word sung “Vincero” (“I will win” ie. syllabically sung as “Vin-ce-ro”), was written one way by Puccini but performed in another by Pavarotti. Pavarotti has sustained the second-last

⁴⁸ Furuya, S., Oku, T., Miyazaki, F. et al. (2015). Secrets of virtuoso: neuromuscular attributes of motor virtuosity in expert musicians. In *Nature. Sci Rep* 5, 15750.

⁴⁹ Nodame26 (2007, October 20). *Itzhak Perlman Manuel de Falla Danse Espagnole*. [Video]. YouTube. URL <https://youtu.be/Z4ayc6Fb3hI>

⁵⁰ Warner Classics. (2016, June 7). *Luciano Pavarotti sings "Nessun dorma" from Turandot. (The Three Tenors in Concert 1994)*. [Video]. YouTube. URL <https://youtu.be/cWc7vYjgnTs>

note "B4" to heighten the tension (with resultant "frisson" effect) - though originally scored by Puccini as an "attacked" (>) semi-quaver (1/8-note) in duration and style.

Music connoisseurs and audiophiles strive to purchase or listen to the best recorded version, the best recording formats, the best playback equipment, and the best speakers in an effort to create a room-environment where, with eyes-shut, they can imagine the artist or band in the room with them. At the end of the day, music's ultimate context for enjoyment is "live". Whether intimate clubs, live houses, concert halls, outdoor events, or stadium performances, the challenge is to devise a methodology to map emotional response in a live event setting, as the various levels of euphoria (dependent on venue size) exceed that of a controlled listening environment, controlled time, and controlled content. Listening context is critical.

SOUND ENGINEERING



The Studio Perspective: Audiophiles, music connoisseurs, or general listeners rarely get to meet or hear from the audio people who track, mix, and master the recordings they listen to. Given that test instruments used in research are reliant on the product of a sound engineer's creative and technical decision-making - both a subjective and objective process - investigating their approach to manipulating and crafting recorded sound gives insights on "focused listening". Control room equipment and acoustics are critical factors in sonic production.

Figure 24⁵¹. Red Bull Studios, Tokyo showing SSL 4040 G+ Console | Amphon Two18 Studio Monitors.

Lee Popa (<https://www.discogs.com/artist/105416-Lee-Popa>) is a celebrated US producer, studio/live-engineer, and a major figure in late-1980's *Industrial Rock*. He has worked with many of the iconic artists in the industry such as Queen, Red Hot Chili Peppers, The Rolling Stones, Beyonce, Whitney Houston, Aretha Franklin, Andre Bocelli et al; and is associated with the major record labels such as Sony/Epic, Warner Brothers, Universals, Verve, and many others; has significant experience in arena concert-audio (c.6000 live-gigs | venue-sizes of 80,000+); and is credited with producing 100 studio-recordings, including platinum-sellers.

The following is a summary-interview (L. Popa, personal communication, April 28, 2020) with the author, and his process in working with soundtracks and control-room evaluation:

As I have travelled the world and have been asked to mix under many different conditions and situations, I need to listen carefully to tune or find issues in the sound system. This is the first thing I do with any sound system I sit in front of - whether a large PA system in a venue or two speakers in a studio. This is the order in which I play my tracks, and specifically what I listen-in for ... (Lee Popa, 2020)

- ① **"Madman Across The Water" (1971)** Elton John | DJLPH420 Records | This song is super-dynamic. I doubt that they had any compression on the final mix other than keeping it under control, so it did not clip. Here I am checking out the transient response.
- ② **"Ain't That A Kick In The Head" (1960)** Dean Martin | Capitol Records 4420 | Tons of brass tells you where the treble is. From his remastered record, the vocal is loud here the band is super stereo-mix in an awesome studio by the real professionals of our industry. I swear you can hear the saliva in his mouth when he was singing!
- ③ **"Straight Outta Compton" (1988)** NWA | Ruthless Records SL 57102 | Right after the intro, "what you are about to witness is the strength of street knowledge", there is a drum hit. That drum hit tells me

⁵¹ Di Stasio, M. (2019). Red Bull Studios. [Photo]. Facebook. <https://tinyurl.com/RedBullAmphonTokyo>

how slow or fast the transient response is, or the quickness of the speaker. It also tells me how long the low-end will resonate in the room. So, I only use the first 8~10 seconds of the track.

- ④ **“Graceland” (1986)** Paul Simon | Warner Bros. Records 1-25447 | This superbly mixed song is quite involved, and the vocals way-up-front make it easy to listen to the music and get lost in the song.
- ⑤ **“Crazy” (1990)** Seal | ZYT ZANG 8 | There is some analogue sub-bass in this track, and the song is excellent within itself. But this tells me if there is some compression or loading in the lower end.
- ⑥ **“Avalon” (1982)** Roxy Music | Polydor 2302 | Bryan Ferry’s voice on this track is unlike most vocalists, so the lower-mid of it is clear, then you are going in the right direction.
- ⑦ **“Everybody Wants To Rule The World” (1985)** Tears For Fears | IDEA9 | This is a beautiful, smooth track at a nice tempo, and has a lot of information in it. I listen through the frequency ranges of the upper-mid. I can then tell if the high-end is out of focus with the low-end.
- ⑧ **“Tunnel Of Love” (1987)** Bruce Springsteen | Columbia OC 40999 | Another well-mixed track that once-again giving me a lot of information across all the frequency-bandwidth. It has a great breakdown in it, and you can listen to the reverb in your room and for how long the decay is. Even though it is your house or your listening room, how long that music hangs around is what causes the trouble.
- ⑨ **“Time” (2001)** Pink Floyd | EMI 7243 | When you are sitting centrally in front of the speakers, the opening cash register and money sound sets up my stereo imaging. If PAs or speakers are adjusted a little too wide or not triangular, you will hear if imaging is correct or not.
- ⑩ **“Shine On You Crazy Diamond 1” (1992)** Pink Floyd | EMI CDS780557 | I turn this one all the way up its balance is so lovely when the drum fill comes in. That’s how you can tell really how great your speakers are. The guitar takes care of that 1 kHz to 4 kHz range.

“Focused Listening” is a listening mode that will be discussed later in this paper. However, it refers to “audio-manipulation” - covering mixing engineers, mastering engineers, broadcast engineers - where an audio product requires capture/balance/edit/post-production skills.

DEFINING EMOTION & MOOD

The states of emotion and mood are related but distinct entities. Ekman & Davidson (1994)⁵² proposed five key-point differences: *duration*, *provocation*, *modulation*, *expression*, and *awareness* - separated by response-speed and self-control (Figure 25.). Lane, Beedie, and Terry (2005)⁵³ identified seven distinctions: *cause*, *duration*, *intentionality*, *control*, *experience*, *consequences*, and *function*. They also expressed that the interchangeability of these two words was common as their meanings were often cloudy. However, they did state that “it is incumbent on psychologists to attempt to clarify the exact nature of emotion and mood, their relationship with one another and respective relationships with other psychological phenomena”.

KEY DIFFERENCES BETWEEN MOODS vs EMOTIONS	
• DURATION MINUTES TO HOURS	• DURATION SECONDS TO MINUTES
• PROVOCATION LOWERS THRESHOLD NEEDED TO TRIGGER EMOTIONS	• PROVOCATION MORE EASILY EXPERIENCED WITHIN MOODS
• MODULATION/REGULATION MOSTLY UNAFFECTED	• BELONGING TO SAME “FAMILY”
• EXPRESSION NO UNIQUE NONVERBAL EXPRESSIONS	• MODULATION MORE DIFFICULT TO REGULATE IF EXPERIENCED WITHIN MOOD
• AWARENESS DIFFICULT TO IDENTIFY EXACT TRIGGER(S) CAUSING MOOD	• EXPRESSION UNIVERSAL FACIAL EXPRESSIONS
	• AWARENESS TRIGGERS MORE EASILY IDENTIFIABLE

Figure 25. Mood vs Emotions (Ekman, 1994. Ibid.)

⁵² Ekman, P. & Davidson, R. (1994). *The nature of emotion: fundamental questions*. Oxford University Press. USA.

⁵³ Lane, A, Beedie, C., and Terry, P. (2005, September). Distinctions between emotion and mood. In *Cognition and emotion*. 19(6).

There is a shifting trend in music-classification - *genre* (music-identity) to *mood* (self-identity). However, it is driven by two factors i) *commercial* interests (promotion and merchandizing rationale) due to the immense digital catalogue of recorded music, and ii) a user's desire for a *personalized* (on demand, easy-to-retrieve) listening library. Now, mood/theme is equal to genre/index, and mood/theme metadata is being extracted from music tracks to generate real-world music needs.⁵⁸

MOOD	INTENSITY	TIMBRE	PITCH	TEMPO
HAPPY	MEDIUM	MEDIUM	VERY HIGH	VERY HIGH
EXUBERANT	HIGH	MEDIUM	HIGH	HIGH
EXCITED	VERY HIGH	MEDIUM	MEDIUM	HIGH
ANXIETY/TERROR	LOW	VERY HIGH	LOW	VERY HIGH
SADNESS	MEDIUM	VERY LOW	VERY LOW	LOW
DEPRESSION	LOW	LOW	LOW	LOW
CALM	VERY LOW	VERY LOW	MEDIUM	LOW
CONTENTMENT	LOW	LOW	HIGH	LOW

Figure 28. Thayer's Mood types/levels vs music elements. (Bhat et al, 2014)⁵⁹.

THE MIND OF THE LISTENER

An examination of the current literature and research in this field indicates that the primary question asked in the quest for gaining insights into the place of music and its association with the emotion and mood has been: Does music itself *induce* emotional responses or do emotional responses stem from factors such as cultural transmission, specific learning environment, environmental conditioning or other associated effects? A substantial number of studies have been conducted to *interpret* human psychological responses and *measure* physiological activity during music listening. Resulting data from both fields has been examined to look for convergence. Music response is linked to *arousal* - a cause-and-affect process with a build-up of tension and release within the music and within the listener (bradycardia vs tachycardia - heart-rate response to stimuli); and *valence* - positive and negative reactions that are expressed in words, facial expressions, and gesture (micro/macro-expressions or brain-imaging).

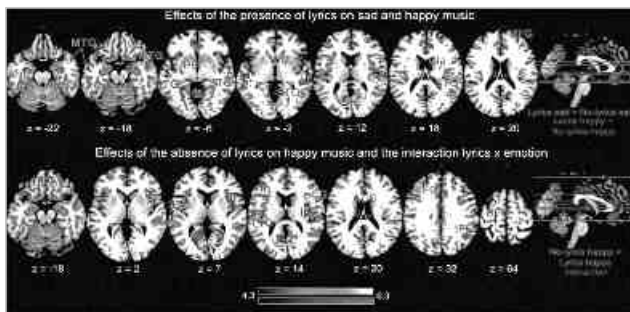


Figure 29. Effects of presence or absence: lyrics x emotion (Brattico, 2011. Ibid.).

Brattico et al (2011)⁶⁰, Harrer (1977)⁶¹, Schaefer (2017)⁶², and Zatorre et al. (2005)⁶³ used various neuro-imaging techniques (Figure 29.) in controlled and monitored environments; with informants chosen from a cross-section of age-groups and cultures; and with music samples

⁵⁸ Bischoff, K. Firan, C., Paiu, R., Nedjl, W., Laurier, C., & Sordo M. (2009, October 26-30). *Music mood and theme classification - a hybrid approach*. [Conference]. ISMIT 2009. Kobe.

⁵⁹ Bhat, A., S. Prasad, N., & Mohan D., M. (2014). *An efficient classification algorithm for music mood detection in western and hindi music using audio feature extraction*. 2014 Fifth International Conference on Signal and Image Processing, pp. 359-364.

⁶⁰ Brattico, E., Alluri, V., Bogert, B., Jacobsen, T., Vartiainen, N., Nieminen, S., and Tervaniemi, M. (2011, December 1). A functional MRI study of happy and sad emotions in music with and without lyrics. In *Frontiers of Psychology*. Retrieved from <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2011.00308>

⁶¹ Harrer, G. & Harrer H. (1977). Music, emotion, and autonomic function. In M. Critchley and R.A. Henson (Eds.). *Music and the Brain: Studies in the neurology of Music*. London: William Heinemann Medical Books Ltd.

⁶² Schaefer, H. (2017). Music-evoked emotions - current studies. In *Frontiers of Neuroscience*. 11:600.

⁶³ Zatorre, R.J. (2005). *Functional neuro-imaging: applications to music and auditory cognitive processing*. [Lecture Notes]. Montreal Neurological Institute, McGill University.

either self-chosen or test instruments sourced from a range of genres and styles to map and analyze brain function given specific stimuli. Neuro-imaging findings produced measurable phenomena clearly mapping the brain responding to different music stimuli in different regions of the brain; music with/without lyrics generating different levels of emotional intensity; the auditory cortex processing music separately from lyrics; lyrics acting as a key differential in creating emotion and mood; and music with sad lyrics generating sadder emotional responses, while instrumental music generating happier emotional responses. In (Schaefer, 2017. Ibid.):

Some pieces of music will invite an aesthetic attitude of the listener due to perceptual inputs by sensory impressions, due to more knowledge-based cognitive inputs, or due to emotional inputs. Some criteria that may underlie listeners' aesthetic judgments of music are suggested such as beauty, wittiness, originality, taste, sublimity, expression, complexity, use as art, artistic skill, emotion arousal, message, representation, and artistic intention. Certain criteria such as expression, emotional arousal, originality, skill, message, or beauty were considered as more important than others and different listeners tend to focus on different criteria. With its multi-level framework of everyday emotions and aesthetic judgment, the study might help to explain the occurrence of mixed emotions such as bitter-sweet combinations of joy and melancholy.

The sociologist methodology approach of Eco, (1977)⁶⁴, Frith (1983)⁶⁵, and Snow (1986)⁶⁶ places music within a social/cultural/semiotic framework. Eco et al argue that a musical work (emitter) cannot be described independently from the listener (receiver) due to its diversity of interpretations and perceptions and suggest that measurement aimed to capture meaning is inaccurate as music is perceived by a certain subject in a certain social and cultural context. However, researchers such as Tagg (1987, Ibid.) see this methodology as problematic:

Traditional musicology has tended to stay clear of viewing music as a symbolic system whose structures are considered as either references to or as interpretations, reflections, reconstructions or re-creations of experiences which are not necessarily intrinsically musical. This is, in short, a problem of musical semiotics.

According to the seminal music-and-emotion researcher Meyer (1956)⁶⁷:

There are particular elements (referred to as the “seven elements”) at interplay within a musical piece which determines the experience of “musical emotions”. The greater the build-up of suspense or tension, the greater the emotional release upon resolution.

Meyer argues that in music, emotion equates to arousal within the music and in the listener (measured clinically and termed as bradycardic or tachycardia - changes in heart rate in response to external stimuli). He also implies that conscious insight (eg. a musically trained listener) in this process reduces the emotional effect of music and vice-versa.

In Jansma & de Vries (1995)⁶⁸, the core issue of “does music induce emotion in the listener, or do we project emotion to music?” is explored, and they claim:

It is the latter opinion that is supported most frequently in music psychology research. Various studies demonstrate that a variety of physiological and psychological changes occur when listening to music, although it is not yet clear how these changes are brought about, related directly to musical qualities.

⁶⁴ Eco, U. (1976). *A theory of semiotics*. Bloomington & London. Indiana University Press.

⁶⁵ Frith, S. (1983). *Sound effects. Youth, leisure and the politics of rock-'n-roll*. London. Constable.

⁶⁶ Snow, R.P. (1987, June). Youth, rock 'n roll and electronic media. In *Youth & Society*. 18(4), 326-343.

⁶⁷ Meyer, L. B. (1956). *Emotion and meaning in music*. [Magazine]. Chicago: Chicago Press. New ConneXion (1998) - Journal of Conscious Evolution.

⁶⁸ Jansma, M. & Vries, B. de (1995). *Muziek en emotie* (pp.204-222). In: Evers, Jansma, Mak, De Vries (Eds). *Muziekpsychologie*. Assen: Van Gorcum.

Waterman (1992)⁶⁹ tested both trained and untrained listeners, and found that they differed in their qualitative responses, but not quantitatively in emotional responses:

Both explicit and implicit effects were evident in the qualitative data, with variation in both being greatest amongst untrained listeners. Performers exhibited both explicit and implicit effects. Explicit effects were more evident when referring to their own performance, and implicit effects were more evident in responses to the performance of the other instrumentalist.

Cognition, Influence & Meaning: Firstly, “cognition” is defined as the meaning-processing and meaning-processed system of a conscious mind - more than simply a state-of-mind (Mandler, 1984)⁷⁰. The issue of “cognitive penetrability” (Pylyshyn, 1989)⁷¹, or to what degree a cognitive process such as music can consciously influence a listener’s perception, is at the heart of the psychological debate of the effect of music:

We sometimes use the term “rational” in speaking of cognitive processes or cognitive influences. This term is meant to indicate that in characterizing such processes we need to refer to what the beliefs are about - to their semantics ... (cognitive penetration) is an influence that is coherent or quasi-rational when the meaning of the representation is taken into account. ” (Pylyshyn, 1989. Ibid).

THE LISTENER CONTEXT

How a listener “listens” - as a lifestyle activity or as a research informant - is shaped by both psychological factors and contextual factors. Current studies seem to suggest that music may mean different things for different people at different times and in different situations. When clinical trials are conducted to gather either scientific or sociological data, the respondent’s *profile* (musician, aficionado, or general consumer), *orientation* (pre-interview state of restiveness) and *acrophase* (state of arousal or valence) are key metrics for considerations.

The importance of respondent profiling (music background context) has been discussed earlier in this paper. From here, we look at the contextual aspects that build a full profile of a listener, and identify them under the 5W + H lens of “*Who?*, “*When ?*, “*Where?*, “*What?*, “*Why?*, “*How?*”.

A. Listener Profile - The “Who”

Nationality, Region, Socio-Economic, Ethnicity, Time, Gender, Age, Personal/Health Factors

B. Listening Form - The “Where”

Live vs Recording, Speaker vs Headphone, Home vs Venue vs Transit, Playback Format/s

C. Listening Orientation - The “When”

State of Rest/Acrophase (Arousal/Circadian Rhythm), AM vs PM, Work vs Leisure vs Health

D. Listening Menu – The “What”

The Elements of Music. Genre vs Sub-Genre vs Micro-Genre. Music vs Audio-Video vs Visual-Audio

E. Listening Purpose/Function - The “Why”

Why are you listening? Social, Emotional, Cognitive, or Arousal? Other ?

F. Listening Modes - The “How”

Cause-based (learn/feel), Semantic-focus (interpret/critique), Ambient-type (background/atmosphere)

Figure 30. Application of 5W + H to determine listening situational macro-variables.

⁶⁹ Waterman, M. G. (1992). Emotion in Music: Towards a new methodology for the investigation of appreciation. In *International Journal of Psychology*, 27, (3/4),189.

⁷⁰ Mandler, G. (1984). *Mind and body: Psychology of emotions and stress*. New York: Norton.

⁷¹ Pylyshyn, Z. W. (1989). Computing in cognitive science. In M. I. Posner (Ed.), *Foundations of cognitive science*. Cambridge, MA: MIT Press.

Based on these six metrics above (Figure 30.), there are a substantial number of situational macro-variables to form a profile of a listener; their listening locations; their physiological status at the time of listening; their preferred music forms; and purpose/function for listening. This reinforces the view that emotion/mood responses are impacted upon by *context* and of the need for wider test-group fields.

LISTENING MODE

Huron, D. (1999)⁷² in the reference list below (Figure 31.), defines the key music listening *modes*. For example, an “aficionado” such as a hardcore audiophile could be described as a *fault listener*, while an apex-listener such as recording engineer could be described as a *focused listener*. While both are hyper-critical listeners, the primacy of their listening mode purposes are quite different.

Allusive listening	Relates moments or features to similar moments or features in other music.
Directed listening	Selective attention to an element of complex texture, excluding all others.
Distance listening	Characterized by memorizing the work by segmentation or recapitulation.
Distracted listening	Pays no conscious attention to the music and is possibly unaware of it.
Ecstatic listening	Pleasurable sense from favourite music – a sensation of shivers/frisson.
Emotional listening	Engenders feelings of sorrow, joy, love etc from current times or the past.
Fault listening	Mentally lists faults and problems: Audiophile/gear; Conductor/ensemble.
Feature listening	Focus is identifying features: motif, distinctive rhythm, instrumentation.
Focused listening	Listener’s career is audio-manipulation focused: engineer, broadcaster.
Identity listening	The “What is...” listener: What’s the instrument? Who’s the composer?
Innovation listening	Vigilant listening to identify significant musical novelty or features.
Kinesthetic listening	Compulsion to move, to tap, to dance, or to conduct to the music.
Lyric listening	Attention to catching/singing-along with the lyrics and feeling the meaning.
Memory Scan listening	Knows by memory. Answers questions by mentally F-FWD through music.
Metaphysical listening	Not attentive to the music but thinking of questions related to it.
Performance listening	Conductors, musicians, or vocalists internally recreate gestures.
Programmatic listening	Imagines certain situations or scenes: rolling waves, mountain vistas.
Reminiscent listening	Remembrance of emotions experienced from past events.
Retentive listening	Listens to remember what is being heard eg. ear training.
Signal listening	A “listening-in-readiness” - state of a listener waiting for a cue or sign.
Sing-along listening	Presupposes that the listener is already familiar with the work.
Tangential listening	Engaged in thoughts traced to the music, but largely tangential to it.

Figure 31. Abridged description of the variety of Listening Modes. (Huron, 1999. Ibid.).

A listener’s preferred or automatic *mode* of listening to any given piece of music is a variable driven by either cause-based (learn/feel), semantic-focus (interpret/critique), or ambient-type (background/atmosphere) factors. And regardless of guided instructions given to the research participant by the researcher, the listener may naturally revert to their default “pattern” of consumption during the exercise - whether self-testing or under laboratory conditions.

The mode-list above is an effective diagnostic tool to determine, via a post-listening interview process, the particular form their listening experiences took. Combined with the listener *context* profile points, a clearer picture emerges as to which music-type evokes a critical response at a particular moment and under what listening conditions.

⁷² Huron, D. (1999). *Music cognition handbook: A glossary of terms*. Ohio State University. Retrieved from <http://csm1.som.ohio-state.edu/Music838/glossary.html>

MUSIC & COGNITIVE/PERCEPTUAL ENHANCEMENT ATTEMPTS

The following is a selection of three historical music | psychology case which gained global attention or notoriety, and where music products were proposed as functional tools or applied as effectors of behaviour.

The Mozart Effect: The therapeutic powers of music have long been considered to enhance certain cognitive abilities and stimulate higher brain functions. Mathematics and chess are also credited with this same capacity. In an article appearing in *Neuroscience Letters* (1995) entitled “Listening to Mozart enhances spatial temporal reasoning: towards a neurophysiological basis”, it was reported that 10 minutes of Mozart’s “Sonata for Two Pianos” K.448 (1784) resulted in an 8~9 point enhancement on a spatial IQ test. The “Mozart effect” became known to the world via a series of books and recordings by Don Campbell - the trademark holder of the name “Mozart Effect”.

“Sonata for Two Pianos K.448” (1784) W.A. Mozart | Vox STPL 510.780

Campbell popularized the notion that listening to Mozart (particularly his piano concerti) will temporarily increase a person’s IQ and could produce other beneficial effects on cerebral function. He recommended playing selected classical music to infants, in the expectation that it would benefit their mental growth. Schools reportedly played Mozart over PA systems, and even allowed students to wear portable listening devices prior to exams. In 1998, the governor of Georgia⁷³ was so impressed that he announced that every child born in Georgia, USA would receive a classical music CD. An abstract from the original researchers is printed below:

Motivated by predictions of a structured neuronal model of the cortex, we performed a behavioral experiment which showed that listening to a Mozart piano sonata produced significant short-term enhancement of spatial-temporal reasoning in college students. Here we present results from an experiment which replicates these findings and shows that (i) ‘repetitive’ music does not enhance reasoning; (ii) a taped short story does not enhance reasoning; and (iii) short-term memory is not enhanced. We propose experiments designed to explore the neurophysiological bases of this causal enhancement of spatial-temporal reasoning by music and begin to search for quantitative measures of further higher cognitive effects of music. (Rauscher, 1995)⁷⁴

However, this is a disputed set of research results. The “Mozart effect” was challenged by researchers Steele et al (1999)⁷⁵:

The results show that listening to the Mozart sonata produced no differential improvement in spatial reasoning in any experiment. The sonata had no effect on performance, as revealed by analyses for main effects and several interactions, and for individual improvement from the pretest. When SAS scores were translated into IQ-point equivalents, listening to Mozart produced a 3-point increase relative to silence in one experiment and a 4-point decrease in the other experiment. Conversion of the Mozart and silence comparisons into a measure of effect size indicated that the music had little impact. A requiem may therefore be in order.

and in Jones & Zigler (2002)⁷⁶:

⁷³ Sack, K. (1998, January 15). *Georgia’s Governor Seeks Musical Start for Babies*. New York Times. Section A. Page 12.

⁷⁴ Rauscher, F., Shaw, G., and Ky, K. (1995, February 6). Listening to Mozart enhances spatial-temporal reasoning: towards a neurophysiological basis. In *Neuroscience Letters*. Volume 185, Issue 1, Pages 44-47.

⁷⁵ Steele, K., Dalla Bella, S., Peretz, I., Dunlop, T., Dawe, L. A., Humphrey, G., Shannon, R., Kirby Jr., J., & Olmstead, C. (1999). Prelude or requiem for the ‘Mozart effect’? In *Nature*, 400, 827.

⁷⁶ Jones, S. and Zigler, E. (2002, May~June). The Mozart effect: Not learning from history. In *Journal of Applied Developmental Psychology*. Volume 23, Issue 3, Pages 355-372.

This paper critiques the links between recent reports on the impact of early experience on the developing brain and proposed policies and interventions for young children. Using the “Mozart effect” as a contemporary example, as well as several examples from history, the case is made that brain research is being misappropriated to the service of misguided, “quick fix” solutions to more complicated, systemic issues. The paper concludes with a brief summary of research that, by contrast, illustrates the substantive contribution of high quality, intensive, multi-domain interventions to early cognitive and social development.

“Mozart effect” researcher Frances Rauscher⁷⁷ herself has disclaimed this idea:

Our results on the effects of listening to Mozart’s Sonata for Two Pianos in D Major K. 448 on spatial–temporal task performance have generated much interest but several misconceptions, many of which are reflected in attempts to replicate the research. The comments by Chabris and Steele et al. echo the most common of these: that listening to Mozart enhances intelligence. We made no such claim. The effect is limited to spatial–temporal tasks involving mental imagery and temporal ordering. Second, it is frequently suggested or stated that exposure to the right kind of music in childhood has a lasting, beneficial effect. On programs like these, I don’t think it can hurt. I’m all for exposing children to wonderful cultural experiences. But I do think the money could be better spent on music education programs.

However, some studies and claims continue to support the “Mozart effect”, with a recent announcement published by the European College of Neuropsychopharmacology (2020)⁷⁸:

A new comprehensive analysis on the effect of Mozart's music on epilepsy has confirmed that listening to his piano music can reduce the frequency of epilepsy attacks. The results of this comprehensive meta-analysis (a study of studies), which may overturn current skepticism about the effect, are presented at the ECNP congress after recent publication in a peer-reviewed journal. They found that listening to Mozart, especially on a daily basis, led to a significant reduction in epileptic seizures, and also to a reduced frequency of abnormal brain activities in epileptic patients (called interictal epileptiform discharges, which are commonly seen in epileptic patients). These effects occurred after a single listening session and were maintained after a prolonged period of treatment.

But in closer examination of the claims, critics noted that “This is a review of research, and not original research.” (Solender, 2020. Ibid.) and indicated that while non-invasive techniques for therapeutic practice were strongly desired, deeper and more consistent studies were needed.

Wagner & Music as Propaganda: Music has been re-packaged for use as political motivation or manipulation. Music-appropriation for inclusion at political events continues today, however, artist have more control over its usage. US President Donald Trump was blocked by artists and bands such as Adele, Rihanna, R.E.M., Aerosmith, Neil Young, Elton John, Earth Wind & Fire, Rolling Stones, Queen et al in using their tracks for his political rallies or events⁷⁹.

The 19th Century music of Richard Wagner was a significant propaganda tool used by the Germans in WW2⁸⁰. Wagner’s (and Anton Bruckner’s) works were the only allowable music to be broadcast out of radios in German homes during the war period. Its nationalistic themes

⁷⁷ Goode, E. (1999, August 3). *Mozart For Baby? Some Say, Maybe Not*. New York Times. Section F. Page 1.

⁷⁸ (n.a.). (2010, September 11). Is the Mozart effect real? New analysis indicates that music can help epilepsy. In *Medical Xpress*. Retrieved from <https://medicalxpress.com/news/2020-09-mozart-effect-real-analysis-music.html>

⁷⁹ Solender, A. (2020, June 28). All the Artists who have told Trump to stop using their Songs at his Rallies. In *Forbes*. [Magazine]. Retrieved from <https://www.forbes.com/sites/andrewsolender/2020/06/28/all-the-artists-who-have-told-trump-to-stop-using-their-songs-at-his-rallies/>

⁸⁰ Neuschwander, D. (2012, December). Music in the Third Reich. In *Music Offerings*. 3(2):93-108.

and martial feel suited the Nazi war machine's 'beat'. Richard Wagner himself (1813~ 883) was considered anti-Semitic and hence was a 'good-fit' for the 3rd Reich's imagery and 'genocidal agenda'.

"Ride of the Valkyries" (1890) Richard Wagner | Columbia MS 7141

His music was used extensively by Joseph Goebbels' propaganda machine to exploit the Aryan race myth - even though Wagner died 50 years prior to the emergence of Adolf Hitler and the Nazi movement. Yet there is no evidence that Wagner included overt political or anti-Semitic ideas within his operatic and orchestral works, though he was well-known for expressing his antisemitic criticisms in the forms of essays and books - though reportedly fueled by his anger with wealthy German-Jews not willing to invest in his productions.

It's all there, in Wagner's boasting, his constant lecturing, his desire to deliver monologues on every possible subject, an unspeakable immodesty - all that a role model for Hitler - certainly there is plenty of 'Hitler' in Wagner. (Mann, T., 1949)⁸¹.

Wagner is credited with being a musical innovator, transforming musical thought, and pointing the way to greater 'emotion' and 'meaning' in music. But the deep and dark legacy of the Nazi partnership with the music of Wagner continues today - including the sustained boycott of Wagner's works in Israel⁸². The psychological impact of Wagner's music is profound. "Wagner the man" and the "Nazi Propaganda machine" are inseparable in the Jewish psyche. His music was re-interpreted/re-packaged for use as mental manipulation and coercion of the German populace. It was either a repurposing of his music and something Wagner did not imagine would be actuated from his writing, or specifically intended. Critics believe the latter:

There are pre- and subconscious processes that enter into his work, whereby more is expressed than its creator intended. (Micha Brumlik, 2017)⁸³

"Paul is Dead": Much was made of the image of a barefoot Paul McCartney on the cover of The Beatles' "Abbey Road" (1969). The rumour circulated that Paul had died, while in fact he was on holidays. Urban legend stated that the vinyl album also had a feature that if you wound the record backwards after the last track, with the needle still in the groove, you could hear the words "Paul is dead" on a loop. The marketing arm of the music industry has always sought fresh angles to get an edge - mostly through tricks-of-the-trade in the studio such as subliminal sounds (sound/messages recorded at higher frequencies/speed picked up by the subconscious) and backmasking (deliberate sound/message recorded in reverse onto a track). However, an infamous event in Rock history occurred in 1985 which reverberated across the music industry:

December 23, 1985: Raymond Belknap (18) and James Vance (20), after six hours drinking, smoking marijuana, and listening to the album "Stained Class", each man took a shotgun and killed or maimed himself.

"Better By You, Better Than Me" (1978) Judas Priest | CBS S6077

In 1990, the trial of Judas Priest (1990)⁸⁴, the parents' Lawsuit Claim (Vance v. Judas Priest 1990, 31) stated that British Heavy Metal band Judas Priest had hidden subliminal messages into the album "Stained Class" in their cover-version of the Spooky Tooth song "Better By

⁸¹ Mann, T. and Adorno, T. (2006). *Correspondence 1943-1955: Theodor W. Adorno & Thomas Mann*. Polity. Retrieved from <http://www.the-wagnerian.com/2016/08/a-letter-from-thomas-mann-to-theodor.html>

⁸² Biran, J. (2020, January 28). Richard Wagner's troublesome history in Israel. In *Jerusalem Post*. Retrieved from <https://www.jpost.com/Israel-News/Culture/Richard-Wagners-troublesome-history-in-Israel-615645>

⁸³ Brumlik, M. (2017, July 28). *Hitler and his Bayreuth*. [Symposium]. Retrieved from <https://www.bayreuther-festspiele.de/programm/diskurs-bayreuth/archiv-diskurs-2017/>

⁸⁴ Moore, T. (1996, January). Scientific consensus and expert testimony: Lessons from the Judas Priest trial. In *Skeptical Enquirer*. 20.6.

You, Better Than Me”, thereby influencing the suicide pact. Expressions such as “try suicide”, “do it”, and “let’s be dead” were claimed to be the triggers for their fatal actions. The key finding of the Court was:

The scientific research presented does not establish that subliminal stimuli, even if perceived, may precipitate conduct of this magnitude.” (Justice J. Whitehead:) (Ibid).

But it was a wake-up call to society and the music industry - especially the *Shock Rock* and *Metal* bands sub-genre. Soon the ubiquitous "Disclaimer" statements appeared on all album releases. Psychologists usually attribute the causes to:

Subliminal Message: A message, either auditory or visual, presented below the normal limits of human auditory or visual perception.
Pareidolia: Psychological phenomenon where the mind responds to a stimulus (image/sound) perceiving a familiar pattern where none exists.
The Observer-Expectancy Effect: Perception can be influenced by expectation, habituation, imprinting, prejudices, predispositions, or priming.

In contrast, Brown & Volgsten (2006. Ibid.) argue that music is indeed powerful at manipulating social behaviour, and this is embedded in us from infancy through to adulthood via rituals (social gatherings, religious ceremonies, political rallies), and it is an “emotive manipulator”. The Judas Priest “lyric” carries the message with the music underscoring its tone and its emotional intensity.

MUSIC & PHYSIOLOGICAL/PSYCHOLOGICAL TRIGGERS

An approach combining Music Psychology, particularly *Psychoacoustics* (how we perceive sound), and Music Appreciation, particularly *Back-Story* (music’s creative/performative elements and background) is critical to determine human physiological/psychological triggers.

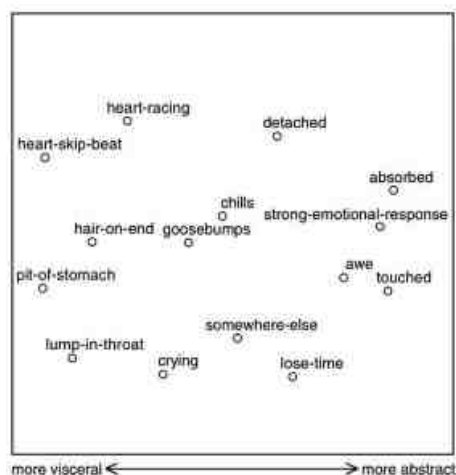


Figure 32. Aesthetic Experience Scale (Sachs, 2016)⁸⁵

This chart plots 15 human emotional responses against 2 x axes. The horizontal axis represents the degree of *visceral vs abstract* response, and the vertical axis represents *human heart rate* between rest and hyper-excited states during the viewing of a diverse range of film. While *acrophase* (the mood prior to testing), *habituation* (conditioned through repetition), and *novelty* (the first-time exposure to test-instrument) play a part in the heart-rate response, the plot-points also take into account the concept of mixed-emotions eg. “chills”. A similar test (Kim et al., 2011)⁸⁶ for a mood classification model tested for responses based on Hevner’s adjective circle and Russell’s circumplex model of emotion (Sachs, 2016.Ibid.).

However, do we all feel chills from the same stimuli at the same time?

Humans uniquely appreciate aesthetics, experiencing pleasurable responses to complex stimuli that confer no clear intrinsic value for survival. However, substantial variability exists in the frequency and specificity of aesthetic responses. While pleasure from aesthetics is attributed to the neural circuitry for reward, what accounts

⁸⁵ Sachs, M., Ellis, R., Schlaug, G., and Loui, P. (2016, March 16). Brain connectivity reflects human aesthetic responses to music. In *Social Cognitive and Affective Neuroscience*. Vol.0, No.0. Oxford.

⁸⁶ Kim, J., Lee, S., Kim, S., and Yoo, W. (2011, February 13-16). *Music mood classification model based on arousal-valence values*. Retrieved from http://www.icact.org/upload/2011/0386/20110386_finalpaper.pdf

for individual differences in aesthetic reward sensitivity remains unclear. (Sachs et al, 2016. Ibid).

Muzak: a broad term used to name/bundle *music in a public space* and originally trademarked in 1926, is now owned and rebranded as MOOD: or Mood Media (<https://moodmedia.com>). This ubiquitous *background music* is likely the precursor to today's music relaxation and new-age therapy movement, and a globally shared aesthetic experience. Designed to be passive, people are generally unaware or unaffected by its presence ie. habituated. Impact registers subliminally as music with a metre of 60~70bpm (heartrate at rest); below 60 dB (conversation level); and positive playlists (curated music genres) places it in "stealth" mode. Its purposes and effects have been widely studied⁸⁷ and their results implemented in functional situations⁸⁸. Market researchers have found that if in-store music is reduced from 100bpm to 60bpm, the speed of the average shopping trolley also slows down, increasing shopper-duration in-store and increasing the number of purchases made by 30~40% (Milliman, 1982. Ibid).

Designed to be 'passive', the success of Muzak lies in the fact that it is not supposed to be noticed (termed "Distracted Listening"). The target response by the music creator is in fact for the listener not to listen, to be unaware and unaffected by it - but in a psychological sense the music is registering subliminally ie. *to be somewhere else* or *lose time* as above (Figure 32).

Extending that aesthetic experience to consciously consumed music products, the following recordings, with accompanying YouTube *cues*, are renowned for evoking the physical response of "frisson" (goosebumps). Each sample has a different sound-palette, a unique timbral quality, and contrasting music genre:

Example #1: Audio/Visual samples - Movie soundtrack - Score vs Song-score.

"The Ecstasy of Gold" (1966) Ennio Morricone - from Original Motion Picture Soundtrack.
In this music-cue, Morricone's stated express-purpose was to create a chills/goose-bump effect.
From "The Good, The Bad And The Ugly" | UA Records UAS5172 | https://youtu.be/IE5_NadMdQ

"Stuck In The Middle With You" (1972) Stealers Wheels (Band) - Single/EP.
Quentin Tarantino heavily uses visual-source + song-score (live + existing popular-music) in his films.
From "Reservoir Dogs" (1992) | MCA Records MCAD-10541 | <https://youtu.be/U9r1BE0KM-w>

Example #2: Audio samples - Live performance - Rock vs Classical.

"Seven Days" (1993) Sting | A&M Label 31454-0075-2 | <https://youtu.be/EV0rJ6rvWbw>
From "Ten Summoner's Tales", with 5/4 metre | Reggae groove | Broadway Musical chord-patterns, 17 x Grammy-winner Sting's aim was to place his musicians in a performance situation totally out of their comfort-zone.

"Duo des Fleurs" (2017) Sabine Devieille | Warner B075QX4RB2 | https://youtu.be/C1ZL5AxmK_A
From the soundstage recording of "Mirages", operatic coloratura-soprano Sabine Devieille is a Grammy-winning artist and showcasing her signature opera role of "Lakme" with soprano Marianne Crebassa and full orchestra.

Physiological and Psychological responses: The three most notable physiological reactions to psychological and psychoacoustic phenomena are *frisson* (pleasure), *tension* (discomfort), and *chills* (mixed emotions). Selecting music samples based on Tagg's (ibid.) trichotomy of genre streams (art | folk | popular), below are soundtracks with accompanying YouTube *cues* that would be particularly suitable for test instrument selection - **Classical** (*art music*), **Jazz** (*folk music*), **Soul** (*popular music*):

⁸⁷ Plourde, L. (2017, January). Sonic air-conditioning: Muzak as affect management for office workers in Japan. In *The Senses and Society*. 12(1):18-34.

⁸⁸ Milliman, E. (1982). Using background music to affect the behavior of supermarket shoppers. In *The Journal of Marketing*. Vol.46, No.3 (Summer). Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/1251706>

Example #3: Frisson - the goosebump phenomena or “Ecstatic Listening” mode.

“Fantasia on a theme of Thomas Tallis” (1910) Vaughan Williams - “Frisson” at its best.
This used 2 x String Orchestras, separated by distance, yet with one conductor, in a cathedral.
Argo ZRG 696 | <https://youtu.be/ihx5LCF1yJY>

Example #4: Tension - a tightening of muscles or “Performance Listening” mode.

“Giant Steps” (1960) John Coltrane - The “most feared” song in jazz.
Pianist Tommy Flanagan’s impro really struggled with Coltrane’s chord progressions.
Atlantic SD 1311 | <https://youtu.be/30FTTr6G53VU>

Example #5: Chills - a shiver sensation or “Ecstatic and Emotional Listening” modes.

“I Heard It Through The Grapevine” (1968) Marvin Gaye - Popular Music before Auto-Tune
A *cappella* version (vocal-stem only) shows the vocal-artistry of one Soul’s greatest singers.
Tamla T 54176 | <https://youtu.be/87FjkqtK67o>

How A Composer Make Us “Feel”: Composers have a comprehensive knowledge of all music styles. They exploit our pre-conceived or conditioned notions of mood, atmosphere, or feelings. They then harness compositional devices, instrumentation characteristics, and arranging techniques to push the emotion of the moment. This YouTube *cue* is a piano-composition of “Playing Love” from the key piano solo in a movie, and a pivotal point in the storyline itself ...

“Playing Love” (1998)⁸⁹ Ennio Morricone
Morricone was an iconic composer in both classical and film-music spheres.
Sony Classical SK 66767 | <https://youtu.be/DTogQjE9d1w>

The overall music theme of this work is “Unrequited Love”. The focal character, the pianist in the movie (‘1900’), is recording a piece while on an ocean-liner, inspired by a beautiful young woman on the ship he has seen and adores from afar, but has never had the courage to meet. This composition is shaped in the “form” of:

Scherzando → *Espressivo* → *Dolce* → *Grave* | *Playfulness* → *Desire* → *Tenderness* → *Sadness*

It is a representation of a dream-scenario in 1900’s mind ... eg. music mimicking his grand-entrance full of braggadocio; to words of flattery/desire; through to his inner romantic feelings; and then ending with a tone of self-realization that “Alas, it will never be ...” emotion. The composition is music-painting his internal thoughts that he cannot express externally.

In 1996, during an interview recorded with the late Brian May⁹⁰ (internationally known Australian screen composer: *Mad Max 1 & 2*, *Patrick*, *Gallipoli*, *Harlequin*, *Dr Giggles*, *Nightmare on Elm St: Freddy’s Dead* et al), and who worked under Bernard Hermann and Nelson Riddle, he was asked how he ‘created’. This is a brief excerpt into his creative process:

I create thickness, weight, and density in sound through various instrument combinations, musical effects or elements, and borrow from composing styles such as Expressionist, Impressionist, or Classicism. For example, when I want to create a sense of loneliness, I write for a solo English Horn (Cor Anglais). When I require a

⁸⁹ Tornatore, F. & Tornatore, G. (1998). *The Legend of 1900*. [Motion Picture]. Italy. Sciarlo Medusa Film.

⁹⁰ May, Brian. “Film Music Composing”. Interview by Michael Di Stasio. Griffith University, Gold Coast. April 1994. Public Lecture.

dark mood, I choose Violas playing bass notes. For a military feel I write Brass fanfares. For 'royalty' I compose close-harmony parts for French Horn, and when I write for shock-value, then high-sustained notes on Strings gives the message.

Music Therapy: Any discussion about music and emotions would not be complete without reference to the 'new age' world of Music Therapy. The proliferation of music relaxation and therapy recordings, likely originating from Muzak in the 1920's and the *Minimalist Music* movement in the 1960's, may give further insights into the 'how' and 'why' of music's impact.

With themes such as: Music for Healing; Music to 'de-stress' you; Music for Relaxation; Music for Inspiration; Music to transport you; and Music for Mood, they borrow music and sounds from all styles and genres, and include nature/earth sounds, ethnic instruments (eg. Indonesian 'gamelan' and its reputed ability to 'heal' via its sound vibrations), and of course, sophisticated electronic sounds and vocals.

John Sozra says he is a sound artist and that he approaches the time and space of music much like an abstract painter approaches canvas. The music ranges from perky, 'up' tempo to warm, rich spaces of sound to 'snuggle into'; from trance-inducing repetitive patterns to memorable melodies. (Stone, 1998)⁹¹.

Perception/Sensory phenomena: A left-field consideration in respondent assessment is the phenomena of the Mondegreen Effect⁹² (mishearing/misinterpretation) and McGurk Effect⁹³ (mixed auditory/visual signals). How audio can play illusions and how the eye can affect what you hear, are forms of confirmation bias. Misheard lyrics or where visual sources produce clearer information than the audio sources can lead to confusion. In addition, an inability to identify timbres in music⁹⁴ can affect perception of music emotion. These psycho/neural responses are a response characteristic to track but can be pre-emptively solved or minimized by ensuring test instrument media of high resolution - both audio and visual.

DISCUSSION

Currently, research into identifying and understanding the specific *musical quality* that produces the physiological and psychological conditions for an emotion/mood response is generating imprecise results. This is largely to do with the temporal nature of music itself. In other artforms such as painting or sculpture, the image is static and remains present. Only the duration of the viewer's time spent with the object varies, while the sound and/or words of a song quickly pass leaving only fleeting evidence in the listener's mind. No studies have revealed specifically 'why' music is effective in modifying behaviour or why it stimulates physiological responses. Nor have they identified the fundamental musical essence as to 'how' or what specific 'property' of music achieves this or any effect.

Most of the experimental research techniques used in the measuring of emotion and music have also come under criticism for their theoretical and methodological approach, and as a result, their findings have been subject to review or are inconclusive. For example, those who subscribe to the 'music induces response' argument may fail to account for the fact that in another location, at a different time, and in a different mood, the song may evoke something else entirely for the listener. But perhaps the most profound hole in the analysis phase seems to be that the following question appears to be omitted in the process of investigative trials ... "What emotion do you want to feel when you listen to this music?" As a result, *listening context* and *listening mode* are critical to use as a template to understand the phenomena.

⁹¹ Sozra, John. (1998). *Canvas of the Mind: CD Review*. Interview by Lee Stone. ConneXion Magazine. USA.

⁹² Connor, S. (2009, February 14). *Earslips: Of mishearings and Mondegreens*. Columbia University. Retrieved from <http://www.steveconnor.com/earslips/>

⁹³ McGurk, H., and MacDonald, J. (1976). Hearing lips and seeing voices. In *Nature*. 264 (5588):746-748.

⁹⁴ Hailstone, J., Omar, R., Warren, J. et al. (2009, November 1). It's not what you play, it's how you play it: Timbre affects perception of emotion in music. In *Quarterly Journal of Experiential Psychology*. Sage.

It remains an ongoing challenge to discover this *music-singularity* and develop a general theoretical framework explaining emotion/mood effects. We know that it occurs but deriving conclusions as to what that core ingredient of music is remains elusive. This seems to be due to a shortfall in the methodologies used in exposing the listener to the multiplicity of musical parameters: recognizing the impact that transient life-mood states have on listeners asked to respond to (emotional) stimuli in a clinical trial; and finding a framework to synthesize these experiences to find a convergence in human response. A song replayed in a different location, at a different time, with the listener in a different mood-set may evoke an entirely different response, and why integrating listening *context* and *mode* into a research plan is critical.

Reflecting on the many music cues included in this paper, and their core purpose for inclusion:

Researchers, in their hunt for test instruments in this field, have by-and-large fallen back on the standard menu of music choices rather than emotionally evocative content, as well as testing for base emotions rather than mixed emotions or amplified emotional scenarios. In addition, the music is simply “played” with scant information presented about it to the participant - no backstory, no insights as to what was in the mind of the composer, no framework for what may transpire in the piece. The strategy has always been through “surprise” in measuring arousal or valence, and assuming the listener has or has not any knowledge of the tracks used. Invariably, these test-instrument tracks are short (an average of 8~10 music samples of 30 seconds duration each - as reported in Eerola & Vuoskoski, 2012. Ibid.).

A strategic approach would be to curate an innovative test instrument set: *longer selections* (full music cue) with background analysis of the composition provided (“Playing Love” (1998) Ennio Morricone) to evaluate the “romantic” quotient; *extended play* (full “concept” LP) of an entire album just as the artists intended it to be listened to (“Sgt Pepper’s Lonely Hearts Club Band” (1967) The Beatles); *epic tragedy* (experimental music cue) with its back story explained (“Threnody to the Victims of Hiroshima” (1960) Krzysztof Penderecki) and a virtual sense of horror; *dystopian dream* (audio/visual cue) of ultra-violence (“Stuck In The Middle With You” (1972) Stealers Wheels) to push emotive/shock buttons; *physiological response* (frisson cue) generating a palpable physical reaction (“Duo des Fleurs” (2017) Sabine Devieille & Marianne Crebassa); *live event* (musician and audience interaction) to be in a sea of like-minded feelings (“Danse Espagnole” (1982) Itzhak Perlman). Such an approach not only triggers emotion/mood response but also stirs more intense comment and feedback from the respondent, as the material makes a “connection”. This is a way forward.

CONCLUSION

As this was a theoretical paper, its aim was to identify the gaps in current music and emotion/mood research design and implementation, and to propose recommendations for future research processes. However, it was abundantly clear from the outset that researchers were seeking real-world responses to internalized feelings from participants immersed in artificial environments with little personal connection to the test instruments used. With test subjects drawn by convenience rather than streamed via music-consumption background, measurement of resultant responses is too generalized. Rationale for the selection of test instruments was a further follow-the-pack approach with the dominance of classical music, and some adjunct genres, as the source material. The stimuli selected to elicit emotional responses needs to match the reaction-model the researcher believes will generate that emotion/mood.

In addition to the need to develop curated, purpose-designed music stimuli, and to source a representative cross-section of listener profiles for testing, a critical feature for inclusion in the process is listening-location variance ie. from laboratory to home to mall to commuting to vehicular to venue - rather than static clinical environments. An atmosphere or location context conducive to extracting a personal response has generally been omitted from research practice - unless the participant has completed a self-evaluation out of the laboratory. The emotional intensity of music engagement also measured outside of the clinical environment may provide deeper and more focused responses and insights.

Along with the importance of source material and listening environments is the quality of the transmitted sound. From the perspective of an audiophile or music connoisseur, asked to participate in a study, and listening to music through consumer-level equipment, this has a negative impact on their response - likely frustrated or distracted by the sub-sonic quality. Audio quality perception or reception can have a direct impact upon the listening experience and emotional response - whether analogue or digital, live or recorded, standard or high-resolution formats. However, regardless of the participant profile, thought should go towards sound playback formats and equipment that brings the participant as close to possible to having the artist/s in the room with them - maximizing the emotional arousal and valence level of the music, and thereby unleashing its full sonic spectrum.

Whether scientific, sociological, or theoretical research in this field, the respondent's *profile* (musician, aficionado, or general consumer), *orientation* (pre-interview state of restiveness) and *acrophase* (state of arousal or valence) are critical to ascertain. This *listening context* data pre/during/post testing provides the background for preparation, implementation, and analysis of the research project. But of even deeper importance is to determine the *listening mode* or "how" the respondents are listening - *causal* (to learn or feel), *semantic* (to interpret or critique), and *ambient* (for background or atmosphere). These data fields of context and mode can then act as the template for measuring emotion/mood. It also eliminates the risk of bias or the Hawthorne effect (McCambridge et al, 2014)⁹⁵ where participation in research, particularly activities that probe inner personal feelings, have effects and consequences when the participant is aware of being studied.

There is an abundance of music and emotion/mood studies, with a large majority following a predominantly Classical Music | Lab/Self Testing | Easy-access Respondent research model. The need for a renewed approach, to avoid well-worn pathways leading to inconclusive or broad findings, is evident. The template of *systematic musicology* which encompasses all music disciplines, and a *mixed method* research format which integrates quantitative/qualitative investigative methods, would form a unified model to better examine the physiological, psychological, biological, neurological, and metaphysical determinants of emotion/mood in music, or in particular, "how does music evoke or induce emotion?"

REFERENCES

- Bailes, F., Bishop, L., Stephens, C., & Dean, R. (2012, December 3). Mental imagery for musical changes in loudness. In *Frontiers in Psychology*. Retrieved from <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2012.00525>
- Bamberger J. & Brofsky H. (1975). *The art of listening: Developing musical perception*. Harper & Rowe. NY.
- Bannach, A. (2013). *An extended analysis of Krsysztof Penderecki's Threnody to the Victims of Hiroshima*. URL www.anthonybannach.com/uploads/2/1/6/7/21674290/pendereckipaper.pdf
- Berlyne, D. E. (1971). *Aesthetics and psychobiology*. New York: Appleton Century-Crofts.
- Bhat, A., S. Prasad, N., & Mohan D., M. (2014). *An efficient classification algorithm for music mood detection in western and hindi music using audio feature extraction*. 2014 Fifth International Conference on Signal and Image Processing, pp. 359-364.
- Big Picture Group | Google Brain (n.d.). *Music Timeline*. Google Research. Retrieved from <http://research.google.com/bigpicture/music/#>
- Biran, J. (2020, January 28). Richard Wagner's troublesome history in Israel. In *Jerusalem Post*. Retrieved from <https://www.jpost.com/Israel-News/Culture/Richard-Wagners-troublesome-history-in-Israel-615645>
- Bischoff, K. Firan, C., Paiu, R., Nedjl, W., Laurier, C., & Sordo M. (2009, October 26-30). *Music mood and theme classification - a hybrid approach*. [Conference]. ISMIT 2009. Kobe.
- Blumstein, D., Bryant, G., and Kaye, P. (2012, June 13). The sound of arousal in music is context dependent. In *Animal Behaviour*. The Royal Society Journal.
- Bowie, D. (2018, June 14). *Let's Dance*. [Video]. YouTube. URL https://youtu.be/VbD_kBJc_gI

⁹⁵ McCambridge, J., Witton, J., & Elbourne, D. (2014, March). Systematic review of the Hawthorne effect: New concepts are needed to study research participation effects. In *Journal of Clinical Epidemiology*. 67(3): 267-277.

- Branger, J. (2019, January). Un critique musical et musicologue a l'ecoute de son temps: Louis Schneider et Claude Debussy (1895-1934). In *Revue de musicologie*, JSTOR, 2019, 105 (2), pp.317-356.
- Brattico, E., Alluri, V., Bogert, B., Jacobsen, T., Vartiainen, N., Nieminen, S., and Tervaniemi, M. (2011, December 1). A functional MRI study of happy and sad emotions in music with and without lyrics. In *Frontiers of Psychology*. Retrieved from <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2011.00308>
- Brown, S, and Volgsten, U. (2006, January). *Music and manipulation: On the social uses and social control of music*. Berghahn Books.
- Brumlik, M. (2017, July 28). *Hitler and his Bayreuth*. [Symposium]. Retrieved from <https://www.bayreuther-festspiele.de/programm/diskurs-bayreuth/archiv-diskurs-2017/>
- Burunat, I., Brattico, E., Puolavali, T., Ristaniemi, T, Sams, M. & Tiivainen P. (2015). *Action in Perception: Prominent Visuo-Motor Functional Symmetry in Musicians during Music Listening*. PLoS ONE 10(9): e0138238.
- Carpool Karaoke. (2016, August 5). *Quando Quando Quando | The Songaminute Man*. [Video file]. YouTube. URL <https://youtu.be/Pf0sFRm5yyl>
- Carter, D. (2017, December 19). *Show It 2 Me*. [Video]. YouTube. URL <https://youtu.be/SsFa5JhSDH4>
- Colombetti, G. (2009, August). From affect programs to dynamical discrete emotions. In *Philosophical Psychology*. 22(4):407-425.
- Connor, S. (2009, February 14). *Earslips: Of mishearings and Mondegreens*. Columbia University. Retrieved from <http://www.steveconnor.com/earslips/>
- Crauwels, C. [Kwinten] (n.d.) *Musicmap | The Genealogy and History of Popular Music Genres*. [Web]. Retrieved from <https://www.musicmap.info/>
- Creswell, J. and Plano Clark, V. (2011). *Designing and conducting mixed methods research*. Sage.
- Di Stasio, M. (1996). Lights, camera, action. In *Queensland Journal of Music Education*. 4(1). 24-31.
- Di Stasio, M. (2019). Red Bull Studios. [Photo]. Facebook. Retrieved from <https://tinyurl.com/RedBullAmphionTokyo>
- Deutsch, D. (2007). Music Perception. In *Frontiers in Bioscience*. 12(8-12):4473-82.
- Driscoll, M., Bollu, P, & Tadi, P. (2020, July 31). *Neuroanatomy, Nucleus Caudate*. StatPearls Pub. FL.
- Dumont, D. (2014, February 20). *I Got U*. [Video]. YouTube. URL https://youtu.be/FHCYHldJi_g
- Eco, U. (1976). *A theory of semiotics*. Bloomington & London. Indiana University Press.
- Eerola, T., and Vuoskoski, J. (2013, February). A Review of Music and Emotion Studies: Approaches, Emotion Models, and Stimuli. In *Music Perception. An interdisciplinary Journal*. Vol. 30. Issue 3. pp. 307-340.
- Ekman, P. & Davidson, R. (1994). *The nature of emotion: fundamental questions*. Oxford University Press. USA.
- Fabbri, F. (1981). *A theory of musical genres: two applications*. Popular Music Perspectives. (Eds. D. Horn and P. Tagg; 1982, Göteborg and Exeter: International Association for the Study of Popular Music, p. 52-81)
- Francis, P., Furuya, S., Masuko, T., & Nakahara, H., (2011, June). International Journal of psychophysiology 81(3): 152-8. *Performing music can induce greater modulation of emotion-related psychophysiological responses than listening to music*.
- Frith, S. (1983). *Sound effects. Youth, leisure and the politics of rock-'n-roll*. London. Constable.
- Furuya, S., Oku, T., Miyazaki, F. et al. (2015). Secrets of virtuoso: neuromuscular attributes of motor virtuosity in expert musicians. In *Nature. Sci Rep* 5, 15750.
- Gabriel, P. (1993). *Xplora1: Peter Gabriel's Secret World*. [Interactive CD-ROM]. MacPlay.
- Goode, E. (1999, August 3). *Mozart For Baby? Some Say, Maybe Not*. New York Times. Section F. Page 1.
- Hailstone, J., Omar, R., Warren, J. et al. (2009, November 1). It's not what you play, it's how you play it: Timbre affects perception of emotion in music. In *Quarterly Journal of Experiential Psychology*. Sage.
- Harrer, G. & Harrer H. (1977). Music, emotion, and autonomic function. In M. Critchley and R.A. Henson (Eds.). *Music and the Brain: Studies in the neurology of Music*. London: William Heinemann Medical Books Ltd.
- Howland, K. & Rogers, K. (2016, July). *Music Therapy*. Encyclopedia Britannica. Retrieved from <https://www.britannica.com/topic/music-therapy>
- Hruby, D. (1975). *An analysis of George Crumb's Ancient Voices of Children*. Michigan State University.
- Huron, D. (1999). *Music cognition handbook: A glossary of terms*. Ohio State University. Retrieved from <http://csmi.som.ohio-state.edu/Music838/glossary.html>
- Jansma, M. & Vries, B. de (1995). *Muziek en emotie* (pp.204-222). In: Evers, Jansma, Mak, De Vries (Eds). *Muziekpsychologie*. Assen: Van Gorcum.
- Jones, S. and Zigler, E. (2002, May-June). The Mozart effect: Not learning from history. In *Journal of Applied Developmental Psychology*. Volume 23, Issue 3, Pages 355-372.

- Kim, J., Lee, S., Kim, S., and Yoo, W. (2011, February 13-16). *Music mood classification model based on arousal-valence values*. Retrieved from http://www.icact.org/upload/2011/0386/20110386_finalpaper.pdf
- Lamere, P. [Peter] (n.d.). *Music Pop-corn*. [Web]. Spotify for Developers - Web API. Retrieved from <https://developer.spotify.com/community/showcase/music-popcorn/>
- Lane, A., Beedie, C., and Terry, P. (2005, September). Distinctions between emotion and mood. In *Cognition and emotion*. 19(6).
- Lehrich, C. (2014). Hearing transcendence: distorted iconism in Toru Takemitsu's film music. In *Signs and Society. Representing Transcendence*. Vol. 2, Number S1.
- Liu, J., S. Liu and Y. Yang (2014). LJ2M dataset: Toward better understanding of music listening behavior and user mood. [Conference]. *IEEE International Conference on Multimedia and Expo (ICME)*, Chengdu, 2014, pp. 1-6.
- Makihara, N. (2014, November 19). *Fall*. [Video]. YouTube. URL <https://youtu.be/6ZJeKXW8Ewc>
- Mandler, G. (1984). *Mind and body: Psychology of emotions and stress*. New York: Norton.
- Mann, T. and Adorno, T. (2006). *Correspondence 1943-1955: Theodor W. Adorno & Thomas Mann*. Polity. Retrieved from <http://www.thewagnerian.com/2016/08/a-letter-from-thomas-mann-to-theodor.html>
- Maren, S., Luan Phan, K., and Liberzon, I. (2013, June). The contextual brain: implications for fear conditioning, extinction, and psychopathology. In *Nature reviews. Neuroscience*. 14(6): 417-428.
- May, B. (1995). *Arranging and Orchestration*. Personal Collection of Brian May. Griffith University. Southport. Queensland.
- May, B. (1995). *Film and Television Music Scoring*. Personal Collection of Brian May. Griffith University. Southport. Queensland.
- McCambridge, J., Witton, J., & Elbourne, D. (2014). Systematic review of the Hawthorne effect: New concepts are needed to study research participation effects. In *Journal of Clinical Epidemiology*. 67(3):267-277.
- McDonald, G. [Glenn] (n.d.). *Every Noise At Once*. [Web]. Retrieved from <http://everynoise.com>
- McGurk, H., and MacDonald, J. (1976). Hearing lips and seeing voices. In *Nature*. 264 (5588):746-748.
- Meyer, L. B. (1956). *Emotion and meaning in music*. [Magazine]. Chicago: Chicago Press. New ConneXion (1998) - Journal of Conscious Evolution.
- Mikutta, C., Maissen, G., Altorfer, A., Strik, W., & Koenig, T. (2014, May 30). Professional musicians listen differently to music. In *Neuroscience*. Vol. 268: 102-111
- Milliman, E. (1982). Using background music to affect the behavior of supermarket shoppers. In *The Journal of Marketing*. Vol.46, No.3 (Summer). Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/1251706>
- Moore, T. (1996, January). Scientific consensus and expert testimony: Lessons from the Judas Priest trial. In *Skeptical Enquirer*. 20.6.
- Morley, R. [Roberta]. (n.d.). *Beatles Sons and Daughters*. [Pinterest post]. Retrieved September 11, 2020.
- (n.a.). (2010, September 11). Is the Mozart effect real? New analysis indicates that music can help epilepsy. In *Medical Xpress*. Retrieved from <https://medicalxpress.com/news/2020-09-mozart-effect-real-analysis-music.html>
- (n.a.). (2017, June 8). Two notes that changed the film world: John Williams' theme for 'Jaws'. In *CSO Sound & Stories*. [Magazine] Retrieved from <https://csosoundsandstories.org/two-notes-that-changed-the-film-world-john-williams-theme-for-jaws/>
- Nakada, T. (2014). AOR Disc Collection. (800 Discs). Shinko Music. ISBN-13: 978-4401638956
- Neuschwander, D. (2012, December). Music in the Third Reich. In *Music Offerings*. 3(2):93-108.
- Nodame26 (2007, October 20). *Itzhak Perlman Manuel de Falla Danse Espagnole*. [Video]. YouTube. URL <https://youtu.be/Z4ayc6Fb3hl>
- Ortony, A., Clore, G. and Collins, A. (1988). *The cognitive structure of emotions*. NY: Cambridge University Press.
- Pachet, F. and Cazaly, D. (2000, January). *A Taxonomy of musical genres*. [Conference]. Computer-Assisted Information Retrieval - RIAO 6th International Conference, France.
- Parncutt, R. (2007, Spring). Systematic musicology and the history and future of western musical scholarship. In *Journal of Interdisciplinary Music Studies*. Vol. 1, Issue 1, pp. 1-32.
- Penderecki, K (1960). *Threnody for the Victims of Hiroshima*. [Score]. Alfred Music. SB00902.
- Plourde, L. (2017, January). Sonic air-conditioning: Muzak as affect management for office workers in Japan. In *The Senses and Society*. 12(1):18-34.
- Pylyshyn, Z. W. (1989). Computing in cognitive science. In M. I. Posner (Ed.), *Foundations of cognitive science*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rauscher, F., Shaw, G., and Ky, K. (1995, February 6). Listening to Mozart enhances spatial-temporal reasoning:

- towards a neurophysiological basis. In *Neuroscience Letters*. Volume 185, Issue 1, Pages 44-47.
- Rawkhead1. (2008, November 24). *One Man Band*. [Video]. YouTube. URL https://youtu.be/dli_cWbS6WY
- Reisenzein, R. (2000). Wundt's three-dimensional theory of emotion. In Balzer, W., Sneed, J., and Moulines, C. (Eds.). *Structuralist Knowledge Representation: Paradigmatic Examples*. Rodopi. pp75-219.
- Routley, N. (2018, October 6). *The visual capitalist: visualizing 40 years of music industry sales*. Retrieved from <https://www.visualcapitalist.com/music-industry-sales/>
- Sachs, M., Ellis, R., Schlaug, G., and Loui, P. (2016, March 16). Brain connectivity reflects human aesthetic responses to music. In *Social Cognitive and Affective Neuroscience*. Vol.0, No.0. Oxford.
- Sack, K. (1998, January 15). Georgia's Governor Seeks Musical Start for Babies. *New York Times*. Section A. Page 12.
- Schaefer, H. (2017). Music-evoked emotions - current studies. In *Frontiers of Neuroscience*. 11:600.
- Siegel, R. (2000, October 30). *Bernard Herrmann's score to Psycho*. In *The NPR 100*. Retrieved from <https://www.npr.org/1000/10/30/1113215/bernard-herrmanns-score-to-psycho>
- Sozra, John. (1998). *Canvas of the Mind: CD Review*. Interview by Lee Stone. Connexion Magazine. USA.
- Steele, K. M., Dalla Bella, S., Peretz, I., Dunlop, T., Dawe, L. A., Humphrey, G. K., Shannon, R. A., Kirby Jr., J. L., & Olmstead, C. G. (1999). Prelude or requiem for the 'Mozart effect'? In *Nature*, 400, 827.
- Tagg, P. (1987). *Musicology and the semiotics of popular music*. Semiotica. 66: 1-3. Mouton de Gruyter. Amsterdam
- Thayer R. (1978). Toward a psychological theory of multidimensional activation (arousal). In *Motivation and emotion* 2:1-34.
- Sadie, S. & Tyrrell, J. (Eds). Oxford University Press. London.
- Vink, A. (2001). Music and Emotion. Living apart together: a relationship between music psychology and music therapy. In *Nordic Journal of Music Therapy*. 10, (2), 21.
- Schaefer, H. (2017, November). Music-evoked emotions - Current Studies. In *Frontiers in Neuroscience*. 11:600. Retrieved from <https://doi.org/10.3389/fnins.2017.00600>
- Snow, R.P. (1987, June). Youth, rock 'n roll and electronic media. In *Youth & Society*. 18(4), 326-343.
- Solender, A. (2020, June 28). All the Artists who have told Trump to stop using their Songs at his Rallies. [Magazine]. In *Forbes*. Retrieved from <https://www.forbes.com/sites/andrewsolender/2020/06/28/all-the-artists-who-have-told-trump-to-stop-using-their-songs-at-his-rallies/>
- Steele, K., Dalla Bella, S., Peretz, I., Dunlop, T., Dawe, L. A., Humphrey, G., Shannon, R., Kirby Jr., J., & Olmstead, C. (1999). Prelude or requiem for the 'Mozart effect'? In *Nature*, 400, 827.
- Waldrep, M. (2015, October 1). Real HD-Audio. *Alan Parsons: The Audiophile Mixup*. Retrieved from www.realhd-audio.com/?p=5260
- Warner Classics. (2016, June 7). *Luciano Pavarotti sings "Nessun dorma" from Turandot. (The Three Tenors in Concert 1994)*. [Video]. YouTube. URL <https://youtu.be/cWc7vYjgnTs>
- Waterman, M. G. (1992). Emotion in Music: Towards a new methodology for the investigation of appreciation. In *International Journal of Psychology*, 27, (3/4),189.
- West, K. (2019, February 27). *I Feel Like That*. [Video]. YouTube. URL https://youtu.be/CZaW0l_X1Po
- Wrobel, W. (2017, July 8). *Half-diminished Seventh: The Bernard Herrmann Chord*. Retrieved from <https://www.film scorerundowns.net/herrmann/herrmannchord.pdf>
- Zapista A. (2019, July 6). *The Periodic Table of Music Genres*. [Poster] Retrieved from <http://www.posterswholesale.com/resize/Shared/Images/Product/Periodic-Table-of-Music-Genres/51519.jpg>
- Zatorre, R.J. (2005). *Functional neuro-imaging: applications to music and auditory cognitive processing*. [Lecture Notes]. Montreal Neurological Institute, McGill University.
- Zatorre, R. & Krumhansl, C. (2003, January). *Mental models and musical minds*. Science. 298(5601):2138-2139

ⁱ 5W+1H (aka 5W+2H, 6W+H, 6W+2H et al.) is an investigative question-method (who, what, when, where, why, and how) derived from a Rudyard Kipling poem "The Elephant's Child" (Kipling, R. (1902).

ⁱⁱ WOMAD: World of Music, Arts, and Dance. Retrieved from <https://womad.org/>

ⁱⁱⁱ WOMEX: Worldwide Music Expo. Retrieved from <https://www.womex.com>

^{iv} BILLBOARD: Billboard-Hollywood Reporter Media Group Retrieved from <https://www.billboard.com>

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2020 年度活動報告

Progress Reports on
Mukogawa Women's University Center for The Study of Child Development 2020

河合 優年*・難波 久美子**・坂田 智美***

中井 昭夫*・石川 道子*****・玉井 日出夫*****

KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SAKATA, Tomomi,
NAKAI, Akio, ISHIKAWA, Michiko, & TAMAI, Hideo

目次

- I. はじめに
- II. 2020 年度の子ども発達科学研究センターについて
 - 1. 本年度の取り組みについて
 - 2. 外部資金の獲得について
 - 3. 次年度に向けて
- III. 研究業績

- * 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・教授・研究員
- ** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手・研究員
- *** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手
- **** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・研究員
- ***** 武庫川女子大学・元教授

I. はじめに

2020年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、子ども発達科学研究センター（以下、子どもセンター）の研究活動は大幅に制限された。学外者の入構の制限により滞った活動や、対面状況を避けることができず実施できなかった活動があった。

具体的には、子どもセンターの中心的研究となっている、誕生時からの縦断的調査研究では、対面状況を避けることができないため、観察とインタビュー調査は中止された。子どもの発達状況や養育者との関係性を知る上で、直接話を聞くということは、調査項目以上の意味を持っており、この部分が欠落したことは大きな痛手であった。この時期に特異的に起きる進路決定などの保護者との葛藤を通した、子どもたちのアイデンティティ形成に関する情報が弱くなってしまった。

また、これまでに実施されてきた実験等のデータの整理、分析作業にも影響があった。特に前期では、分析を依頼していた学外者が学内に立ち入れない状況が続き、計画通りに分析作業は進んでいない。子どもセンターでの追跡データについては、発達心理学会においても、データ共有を通しての発達研究の活性化につながるものとして期待されているが、データブックの作成を含めて、当初計画通りに実行できていない。

地域貢献の取り組みである、保育士や保健師を対象とした子ども発達に関わる専門家を対象として実施してきた勉強会も開催を見送った。保育場面での子どもの行動を使って評価するという、新しい取り組みが大きく遅れている。

以上のように、子どもセンターの中心となる活動が制限を受けた一年であった。とはいえ、縦断研究のうち、パネル調査部分については、従来同様の郵送による調査を実施することができ、付加的に新型コロナウイルス感染症の影響に関する調査を実施した。これについては、発達心理学会、青年心理学会（いずれもオンライン開催）で結果報告を行った。また、一旦延期が決まった市民公開講座は、年度末にオンラインで開催することができた。

子どもセンターの理論的な枠組みであるダイナミックシステム理論については、科学研究費補助金による研究課題の分担者である、北海商科大学の玉井航太准教授、奈良教育大学の中山留美子准教授、本学共通教育の寺井朋子准教授がそれぞれ、「社会化の弁証法的モデル」「情動発達と意識」「過程・関係・関係－発達－システム」として訳書を準備している。他に、ゴンザガ大学との、日米の中学性の生活実態調査の結果は、2021年6月にゴンザガ大学（アメリカ）で開催される、日米教員養成協議会（JUSTEC）において報告できるよう、準備が進められている。

このように、2020年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、計画通りに研究は遂行できていないが、オンライン等で実施できる研究活動に注力し、研究センターとしての機能は遂行できていたのではないかと考えている。

II. 2020 年度の子ども発達科学研究センターについて

1. 本年度の取り組みについて

2020 年度は以下のような研究活動と成果の地域還元および成果発表を行った。

(1) コホート研究

<概要>

本研究は、子どもセンターの中心事業として継続しているものである。今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染予防のために、学校が臨時休校になった。この影響で、学校種を移行する学年（新中学 1 年生、新高校 1 年生）への春の適応調査は延期することになった。また、新型コロナウイルス感染症による臨時休校の影響を確認するため、追加調査を実施した。緊急事態宣言が解除される目途が立った 5 月末と、多くの学校が再開され、通常の授業となってから 1 か月以上経過したと思われる 7 月に郵送調査を実施した。3 学期に実施しているパネル調査（中学 3 年生は 11 月）に関しては、例年通り実施した。また、対面による観察調査は、新型コロナウイルス感染症の感染予防に鑑み、実施を断念した。

なお、追加調査の結果の一部は、発達心理学会、青年心理学会（オンライン開催）において報告されている。

今年度は、調査対象者全員が中学生以上となり、青年期の調査となった。調査票の項目選定に当たり、青年期の項目選択については、引き続き中山留美子准教授、石井僚特任准教授（奈良教育大学）からアドバイス・提案を受けた。パネル調査とともに、青年期の自我の形成や、友人関係といった項目が含まれている。また、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に基づき、中学校等の課程を修了した協力者からは、インフォームドコンセントを受ける必要があるため、高校 1 年生向けの説明資料を用意し、保護者用の案内と同様の案内を作成、送付した。

協力者向けのニューズレターは、今年度も順調に発行できた。今回は、新型コロナウイルス感染症の影響を確認するために実施した調査結果の一部を紹介する記事を掲載した。また、今回も“To Junior Researcher ～ Dr. Masa の人間ウォッチング”を発刊した。第 4 回目となる今号は、感情をテーマに高校 1 年生に届けることができた。今後も中学生以降の対象児に対して順次送付する予定である。

中学校入学後、子どもたちからも質問や感想を受け付けており、それに対し直接回答が欲しい、ニューズレターでの一般的な回答が欲しい、という選択肢を設けている。今回も直接回答が欲しい、というケースがあったため、ケースカンファレンスを持ち、それぞれに回答を作成、本人宛親展にて送付している。

<すくすくコホート三重>

すくすくコホート三重では、中学 3 年生には、5 月、7 月に追加調査、11 月にパネル

調査を実施した。また、高校1年生には5月、7月に追加調査、7月に適応調査、3学期にパネル調査を実施した。

＜武庫川チャイルドスタディ＞

同様の枠組みで西宮市内（開始当時）の追跡研究である武庫川チャイルドスタディでは、中学1年生には、5月、7月に追加調査、7月に適応調査、3学期にパネル調査を実施した。また、中学2年生には、5月、7月に追加調査、3学期にパネル調査を実施した。中学2年生の観察調査を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、大学構内への学外者の立ち入りが制限されていたため、予定していた夏休みの実施を見送った。その後の感染状況に鑑み、今年度の実施は断念した。

(2) 西宮市との「こころんサーモ」に関わる、チェック項目の策定とシステム構築

この取り組みは、西宮市教育委員会との連携の中で、小学校入学から中学校卒業までの9年間の一人ひとりの子どもの追跡可能性を検討しようとするものである。2020年度は、西宮市の教育ネットを使つての、オンライン調査への移行実験がなされた。

チェック項目の信頼性と妥当性に関するレポートを刊行し、内容についての外部評価を可能としている。2020年秋に出された、自殺統計において、子どもの自殺が増加傾向にあることから、文部科学省からも、このシステムの早期の導入が望まれている。このような社会的なニーズに対応するべく、システムのブラッシュアップを進めている。

(3) 子どもみんなプロジェクト

2015年度より開始された、大阪大学を基幹大学とした、弘前大学、千葉大学、浜松医科大学、金沢大学、福井大学、鳥取大学、兵庫教育大学、武庫川女子大学、中京大学の10大学コンソーシアム研究は、2020年2月に開催された、全体報告会を以って第一期を終了した。2020年4月より、千葉大学を基幹として第二期がスタートしている。

(4) 学院教育への還元および地域連携

研究成果の地域への還元として、これまで専門職者に対しての勉強会を実施してきたが、今年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、開催を断念した。これまでに勉強会で検討してきたチェックリストの完成に向けて、細部の調整を継続している。

(5) Light It Up Blue, MUKOJO! 2020

自閉症スペクトラム障害など神経発達障害に関して、発達障害者支援法や障害者差別解消法などの各法整備、特別支援教育や合理的配慮などが少しずつ進んでいるものの、社会における正しい理解や支援は十分とは言えない。国連により4月2日は世界自閉症啓発

デー、同日から1週間を発達障害啓発週間として、世界の170か国以上が参加する。本学でも2019年に第1回Light It Up Blue, MUKOJO!を学院80周年記念事業公募型採択事業として開催し、厚生労働省、文部科学省、国連など国内外と繋がるとともに、市民公開講座には多数の参加者があり、アンケート調査でも神経発達障害に関する啓発活動の継続に関するたくさんの要望の声を得た。

これらの多くの期待や要望に加え、文部科学省からの普及啓発の協力依頼も受け、2020年度は中井教授による特別経費「Light It Up Blue, MUKOJO!～発達障害をキーワードとした大学教育改革と地域社会貢献への基盤整備～」により引き続き継続して開催することとなった。4月2日の世界自閉症啓発デーから8日までの発達障害啓発週間、研究所棟においてブルーライトアップを行った。2020年4月18日（土）に開催を予定していた女子大学である本学にも深く関連する、女性の神経発達障害に関する市民公開講座「女性の発達障害～発達障害のある女性が一生を描ききるために必要なこと～」については、折からの新型コロナウイルス感染症の拡大により一旦延期とし、2021年3月28日（日）にオンラインによる開催とした。

これらのLight It Up Blue, MUKOJO!の実績は、文部科学省、厚生労働省に実施機関として登録され、LIUB JAPANのホームページにも掲載されること等を通じて、世界的にも認識されている。今後も本学が世界とつながり、また、地域に根ざす大学として神経発達障害に関する取り組みを積極的に行っているというステータスを国内外に継続的に発信していく必要がある。そのためには、将来的には本学院をあげての事業として行うことが望ましいが、その基盤構築のため、しばらくは特別経費にて教育研究所・大学院臨床教育学研究科・子ども発達科学研究センター主催として開催していく予定である。なお、2020年度はその全学的な取り組みへの第一歩として、武庫川女子大学・武庫川女子大学短期大学部FD推進委員会との共催として開催した。

2. 外部資金の獲得について

2020年度は科学研究費補助金（基盤研究（B）「コーホート研究による青年期における社会性の形成要因の解明と発達モデルの構築（課題番号：19H01759、2019年度～2021年度）」が継続されている。

3. 次年度に向けて

(1) コホート研究

科学研究費補助金を獲得し、次年度は3年目の活動となる。

2021年度の追跡調査は、すくすくコホート三重では、高校1年生には春の適応調査、1、2年生の協力者に3学期のパネル調査が行われる予定である。

武庫川チャイルドスタディでは、中学2、3年生のパネル調査が実施される予定である。中学生に対する観察調査は、新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、対策を講じて実施できると判断されれば、オンラインインタビューも含め、慎重に実施を検討する予定である。データセットの完成と論文化を進める。紙媒体データ・電子データの整理を実施し、国内の共有データ資料として広く国内外へ公開する準備に入る。同時に、これまでに得られたデータをまとめる作業に入る。追跡調査も引き続き実施する。

(2) 児童生徒の学校適応

西宮市教育委員会との連携研究として進められてきた本研究は、公的な事業として、武庫川女子大学と西宮市との共同で実施されることになる。データの整理、フィードバック方法の検討、啓発的講演の開催などについて検討を進めている。

(3) 子どもみんなプロジェクト

2015年から始まった本プロジェクト第一期は終了したが、2020年度からは、千葉大学を事務局とする第二期事業が開始され、全国研究コンソーシアムが立ち上げられた。第二期においては、兵庫教育大学、兵庫県教育委員会との連携も計画されている。また、兵庫県での活動についても検討を開始する。

(4) 国際研究の展開について

ゴンザガ大学との、日米の中学性の生活実態調査の結果は、2021年6月にゴンザガ大学で開催される、日米教員養成協議会（JUSTEC）において報告する予定である。

今後、ゴンザガ大学、フリー大学（オランダ）との共同研究を積極的に展開し、100周年に向けた子ども研究を開始できるよう、検討していく予定である。

III. 研究業績（2020年）

<河合優年>

▶ 著書

- 1) 日本児童研究所（監）． 藤田博康・河合優年・内藤美加・斉藤こずゑ・高橋恵子・山祐嗣（編）（2020）． 児童心理学の進歩 2020年版（VOL.59） 金子書房

▶ 論文

- 1) 河合優年・難波久美子・中平真美・中井昭夫・石川道子・玉井日出夫（2020）． 武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2019年度活動報告． 武庫川女子大学教育研究所研究レポート， 50， 149-165.
- 2) 河合優年・高井弘弥・寺井朋子・坂田智美・大和一哉・佐々木理・谷口麻衣・星川雅俊

(2020). 心理的状态把握のためのチェックリスト開発 —10 大学連携共同研究「子どもみんなプロジェクト」西宮市における取り組み—. 臨床教育学研究, 26, 67-82.

<中井昭夫>

▶ 著書

- 1) 中井昭夫 (2020) 睡眠関連疾患 (不適切な睡眠衛生／概日リズム睡眠・覚醒障害群). 今日の小児治療指針 第 17 版, Pp.704-706. 医学書院, 東京.

▶ 論文

- 1) 中井昭夫 (2020) 不登校の影に潜む子どもの睡眠障害. 特集『子どもの睡眠と発達脳、そしてその障害』. 日本外来小児科学会雑誌「外来小児科」, 23:205-209.
- 2) 中井昭夫 (2020) 発達性協調運動症／発達性協調運動障害. 精神科治療学 増刊号「児童・青年期の精神疾患治療ハンドブック」
35(suppl) :143-147.
- 3) 中井昭夫 (2020) 常同運動症／常同運動障害. 精神科治療学 増刊号「児童・青年期の精神疾患治療ハンドブック」. 35(suppl) :197-200.
- 4) 中井昭夫 (2020) 小児神経発達障害における睡眠障害の治療の実際 —自閉症スペクトラム障害とメラトニンについて—. Progress in Medicine 40:403-407.
- 5) 綿引清勝・澤江幸則・島田博祐・中井昭夫 (2020) 身体的不器用さを有する自閉スペクトラム症児の投動作における臨床的な特徴と介入効果について～投動作の質的な変化の違いに着目して～. 自閉症スペクトラム研究 17:59-67.
- 6) Nobusako S, Osumi M, Furukawa E, Nakai A, Maeda T, Morioka S. (2021) Increased visual bias in children with developmental coordination disorder: Evidence from a visual-tactile temporal order judgment task. Human Movement Science. 75: 102743.
<https://doi.org/10.1016/j.humov.2020.102743>
- 7) Nobusako S, Tsujimoto T, Sakai A, Shuto T, Hashimoto Y, Furukawa E, Osumia M, Nakai A, Maeda T, Morioka S. (2020) The time window for sense of agency in school-age children is different from that in young adults. Cognitive Development 54:100891
<https://doi.org/10.1016/j.cogdev.2020.100891>
- 8) Nobusako S, Osumi M, Hayashida K, Furukawa E, Nakai A, Maeda T, Morioka S. (2020) Altered sense of agency in children with developmental coordination disorder. Research in Developmental Disabilities. 107: 103794.
<https://doi.org/10.1016/j.ridd.2020.103794>
- 9) Miike T, Toyoura M, Tonooka S, Konishi Y, Oniki K, Saruwatari J, Tajima S, Kinoshita J, Nakai A, Kikuchi K. (2020) Neonatal irritable sleep-wake rhythm as a predictor of autism spectrum

disorders. *Neurobiology of Sleep and Circadian Rhythms* 9 :100053.

<https://doi.org/10.1016/j.nbscr.2020.100053>

- 10) Suyama S, Yagyu K, Araki A, Miyashita C, Itoh S, Minatoya M, Yamazaki K, Tamura N, Nakai A, Saito T, Kishi R. (2020) Risk factors for motor coordination problems in preschool-aged children. *Pediatric International*. 62:1177-1183. doi: 10.1111/ped.14275.
- 11) Nobusako S, Tsujimoto T, Sakai A, Shuto T, Furukawa E, Osumi M, Nakai A, Maeda T, Morioka S. (2020) Manual dexterity is not related to media viewing but is related to perceptual bias in school-age children. *Brain Science*. 10:100;
<https://doi.org/10.3390/brainsci10020100>

▶ 学会発表

- 1) 岡牧郎・中井昭夫・諸岡輝子・津島靖子・花岡義行・秋山麻里・小林勝弘 (2020) 協調運動の拙劣さを有する発達性ディスレクシア児の行動や情緒の問題について．第 62 回日本小児神経学会学術集会．(8 月、オンライン)

▶ 講演

- 1) 中井昭夫 (2020) 睡眠からみた小児神経発達障害～自閉症スペクトラム障害の包括的時間治療～．岡山県小児科医会研修会．(11 月、オンライン)
- 2) 中井昭夫 (2020) 子どもの睡眠障害の正しい理解に向けて～ ICT 依存にも触れて～．認定 NPO 法人 EDGE LSA(学習支援員)養成講座．(11 月、オンライン)
- 3) 中井昭夫 (2021) 小児神経発達障害への睡眠からのアプローチ～自閉症スペクトラム障害の包括的時間治療～石川県小児睡眠研究会．(3 月、オンライン)

<難波久美子>

- 1) 難波久美子・河合優年・田中滋己 (2020) COVID-19 による緊急事態宣言下における中学生の生活実態に関する調査報告—コミュニケーションを中心に—．青年心理学会第 28 回大会発表論文集, P.22. (12 月、Web 開催)
- 2) 難波久美子・河合優年・田中滋己 (2021) COVID-19 による緊急事態宣言下における中学生の生活実態に関する調査報告 2 生活の変化に対するストレスを中心に．日本発達心理学会第 32 回大会論文集, P.114. (3 月、Web 開催)

2019 年度

研究員の業績および特別研究の経過報告

(2019 年 4 月～ 2020 年 3 月)

▶著書

編著 日本児童研究所(監)・藤田博康・河合優年・内藤美加・斉藤こずゑ・高橋恵子・山祐嗣(編)(2019). 児童心理学の進歩 2019 年版(VOL.58) 金子書房

▶論文

共著 河合優年・難波久美子・中平真美・中井昭夫・石川道子・玉井日出夫 (2020). 武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2019 年度活動報告. 武庫川女子大学教育研究所研究レポート, 50, 149-165.

共著 河合優年・高井弘弥・寺井朋子・坂田智美・大和一哉・佐々木理・谷口麻衣・星川雅俊 (2020). 心理的状态把握のためのチェックリスト開発 —10 大学連携共同研究「子どもみんなプロジェクト」西宮市における取り組み—. 臨床教育学研究, 26, 67-82.

▶学会発表

共著 Namba, K., & Kawai, M. (2019). Effects of infant stable self-regulation on their adjustment during primary school years. Poster presented at the Developmental Section Annual Conference 2018 of the British Psychological Society. Abstracts, P.144. (September, 2019. Stoke-on-Trent, UK).

▶学会活動

日本子ども学会 理事

日本発達心理学会 評議員

▶委託研究 研究助成

文部科学省委託事業「いじめ対策等生徒指導推進事業：脳科学・精神医学・心理学等と学校教育の連携の在り方（通称：子どもみんなプロジェクト）」（平成 27 年度～ ）

▶2019 年度特別研究の経過報告

テーマ①：西宮市における発達コホート研究

研究経過： 西宮市におけるデータ収集は、2019 年度も順調に終了した。2019 年度は、小学校 6 年生の観察調査及び小学校 6 年生、中学校 1 年生の郵送による質問票調査であった。生まれた時から追跡を継続しているコホート研究が進むにつれて、多くのことが分かってきている。これらについて発信することが必要となっているが、同時に追跡データを収集し続けることも必要である。この二つのことを同時に成立させていくことは、現在の研究体制ではかなり厳しく、子どもの成長に遅れないで資料を蓄積することに力が注がれている。また、収集されたデータをもとに、理論化を鋭意進めている。

研究成果：(論文、報告書、発表など)

<西宮市・三重県内の個別観察データに基づく研究発表>

Namba et al. (2019) では、幼児期の自己抑制の発達の仕方と、その後の小学校での適応につ

いての研究を行った。幼児期に安定して自己抑制に成功している群は、クラスでの承認得点が3年生から6年生まで安定した値であるのに対し、不安定な結果であった子どもたちは、3年生、4年生、5年生と承認得点が上昇するものの、特に6歳で自己抑制行動に失敗している群では、6年生で得点が下がっていた。また、親が評定するコントロールされた社会的行動の得点は、安定した群は逆U字型の得点推移であるのに対し、他は4年生までに一旦コントロールされた行動をとるようになるが、5年生ではコントロールされなくなり、6年生で再びコントロールされた行動を取るようになっており、異なる推移がみられた。このことから、特に幼児期に安定した自己抑制行動が観察されていることは、その後の適応に影響を与える可能性があるとし唆された。

テーマ②：西宮市の小中学生の心理的健康さに関するアプリ開発と教育的活用

研究経過： 本研究は、西宮市内の小中学生を対象とした、子どもの心の状態をリアルタイムで自己確認し、心理的健康状態を知るためのチェックリストの開発、及びアプリケーションの開発を、本学と西宮市教育委員会と共同で行っているものである。また、開発されたチェックリストをもとに、アメリカの連携大学であるコンザガ大学と共同で日米の子どもの心理状態を調査する研究が進められている。そのため、学内、地域、国際と広く連携して進められており、本学より、高井弘弥（教育学部教授）、玉井日出夫（教育研究所客員研究員）、寺井朋子（共通教育部准教授）と、子ども発達科学研究センター、ゴンザガ大学（アメリカ）より、Vincent Alfonso (Professor, the School of Education)、John Traynor (Associate Professor, the School of Education) による共同研究である。また、西宮市教育委員会より、大和一哉氏（教育次長（2019年当時））、佐々木理氏（学校教育部長（2019年当時））が地域連携者として参加している。

この研究は、教育現場における生徒理解のあり方についての研究であると同時に、我が国における地域や家庭の子育て支援のあり方における、環境の重要性を示す研究ともなっている。今後、環境としての家庭、仲間、職業などとの検討が必要であると考えている。これらの成果について、今年度は国際的な発信は行われなかったが、実用化に向けた検討を行った。

研究成果：（論文、報告書、発表など）

河合ら（2020）では、児童生徒の心理的状态把握のためのチェックリスト開発についてまとめた。これは、2015年以降開発を進めてきた独自尺度について検討を加えたものであり、因子の安定性等が確認された。今後の本格的なチェックリスト運用に資するものである。

▶論文

- 単著「悩（なや）んでいる、きみへ」「『特別の教科 道徳』の目標を深く読み解こう」（『令和元年度 滋賀県道徳教育振興だより』滋賀県教育委員会 2020.3 1～3 頁）
- 単著「道徳の特別教科化—その意義と課題—」（西野真由美編著『新訂 道徳教育の理念と実践』放送大学教育振興会 2020.3 150～167 頁）
- 単著「道徳教育のカリキュラム開発」（西野真由美編著『新訂 道徳教育の理念と実践』放送大学教育振興会 2020.3 168～183 頁）
- 単著「新教育課程をリードする道徳教育」（『Educate』Vol.4 昭和女子大学現代教育研究所 2020.1 1～3 頁）
- 単著「道徳の評価は一人ひとりの「よいところ探し」「道徳の評価は子どもたちへの愛情表現」である」（『日本教育新聞』2019.9.13 2019.9.23 所収）
- 単著「『特別の教科 道徳』の評価」（無藤隆他編著『新指導要録の解説と実務（小学校）』図書文化社 2019.11 124～131 頁）
- 単著「郷土愛をはぐくむ道徳教育」（『弘道』（第1122）日本弘道会 2019.10 29～42 頁）

▶学会発表（共同発表）

- ・日本道徳教育学会第94回（令和元年度秋季）大会
「道徳教育全国調査の実施（2019.3）と結果分析（1）—統計的分析—」
○押谷由夫（武庫川女子大学大学院・教授）、○木崎ちのぶ（武庫川女子大学大学院・院生）、○谷山優子（武庫川女子大学大学院・院生）、矢作信行（武庫川女子大学大学院・院生）、齋藤道子（武庫川女子大学大学院・院生）、小山久子（大阪芸術大学・特任教授）、醍醐身奈（目白大学・専任講師） ※○は発表者
会場：広島大学 日時：2019年11月10日
- ・日本道徳教育学会第94回（令和元年度秋季）大会
「道徳教育全国調査の実施（2019.3）と結果分析（2）—自由記述の分析—」
押谷由夫（武庫川女子大学大学院・教授）、木崎ちのぶ（武庫川女子大学大学院・院生）、谷山優子（武庫川女子大学大学院・院生）、○矢作信行（武庫川女子大学大学院・院生）、○齋藤道子（武庫川女子大学大学院・院生）、○小山久子（大阪芸術大学・特任教授）、醍醐身奈（目白大学・専任講師） ※○は発表者
会場：広島大学 日時：2019年11月10日

▶所属学会

日本道徳教育学会、日本道徳教育方法学会、日本道徳基礎教育学会、日本教育学会、日本教育社会学会、日本カリキュラム学会、日本保育学会、日本乳幼児教育学会 など

▶社会活動

（公）小さな親切運動本部（顧問）、滋賀県道徳教育振興会議委員（会長）、芦屋市社会教育委

員（副会長）、（公）日本弘道会（理事）、心を育てる教育研究会（主宰）など

▶ 2019 年度特別研究の経過報告

テーマ①：新教育課程に関する研究

研究経過： 本事業は二年目になる。昨年度の取組を継続発展させることをベースとして、研究を進めた。大きくは新教育課程全体に関する研究と、そのことを踏まえて中心的な課題である道徳教育改革について追究した。

新教育課程全体に関する研究では、小学校では来年度から、中学校では再来年度から全面実施される、新しい学習指導要領による新教育課程について、その基本となる理念と方法について、更に分析を加えた。特に、これから求められる資質能力の3本の柱として提案されている「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」と、これからの学びの方法として求められている「主体的・協働的で深い学び」の関連について追究した。

このような視点から、道徳教育が学校現場でどのように理解され取り組まれているのかについて、実際に学校訪問をしたり研究会に参加したり、関係する実践論文などの文献をもとにしたりして分析し、これからの道徳教育について提案した。

また、今年も、科研費研究（17H02706）とかかわらせて、道徳教育の取組みや意識に関する実態調査を、全国の小学校、中学校約3300校（全体の約1割）を対象に行った。特に小学校が、「特別の教科 道徳」の全面実施されたことがどのような影響を及ぼしているかを分析した。

研究成果： 取組状況とかかわらせて、成果をあげると次のようなものがある。まず、新教育課程の全面実施に先駆けて、取り組まれた道徳教育の抜本的改善・充実の取組みがどのような意味をもつのかについて、論文等で発表するとともに、具体的実践について検討した。

その中で、これからの教育改革の柱に道徳教育があることを改めて明らかにした。つまり、これから求められる「深い学び」とは、学びの目的（何のために学ぶのか）を追い求める学びであり、それは自己の成長とよりよい社会を目指しての学びとすることである。特に三木市立平田小学校には、およそ3ヶ月ごとにお伺いし、2019年10月22日には全国に向けて2年間の取組みを発表した。

また、2020年3月7日に、平田小学校の研究主任による実践発表や、道徳教育を先導している研究者や実践者を交えての道徳教育フォーラムを企画したが、コロナ禍で開催できなかった。その時に用意した研究冊子を関係者に配布し、ホームページにもアップした。

テーマ②：学生の自己形成ノートの開発に関する研究

研究経過： 今年度も昨年の取組みを継続させる形で、大きく3つの研究に取り組んだ。一つ

は、私の行っている授業の「道德教育の理論と実践」（教育学科2年生が対象）において、授業でのノート作成力がいかに自己形成と関わるかを検証しようとした。二つは、学校教育において取り組まれている「道德ノート」についての分析。三つは、小・中・高等学校で取り組まれているキャリア・パスポートについての情報収集である。

研究成果： 研究成果は次のものがある。授業のノートの分析では、受講生全員から提出してもらい分析した結果、配付した資料とテキストを事前に読み、授業でもメモを丁寧に取り、その後独自に資料を貼り付けてノートを清書し自分独自のノートを作成している学生が7割以上いた。そのノートには、ときどきに質問した課題についても自分の意見が述べられており、大学の道德に関する科目は、自己を見つめ、自分の教師としての生き方を考える大きな媒介になっていることを確認できた。

小・中学校における「道德ノート」の取組は、今年も学校現場の取組を元に分析を行った。特に三木市立平田小学校の取組は、一人一人の生き方を道德の授業と普段の学習や生活と関わらせてとらえており、自己の成長とよりよい学級づくりを考えていた。学生の自己成長ノートの作成へのヒントを得ることができた。

キャリア・パスポートの計画については、研究会に参加したり、専門的に研究している研究者に専門的知識の提供を受けたりした。学校現場での調査によって、多様にノートが工夫されていることが把握できた。

テーマ③：道德教育リーディングスの開発

研究経過： 本事業は、今年度から始めるもので1年目になる。この事業の意図は、これからの学校教育改革の中核となる道德教育を研究、実践する上に置いて、重要な基本的情報を、ホームページなどを通して提供しようとするものである。つまり、道德教育に関する情報バンクのような役割を果たせるものを構築していくことを目的としている。まずは、道德教育の文献に関する情報の提供を中心としながら、さらに本事業の趣旨を実現するために、研究内容を充実させようと考えている。

研究成果： 今年度は、ホームページの構成案をまず考えた。大きく5つのパートを取り上げた。第1は、道德教育に関する文献の情報収集である。日本と外国の代表的な学会誌を取り上げる。そして、他の関連学会における道德教育に関する論文の紹介、専門図書の紹介、専門的な論文の紹介である。第2は、道德教育に関する全国の実態及び実践動向である。このことについては、科研研究で取組んでいるので、その部分と関連をもたせて、道德教育の基本データとして活用できるようにする。第3は、全国の学校において取り組まれている優れた実践についての紹介である。現在いろんな学校に関わらせていただき、研究実践をサポートさせてもらっているのも、それらの学校における取組を、参照いただけるようにデータ化する。第4は、道德

教育改革を中心として文部科学省の動向について、容易に理解できるように、データ化して、容易に参照いただけるようにする。第5は、諸外国の道德教育の動向である。外国の道德教育を専門的に研究している研究者の協力も得ながらデータ化していこうと思う。

今年度は特に第1について、現在取り組まれている道德教育研究について著書を紹介する形で明らかにしようとし、取り組み、データ化した。

安 東 由 則 (あんどう よしのり) 教授

▶研究論文

単著 2020年3月 「韓国における女子大学の変遷と現状：全体の動向と梨花女子大学校の拡充過程」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）50号、57-85頁

▶インタビュー（翻訳）

共著（ヒーブローウ, R.・西尾亜希子・安東由則／安東訳）2020年3月「スミス・カレッジにおける起業家活動・金融教育の取り組み」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）50号、1-27頁

共著（チョン, ジョンセル・安東由則／安東訳）2020年3月「梨花女子大学校の強み、戦略、課題：事前質問とChun教授へのインタビューから」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）50号、29-55頁

▶報告書

単著 2020年3月『「女子大学の存続意義とサバイバルストラテジー：日本・アメリカ・韓国の国際比較」2015～2019年度 科学研究費助成事業 基盤研究C（課題番号 15K 04327）研究成果報告書』全255頁

▶発表

2019年7月20日 実践女子学園創立120周年記念公開講座

安東由則「アメリカにおける女子大学の動向とリーダーシップ育成の取り組み—スミス・カレッジを中心に—」（全体テーマ「女性リーダー育成の可能性—男女共同参画時代の女子大学のミッション—」）

2019年10月5日 武庫川学院創立80周年記念シンポジウム・報告者

安東由則「女子大学でのリーダーシップ育成の可能性—スミス・カレッジの事例から—」

2019年11月7日 南京大学社会学院ワークショップ「知識、文化と学校教育：東アジアの教育社会学における質的研究」（於：中華人民共和国 南京大学社会学院）

安東由則「日本の学校における性的マイノリティ支援の取組」

▶所属学会・学会活動

日本教育社会学会、日本高等教育学会、日本社会学会、日本教育学会、日本子ども社会学会（理事）など

▶社会的活動

西宮市青少年問題協議会・会長

▶2019 年度特別研究の経過報告

テーマ①：大学教育、大学経営に関する研究

研究経過： 2020 年度開催の武庫川学院 80 周年シンポジウムを教育研究所主導で行うこととなったので、事前準備として二回、大学教育研究会を開催した。

第 18 回大学教育研究会では、シンポジストの一人で、ジャーナリストの松本美奈氏を招き、「これからの女子大学について—大学調査や取材を通して見えてきたもの—」とのテーマで話題提供をしていただいた。理事長や学長等の参加を得て、発表後、質疑応答と議論が行われた。(2019 年 5 月 18 日実施)

第 19 回大学教育研究会では、同じくシンポジストの一人である安東が、「日米における女子大学の動向と女子大学でのリーダーシップ育成の取り組み— スミス・カレッジを中心に —」とのタイトルで報告を行った。その後、前回と同様、学内関係者と質疑応答、議論が行われた。(2019 年 8 月 5 日実施)

研究成果： シンポジウムの準備として、ジャーナリストの松本氏からは女子大の現状や課題だけでなく、様々な大学における先進的な取り組み状況について話題を提供していただき、理解を深めることができた。また安東からは、外国の女子大学におけるリーダーシップの取り組みが紹介され、それを基に本学でのこれからの取り組みについて、率直な意見交換がなされた。今回の発表及び議論の内容については、『研究レポート』には掲載しないこととした。

テーマ②：女子大学の総合的研究：データ収集とデータ集作成

研究経過： 例年通り、日本及びアメリカにおける女子大学に関する資料の収集・整理を継続して行った。教育研究所の HP にて「日本の女子大学データ」として pdf 形式で公開しており、予定より遅くなったが 2019 年度の最新データをアップロードすることができた。(本特研の図書代、旅費以外の経費は、主に業者に依頼している PDF 作成とアップロードの費用として使用されている。)

研究成果： 教育研究所の HP に pdf 形式で公開しており、このデータを引用した論文や報告が出されたりしている。収集した図書資料等については、それらを利用した研究成果を『研究レポート』に掲載している。

テーマ③：私立中学・高等学校の動向とサバイバル戦略

研究経過： 既に分析した女子大学付属高校以外の、私立中学・高校（共学及び男子校）のパンフレットの内容分析を行うため、昨年度に引き続き、選択した項目をアルバイトに依頼して入力したデータの確認と補足を行い、分析の準備を整えた。

研究成果： 分析のためのデータ入力と入力データのチェックを行い、まとめたものを読み進めるなど分析準備をしたが、シンポジウムなどの準備もあり、論文としてまとめることはできなかった。来年度には、何らかの形で成果をまとめたい。

上 田 孝 俊 (う え だ こう し ゅ ん) 教授

▶論文

「教師の「教育ノート」からみた教育実践概念の検討—大阪の小学校教師・山本正次の1960年代実践とその記録の考察を通して—」日本臨床教育学会『臨床教育学研究』第8巻、2020年3月（田崎由子と共著）。

▶学会発表

・「北海道・胆振東部地震を通して考える臨床教育学の課題」日本臨床教育学会第9回研究大会特別課題研究での基調報告、2019年10月19日、北海道教育大学札幌校

▶2019年度特別研究の経過報告

・「援助職者の大学院での学修意義の検討」第2年次
調査用紙による大学臨床教育学研究科での学習意義を問うインタビュー調査を実施した。

▶科研費研究の経過報告

・「災害トラウマの回復過程における子どものナラティブと応答的な生徒指導実践の検討」（基盤研究（C）：19K02798 2019年度～2021年度）

2019年9月8日～10日の3日間、研究協力者2名とみやぎ教育文化研究センター所属の研究者とともに、仙台・石巻・東松島・陸前高田の4市において、6名の教員と2名の元教員から、震災後の実践と生徒指導上の課題の聴きとりを行った。

2020年2月6日には、みやぎ教育文化研究センターにおいて、現在までの調査についての研究討論を行った。震災から8年余の時点で、1) 教育現場における教師の側の震災体験の「風化」がいつそう進んでいる。2) その結果、児童・生徒の示す「教育的病理」例えば小学6年生での突然母子分離ができなくなる赤ちゃん返り現象の意味が理解できないなどの教師側の実態が語られた。3) それに対して、詳細な育ちの情報を収集し、避難所生活が何か月に及んだか、家庭の経済状況はどうか等の観点から、学力や病理を問い直す検討が求められ、保護者との「対話」に基づく連携が必要とされる。4) そのことで保護者の抱える不安や問題意識を共有でき、子どもの関わりに安定がはかれると予想できる、等の「指導」の方向性が案出できた。

2019年10月18～20日に開催された日本臨床教育学会第9回研究大会（北海道教育大学札幌校）の特別課題研究「災害と臨床教育学」において、基調報告の一つとして報告を行った。その主旨は「大川小学校の事例にみられるように、地域や学校の主体性の確保が『命にかかわる問題』であることの自覚が求められ、明治以降の地域と学校との関係で創りあげられてきた学校理念（地域管理の校舎、多目的な位置づけ）が解体されていることに研究を拡

げる必要性がある」と提言した。

2019年度の調査・研究活動の保存資料として「災害と学校・教育実践についての研究」(No.4)を作成した。

▶所属学会

日本教育学会、日本臨床教育学会（機関誌編集委員）、武庫川臨床教育学会（会長）、日本教師教育学会、全国社会科教育学会

倉石 哲也（くらいし てつや） 教授

▶論文

単著「多胎児や未熟児の育ちを支えるためのポイント」『保育の友』第67巻第14号、12 - 14、2019年12月

単著「現代「若者考」 - 『宿命を生きる若者たち』を読み解きながら -」『学生相談センター紀要』第29号、武庫川女子大学学生相談センター、13 - 24、2020年2月

▶著書

単著『保育を変えるチーム力の高め方 - 職員の意識改革とコミュニケーションの活性化 -』中央法規出版 2019年9月

▶所属学会

日本子ども家庭福祉学会（理事・査読委員）、日本社会福祉学会（査読委員）、日本保育学会（査読委員）、日本家族心理学会、日本子ども虐待防止学会、日本学生相談学会

▶社会活動

神戸市総合児童センター 予防・療育事業委員 「家族支援研究会」主宰

西宮市子ども・子育て会議会長

西宮市要保護児童対策地域協議会アドバイザー

大阪府児童措置審査委員会委員

大阪府福祉部福祉専門職研修（指導者育成研修）講師

兵庫県こども家庭センター虐待対応専門アドバイザー

兵庫県西宮こども家庭センター 家庭復帰等検討委員会委員

社会福祉法人「神戸真生塾」スーパーバイザー

NPO 法人ちやいどネット大阪 「養育困難家庭への支援を考える研究プロジェクト」アドバイザー

全国社会福祉協議会中央福祉学院「社会福祉施設長研修」講師

全国保育協議会「保育所長専門講座」講師

全国保育士会「主任保育士特別講座」講師

2019年度厚生労働省「外国籍等の子どもへの保育に関する調査研究」委員会座長

日本生命財団児童少年の健全育成助成選考委員会委員

▶ 2019 年度特別研究の経過報告

テーマ：就学前施設における困難家庭への支援の現状と課題分析

研究経過： 本研究は、就学前施設における困難家庭の支援の実態と課題の把握、求められている技能等を把握し、保育者等の資質の向上に寄与することを目的としている。2019 年度は「子どもの保育・保護者支援に期待される保育者の技能」をテーマとして、困難家庭に関する資料の収集を行い、就学前施設で勤務する保育士から情報収集しながら交流を深める機会を持った。現場の実情を把握し、ニーズに合った情報の提供と具体的方策について検討していくために、本研究科修了生の保育士 4 名でのグループワークを定期的に行い、事例検討として話し合いを進めた。

研究成果： グループワークでは、主に保育におけるチーム力を発揮した事例について検討を行った。その結果、困難家庭への支援には保育者等支援者の個々の力が必要であるが、それを引き出すためのチーム力が必要であるという認識が共有できた。その成果として、『保育を変えるチーム力の高め方』（中央法規、2019 年 9 月初版）を出版した。保育現場で様々な課題を持つ子どもへの対応、困難を抱える保護者対応などについて、チーム対応の重要性を具体的に示した内容であり、現場の保育士から提出された実践事例をまとめており、就学前施設の研修用としても活用されている。

中 井 昭 夫（なかい あきお） 教授

▶ 著書

監修 中井昭夫（2019）発達性協調運動障害（DCD）の理解と支援 全 2 巻

丸善出版 映像メディア部 東京

共著 中井昭夫（2019）「発達性協調運動障害の検査」

公認心理師技法ガイド～臨床の場で役立つ実践のすべて～

文光堂、東京 pp220-227.

共著 中井昭夫（2019）「医学・脳科学からみた DCD」

発達性協調運動障害～不器用さのある子どもの理解と支援～

金子書房、東京 pp.45-70.

▶ 論文

共著 戸次佳子、中井昭夫、榊原洋一（2019）子どもの協調運動の発達と行動特性および QOL との関連—小学 2 年生と 5 年生を対象とした保護者記入による質問紙調査—.

日本子ども学会雑誌「チャイルドサイエンス」18：15-20.

共著 片桐正敏、伊藤大幸、村山恭朗、高柳伸哉、浜田 恵、中島俊思、上宮 愛、明翫光宣、中井昭夫、辻井正次（2019）児童・思春期における発達障害特性と社会的スキルとの関係．LD 研究 28：325-335.

共著 Nobusako S, Osumi M, Matsuo A, Furukawa E, Maeda T, Shimada S, Nakai A, Morioka

S. (2019) Subthreshold Vibrotactile Noise Stimulation Immediately Improves Manual Dexterity in a Child With Developmental Coordination Disorder: A Single-Case Study. *Frontiers in Neurology* 2019 Jul 2;10 : 717. doi: 10.3389/fneur.2019.00717.

▶その他

共著 中井昭夫、加藤光広、山本 仁 (2019)

「そうだ！海外へ行こう～海外留学のススメ～」

脳と発達 51 : 114-45.

単著 中井昭夫 (2019) 小西行郎先生との思い出

日本赤ちゃん学会雑誌「ベビーサイエンス」19 : 26-27.

単著 中井昭夫 (2020) 日本子ども学会創設者 小林登先生を悼んで

日本子ども学会雑誌「チャイルドサイエンス」19 : 8.

共著 中井昭夫、長井志江 (2020)

学院創立 80 周年記念事業 公募型採択事業 Light It Up Blue MUKOJO !

～武庫女を青く照らそう！～ 臨床教育学研究 26 : 53-65.

▶学会発表

教育講演

単独 中井昭夫 (2019) 「協調をアセスメントする意義 ～Movement Assessment Battery for Children, 2nd Edition (M-ABC2) を用いた臨床研究と日本語版の開発～」

第 3 回日本 DCD 学会学術集会 (長崎 4 月)

シンポジスト

単独 中井昭夫 (2019) 身体性から自閉スペクトラム症を捉え直す ～発達性協調運動症という視点～

第 115 回日本精神神経学会シンポジウム 15 「自閉スペクトラム症の本質に迫る：感覚・運動機能という新たな視点から」(新潟 6 月)

▶一般演題

国際学会

共同 Aoki Y, Arimitsu K, Nakai A. Impacts of DCD and AD/HD traits on Handwriting Skills in the Japanese Children with Neurodevelopmental Disorders.

13th International Conference on Developmental Coordination Disorder (DCD-13)
(Jyväskylä, Finland 6 月)

共同 Higashionna T, Tokunaga A, Hidaka K, Nakai A, Iwanaga R, Tanaka G. Differences in fine motor performance between first and second trials in children with autism spectrum disorder and attention deficit/hyperactivity disorder.

13th International Conference on Developmental Coordination Disorder (DCD-13)
(Jyväskylä, Finland 6 月)

国内学会

共同 信迫悟志、大住倫弘、松尾 篤、古川恵美、中井昭夫、森岡 周。(2019) 発達性協調運動障害の可能性を有する児の手の器用さに対する 振動触覚ノイズ装置の即時効果。

第3回日本DCD学会(長崎 4月)

共同 中村由紀子、河野千佳、大澤麻記、杉浦信子、小沢愉理、小沢浩、中井昭夫、北洋輔。(2019) 学童期の神経発達障害における M-ABC2 を用いた協調の評価。

第61回日本小児神経学会(名古屋 5月)

共同 岡牧郎、中井昭夫、諸岡輝子、花房香、津島靖子、花岡義行、秋山麻里、小林勝弘。(2019) 発達性協調運動障害を併存する発達性読み書き障害の臨床特性。

第61回日本小児神経学会(名古屋 5月)

共同 安永正則、宮口英樹、石附智奈美、北洋輔、中井昭夫 (2019)

不器用さを有する年長児に対する CO-OP を用いた介入の有効性についてのパイロットスタディ。

第53回日本作業療学会(福岡 9月)

共同 東恩納拓也、徳永瑛子、日高欣哉、中井昭夫、岩永竜一郎 (2019)

運動の不器用さのある神経発達症児に対する小集団作業療法の効果。

第53回日本作業療学会(福岡 9月)

▶その他

中井昭夫 (2019 年 11 月 2 日)

NHK E テレ 「すくすく子育て」「子どもの発達が気になったら」

<https://www.nhk.or.jp/sukusuku/p2019/794.html>

本放送は、NHK「特集：発達障害って何だろう」のプログラムの一環である。

https://www.nhk.or.jp/kenko/special/hattatsu/sp_1.html

中井昭夫 (2019) 「不器用のすゝめ」

鈴鹿高等学校放送部制作 第6回 NHK 杯 全国高校放送コンテスト

(テレビドキュメント部門) 三重県大会で奨励賞を受賞

▶学会活動

日本赤ちゃん学会 理事、学会誌「ベビーサイエンス」編集委員

日本子ども学会 理事

日本発達神経科学学会 理事

日本DCD学会 理事

日本小児神経学会 評議員、長期計画委員、国際化推進委員

日本小児精神神経学会 代議員

日本小児科学会 英文誌 Pediatric International

Editorial Board (Developmental-Behavioral Pediatrics)

国際DCD研究学会 日本代表 committee

アジア・オセアニア小児神経学会 終身会員

▶資格

日本小児科学会 小児科専門医・指導医

子どものこころ専門医

公認心理師

臨床発達心理士

日本小児科医会「子どもの心」相談医

日本小児精神神経学会 認定医

日本臨床薬理学会 特別指導医

▶社会活動

2010 年～現在 NPO 法人 AOZORA 福井 理事

2018 年～現在 日本臨床発達心理士会 兵庫支部 副支部長

2018 年～現在 一般社団法人 笑壺研 (ETUBOLAB) 理事

▶研究助成

科学研究費補助金 (C)「発達性協調運動障害の病態モデルの構築とニューロリハビリテーションの開発」(2016～2019 年度)

▶2019 年度特別研究の経過報告

テーマ：子どもの睡眠障害に対応できる人材育成に関する研究

研究目的：子どもの睡眠の問題（睡眠障害）は身体の成長、心の発達、さらに将来の生活習慣病やガン、認知症や精神障害などの発展に密接に関係することがわかってきた。しかし、保育・教育、子育て支援の現場はもちろん、小児医療・療育の現場においても、その認知や理解が十分でなく、結果、適切な支援・介入がなされないまま、不登校や発達障害に進展しているのが現状である。さらに、このような小児の睡眠障害を適切に診断、治療可能な医療機関は世界的にも希少な状態であり、受診や入院まで長期の待機期間を余儀なくされている状況にある。本来であれば、その子どもや家族が暮らす地域での保育士・教諭が子どもの睡眠障害に関する知識や助言などのスキルを身につけ、早期の気づきと介入を行うことが必要である。そこで、本研究では子どもの睡眠に関する人材育成に関するプログラム開発、システム構築などを目的とする。

研究経過と成果：

1) 人材育成に関するプログラム開発の基盤整備のため、大学院臨床教育学研究科・教育研究所が主催する「保育士・幼稚園教諭・子育て支援者のためのレベルアップ勉強会」にて1回、子ども発達科学研究センターが主催する「子どもの発達を学ぶ会」において2回にわたり、保育士・幼稚園・学校教諭など子供の発達を支援する職業人向けに、睡眠と子どもの発達との関連や、子どもの睡眠の状態を把握し介入するための睡眠ログの重要性、より客観的なウェアラブル計測計の有用性について講演を行った。その他、研修医・若い小児科医やプライマリ・ケア医、パラ

メディカル向けに講演を行うとともに、本研究の成果の一部を小児睡眠障害の診断と治療に関する書籍や論文として公表した。

2) 前任地である兵庫県立リハビリテーション中央病院「子どもの睡眠と発達医療センター（現：子どものリハビリテーション・睡眠・発達医療センター）の入院患者を中心に関西で活動を行っている子どもの睡眠障害・慢性疲労症候群の当事者の会である「おひさまの家」と、関東で活動を行っている「睡眠リズム障害患者会(R&S)」と協働し、「睡眠とリズムに関する関東関西交流勉強会」を開催し、「生活リズムは生体リズム～生活習慣で自分の脳と身体をコントロールする～」と題して講演を行うとともに、当事者からの語りを中心に座談会を通じて当事者研究を行った。

3) ウェアラブル計測計による環境整備と睡眠ログに関する検討では、大まかには相関があるが、睡眠潜時や中途覚醒に関してはウェアラブル計測計のほうの詳細に記録できること、一方でウェアラブル計測計では睡眠ステージが判別できず、Apple Watch などでの睡眠アプリなどとの併用が必要であることが確認されたため、今後これら同時計測について検討していく予定である。

4) 睡眠に問題があり不登校状態に陥り、保護者より相談希望があったケースにおいて、ウェアラブル計測計と睡眠ログによる睡眠の客観的評価を行い、より具体的な睡眠衛生指導や医療への連携をおこなった。

5) 今年度の研究成果を元に、本学学部教育、大学院教育に還元すべく、次年度の共通教育「生活習慣と脳と心と身体の科学」、大学院臨床教育学研究科の「学校臨床学演習」において、子どもの睡眠とその障害に関する講義とアクティブラーニングとして睡眠ログの読み解き方に関するワークショップとして開講することとなった。また、本研究に関心をもった聴講生を次年度より研究生として受け入れ、自閉症スペクトラム障害のある子どもの10年間にわたる睡眠ログを解析ソフトを用いてデジタル化し分析していくという発達障害の睡眠リズムの発達に関する研究を行う予定である。

西 井 克 泰 (にしい かつやす) 教授

▶論文

単著「精神的健康との関連からみた ASD 学生の特徴—AQ-J と GHQ を用いた 5 年間の調査結果に基づいて—」、『学生相談センター紀要』29, 武庫川女子大学学生相談センター, pp.1-12. 2020 年 2 月発行

▶所属学会

日本心理臨床学会

▶社会的活動

日本心理臨床学会 (理事)、日本臨床心理士資格認定協会 (理事)

中 尾 賀要子 (なかお かよこ) 准教授

▶著書

中尾賀要子 (2019) 「第 20 章 外国籍の児童や LGBT の児童への支援と理解 (pp.267-278)」
杉本敏夫監修 立花直樹・中村明美・松井剛太・井上和久編
「新・はじめて学ぶ社会福祉⑥ 障害児の保育・福祉と特別支援教育」ミネルヴァ書房

▶学会発表

Kayoko Nakao (2019.10.24) “Perceptions towards Life’s End among Japanese American Older Adults” 第 77 回日本公衆衛生学会総会 高知会館

▶所属学会

日本社会福祉学会 (JSSSW)

日本ソーシャルワーク学会

日本公衆衛生学会

認定特定非営利活動法人ウィメンズ アクション ネットワーク (WAN) 会員

▶社会活動

北米原爆被爆者の会 (North America A-bomb Survivors Association) ボランティア

兵庫県立教育研修所 (兵庫県教育委員会) 「令和元年度 中堅教諭等資質向上研修：生徒指導
研修 (2019 年 07 月 25 日)」講師

兵庫医科大学 臨床研究審査委員会委員

▶2019 年度特別研究の経過報告

テーマ：学習教材「日本版自己発見タペストリー」の開発

研究経過：本研究は、自己理解を促す学習教材として、南カリフォルニア大学 Phyllis Meltzer 教授の開発した「The Self-Discovery Tapestry」を基盤に日本文化・社会的側面を反映した「日本版自己発見タペストリー」の開発を目指すものである。本年度は、著作権に関する表記の明示について海外とのやり取りに時間を要し、計画していた学

部教育における自己発見タペストリーの活用開始が遅れたため、次年度前期からの仕切り直しを判断した。次年度は研究者が担当する学部科目やキャリアセンター利用者といった全学の学生を対象として、自己発見タペストリーの活用と調査の実施を計画している。

武庫川女子大学教育研究所研究レポート 掲載論文総目次（過去5号分）

第46号～第50号

◇第50号（2020年3月）

〈特集〉 スミス・カレッジと梨花女子大学校におけるインタビュー調査

スミス・カレッジにおける起業家活動・金融教育の取り組み

ーヒーブロー氏へのインタビューからー

……………René C. HEAVLOW・西尾亜希子・安東由則（安東由則 訳・編） 1 - 27

梨花女子大学校の強み、戦略、課題

ー事前質問への回答と CHUN 教授へのインタビューからー

……………JongSerl CHUN・安東由則（インタビュー通訳：鳩山京美）・安東由則（監訳・編集） 29 - 55

韓国における女子大学の変遷と現状

ー全体の動向と梨花女子大学校の拡充過程ー

……………安東由則 57 - 85

学校現場における道德教育改革への対応と意識に関する調査研究（2）

ー2018年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心としてー

……………押谷由夫・矢作信行・齋藤道子・木崎ちのぶ・谷山優子・小山久子・醍醐身奈 87 - 120

The Rock Challenge Phenomenon:

A Cross-cultural Study into the Effects of Using Arts Projects to Foster the Growth of
Self-esteem, Resilience, and Creativity in Children

……………DI STASIO, Michael J. 121 - 148

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2019年度活動報告

……………河合優年・難波久美子・中平真美・中井昭夫・石川道子・玉井日出夫 149 - 165

◇第49号（2019年3月）

〈特集〉 スミス・カレッジにおけるトランスジェンダー学生対応

2017年度 スミス・カレッジ調査の目的・調査経緯とインタビューの解説及び補足

ー Wong の出願への対応とトランスジェンダー学生の受け入れを中心にー

……………安東由則 1 - 22

スミス・カレッジにおけるトランスジェンダー学生の受け入れ議論	
ー スミス副学長とシェイパー氏へのインタビューからー	
…… Audrey SMITH・Debra SHAVER・西尾亜希子・安東由則(安東由則 訳・編)	23ー 40
スミス・カレッジにおける学生支援の取り組み	
ー オートニッキー氏とショー氏へのインタビューからー	
…… Julianne OHOTNICKY・Becky SHAW・西尾亜希子・安東由則(安東由則 訳・編)	41ー 62
学校現場における道德教育改革への対応と意識に関する調査研究(1)	
ー 全国調査の統計分析と自由記述分析を中心としてー	
…………… 押谷由夫・矢作信行・齋藤道子・木崎ちのぶ・谷山優子・小山久子	63ー 94
Window on the World (WoW)	
ー A shifting paradigmー…………… Michael J. DI STASIO	95ー 115
海外の子育て支援事情に学ぶ難民・移民家族への子育て支援	
…………… Heleen GOETGHEBUER	117ー 128
武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2018年度活動報告	
…………… 河合優年・難波久美子・中平真美・中井昭夫・石川道子・玉井日出夫	129ー 149

◇第48号(2018年3月)

〈特集〉スミス・カレッジにおけるインタビュー

オードリー・スミス副学長と高橋温子先生へのスミス・カレッジについてのインタ ビュー調査ー調査目的と手続きー…………… 安東由則	1ー 6
オードリー・スミス入学関連副学長へのインタビュー	
ー スミス・カレッジの学生募集戦略に関する聞き取り調査ー	
…………… オードリー・スミス・安東由則	7ー 24
高橋温子先生へのスミス・カレッジに関するインタビュー	
ー 伝統、風土、日本との比較ー…………… 高橋温子・安東由則	25ー 54
武庫川学院立学の精神に立脚した全人的教職実践力形成論	
ー 本学教員養成質保証システム再構築途上における『教職実践演習(小)AB』 の報告と課題(2010～2017)ー…………… 前原健三	55ー 102
女性にとっての職業資格の経済的効用および非経済的効用	
ー 女子大学で取得可能な国家資格を中心にー…………… 西尾亜希子	103ー 119
私立高等学校の生徒募集戦略	
ー 女子大学附属高等学校のパフレット分析ー	
…………… 安東由則・橋詰啓子	121ー 145

回想法研究へのリクルートとリテンションに関する考察

—鳴松会協力のもとに—	中尾賀要子	147 - 153
武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2017年度活動報告	河合優年・難波久美子・佐々木恵・石川道子・玉井日出夫	155 - 169

◇第47号（2017年3月）

〈特集〉日本の女子大学の70年／武庫川女子大学の教職実践力形成

日本における女子大学70年の変遷

—組織の変化を中心に—	安東由則	1 - 31
武庫川学院立学の精神に立脚した全人的教職実践力の形成と その質保証システムの再構築 —我が国近年の教師教育改革施策の動向と課程認定大学の対応課題—	前原健三	33 - 100
大妻中学・高等学校についてのインタビュー —学校改革の取り組みを中心に—	増田稔・安東由則	101 - 125
故新堀通也名誉教授寄贈図書目録.....	友田泰正・末吉ちあき	127 - 140
武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2016年度活動報告	河合優年・難波久美子・佐々木恵・石川道子・玉井日出夫	141 - 155

◇第46号（2016年3月）

〈特集〉私立高校に関する基礎研究／アメリカ女子大学研究

私立高校に関するデータ集（1）.....	安東由則	1 - 33
私立高校に関する文献目録 —主として1990年以降—	安東由則	35 - 51
平成27年度「特別研究・私立中高研究会講演記録」 近畿地区における私立高校の入試動向と進学戦略	森永直樹（安東由則編）	53 - 82
アメリカにおける女子大学の動向（1） —19世紀から1970年代まで—	安東由則	83 - 102
武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター2015年度活動報告	河合優年・難波久美子・佐々木恵・石川道子・玉井日出夫	103 - 123

編 集	武庫川女子大学教育研究所
編集委員	河合 優年 ・ 安東 由則（長）
発 行 者	学校法人 武庫川学院 〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6 番46号
発 行 日	2021年 3 月31日
印 刷	大和出版印刷株式会社